女鑑

第十五年
第四号



來る四月一日より
同三十日まで

第九回新柄陳列會

並に
模様參考蒔繪陳列
諸名家秘藏近古衣服
陳列

寄せ裂れ見切り反物
大賣出し

明治三十八年三月

東京日本橋駿河町

三越呉服店

尾上梅幸丈 市村羽左衛門丈

尾上菊五郎丈 尾上榮三郎丈 樂屋使ひ

貴功化粧水 浦しま

一名しわよらず

御水白粉 浦しま

あれしらす 江戸っ子

定價

大壜	金二十錢	
中壜	金十五錢	
小壜	金十錢	
特製	金五十壜	
大壜	金廿五錢	
中壜	金十八錢	
小壜	金十二錢	
貝入	金三錢	
錫入	金六錢	

◎うらしまを常に使用せば色を白くし艶をいだし、顔手足のあれ、にきび、そばかす、あせも、しもやけ、おしろいやけ等に最もよろし

◎うらしまを常に御もちひなさるれば老て御顔に「しわ」のよることなしわけて「ばら」「すみれ」の愛すべき香氣を多量に含みたる好品にして其容器にも高尚優美の粧飾をつくしあれば御進物用にはきはめてよろし

◎本品に名醫よりつたはる所の由來書あり御一讀を乞ふ

◎全國至る所の名高き小間物店にて販賣仕候

製造元 東京市日本橋區若松町 若松堂

發賣元 東京市日本橋區橋町四丁目 内外小間物化粧品問屋 丸見屋號 丸善商店 電話浪花四四八番



眞正無毒 良磨艶美

クイーン白粉 クイーン水

本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧料なり

取次販賣は到る處の化粧品小間物店にあり品切れなれば直接に

本舗 東京日本橋新和泉町 三井花陽堂

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑 第十五年第四號 目次

口絵

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

畏き邊りの御料に召させらるゝ

完全無鉛 高貴御化粧料

登録商標

御料 御園白粉

御園の雪	濃化粧 ねり製白粉	大壜入 金七十五錢 中壜入 金五十錢 小壜入 金二十錢
御園の月	うす化粧 水おしろい	壜入 金二十五錢
御園の花	洋風化粧用 粉製白粉	紙包 金十五錢
御園の蕾	洋風化粧下 クリーム	陶器入 金十錢
御園の露	特製乾燥 化粧水	壜入 金十二錢
御園撫子	徳用中化粧 打白粉	紙包 金五錢
四季の花	濃厚特製 あれなほし	壜入 金十錢

賣捌・全國小間物化粧品店

製造元 東京芝櫻川町 胡蝶園

發賣元 東京日本橋區橋町四丁目 日の丸扇石鹸本舗。內外小間物化粧品問屋 丸善商店

◎說明書御申越次第進呈◎ 電話浪花四四八番

登録商標

中性。純良。臨床。經驗。保證

衛生化粧用。模範石鹸

日の丸扇印ムスク石鹸

◎大形金廿錢 ◎小形金十錢 ◎懐中用一枚金[illegible]

◎日の丸扇ムスク石鹸は品質純良中性なるが故に肌のあれる事なく皮膚を潔白艶麗ならしむ

◎日の丸扇ムスク石鹸を使用せば愛すべき「スミレ」及高貴なる麝香馥郁として五日間身邊に薫りを保ち常に精心を爽快ならしむ

◎石鹸試驗法……小量の石鹸と酒精を試驗管に入れ少し熱を加へ振動する時は純石鹸は溶解透明し澱粉等の混交物あるものは混濁して沈澱を生ず

◎本品は化學上峻烈なる試驗藥フエノル・フタレインに毫も反應を呈せざる本邦唯一の中性完全なる模範石鹸也

◎[illegible]石鹸は[illegible]軽く且溶け易きもの故に水のきれ能き石鹸入を御用ゆべし

◎賣捌 全國小間物化粧品店

御料園白粉發賣元。內外小間物化粧品問屋

發賣元 東京日本橋區橋町四丁目 丸善商店

◎說明書御申越次第進呈◎ (電話浪花四四八番)

全國到ル處ニ在リ

特約販賣店

東京 大阪 平尾贊平 本店 支店

最新煉香油

男女コスメチック代用品

パール



東京濱町一町目

平尾商店

電浪 一一〇

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

清心丹は興奮、清涼、收斂、健胃消化劑なれば衛生家の四時日常欠くべからざる要藥なり依てポッケット用、携帯用に便利なるニッケル罐入の設けあり定價は金卅錢、十五錢の二種あり販賣所は全國藥鋪賣藥鋪にあり御最寄にて人魚の商標御認めの上御愛求あらん事を乞ふ



本舖東京市元大阪町

高木與兵衛

○大日本の淑女方が一般に渴望する處の原料の確實なる洗粉は此の花洗粉也



一度御試用の上御高評を乞ふ

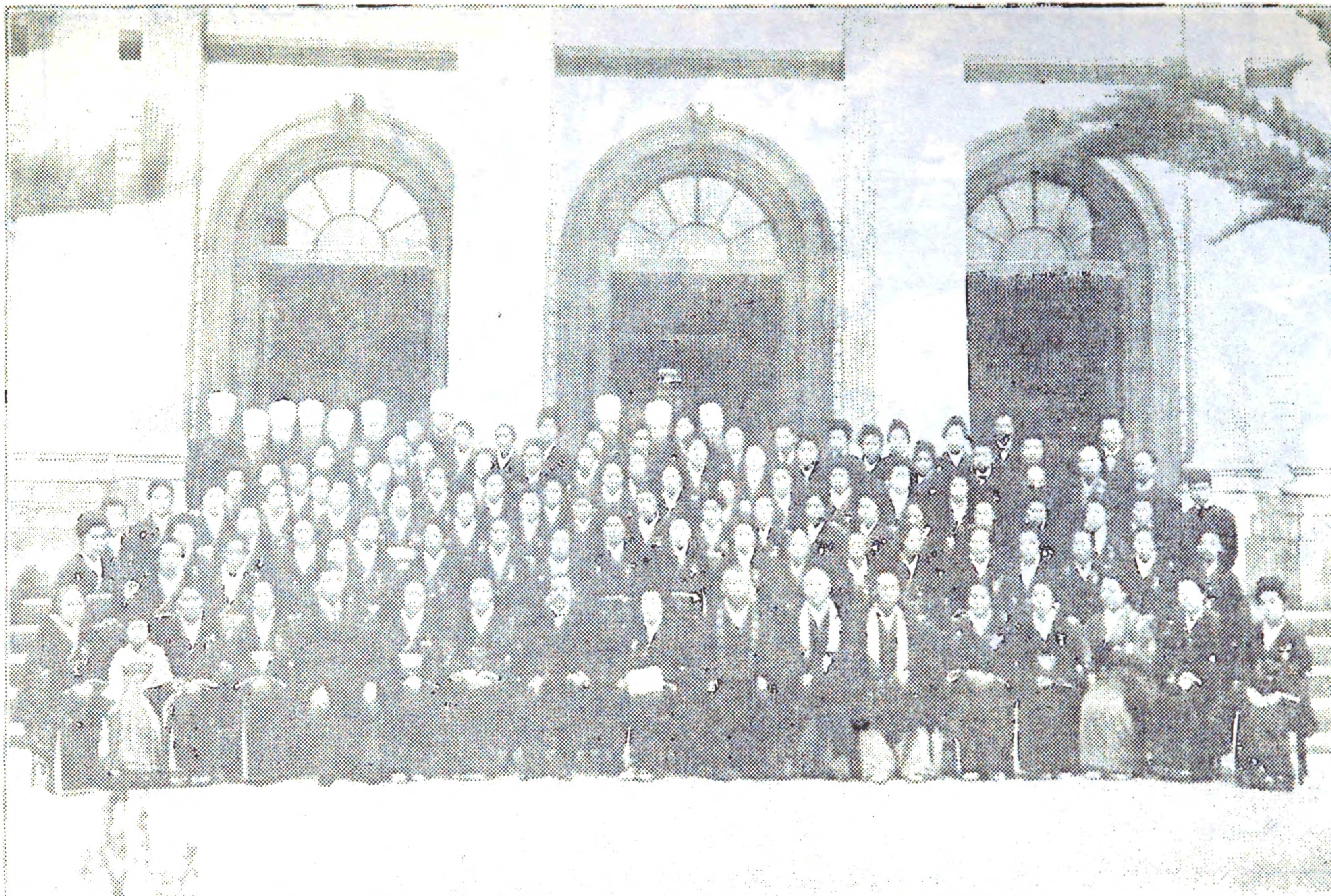
特約販賣店

淺草公園第六區 辻小間物店

京橋區桶町 増田勉強堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

佐賀市に於ける大谷光瑞伯婦人の一行及歡迎會



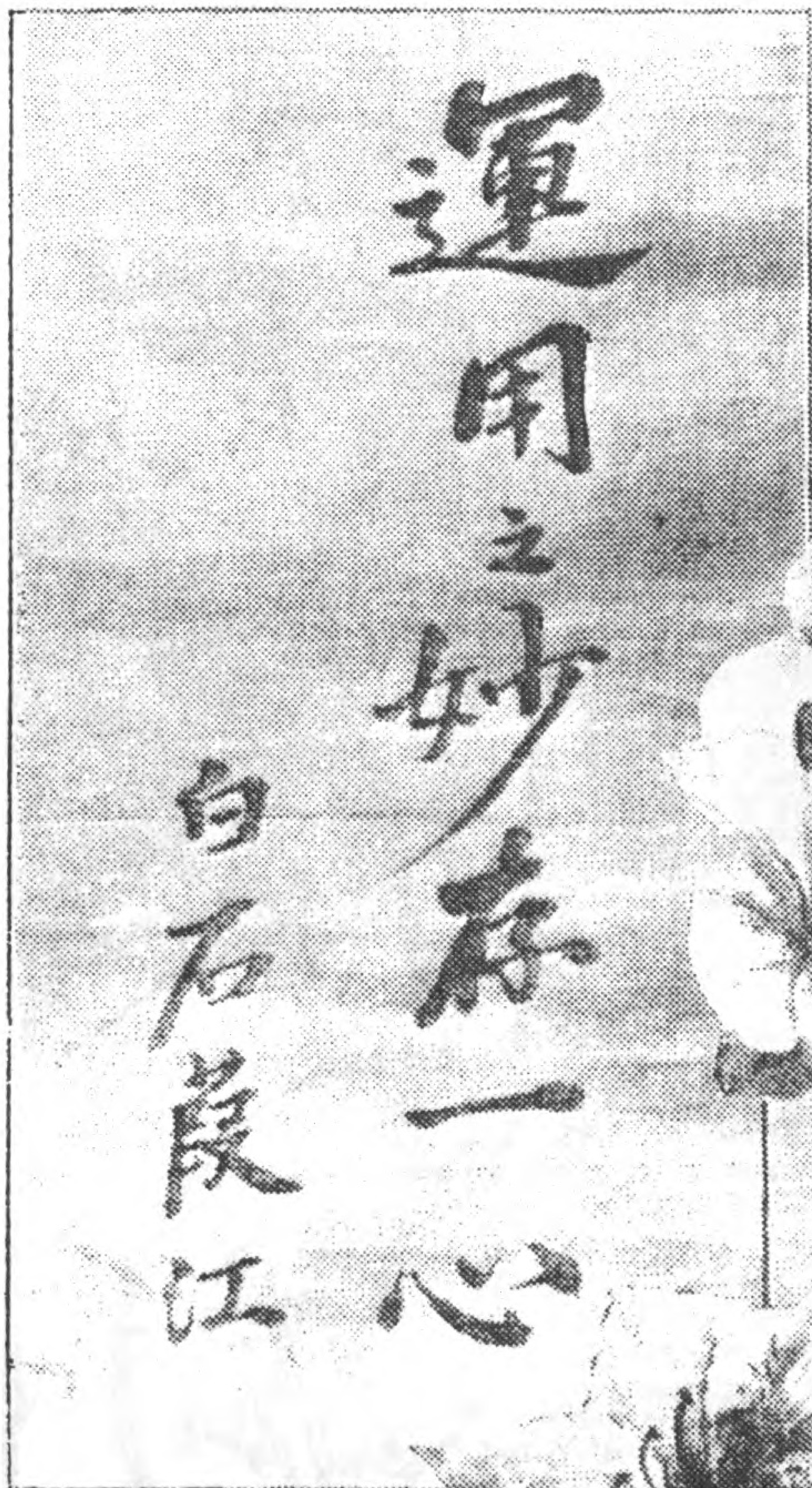
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

關野海軍中佐家庭



（訪問欄參觀）

故白石少佐遺筆



故白石少佐が旅順口第三回閉塞隊の指揮官として大なる功績と名聲を殘して壯絶慘絶の最後を遂げられたるは世の遍ねく知る所なり



故白石海軍少佐未亡人千代子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子英學塾（女學校欄參觀）



櫻花爛熳（赤阪見附外辨慶橋）



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

內外博覽會金牌受領



最上醬油



色白く艶を出す高等化粧洗料

セーネーは歐米婦人社會の最
新流行品にして朝夕洗顔
用として用ゆる時は一切の
ふきでもの、できるお
それなし あぶら顔
又は あれ性 の人は
常に使用すべし



セーネー
おしろい下として
最も好評あり 皮膚に於
けるの効力神の如し定價
瓶五大十錢小瓶廿錢にして市外
御注文は小包郵便にし差上送料
は大瓶三個又は小瓶六個包十錢
各地の小間物化粧品賣藥店にあり

製造發賣元 東京日本橋區くれまさ町七番地 **松泉堂**

佛國パリスピエンモー會社製造



定價 水白粉廿錢 煉白粉廿五錢

麝香獸印 **ムスク白粉** ハ佛國製品中ニ卓絶セル優等品ナリ

麝香獸印 **ムスク白粉** ノ香氣ノ高尚ニシテ馥郁タル皮膚ニ特効アル之レ貴孃各位ノ賞賛ヲ辱ス所以ナリ

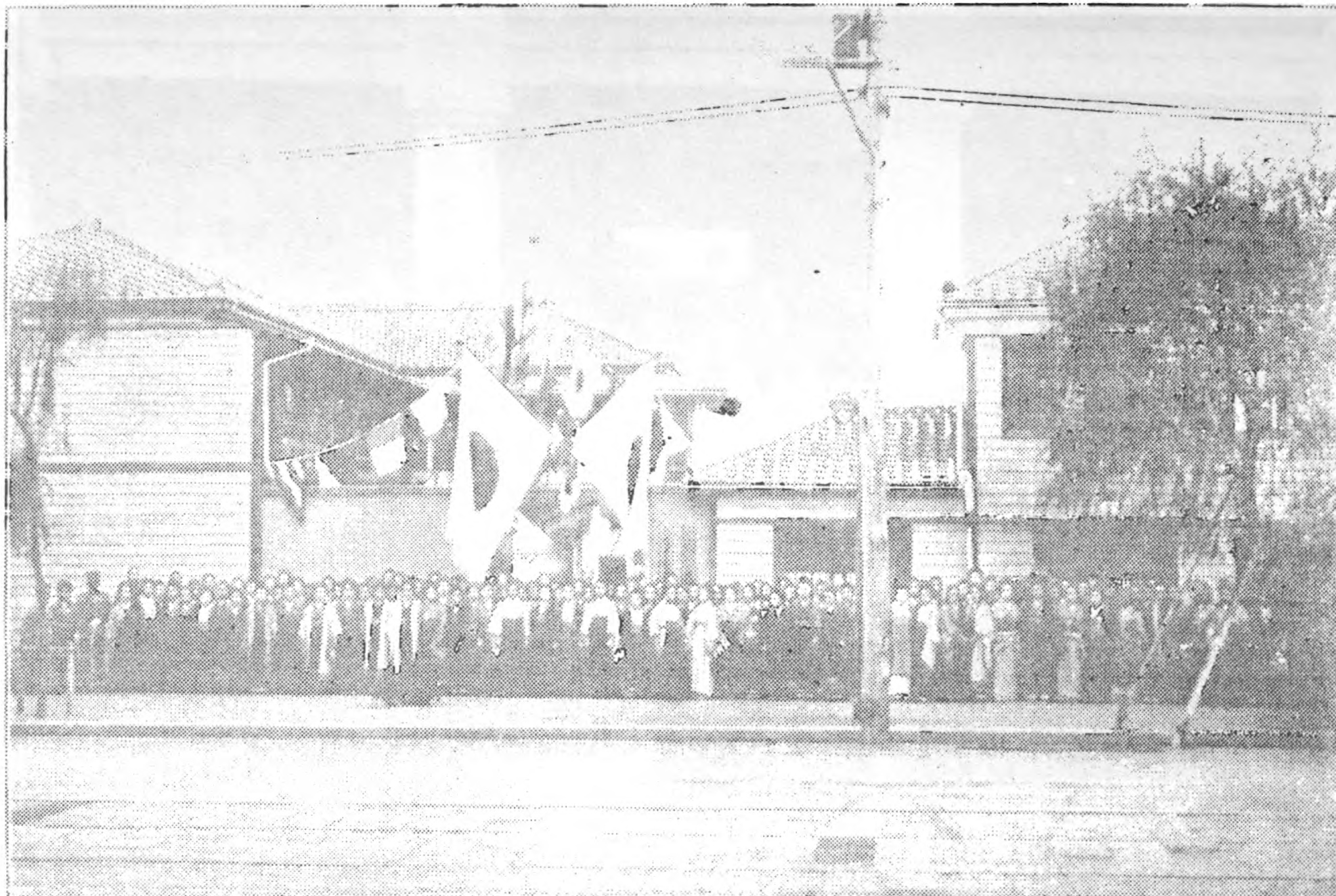
東京日本橋橘町二丁目

直輸入元 石鹼化粧品直輸出入 **竹間商店**（電話浪花一六一四）

各地和洋小間物店賣藥店に有り
麝香獸印に御注意を乞ふ
市外直接御注文は三瓶に付送料拾錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戸板裁縫學校新築落成式當日の光景



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子語學校職員並生徒



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本舖東京資生堂 福原衛生歯磨石鹸
SANITARY TOOTH POWDER. S. FUKUHARA.
PREPARED BY SHISEIDO.

福原有信 歯磨石鹸

煉製大廿五錢 同小十五錢
粉製十五錢 袋入三錢

新製旅行携帯用衛生歯磨
ゴム器入 一個三十錢

新製洗浴化粧液（エリノイン）（花の露）一瓶八十錢

本品は高尚なる芳香薬及び軟和剤の配伍し有れば朝夕盥嗽及び洗浴に際し此液を用ゆれば如何なる水と雖も皮膚をあらし肌色を損ずるとなく色を白くし天性よりも麗はしき色つやを生ず殊に殺菌消毒の効力を有せば當季衛生上缺く可からざる逸品也

高等化粧水（フイテルミン）

本品は高等化粧料中の化粧品なれば貴婦人令嬢方の御常用に適し皮膚を艶美滑澤ならしむる効あり



三個箱入七十五錢

ひげ油（ブロチミン）（佳の江）三個箱入九十錢

髯毛に用ひ給へば適當の粘力を生じ随意の形状を保ち且在來の品とは異り洗去ること容易なり

ふけとり香水（ラウリン）（花たちばな）三個箱入一圓八十錢

本品を常に御用ひたまわらば第一剛き毛髪を柔軟たらしめ且つ汚れを滌め永く清潔の状を保たしむ

あかとり香油（アチモシン）（春風油）三個箱入一圓二十錢

頭髪の汚れを容易に梳き去るが故に髪を洗ふの煩勞なし故に病中病後御使用には至極好適の良品也

うがひ水（エオツン）（しのゝめ）三個箱入九十錢

第一口腔を清潔にし粘液を去り臭氣を防止し黴菌を撲滅し虫歯を豫防し出血しやすき歯齦を固め且つ咽喉加答兒を豫防す一名水はみがきとも云ふ

改良水油（オイトリキシン）（花かづら）三個箱入一圓二十錢

在來の香油の如く髪にねばりを生ぜず毛髪の光澤を艶美ならしめ脱落を制止し疾患を豫防す

凡て美麗なる箱入とした れば御進物用には至極適當の良品なり

取次販賣店は全國化粧品店小物店藥店に販賣致居候

處方調劑・藥品器械・衛生材料・化粧品問屋

本舖 東京市新橋出雲町角 電話新橋三二四番 資生堂 福原有信

意匠登錄

登錄商標

玉おしろい ちゝの井

定價瓶入 金貳拾錢 同曲入 金拾五錢 金六錢

この玉おしろい(ちゝの井)の儀はへちまの水にてよく晒し玉に製したる白粉へ化粧料の藥品と龍腦麝香の芳しき香を加へ候故御顔の皮膚を淸く艶を出しにきび。あせも。はたけ。そばかす其他御顔一切によろしく腫物を防ぎ候等實に類なき御重寶なるおしろいなり
御用法は常のおしろいい如く水にてときて御使用相成候得ば麗しく相付申候

調製所 東京銀座三丁目
松澤八右衛門
(電話新橋特五百參拾四番)

賣捌は各處小間物店賣藥店にあり

同 校長正木直彦序文
同 校敎授島田佳矣
東京美術學校卒業生野口俊尾 共著

女子技藝 編物模樣圖案

全五册石版極彩色大和綴美本
●松の卷金四拾錢●櫻の卷●藤の卷●菊の卷●梅の卷各
定價 卷各金五拾錢 五十五錢 郵稅各貳錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて諸模樣を編み或は刺繡するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなれば女子技藝に於て敎育上參考上必要の著ある所以は從來此類の歐米各國に於て盛に出版されしものあれども其意匠圖案の樣式風趣は直ちは我邦工藝の風致に應適せざるのみならず價格の點に於ても不廉にして一般に普及する能はざるを以てなり

本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を硏究參考し前項の欠點を改善せし者にして我邦に於ける編物圖案の嚆矢唯一の書なり

發兌元 東京京橋區築地二丁目 國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實價
壹袋壹錢
罐詰五錢



此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舖製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登録商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黑船町
梅素亭謹製
電話下谷二三三四

紳士貴婦人用

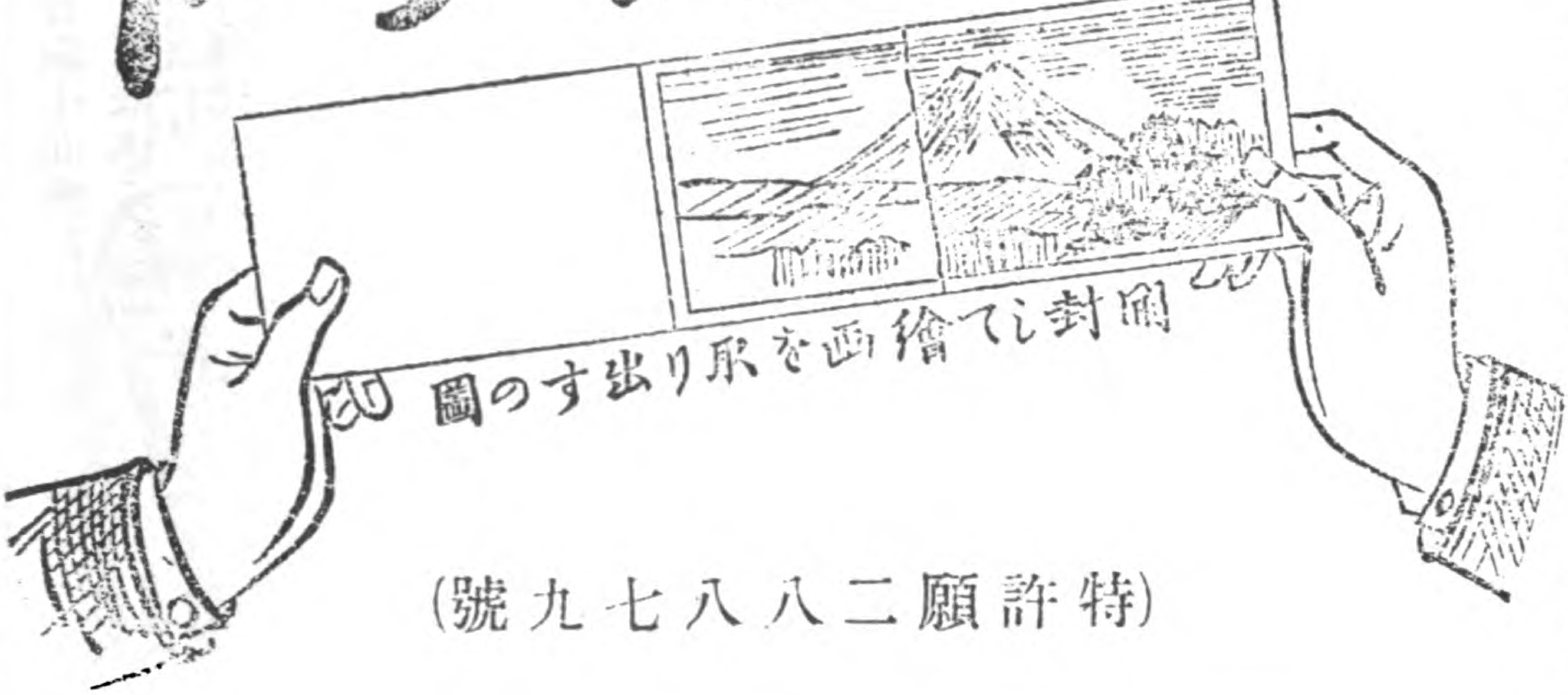
米國有功專賣

●プレスト洗粉は皮膚の理を緻密にし色を白くし光澤を艶麗ならしめ自ら精心の爽快を覺ゆること妙なり●プレスト洗粉は（にきび）（あせも）等を治するに特効あり平常使用せらるゝ時は皮膚病に罹るの憂なし●プレスト洗粉は効能顯著なるが故に普通の洗粉の如く多量に使用すべからず故に經濟上却て德用なり販賣店は全國到る處の化粧品小間物店賣藥店にて販賣す



日本特約一手販賣
東京牛込西五軒町
山本玉川堂

新發明ビレーフート



(特許願二八八七九號)

新發明ビレーフート
精巧優美繪畫挿入

ビレーフートは交際家の一日も缺くべからざる新封筒なり
ビレーフートは優美高尚精巧秀麗なる繪紙入の新封筒なり
ビレーフートは紀念繪保存として最も適當なる新封筒なり
ビレーフートは外征將士を慰むるに唯一無二の新封筒なり
ビレーフートは各種の繪畫を交換するに至便の新封筒なり
ビレーフートは繪葉書より以上の趣味ある絶好新封筒なり
ビレーフートは本邦固有の美術思想を發揮せる新封筒なり

第一號	寫眞版	六枚壹部	定價 拾貳錢
第二號	着色寫眞版	六枚壹部	定價 拾五錢
第三號	寫眞ドー版	六枚壹部	定價 拾錢
第四號	細密日本画	六枚壹部	定價 四拾五錢
第五號	古代近世美人	六枚壹部	定價 四拾五錢
第六號	絶景水彩畫	六枚壹部	定價 卅五錢
第七號	明治座川上演劇王冠	六枚壹部	定價 拾五錢
第八號特別製	明治座川上演劇王冠	六枚壹部	定價 貳拾錢

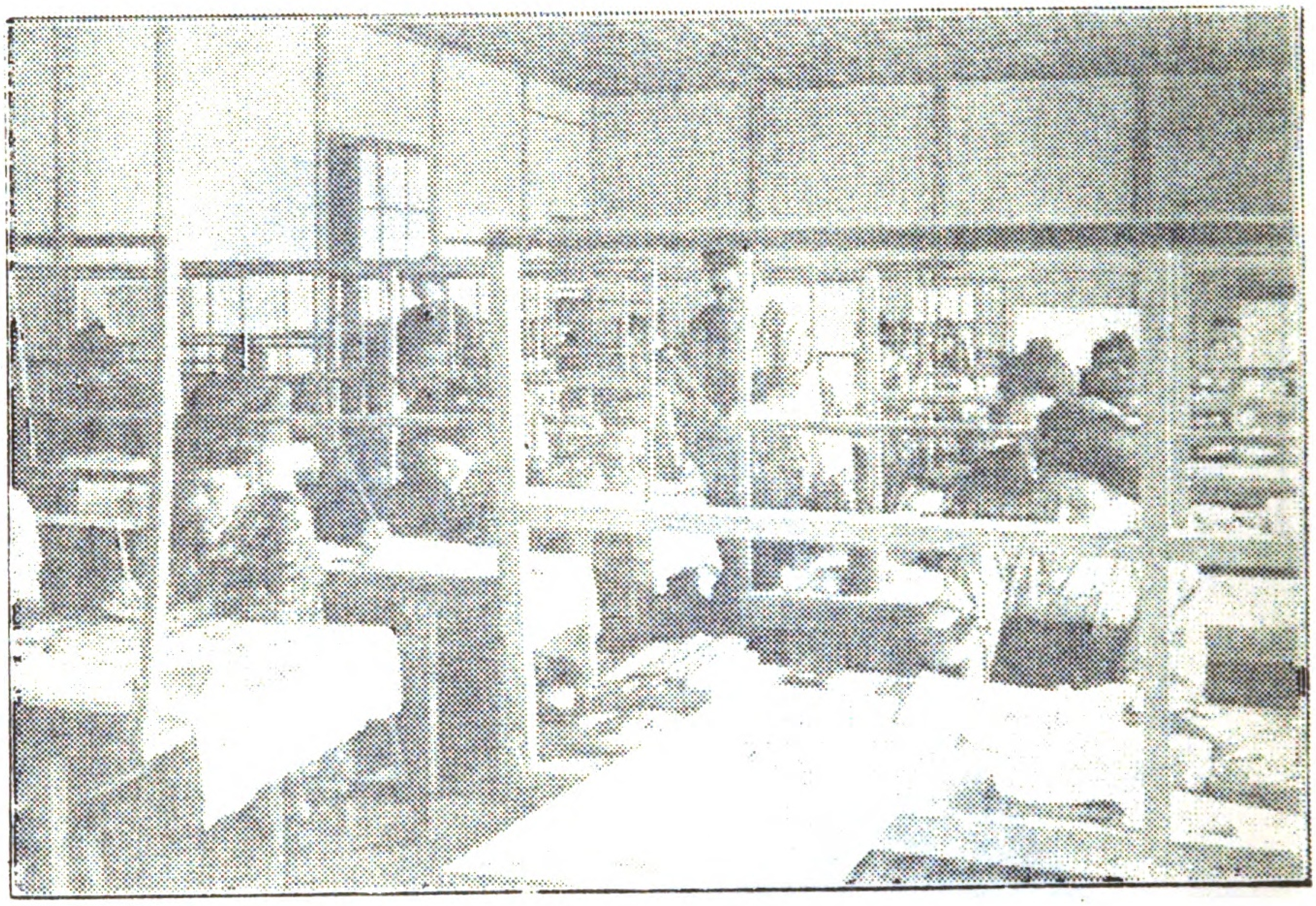
東京市日本橋區馬喰町壹丁目

製造賣捌元 中村封筒部

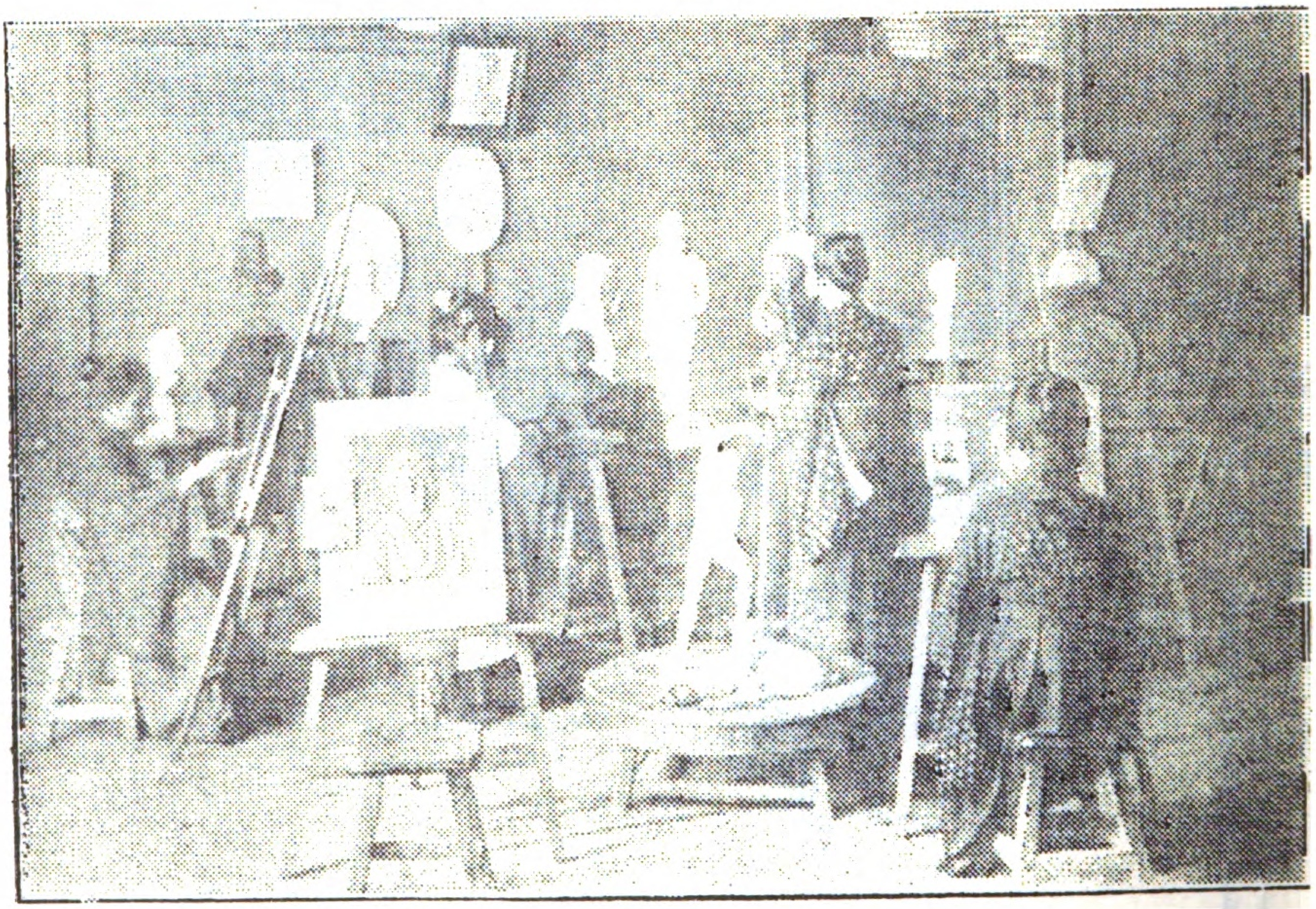
電話浪花二千百六十二番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子美術學校の教場



日本畫科教室



彫刻科教室

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑兼題投稿優等者

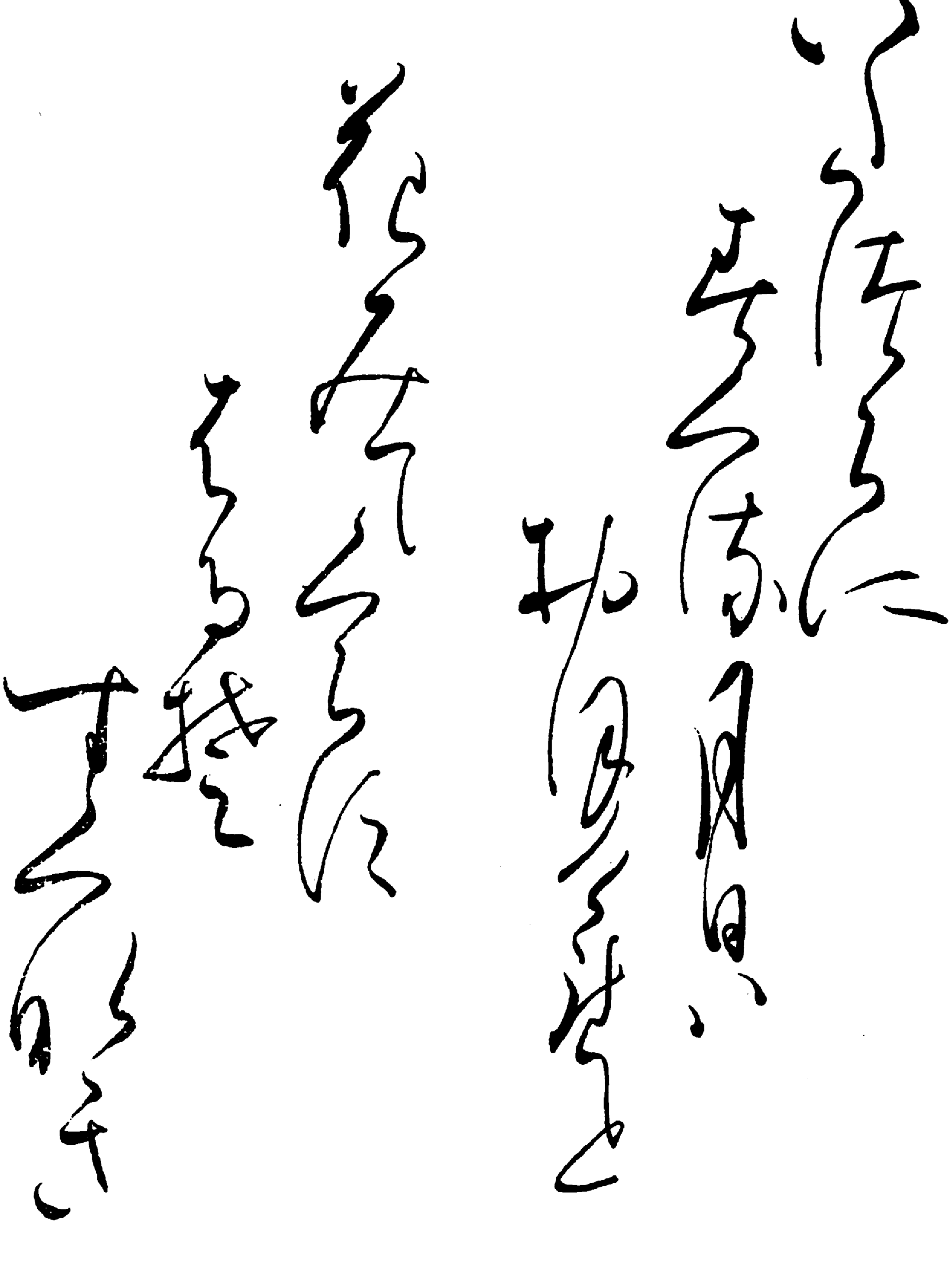
中島武子



澤田伸子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



宮里三木枝子書

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

月經を通じ子宮病血の道を全治す



藥價
- 半週分 二十五錢
- 一週分 四十五錢
- 二週分 八十五錢
- 三週分 一圓二十錢

月やく閉止 三四ヶ月の月經閉止も二廻分にて必ず通ずる不思議の効あり

月やく遲延 常に月經閉止を苦慮するより神經性にて月經閉止を來し亦は遲延れることあり此藥を一廻分も用ちゆれば直ちに通下す

血の道にて**頭痛眩暈**し目かすみ、逆上して顔面潮紅する人亦は常に月やく過少にて肥滿たる人處女十五六才にして月華なき人等は毎月持藥として此藥を用ゆれば**子宮病**月やく閉止、遲延、過少を患ふことなく通利を快よくし**血の道を根治**し身體强壯に**容貌爽快**ならしむること此藥特有の偉効なり

本舗 東京市日本橋區藥研堀町四十三 藥劑師 **高木與八郎**

東京銀座一丁目河岸通り

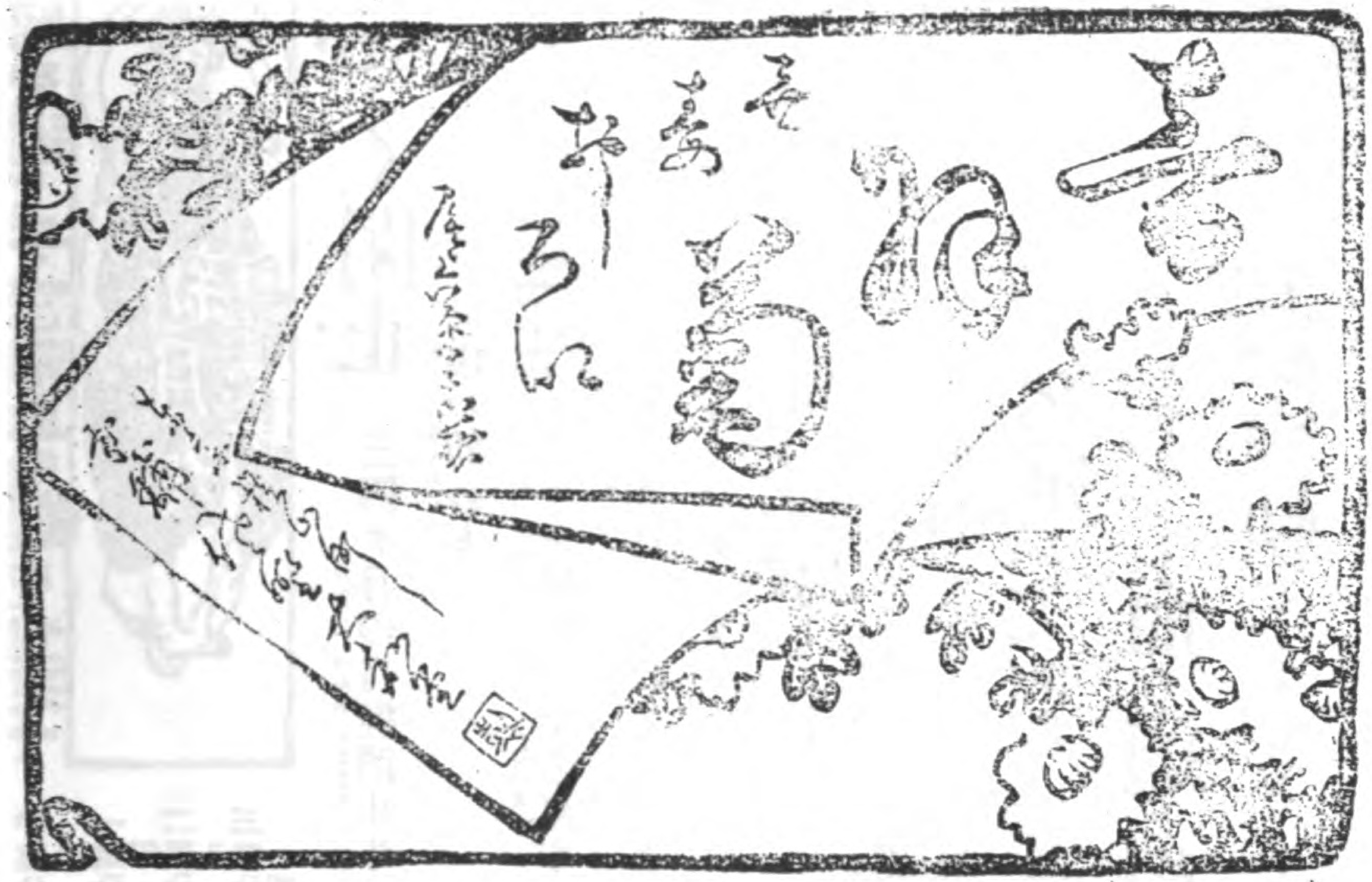
帝國貯蓄銀行

（電話 新橋 八一六 二八〇八）

- 本郷一丁目 本郷支店
- 飯倉三丁目 飯倉支店
- 赤坂表一丁目 赤坂支店
- 四谷大通り 四谷支店
- 南品川一丁目 品川支店
- 横濱吉田町 横濱支店
- 牛込神樂坂 神樂坂支店
- 神田須田町 須田町支店
- 兩國米澤町 米澤町支店
- 淺草雷門前 吾妻橋支店

代理店 日本橋坂本町 田中銀行

●一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候





定價・金五十錢・金廿五錢・金十五錢・金十二錢

專賣特許
最新改良
携帶裁縫用具

携帶裁縫用具は針差し絲巻ふまへ等は皆此箱の中に疊み仕舞樣出來て以て「テーブル」上に於ても安座の時に於ても使用自由自在にして携帶上至極輕便なり女學生諸君の通學及世の旅行者には必要缺くべからず加ふるに體裁優美高尙なるを以て四季の御進物には最適當の良器なり



定價		寸法
一一號	金壹圓	丈八寸幅五寸五分高三寸二分
一二號	金八十錢	丈八寸幅五寸三分高二寸二分
一三號	金七十錢	丈八寸幅九寸五分高一寸七分
一四號	金五十錢	丈八寸幅六寸五分高一寸四分
一五號	金三十八錢	丈八寸幅五寸五分高一寸三分
一六號	金二十五錢	丈八寸幅四寸五分高一寸三分

○一號二號三號の三種には蓋裏に小切並に「ツマ」形等を入る「タトー」附

東京市本郷區春木町二丁目五十六番地

專賣特許携帶用裁縫用具
專賣特許ゴム製下駄表
專賣特許寒暖濕乾計
製造元 Ⓢ佐藤福次郎

御遠方より御注文の節は代金に小包料を添へ本郷一丁目郵便取扱所へ御振込あれ

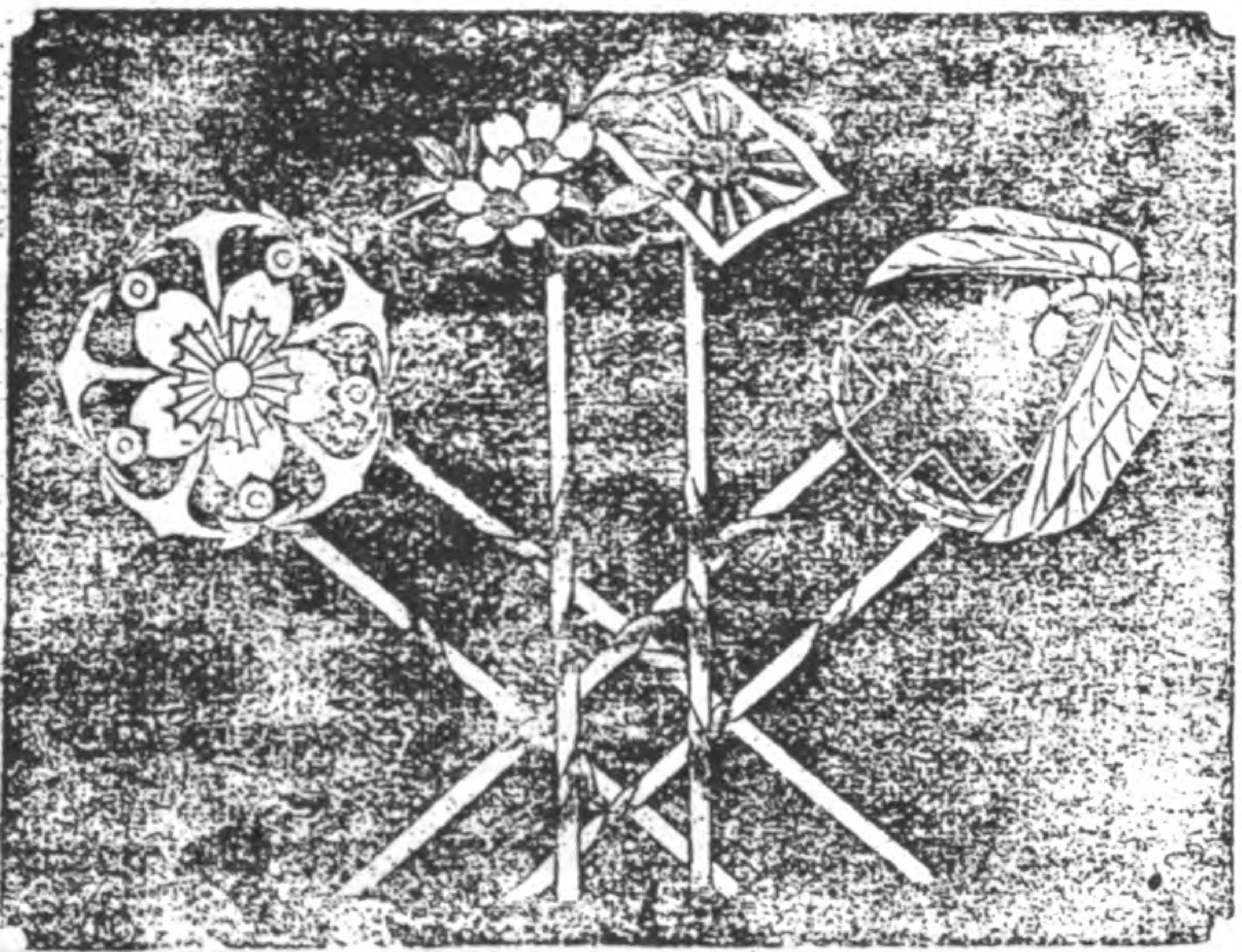
肺病

肺病患者に告ぐ

私儀多年肺病に罹り九死の難に際し偶々新發明の一奇藥に依りて全治せるを以て洽ねく世の同病者を救ひ度素志に付望の方は郵券二錢封入御照會ありたし

千葉縣安房郡北條町
川名助次郎

戰捷紀念簪



開戰以來向ふ所敵なき我陸海軍の大捷紀念として上圖の如き束髮ピンと前差とに兼用の簪發賣仕候

一號　陸海軍紀念
二號　赤十字紀念
三號　陸軍の紀念

三種何れも純銀にして金色製と各色の七寶とを配合せしいとうるわしき品に有之候

此紀念簪は聊か戰捷の祝意を表し特別廉價にて差上候間御注文あらんことを

一、二、三、號各二圓

市外送料　金拾錢
清韓臺灣　卅錢

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

松田幸治郎

特電話新橋五五一番



第十五年第四號

女學校の服制

現時一般の風潮が、いはゆる流行の末を逐ひて、年と共に次第に奢侈贅澤に傾きつつあるは、爭ふべからざる事實にして、是れ將た決して喜ぶべき現象にはあらず。特に最も著しく予輩の眼に映ずるは女學生の服裝なり。見よ、華美なる羽織と袴とに加ふるに、露も滴る許りに束髮の廂を脹らしたる、菫のリボンを挿したる、羽衣ショールとかいへるものを首に卷き付けて、長く胸部にまで垂れたるなど、見馴れざる人に取りては、一見異樣の思を爲すも、理りなしとは云ひ難き程なり。是れ蓋し今日に於ける流行の絶頂なり。

元來女子の天性は、尤も流行に傾き易し、奢侈といひ、贅澤といふものゝ如きも、多くは女子に於て之れを見るを常とす。されば青春妙齡の女學生が、一見奢侈とも贅澤とも思はるべき外觀の美を輝かすも、又自然の情といふべきか。今夫れ一人の羽衣ショールを珍らしとて纏ふものあれば、千人競ふて之を纏ひ、一人のコールテンの襟卷を古臭しとて脫き棄つるものあれば、千人亦爭ふて之を脫ぎ棄てんとす。その樣寔に猿の人眞似に類せずや。しかも今日一般の風潮が、奢侈贅澤に傾きつゝあるに加へて、さらでも流行を渴望する婦人なるが上に、況して十五十六の青春、十九や二十の

妙齢の身を以て、容姿を嫋やかにし、服裝を美はしくし、相逢ふ者をして可愛の娘子よ、美麗の女學生よと賞めたゝへしめんことを望む情の切なるは、尤の次第とやいはん。男子すら彼のハイカラとかいへる一種の似而非男ありて、得知れぬ樣々の化粧品など集めて、朝夕たゞ顔を作り、身を飾るを以て、重大なる任務の如くに心得居るものゝあるにあらずや。されば女子の天性よりして、殊に妙齢女子の情としては、羽衣ショールも、菫のリボンも、華美なる種々の服裝も、必ずしも非難を加ふべき點ありとも覺えず。

されど、茲に顧みて一考すべきは、由來奢侈や贅澤といふものは美風なりや、流行を逐うといふは果して善事なりや否やといふことなり。質素儉約を以て美徳なりとすれば、之と全く反對なる奢侈贅澤の美風ならざるは言を待たじ。況んや奢侈贅澤の製作者たる流行の善事ならざるは更に論ずるまでもなかるべし。既に善事ならず、美風ならずとすれば、各種の弊害の之に伴ふて生出するを免かれざるも、亦必然の情勢なるべし。たゞ一片の流行を趁はんが爲に、一人の富家の子女が、偶まその身に纏ひたる贅澤品は、富家ならざる夥多の子女をして、轉た羨望の情を起さしめざるべきか。而して此の羨望の情は、延ひて其の兩親に苦痛を與へざるべきか。今日の女學校に於ける一女學生に要する學費とても、中產以下の人に取りては、決して容易のものにあらず、然るを況んや、之に加ふるに奢侈とも贅澤ともいひつべき必要ならざる各種の流行品を以てするに於ては、兩親たるものゝ苦痛はそれ如何許りぞや。爲めに女子教育上に影響を及ぼして、或は半途退學の不幸を見ることもあるべく、或は心ならずも初めより高等教育を受けしむることを思ひ止まる父兄もあるべし。概して女學生が服裝の爲に苦心するは、その目的たる教育の爲に苦心

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

するよりも、一層甚しきものありて、累を父兄に及ぼし、遂には教育にも影響を與ふるは、粗々推知するに難からざるなり。

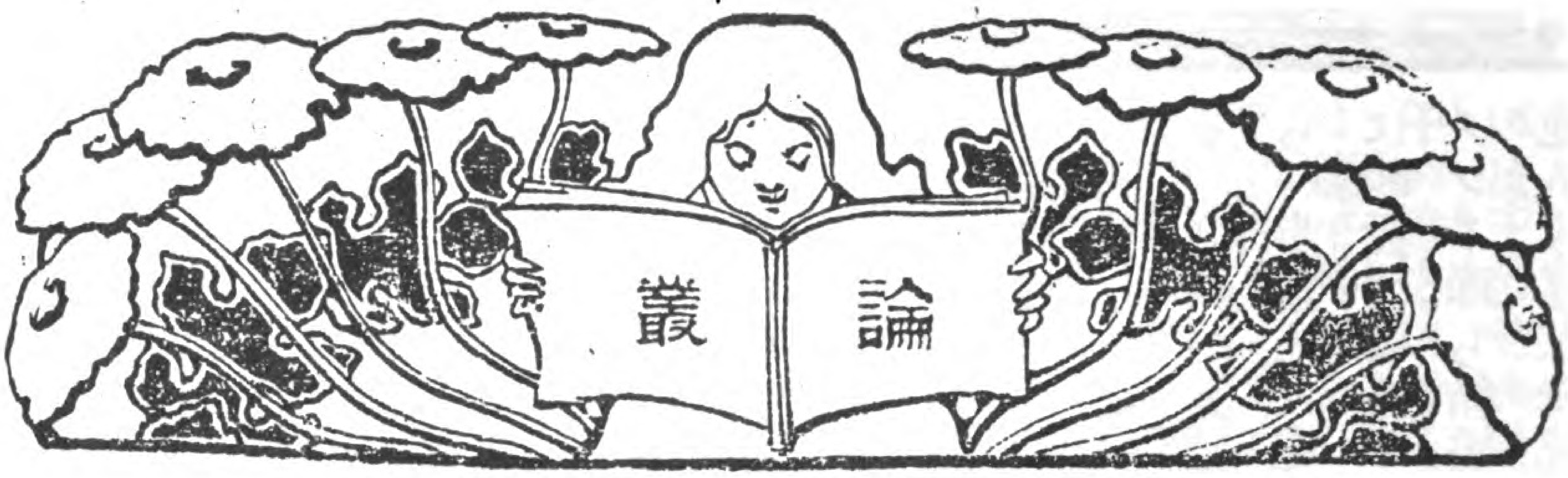
女子をして其の性情に從ひて、心の欲するところのまゝならしめむか、一の流行の廢ると共に、又一の流行は生じ來りて、贅澤より贅澤に徙り、奢侈より更に奢侈に進みて、殆んど底止するところなかるべしさらば注意を其の父兄に加へて、深く戒飭せしめむか、これまた云ふべくして行はるべからざる所ならん饒ひ一時は父兄の注意、その効を奏して、儉素の美風を覩ることあらんも、決して永續する能はずして、復び奢侈贅澤の昔に還らんは、猶ほ一旦堰き止めたる河流の、久しからずして潰裂四散、再び舊體に復するに同じかるべし。兒に甘きはすべての親の常なり。一たび一人の父兄が、その注意を緩かせにして、其子の欲するがまゝに一任するの日は、凡ての父兄がみな其の注意を緩めて、其子女の云ふがまゝに隨ふの時ならざるを得ず。斯くして一般女學生の状體は、復び流行を趁うて、奢侈と贅澤とに傾くを免れず。

さらば如何にするも、到底今日の状勢を防止するの道なきか、曰くたゞ一の道あり、この道を嚴重に斷行せば、以て頽瀾の將に倒れんとするが如き今日の勢を挽回するに難からじ。則ち學校の服制を一定すること是れなり。服制一たび定まらば、苟も籍を其校に置く以上は、如何なる事情あるも、之を循守せざるべからざること、猶彼の男學生の中學以上の官公立學校に在るもの〻服制と趣を同ふせざるべからず。斯の如くならばその制服以外に贅澤奢侈の風を容るゝの餘地なくして、女學生としての贅澤なる流行は、自から地を拂ふて消滅するに庶幾からん。

記者嘗て本郷なる日本女學校の卒業式に參觀して、その全校數百の生徒が、一樣に黑木綿の紋服を着用せるを見て、轉た感賞を禁せざりき。富貴の家の女子も、貧賤なる人の女子も、みな斯の如く質素なる一樣の服制の下に敎育を受くるに於ては、學費以外に、臨時の費用を要せざるは勿論、其の外觀もまた如何にも女學生らしくして、何處となく快活にして奥床しきを感ぜざるを得ざるなり。而して敎育上に於ても、かの紫衣紅裝種々思ひ〳〵の服裝を爲すものに比し、一層の便宜あるも勿論なるべし。されば予輩は今日の女學校に向つて、斷然服制を一定せんことを勸告すると同時に、其の服制は中産以下普通の家の女子に相應すべきものを以て、之が程度となさんことを主張するものなり。尤も服制を一定するに就ては多少の困難もあらん、或は一二不平の聲を聞くこともあらん。然れどもこれたゞ一時のことならんのみ。一たび決行して動かずんば、不平の如き、困難の如きは、必ずしも憂ふるに足らざるなり。且つ服制を一定するに當りては、成るべく多數の高等女學校程度以上の女學校が、互に一致聯合して、同一の決行を見むことを望む。僥ひ一校にても二校にても、一日も速かに決行せんこと、日本女學校の特に他校に卒先するが如くなるは、予輩の切望するところなれども、他の數多の學校が、依然之を等閑に付し去らば、猶多くの弊害の存在して、決行したる女學校の取締上、爲に困難を感ずる少々ならざらん。

若し夫れ學校以外に於ける服裝の如何に至つては、固より之を善良なる家庭の風儀に一任せざるを得ず。蓋し花觀遊散の如き、親戚朋友訪問の如き、或は公會祝筵に臨む時の如きは、父母たる人々の意志に任するの外、學校の敢て關係すべき所にあらざるを以てなり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



男女交際論

慶應義塾々長　鎌田榮吉

私が、佛蘭西人……何といふ人であつたか匿名でありましたが……其人の亞米利加に旅行する時の船中の所感に、種々同船乘客の模様を面白く寫した中に、自分は實に亞米利加の年少婦人の所爲を見て驚いた、固より其父と共に乘船しては居たのであるが年若き妙齡の處女が男子と共に、他人の其所に居合すと否とに拘はらず、男子が男子との交際、女子が女子との交際よりも、より親く物語して遊んで居た、之を見ると亞米利加に於ける男女間の交際は頗ぶる親密なものに相違ないが、斯る有様は米人同志でこそ通常一般の事であらうけれども、英國人が見たらばショッキング……と叫ぶであらう、即ち嫌やな事と思ふであらう、佛國人が見たらばインヂーセント……猥褻のやうに思ひ、獨逸人が見たらばインポシブル……到底あんな眞似は出來ないと思ふであらう、かく米國の年若き婦人は年若き男子と親しく交際をして居る、が、此の交際はポケットを覗ふためでもなく、又たハートを覗ふのでもない、言ひかゆれば、金錢の爲めでもなければ、戀慕……結婚の爲めにするのでもない、單に遊び友達として交際して居るので、外國人の眼から見て居る程の意味のある譯ではない、加ふるに、米國婦人は一方に獨立の氣象に富んで居て、男子の犧牲にさるゝ樣な事もなく、男女の交際は

普通のものと結婚的關係のものと全く別である、それ故父母も社會も、男女間の自由の交際を許して居るとありますが、之れは米國風の男女交際を見て、最初はイヤに思ふて居たのが、終りには感心して居るのである。

又、先達て、彼の露國の有名なるトルストイの小說を讀んで見ましたのに、其中に或婦人の結婚問題の起つた時の事を書いてありますが、これで露國に於ける現在の事情が分るので、トルストイの筆を挿んだ處によつて見ると、露國の結婚は今方に過渡の時代に屬して居るので、舊式を守るもの即ち純粹の露國式によつてする結婚は、全然父母の意見に一任されつゝあるので、親がこれならばと見定めて、一たび命令を下した以上は、娘は一言もなく父母の命令に服從して、茲に其の問題は決定を告るのであるが、男子も亦女子と同じく父母の命令に從ふので、これが露國固有の風である、第二は佛國風にまで進んで居るもの、先づ男女の若者同志が互に見定をつけて、結婚の意志を決することにはなつて居りますけれども、其の結婚の成立つには、是非とも親々の許可を受けねばならぬことになつて居る、而して其の男女は、結婚の式を擧げて眞の夫婦になるまでの間は、双方勝手に相携へて遊び歩く事も出來るが、その時には母親が必らず同行して之れを監督することになつて居る、即ちまだ父母の干涉といふものが稍々行はれて居るのである、之れが露國に於ける男女交際の半ば進んで未だ大に進まない中間に位して居るものであつて、それから一步進んだ處は、大に開けて英國風といつても可い位ゐになつて居る、英國風といへば、若い男女の互に相愛するもの、氣の合ふたものが、互に約束の夫となるべく又た妻となるべく決心をして、エンゲージメント即ち結婚の豫備約束といふものをする、此の約束をすれば、其の男女は互に相携へて自由に往來し、他人……父母兄弟の如きをも交へずに何處にでも行くことを得るし、家庭に在ても、成るべく二人の交際

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

には干渉せぬ様の方針を執つて、二人だけで外出することの出來るやうに心掛けて居る、若し又、其の男子が遠方にでも居るもので、女の家を訪問することがあれば、其の時には其の約束の夫婦を除き餘の家人は總て外出をして、若い男女の二人を一家に殘し、自由に談話や遊戯をすることの出來る樣に取計らふ位で、此の結婚の豫備約束をした男女には、互に相携へて二人のみにて自由に外出することも許してある、又た、家内でも餘のものを交へずに自由に交際し得ることになつて居る、勿論結婚の成立には形式上父の許諾を受けることにはなつて居りますが、斯の如く親密の交際を繼續して、結婚の式を擧るまでの幾年月の間、若しも此の豫約の中に間違がある、即ち豫備約束の身でありながら結婚式後の如き行爲があつたならば、其のものは生涯社會に顏出しをすることがならぬ、此の社會の制裁は極めて嚴格なもので、寸毫も假借する所がないのでありますから、此の間違のあつたものは社會的死人となるので、此等のものが多く醜業婦などに落ぶれるそうです、兎に角、男女間の交際は自由にするとは出來るが、豫約中若し間違が出來たならば生涯浮む瀨はないと云ふ此英國風迄進んだ社會は露國にも出來て居る、これは露國でインテルゲンチヤと稱せらるゝ文明流の人々の一派で、此の風によつて自由結婚をして居るのである、自由結婚といへば語弊があるやうであるが、勝手次第に我儘な結婚をするといふのは間違ひである、英國風の結婚豫約を結んで双方心情の分つた上に始て結婚する夫婦になるといふことであれば、弊害はないのであるから、チコミロフといふ人も此の事について詳く書いて居るが、此の人は露國人でありながら公平の筆を執つて居る人であるから、露國のインテルゲンチヤには眞に英國の結婚風が行はれて、先づ餘り間違のないものと見て宜しい。

翻つて日本の男女間の交際は如何と見るに、矢張露國と同じやうな過渡の有樣にあるかのやうに思はれ

る、全く父母の關渉に屬して居るものと、大分自由にさせることになつて居るのとがある、併し第三として述べた結婚の豫備約束をして交際を親密にして些の弊害もなく、互に心情を見た上で結婚をするといふ事は却々甘く行かない、のみならず、佛國風に達して居るのもない、即はち日本の男女の間は極端と極端の現象で、一方に究屈な親の命令に服從せしむるものはまだ普通として、一方には互ひに行末を約束して交際して居るものは其間に餘り規律がなさ過る、これは餘り日本の國風が男女の交際に制限を立て丶、男女七歳にして席を同ふせずといふやうな東洋流の習慣をつけたからなので、全く相隔離して居たのであるが、之れが反對に相近づくことになると勢ひ間違ひを生ずるので、他よりも疑を挾むこと丶なる、要するに男女の間が他より疑を容れられる程に相近けば其間に弊害の生ずるのは免かれぬことであるが、此等の弊害の生ぜざるやう、男女は成るべく自由に相近しくして、互に相知り相計すことにならねばならぬ、之れは獨り結婚に就ての上のみならず、社會交際の點から見ても相互自由にすることにせねばならぬが、其間には嚴重な制裁がなくてはならぬ。

近來女學校の數が日を追ふて增加し、女學生の數も頗ぶる多きを加へ、學生交際といふものも頻繁になつて來たが、それについて新聞紙上などには、之れに伴ふ惡弊が往々掲載されて居る、假りに其の事實は紙上のそれ程に甚しくなく其半分に見ても誠に憂ふべきの至りである、西洋でいふ男女間の自由交際及び自由結婚は其間に弊害を交へぬ、勿論時により處によつて折々其の弊害を見ぬでもない、中には却々甚しい惡弊の行はる丶所もあるやうだが、未婚の男女の間は交際の自由な割合に、殊に交際の自由な國ほど制裁が嚴しい、現に未婚のものにして、淫猥なる交際が起るやうなことがあれば、直ちに社會から嚴重な制裁を加へられる、即ち間違のあつた時は社會の人々から擯斥され爪彈きを受けるので、無制裁なる極端の自

由交際は出來ぬのである、我國刻下の現狀について、世間の人が之れを意に介せぬやうでは、實に由々しき大事であるから、今にして其の制裁を設くる事に勉めるのは、尤も大切なる急務である。

併し、只だ其の弊害のある處を見て、女子の修學を止めるとか、其の交際を禁ずるのは間違である、世人動もすれば、其の弊を憂ふるの甚しき處より、良好なる事柄まで打消すが如きことあるは、其の當を得ざるものである、從來我國の習慣として、社會が男女の交際を極端に究屈に制限したる爲め、此の極端なる究屈より極端の自由に趨り、此等に伴ふて生じたる免かれ難き弊害なれば、此の際適當なる措置を考慮して、男女の交際に然るべき社會的制裁の起る樣に勉めなければならぬ、其の交際をして自由ならしめると同時に間違のあつたものは少しも假借せぬ、勿論其の制裁は當人の身に取つては、慘酷と思はしむる程のことでも仕方はない、其の制裁を加へるの方法としては、一種夫れ相應の會を組織して之れをさせるのも可からう、又た、女鑑の如き婦人雜誌が紙上に於て警告するのも可からうと思ふ。

之を要するに、英國でも米國でも、男女の交際が昔しから今日のやうに自由ではなかつた、現に今日の彼國の若き婦人の話しを聞いても、佛國の姉妹は我々の如く信用されて居らぬと云ふ辭を發する、佛國の娘達は將來の夫たるべき男子と外出するにも必らず母に伴はれねばならぬ、單獨に豫約男子と外出することは許されぬ、勿論英國などにても、我々の母の時代には今日程には信用されて居らなかつた爲め、男女の交際は今日の如く自由ではなかつたが、今日の娘たる我々は若き男子と外出しても間違ひなく、又男子から惡い方に導かれるやうなことはない、といつて居るが、此等は即ち獨立自尊の婦人となつて居るのである、偶々敵國たる露國婦人の地位は如何と云ふ感じから、我國婦女子の現狀に就て所感を述べた迄であります。

婦女雜感（やぶうぐひす）

女子大學教授　戸川殘花

△やぶうぐひすの聲ですから、上臈方に御聞かせ申す程の話ではありません、女學校の庭のすみのやぶから、チヨ〳〵と鳴くばかりです。

△さてバイブルを見ますと、エバと云ふ女は、アダムと云ふ男の脇ばらから製造されて居ます、またポウロなどが云ふ所でも、女は男に頭の上らぬものとしてあつて、どうしても從順を旨として教へたらしい、佛教では女を惡魔の樣に云ひ、成佛するには一度女身を男化させてからでなければ、極樂往生が出來ない樣に云つてあります、儒教は云ふ迄もなく男尊女卑であります、女といふものは果してこんなものでせうか。

△どうも吾々の目からみると、聖賢が男ですから、男の立場からばかり女を論じたものではありますまいか、批評したものではありますまいか、とも思はれますが、併し矢張弱肉强食の弊は免れぬやうに見えます。

△それも元來女の性質を見ると、無理ならぬ所も見えぬではありません、概して男の兒より女の兒の方が母親父親の命令をよくきゝ、生意氣な所もよほど少ない、小學校でも、よく先生を信じ、高等女學校になつても、其校長や、受持の教師を信用する事は、恐らく中學時代の男の生徒には見る可からざる事でせう。

△若し校長教員に其人を得れば、兩親のいふ事よりも何よりも、校長や教師の言葉を信用します、して見ますると女は幼年の内は兩親に嫁し、成年になつては學校の先生に嫁したものと見ても、差支はありますまい、勿論除外例はありますが………。

△それでは其女生徒は他へ緣付てからも、前の校長や先生を信ずる事が、夫より厚いかといへば、決してそんなことはありません。

△若し夫婦の間が理想的に和合したならば、女にとりては、天地間に夫のいふことより重きものは恐らくありますまい、夫の勢力はどうも偉いものです、素より父母、兄弟、姉妹、親類よりも、夫の方が力があるのです。

△さてさう考へて見ると、女は男をはなれて、獨立すべきものでせうか、いひ換ゆれば、ある强者の助をはなれて、獨行すべきものでせうか、どうも吾々の考では、强者をはなれては、獨立獨行の容易ならざるものではないかと思はれます。

△かゝる例より考へますれば、エバはアダムの脇ばらの骨でせう、女身では往生も難いでせう。

△さればとて婦人は全く獨立獨行する力のないものとも限りません。社會の事業、學藝、其他諸般の事に例のオールド、ミスとなつて生涯を送り、男子も驚く可き程の事をする女がないではありません。

△然し、さういふ婦人に、女子の美德たる優美閑雅、哀憐などいふものを欠がない人は、稀れであります

△天が男女といふものを、別々につくられた以上は、どうも男子らしき女よりも、女らしき女の方がよいのであります、かくの如き女といふものに、教育はどのへんまで及ぶものでせうか、………、及ぼす可きものでせうか、これは深く考ゆ可き事であります。

△よしや、自分の生れた家庭、育ひ立つた家庭が、理想に近くありましても、即ち理想に近い家庭で養成せられましても、若し嫁したる先の夫が、あまり思はしからぬ方面に、感化を與へる樣な男でありましたならば、千日に刈つた萱をたつた一夜の雨にぬらすやうな事になりますまいか。

△だからして吾々の考では、女子の從順は、勿論天賦でありまして、まことに美しいものでありますけれども、唯從順のみでは、未だ物足らぬ思がするのであります、即ち其の外に何事も自ら批判し、裁決してゆく力が、最も必要でありませう。

△それから女子の職業についてゞすが、この女子の職業は、追々範圍をひろめて來ました、しかし、つまり職業を要するのは、生活に多少の困難を感ずるものに限るので、さしあたり生活の困難なきものは、職業を見出す必要のないことは、いふ迄もありますまい、さて職業も色々ありますが、

△先づ第一に、近來人の注意を引きました新らしいものは銀行、會社、又ステーションの事務員などに婦人を採用する樣になつた事であります、その結果としては、未だ明らかに知ることは出來ませんが、新橋ステーションに於ては、案外結果が好いので續々募集せらるゝのであります、これは婦人が機械的事務に能を得てゐる證據でありませう、また吳服店にも、婦人が採用せらるゝ事は、誰も知つてゐる事でございます。

△それから、昔から婦人の專業としてある產婆もあります、これは勿論大切な職でありまして、その產婆なるものゝ技量如何に依て、產婦や生れ來る兒に影響を及ぼすものでありまして、若しその道を誤つたならば、母子をして終生不具者となし、甚しきは死に至らしむるやうな事ができるのであります、ですからこれは餘程氣の勝つた、心の丈夫な女子でなければ出來ません、さればこれは普通一般の女子に求む可き

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものでなく、また求めて得らる可きものでありませんが、兎も角女子の職業の一に相違はありません。

△看護婦、これも婦人の職業の一として重きをなしてゐます。

△幸田といへば誰れしも小說家の露伴子を思ひ出すとともに、また幸田姉妹なる音樂家のことに思ひ及ばすでありませう、音樂は家庭には素より社會にも必要でありまして、婦人の職業としての音樂家は、至極よいものだと思ひます、然しこれまた多少天才を要するので、一般の婦人に望む事は出來ません、無論家庭で樂しむ位の音樂は、誰にもできませうが、音樂家となるには、ソンナに容易には出來ますまい。

△畫工、これまた婦人の職業としては、ふさわしきものでせう。

△近來は醫師として立つてる婦人も間々見受けます、婦人科、小兒科などは最も婦人に適して居る、或る場合には、女醫の方がよいとかいふ評判でありまして、今はこの道に志す人も、ダン〳〵增加して來ました。

△その他澤山の職業は、婦人のためにまうけられ、婦人を歡迎し、婦人を待つてゐます、女子のためにそなへられてあります、文明と共に、世の進步と共に、國家社會の發達とともに、婦人もダン〳〵頭をあげて、社會の各方面に、職業を見出すやうになり、女子職業の範圍は、ます〳〵擴められつゝあります。

△が、私の考では、高等教育を受けた者に取つては、教師——學校の教師が、第一ではあるまいかとおもはれます。

△これは女子の職業の中でも、一番早くよりあつたので、また現に一番多數の人を持つてゐます、小學校や、高等の女子教育者の三分の一は婦人であるといふを見ても、如何にこの職業が女子に喜ばれ、また婦人に適してゐるかゞ分りませう、今や教育者たらんと志して、其學につく婦人が、年々歲々增して來まし

た、また奬勵さるゝ所から推して見ますと、今後幾年の後には、女子の敎育家――學校の女敎師がドンナに増加してゆくだろふか、思ひやられます、これまた實に婦人界のために、社會のために、賀す可き事でせう。

△而してこの敎師といふ職務は多忙ではありますが、他の職業と比べて見ますと、自修時間もあり、且又婦人として、―敎育ある婦人としての品位を保つて行けるのでありますから、これは至極よろしかろうと思ひます。

△次は記者であります、尤も今日の如き男子社會の有様では、新聞社の如き、多數の靑年が出入するところでは、餘程危險なものであります、……色々面倒な事が起り、又迷惑な事も出來まして……が、雜誌等の記者となれば、少數の仲間或ひは男子をまじへずに、事務をとることも出來まする故、雜誌記者はよいと思ひます、只困難なのは給料が充分とれませんので、……が勉強してゐる中には、社會の様子も分り、筆も熟し、知己も出來て來ますれば、後には隨分相當の月入もある事と信じます、實に婦人の職業としては望のあるものです、近來追々雜誌記者となる婦人が出て來ますのは、よろこぶ可きことだろうと思ひます。

△その他の職業は、敎育なきものには、追々道が開けて來ますが、敎育あるものには、比較的乏しいやうにも思はれます、家庭敎師、秘書なども勿論よいですが、需要がまだ充分でありますまい。

△萬全の道はといへば、適當の配偶を得て、生計の不足を補ふ位がよい事と思ひます。

△それから女子と文學ですが、文學の定義もさま〴〵故、先づ純粹の國文學、小說、和歌、俳諧、新體詩などにつきまして申しますれば、所謂クラシックスに屬する……例へば萬葉、源氏のやうなものを研究

して女學者となることの出來る境遇ならば、これば一番結構です、然し身邊の事情や、その他の事柄があつて、自分の渇望して、それこそ饑渇く如く慕つてゐるにしても、女學者となる等のことは、事情の上からゆるされぬ人が多いかと思ひます。

△よしや、そんな女學者になる事が出來なくとも、和歌や、俳諧、新體詩などを娯樂として研究される位地にあつたなら、これまた結構です、誠に幸な事です。

△ところが、小説――讀む可否は別として――小説家たらんには、餘程世の中の波にもまれなければ到底駄目でございます、――或時は悲しいこともございませう、死ぬ程苦しい事もございませう、非常な危險に出逢ふこともありませう、人の側面、社會の裏面、その奥にも分け入つて、親しく見聞せなければなりますまい、すべて、これらの波にもまれなければなりません、(勿論飜譯は別ですが)また世の波にもまれて、親しく社會の狀態を見なければ、眞に人心を感動せしむ可き作は出來ないものであります。

△されば其のもまるゝ間に、手段のために目的を失するやうな失態も生じますから、ウツカリ御勸め申しがたいのであります。

△これらを除けば、娯樂として文學的の雜誌をよみ、和歌、俳諧を吟ずることが一番婦人の性情を養ふに適しませう。

△雜書と申しますのは、平家、太平記、太閤記などの如き、日本の名作や、飜譯されし海外の名作を、まお家庭的文學といふ名の標準のもとに、撰擇したものであります。

△また今日の婦人程困難なる境遇にあるものはありますまい、家内にあつては隨分兩親の理想とも違い、新舊思想の衝突は、いろ〳〵な事柄を生み出して、現時の婦人を苦しましめ、社會では無暗に男子に批評

され、針程のことを棒程にいひふらされ、笑つたと云つては品格を落し、泣いたと云つては人品を卑しめられ、飛べばハイカラ、跳ればオテンバ、如何したら全體い丶ものでせうか。

△殿方がなさることは、女子に比ぶれば、百倍も萬倍も紳士らしからぬ事のあるのに、世は默許してるではありませんか、おゝ女子たるも亦かたい哉であります。

△日本の女子は、家内にばかり引こもつて交際をせぬからいけない、どうも人形ではあるまいし、奥にばかり、引こんで居られては、實に何の役にもたゝぬ、ほんとに困ると小言をいふ、そこで婦人會とか、慈善會とか、その他いろ／＼な婦人の集會に、身分相當の服裝をして行きますと、日本の婦人會はヴアニチーである、虚榮である、日本の婦人會は、服裝の競爭塲である、一の實なくして、只己れの美裝を見られんがため、見られて、羨やまれんがための、つまり虚榮である、と直に批評されるのであります、内に居れば役に立たゝぬといはれるし。

△實にやるせがない、嫁一人に姑十人ともいひたい程の有樣で、妙齡の處女、貞淑の婦人方には、氣の毒といはなければなりません。

△下手な植木屋が盆栽をいぢくるやうなもので、伸ると切り、縮むとのばし、無暗に水をやり、無茶に日にあて、ドーヤラ、コーヤラ、ひねこけた生氣のない盆栽にしてしまいます。

△どうか男子の方より、充分に女子に自由を與へ、成るべく、その擧動、その行爲に、批評干渉せぬやうに致したいものです、でなければ到底女子は充分に、のび／＼と發達することは出來ますまい。

△さりながら、優勝劣敗、弱肉強食といふことは或ひは一面より論ずれば動物世界にまぬがれぬものでありませう、これは大に注意しなければならない事でありまして、元來かよはき女子は、何を以て強くな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る可きか、如何にして強くなる可きか、どうしたらば此の社會に立つてのび〳〵として行けるだろふか、これ等は實に考慮す可き重要なる問題であります。

△世中といふものは、富とか、學藝とか、腕力とか、或力を持たなければ、理想や議論ばかりでは、思ふやうにならないものであります。

△この點より考へて見ますれば、充分に女子に力を養はしめ、男子をしのぐと迄はゆかなくとも、オサ〳〵劣らぬものを養成しなければ、到底女子が、男子に壓せられぬといふ程度には至りますまい。

△彼の歐米の婦女子が、男子のために壓せられず、これと相携へて社會に立つてる美風は、これ一は、彼國男子の人格の高きにもよりませうが、またたしかに品格に於ても、學藝に於ても、或は才能に於ても、男子の前に立つて恥づることなき婦人其人の力によるのであります。

△どうか、我が國に於ても、婦人の智育も、德育も、體育も、充分に養つて、つまり力を以て平均をはかりたいものであります、これが第一の得策だろふと思ふのであります。

戰後に於ける經營としての 日本の家庭

米國文學博士　山下彌七郎

近頃隨分戰後の經營として、政治家や、實業家や、及び種々の科學者等が、銘々の立場から、夫れ夫れ専門の議論を公衆に發表されます樣ですが、皆何れも多くは國家即ち公共の團體に向つての注文が多く、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寧ろ其の地盤を造る所の家團即ち家族に向ッての注文が少ない、或る人は國家と家團を同じものと云はれるかも知れぬが、其れは話の順序が合ないので、枝葉があるから、本がなければならぬと云ふより、寧ろ本があるから、枝葉があると云ふ方が物の順序である、夫れで家團があるから、國家と云ふものが出來る、夫れ故吾等は第一國に向つての注文は、先ヅ家族に向つて注文せねばならぬ、家族に向つての注文は、夫婦に向つて注文する譯になる、又此の夫婦を私は殊更に個團と名づけ度い、何故かと申せば、二つの個人が、一緒に成り、國家の爲めになることを相談して、働くからである、若しも私が其個人と申すものゝ性格を想ふ通りに造る事が出來れば、男子としてはシエーキスピアーの男子、女子としては近松巣林子の女子の性格が、一番克く描いてある樣に見える、餘計な事ですが、一寸付け加へて置き度いのは、此のシエーキスピアーの男子であります、此の大文豪が種々の方面から、人間と云ふ者を解釋したが、遂に女子と云ふ性格を解する事が出來なかつたことは、歐米當時の學者間の說である、而して其の立派に描いた男子の人物は、皆其人が自然と云ふものに對して働き、又は之に逆つて働き、又は其物を制せんとして働いた、つまり人間男子を自然と同じ地位に措て、一人前の人間を造らうとしたが、夫れで實に重々しい價値のある男子であつて、寧ろ完全に近いものである、然るに其の近松の描きしものは、男子でも、女子でもが、極く柔順で、謹直で、平和で、溫順であつて、つまり自然と云ふものに使はれて居る樣な傾きがある、夫れで近松は確かに女子として、人間を寫したものであつて、それが實に價値ある且つ尤も完全に近き女子であると思ふ、夫故私はこゝには、別に男子と云ふものに話を及ぼさず、單に女子の本分、及び家庭教育の方針を御話し致して、戰後經營の最も必要なる要件と致しますので御座ります。

一　女子の本分

イ、家族的思想
ロ、眞實と平和
ハ、消極的經濟思想
ニ、義務的道德の思想

イ、家族的思想

家族的思想とは、國家的思想に對する言葉であつて、國家と云ふよりも、家族と云ふ方に重きを置く意味である、此には一寸語弊がある樣に思はれるが、決して左樣ではなく、其意味に於ては、誠に女子として最も心を留むべきものであると思ふ、健全なる國家は、健全なる家族の集合であるといふ以上は、家族が一體に健全でなければならぬことは言はずとも明かである、果して然らば此の健全といふものは、眞正の愛から來るものであるから、其の愛と申すものが、健全なる家族の最大要件でなければならぬ、元來此愛と申すものに付て、吾人は大變容易に話し、又た其の文字も容易に用ひますが、實際から申ますと隨分込み入つた意味もあります、例へば愛は夫れ自身己に完全無缺なる意味を持つて居て、他より破壞する事の出來ず、又自ら破毀する事も出來ぬものであります、併し世の中には、往々夫婦の愛が破れ、父子兄弟の愛が厚くなり薄くなる、と云ふ事があるのは、如何なる故かと云ふに、夫れは愛と云ふものでない、同情と云ふものである、同情の厚薄はもとよりあるが、愛の厚薄はない筈である、元來人間には好きと嫌いがある、其好きが段々發達すると同情となる、同情が段々成熟すると終に愛となるので則ち愛は完全なものであるからである、私は此無缺の愛が、夫婦より起つて、家族一般に普及し破ぶる事も破ぶれる事も出來ぬ家族を養成して貰ひたい、今日の日本の家庭は同情に由て持つて居て、愛と申すものでは持て居ない、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

元來愛は、昔より東西洋の詩人歌人に由て、女性として歌はれてある如く、愛の主人公は婦人でなければならぬ、夫故夫婦間の情といふものも、婦人の愛の眞實なると否とに由て、直ちに其家庭の善し惡しを判決する譯になる、故に婦人の其夫に對する愛は、實に眞正なる、且つ完全なるものでなければならぬ、今假りに夫婦の愛を土臺に置き、純粹の家族的思想を以て、理想の家庭を造へたものとせば、此立派なる思想及び家團の働く、目的物を求めなければならぬ、即ち家族的思想は、家族をして團欒せんとするのみに止まらず、廣く國家を造らんとする目的に向つて働く所の順序でなければならぬ、畢竟國と云ふ目的に向つて働く手段にして、先づ家といふもの丶土臺を固め樣といふのであつて、決して家族の幸福のみに向つての家族的思想ではないのである、私は實に此家族的思想が女子の方々に、間違なく解釋せられ、又應用せられて、親兄弟姉妹の間に、波風の起らざる樣に、注意して貰ひ度ひので、又此れが最も立派なる國を造る處の第一の要件であると思ひます。

ロ、眞實と平和

私の考へでは世の中では、多くの場合に於て、平和を要めんとして、不眞實な事を語り、不正眞な話をもするといふ樣なことが流行すると思ふ、殊に此れは婦人の仲間に多くはないかと思はれる、元來平和と云ふものは、實に結構なものであり、又皆が求めねばならぬ事であろうと思ひますが、之に反して不正眞とか、又は不眞實とか云ふものは至極惡い非道のものである、此の非道なものを使つて、平和を要めんとするは、如何にも理屈の合はぬことである、今假りに理屈が立つて平和が得られたとすると、其平和は實際眞正の平和であるかないかは考へものである、私は確かに左樣して得た平和は本當のものでないと云ふことを斷言する、何故かと申せば、眞實と申すもの丶內に平和もあれば、愉快もあり、幸福もあるので、換

言すれば、不眞實の内に不平和もあり、不愉快も出來、不幸もあるのである、詮ずる所、眞實と云ふものから、平和も起り、愉快も來り、幸福も生ずるのであるから、若し不眞實、不正直の方法で、平和が出來たとするならば、夫れは全くテムポーラルピース(假りの平和)と申すので、決してリアルピース眞正の平和でないのである、夫れで私は第一婦人の方々に向つて、平和と云ふものを目的とせらるゝかはりに、眞實即ち「ツルース」と云ふものを目的にして貰ひ度い、此眞實を目當として、世の中の道行きを致しますと求めずして平和も來り、愉快も生じ、幸福も得られるのである、例へば一時如何なる不幸に陷るとも、不愉快であるとも、又は如何に不幸なる境遇に迷ふとも、眞實の目標に向つて進む以上は、決して人間の生活を書き殘す歷史の上に、汚點を留めざるのみならず、却て其等の不幸不愉快が萬世朽ちざる光明を殘すと云ふ事を記臆して貰ひ度い、決して一時を姑息するの手段を以て、一時の平和を求むるやうな、あさましい量見を持たない事を、切に望みますので御座ります。

八、消△極△的△經△濟△思△想△

古から經濟の原則として言ひ囃した通り、入るを計つて出るを制するとは、實に立派なる眞理である、此の入るを計ると云ふ考へが、積極的經濟思想であつて、出づるを制するとは、即ち消極的思想である、女子の天性と修養とは、自ら經濟上消極の方面に傾き易く、又男子は他の方面即ち積極の方に自ら傾く樣になる、其故家政上の經濟は、全く家婦に一任し置き、勉めて出づるを制すると云ふ考へを以てやつて貰ひ度い、そうすれば其間に男子が入るを計るに、全力を盡す譯になる、斯くして家事の整理上、各自の責任を明白にする事が出來るのであると思ひます。

二、義△務△的△道△德△

此の義務的道德を英語で申しましたならば、「サイエンス、オブ、チユーチー」と稱へまして、義務の科學と云ふ事である、義務の科學とは、如何なるものであるかと申しますと、實際權利と云ふものゝ正反對であると申したい、即ち權利は自分を守る事が主であつて、義務は他に向つて善を爲さうと云ふ考へが主であるのである、畢竟吾々人類が互に扶持して生活して居る以上は、人の迷惑になる事をしては好くない、何處迄も人の爲めに働かねばならぬ、又人の爲めになる事ならば、如何なる事でも、手を出して、充分に社會と云ふものを助けてやり度い、此學問を所謂義務的道德と申すのである、併し他と云ふ事にも、自己と云ふものが摸範となッて働く以上は、縱令自分が惡い事をして、他人の爲めになる事を遣らうと思ふた所で、其は却つて社會の害になり、又他人の爲めにもならぬ、其れは自分の惡を他に移して、其を社會に植付る最も有害なる且つ不道德なる行爲であるからである、私は婦人方に向ッて、此義務的道德と云ふ事に付ては、深く能く御研究を願ひ度ひのであります、之が更に社會組織の土臺となり、又更に文明の高低を量る主なるものとなりますから。

二、家庭教育の方針

私は兼ね〳〵家庭教育の方針に付ても、男子に向つての方法と、女子に向つての方法とを、少しく否寧ろ大に變へて貰ひたい、則男子には可成自働的で、建設的で、積極的で國家的で、又權利と云ふ事に重きを置くかはりに、女子に向つては、他働的で、模型的で、消極的で、家族的で、又義務的である樣に仕込みて貰ひ度いのである、例へば自働的と他働的の場合に於ては、前者は自分の働き得る事、又は働いて差支へのない事なら、人が何んと邪魔をしようが、少しも關係を爲ない、之に反して後者は、例ひ人が何んと惡口を言つても、自分はそれに對して却て善く取り扱つてやらう、自分からは決して他の惡口や、邪魔

はしないと云ふ事に心掛る考へである、建設的と云ふ事は、物を建設しようと云ふ思想であッて、發明とか組み立てとか云ふ考へは、皆此の建設と云ふ文字の内にあるのである、然るに模型の思想は、多く模型を尊ぶと云ふ考へで畢竟能く秩序とか順序とか云ふ事物の模型を守りて行ふと云ふことである、積極と消極とは、已に前に御話し致した通り、前者が殖やさうといふ間に、後者は殖やされた丈を持ち續けて行くのである、最早國家的とか、家族的とか、若しくば權利とか、義務とかの説明を繰り返す必要がないと思ひますから、之れで先づ止めますが、畢竟婦人としての天性天職は、自然に男子のとは相違して居りますから、各々其等の天職を全ふする方面に、一生懸命になつたなら、職責も明白になり、社會の組織も、秩序も、順序も定まりて、立派なる日本の國家を世界に紹介して、一種特別なる文明を發輝する事が出來るかと考へます、今日日本の如き復雜なる家庭の無趣味を以ては、到底戰に勝ちても、實際其後を經營する本當の正味がない樣に思はれる故に、是非戰後經營の最大要件として、婦人方に向つて、家庭上の大掃除と、大改革を遣ッて貰ひ、最も健全なる家庭を以て完全なる國家を建設されんことを、願ひ度いもので御座ります。



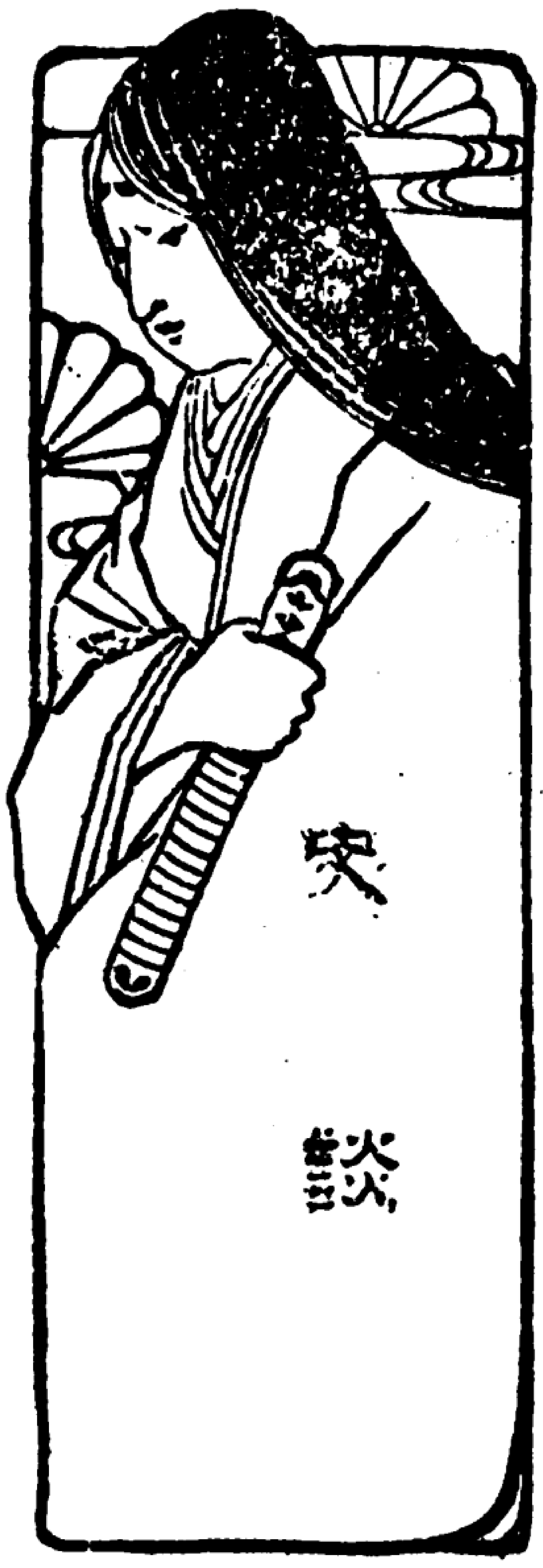
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

理想的婦人

女子教育の詳細目的

- 大綱
  - 教育勅語の熱誠なる實現者
  - 特に忠君愛國の志操充實。
  - 明智。厚情。敢爲。健身。
  - 完人　良民　良妻　賢母　業人
- 細目
  - 身體＝健身
    - 發育　强健　熟練　端麗
    - 起居　飮食　淸潔　活動　鍛練　節制　快活
    - 遊戯　作業　業務
  - 道德
    - 厚情　敢爲
    - 溫順　貞節　誠實　仁愛　忍耐　勤儉
    - 忠孝
    - 愛國＝（公德、遵法、義勇奉公）
    - 妻道＝（齊家、輔佐、慰安）
    - 母道＝（胎教、養育、教育、指導）
    - 對人＝（信義、禮讓、親愛、活才）
    - 女禮＝（容儀、言語、動作、取扱、裝飾）
    - 生活＝（儉素、高尙なる快樂、進步、安立）
  - 智能＝明智
    - 人類及國民たる智能（修身國語、外國語、歷史、地理、數學、理科）
    - 自衞的智能＝（衞生、體操、修心）
    - 良妻たる智能＝（家事、裁縫、料理、編物、刺繡、造花、染織、養蠶）
    - 賢母たる智能＝（育兒、教育）
    - 風雅的智能＝（音樂、圖案、揷花、茶湯、詠歌、園藝）
    - 業人たる智能＝（教育、美術、文學）

（長野縣上田高等女學校長下平末藏氏立案）



吉田松陰の母堂と其の家庭

菅原倭翁

非常の時には非常の決心も出づべく、又眞面目になるものである、日露の間に大難を構へてから、嚮に太平の惰力を助長し來れる軟文學、殊に新聞に雜誌に切に人情の弱點のみを描き、其の境遇を悲しむを專らとして同情を博しつゝあつた小說の如き、今や漸次顧みるものもなくなり、社會は境遇に打ち勝つべき大なる精神を有せる活ける人物を要求するやうになつて來ました、出征軍人が海に陸に古武士に劣らざる、否な或る場合には、より以上の譽を博しつゝあるに付けて、知らず識らず女性も亦涙を隱して愛子の出陣を祝ふやら、或は笑て良人の遠征を送ると云ふ傾向で、實に賴母しき現象であります、斯くて一時物質的僞文明の爲に覆はれ鬱屈して居た日本民族の精華たる武士道は、玆に端なく復活し來つたのであります、此際彼の「花は櫻花、人は武士」てふ名譽ある武人の配たりし當年の女性を追懷すると、何となく新に一層の感興を催し來るを禁じ得られないであります。

さて明治維新の大業を翼贊した筆頭は薩長土肥の諸藩でありましたが、就中尊王の先鞭を着けたのは長藩である、當時廷臣の正義派であつた三條公、岩倉公東久世伯等の諸卿所謂七卿落は、一に長藩志士に信賴されて居たのであります、以て如何に長州に人物が輩出してあつたかと云ふとが想像されるでありませう、是れは長州に吉田松陰と申す偉人があつて能く諸生を薰陶されたからであります、長藩の俗論を

排して嚮背を定めた高杉晋作氏の如き、維新三傑の一に數へらるゝ木戸孝允氏の如き、現存元老中の元老たる山縣侯の如き、皆師事されたのであります、大勲位伊藤侯の嚴父十藏翁は當時松陰先生の私塾松下村塾の門番であつたから、是れ亦門下生の一人に相違ありません、併し高杉、木戸、山縣から見ると後進であつたのです、高杉が山縣へ來翰の一節に『聞多井上馨伯抔々は面白い奴なり後來或は役に立つこともあれば御世話頼み申候、俊介伊藤侯幼名も才子なり、是亦同樣御見捨なく御教導を願ひ候』とあります。

松陰先生は今日で申さば國事犯罪者と云ふやうな科で、當時の政府徳川幕府に捕はれて、三十歲を一期として刑場の露と消えられました、實に短い生涯でありました、先生の歿後に其親戚や友人や門生が松下村塾に會合いたした處が、能文を以て推されて居た土屋蕭海と云へるが進みて『奇人の傳を書くには其筆を得なければならぬ、拙者及ばずながら全力を盡して先師の傳を撰しませう』と云ひ終らざるに、坐中の高杉晋作氏は厲聲一番『お控へなされ、先師の至誠は日月を貫き、大義は天地を窮む、區々たる文章の能く盡くす所でない、貴下奇人の傳が書きたくば賣酷奴三平の傳でもお書きなさるがよからふ』と叱したと云ふことであります、三平は當時萩の行商人で諧謔を以て知られて居た小人である、以て松陰先生の如何に大人物であつたかと云ふことが知れます、今日振古未曾有の征露戰役に際して內外文武樞要の地位にある長藩出身の諸氏は、皆間接直接松陰先生の薫陶を受けた方々で、所謂る長閥てふ長藩出身者の勢力なるものは、取も直さず松下村塾薫陶の惰力に外ならんのであります、此の偉大なる眞武士を生み、この豪傑を育てたる女性の家庭に付て、聊か聞ける處を記して見る積りです。

母堂名は瀧子、村田右中氏の女にして、幼にして兒玉太兵衛氏に養はれ、二十歲の時杉百合之助氏に嫁し、三男四女を擧げました、松陰先生は其次男でありまして、六歲の時に出で、吉田大助氏の後を嗣ぎ、祿

五十七石を給されたのである、杉家は祿薄く家貧しかつたので、萩の城下の片傍に草屋を構へ、公務の傍らに田畠を耕したり、村中の子弟どもに書を敎へたりして、僅に活計を立てゝ居た程であつたから、瀧子も夫に從ひて田に出で山に行くなど、暑き日寒き夕も手足の休まる暇はない、殊に夫が公の務にて六年餘りも家に在らで留守せし時などは、永の月日を一日のやうに立働きました、元より下女下男を召仕ふ事もならず、男女の子寶はありましても、幼なければ、なか〳〵に足手まとひとなるばかりで、内の事外の事皆一身に引受けて、片時休まる心はなかつたのです、晝は終日雨にも耕し雪にも樵り、夜はよもすがら汲炊裁縫に打かゝり、重ね〳〵劬勞の中にも姑に孝養は少しも缺かさで、剰へ姑の妹岸田氏が活計に窮して杉家にたより來り居て、其上重き病氣に罹りて起居もまゝならねば、半年の月日大小便のこと迄介抱して少しも忌嫌ふ樣もなく、そのさま實の父母を遇するに異なる所がありませんでした、されば、姑は涙にむせびて瀧子の厚意を喜ばれしは更なり、他人さへその樣を見聞して感泣せないものはないと云ふ有樣でした、義弟玉木正韞と云へるは中々人に許すことのない男でありましたが、この瀧子刀自計りには感心して「我が義姉の如きは丈夫も及ばぬ人ぢや」と推服して居たと申すことであります。

松下村塾は先生の叔父玉木文之進と云へるが諸生を集て敎授されたのが始めで、玉木氏が官に仕て後は暫く廢れて居たのを、外叔父久保氏がその子弟に業を授けらるゝに付て、塾號を襲用されたので、松陰先生がその外叔父に繼で學を講せらるゝやうになつたのは安政三年七月からのことである、されば瀧子刀自は塾生を見ると己が孫の如く愛撫奬勵された、かゝる間に世の中は段々物騷がしくなつて來て、松陰先生も亦譴を得て蟄居せらるゝと云ふ次第でしたが、同志の方々で先生を訪ふて時事を諮るもの踵を接する計りなるに、瀧子刀自は何時も酒肴を設けて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

欵待せられました。然るに天は、何處まで、この瀧子刀自を艱苦の淵に擠し玉ふのだか、遂に四人の子、四人の孫を奪はれました、就中松陰先生が忠君愛國の至誠を懷かれて空しく刑場の露と消えらるゝさへあるに、その罪の己が良人百合之助(松陰の實父)氏に迨連りて世を捨てたるに至ては如何に雄々しき性とは云へ、腸もちぎれ胸も砕けたであらうに、心の中の苦しさを少し外面に表はさで、よろづ甲斐〳〵しく立振舞ふさま往昔に異はらざりしと云ふことである、かくて十年餘りを經て明治九年となりましたが、茲に又々大なる災が杉家一族の上に降り掛りました、乃ち萩の亂起りて、刀自が最愛の孫小太郎、孫婿玉木正誼などが、義弟玉木正韞と共に戰死するのみならず、親戚の中にも此變に與かるもの多くありましたが、獨り刀自の長子杉民治(先生の實兄)は任に玖珂郡にあつて、家に留守して在つたものは、婦女と幼兒とのみでありましたが、瀧子刀自は例の如く從容として慌て惑ふと云ふ事なく、一家爲に聊かも過ちはありませんでした、何時もながら大事に臨んで動せない女丈夫の振舞、稱へるに言葉がありません。

其の後明治十五年、時の內大臣三條公が刀自の寫眞を　皇太后宮　皇后宮兩陛下の御覽に入れ奉り、翌十六年の秋　皇后宮陛下より特に羽二重一匹を賜はり、踰て二十年の十一月、瀧子の病重きよし金原明善氏より時の宮內大臣土方伯に申しゝに、やがて皇后宮陛下より御菓子一折を賜はりましたが、刀自の病は程なく快くなりました、後二十二年十二月又も縮緬一匹を下賜せられました、此時品川彌二郎子よりの書に、

今朝十一時參內仕候處、　皇后陛下より御側近く召させられ、松陰の老母へ些少の品なれども遣し度候間、彌二郎より可然取計ひ吳れとの御言葉ありし故、此包(白縮緬一匹)拜戴し、如斯迄大御心を掛させられ、松陰の母は申迄もなく、松陰も地下にて感泣致し候半と申上げ、落淚して御前

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を退きたり、彌二が心事御推察可被下候、右御品御送附方は庫三樣へ談じ、取計ひ可申候、何卒先師の御靈前にて、北堂君へ御渡しあらんことを奉希望候、香川大夫の話には當三月松陰並御老母の事、皇后陛下に御話相成候後（御料局長官拜命の時、松陰先師在世中の事色々申上たるなり）幾度も御老母の事御話に相成、よき折もあらば何か老人に遣し度と御内沙汰有之、過日來品川が參内したらば知らせよとの御事に付、先刻申上候處直に御召に相成候云々との事也、實に先師の顏色彌二が眼にちらつき、先師の靈魂は　皇城を擁護して居る心地致し、御前にて落涙に沈み、漸く前條記載の御禮丈け申上げたり、御推察奉　願候、早々拜白

明治廿二年十二月廿七日

御料局にて　品川彌二郎

とあります、此品川子爵は松陰先生の門下生にて、先生の衣鉢を繼げりと、同僚より許されたる人物です、先生の遺志を繼紹して尊攘堂を起したも、この子爵であります。

翌二十三年六月有栖川大將の宮、山口縣下御巡覽の折には、松下村塾に御立寄らせられて、瀧子に拜謁を賜りて親しく御言葉を掛させられました、曾て松陰神社を建つる時には、聖旨を以て御下賜金あり、又松陰に贈位を賜ひしなど、殊恩に浴する毎に、刀自は感泣して必ず亡夫並に松陰の靈を祭り、寅次郎が非命の死を遂げたとき、亡夫も亦その罪に罹つて身まかり、二人共に忠義の志を齎しながら、今日明治の聖代に逢ひもせで、老婦のみ獨り重々の恩典に霑ふこと、嬉しくも又悲しと、いつも涙に咽びたりと云ふことであります。

廿三年八月十七日松下村塾の修繕成りて上棟の式あり、刀自老體を以て式に臨み、祝の莚に列りて賓客より職工の末に至るまで、一々杯を傳へて喜ぶこと限りなかりしが、後幾日もあらず、同じ月の廿三日たま〳〵流行性感冒に犯され、廿九日溘然亡くなり

ました、享年八十四歲、越て七日　皇后陛下より思召もて金一百圓を賜ひ、剩さへ畏き御弔詞を賜ひたりと聞く、萩の城下護國山の南、舊の草屋の邊なる亡夫の墓側に葬り、法號を賢成院釋知覺乘蓮大姉といふ、乘蓮の文字は刀自が生前大谷法主より得たのだと申すことです。

刀自の一生は前にも述べたる如く、若きよりして世にも稀なる憂きふし〳〵に出逢い、身を勞し心を苦しめたことは、すべての世の婦人達に勝つて居る代りに、さて老後の朝恩も亦例し少き處であります、凡て非常の艱苦に堪えて後、優境に入るときは、如何に雄々しき人も、大抵心緩むが常であるに、獨り瀧子刀自は少しも精神の撓んだ樣子も見えなかつたと申すことです、實に世に珍らしき賢婦人ではありませんか。

前に述べた所の瀧子刀自の經歷にて略松陰先生の家庭が想像出來ることゝ思ふ、杉家の家法と申すは、第一祖先を尊び、神明を崇め、老人を勞り、親戚と睦じく、文學を修め、田畠を自ら耕す、此等がその大綱であります、而して如何なる場合にも、此家法を最も忠實に實踐されましたのは、母堂瀧子刀自であります。

松陰先生は育英の傍ら女子敎育に就ても亦多大の考慮を拂はれて居た事實があります、先生は禮敎の不振を慨されて再醮改適不レ知レ爲レ恥緇衣涅齒不レ知二何故一と申されて、時俗の貞操を缺ける樣を痛く嫌ひなされた、今日一種の方面に主張されつゝある再嫁說の如き先生は絕對的に反對であることが知れる、又風俗壞亂として源氏物語や伊勢物語を排斥せられて居ります、却て淨瑠理本は心得あつて聞けば隨分役に立つものだと申されて居る、されば女子の爲には特に富永有鄰氏をして曹大家の女誡を譯述せしめられて授けられました、又、有二節母烈婦一然後有二孝子忠臣一、於二楠菊地結城瓜生諸氏一、吾見レ之矣、と申されてある、その意は忠臣孝子は貞節なる婦人の手によりて始めて育てらるゝのだと云ふのである、特

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に胎教は最も重しとせられ呉れ〲も注意されてあります、先生が曾て獄中より妹君へ遣はされた書狀は一部の女子訓であります、啻に友情の厚きのみでない、一讀必ず思ひ半に過ぐるものがあると存じます、茲に幷せて記します。

十一月廿七日と日つけ御座候御手紙、幷九年母、みかん、かつをぶしともに昨夜相とゞき、かこひ内はともしくらく候得共、大がい相わかり候まゝ、そもじの心の中をさつしやり、なみだが出てやみかね、夜着をかぶりてふせり候得共、いよ〲淚にむせび、つひに夫なりに寐入候得共、まなく目がさめよもすがら寐入り不申、色々なる事思ひ出し申候、そもじや父母樣やあに樣の御かげにて、きものもわたゝかに給物もゆたかにあまつさへ筆紙、書物まで何一つ不足これなく、寒さにもまけ不申候間御安心可被成、そもじ御家おばさまも御なくなりなされ候事なれば、そもじ萬たん心懸候はでは相すまぬ事、ことにおじさまも年まし御よわひ高く被爲成候事ゆへ、別して御孝養を盡したべかし、又萬子も日々ふとり可申候得ば心を用ひてそだて候へ、赤穴のばあさまは御まめに候哉御老人の御事萬事氣をつけて上げ候へ、かゝる御老人は家の重寶と申すものにて、金にも玉にもかへらるゝものに無之候、そもじ事は、いとけなき折より心得よろしきものとおもひ、一しほ親しく思ひしが、此ほど御文拜しいらざる事まで申遣し候なり、

別にくだらぬ事三四枚したゝめつかわし候間、おとゝさまか梅兄樣に讀よき樣に寫しもらひ、少しは心得の種にもなり可申候、扨御たよりの中にも手習よみものなどは心かけ候へ、正月には一日はやぶ入り出來可申哉、あに樣の御休日をゑらび參り候て、心得になる噺とも聞候へ、拙も其の日分り候はゞ昔噺なりとも認め遣し可申、又正月にはいづくもつまらぬ遊び事をすることに候間、それより何か心得になるほんなりとも讀でもらひ候へ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

貝原先生の大和俗訓、家道訓などは丸き耳にもよくきこゆるものに候、又淨瑠りほんなども心得ありて聞き候へば隨分役にたつものに候、扨又別に認めたる文に付、うたをよみ候、こゝにしるし侍りぬ、

　賴母しや誠の心通ふらん
　　文見ぬさきに君を思ひて

右したゝめたるは、そもじを思ひ候より筆をとりぬるが、此夜そもじの文の到來せしは、定めて誠の心、文より先に參りたる哉と、たのもしくぞんじ候まゝ、かくよみたり、

十二月三日　（別紙省略）

女詩人

アンナ、ルイサ、カルスチ

あまき

詩才は天禀なり。生れながらにして、雄篇大作を出すものあり。又多年螢雪の研鑽を經るも、猶ほ凡庸陋劣見るに堪へざるものあり。されど生れながらにして詩才あるものも、學ばざれば、大成を見がたく、天質庸劣なる人と雖も、孜々として倦まずんば自から會心の妙域に入ることなしとすべからず。蓋し古來詩聖と呼ばれ、歌仙といはるゝ人は、天禀の才に加ふるに、研鑽の勉めを以てしたるに非ざるなし。今記さんとせるアンナ、ルイサ、カルスチ女の如きは則ちかゝる類の人なるべし。

　アンナ、ルイサ、カルスチ女は、日耳曼の人なり、一千七百二十二年下シレシアの國境なるナムメルといふ小村に生る、父は酒屋の主人なりしが、彼女の八歲の頃に身まかりぬ。されば彼女は波蘭なる大伯父の家に引取られて、養育を受け、且つこゝにて讀み書きの業を學びける。

　波蘭に在ること三年にして、故鄉なる母の許へと歸りぬ。家素と富めるにあらざれば、家に歸りて後は、何くれとなく一家の勞役に身を委ね、牛飼ふ業に朝夕を送りしが、その天才は此時始めて、萌芽を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

發して、詩歌の嗜好をあらはしそめけり。然るに母は、はかゝる業に心を傾くるは、家事の妨げなりと思ひてや、痛く嫌ひて、そを廢めしめむとしけり。十七歳の時、羊毛を梳づるを職とせる者に嫁して、其妻となり、日に夫の職業を手傳ふのみか、親里の事にも力を貸しゝかば、殆んど寸暇もなかりき。されどかく忙がしき間にも、天性好める道のことゝて、須臾も忘るゝこと能はずして、牛乳搾る暇にも、毛を梳づる折にも、深く詩歌の山に攀ぢ上りて、うるはしき句の花を手折り、日曜日の休日には、そを筆にして紙に認むるを常とせしぞ、殊勝なれ。

然るに如何なる故にや、十一年の歳月を經て、一旦夫に離縁され、今は寄邊渚の捨小舟、頼らん人もなくなりて、日々の生活にも差支へしかば、竟に裁縫師なるカルスチといへるに再嫁せしが、このカルスチは至つて放縱の生れにて、已れは浪費贅澤に日を送り、家族生計の事を擧げて、みなアンナに打任せ、つゆ顧みるところなければ、アンナの不幸困難は愈よ甚しくなりゆきしが、この不幸困難はアンナが、詩人として、大成するの動機となりしとは、後に至りて知られける。

此時アンナは生活の助けにとて、始めて其の作りたる詩をば賣り始めぬ。且つ即席詩人となりて遍ねく國中を遊歷しけるが、その天才は自づとあらはれて、人々に知られ、賞讃を蒙むること屢々なりき。其後一家と共に、グロガといふ處に引遷りしが、ここにて始めて書肆に近づきを得たりしかば、著作出版のことにつきて、少なからざる便宜を得たりき。

千七百六十年シレシアの貴族なるコットウイズ男爵グロガを旅行するに方り、アンナの著作を見て、その詩才の非凡なるに感じ、且つ其家の甚だ貧しきを憫れみて、遂に彼女を携えて、伯林に伴れゆき、自ら紹介の勞を執りて、廣く文學社會の人々に交際せしめ、時の皇帝フレデリック、ウイルヘルム二世にも謁見の榮を得せしめぬ。アンナの詩集の中に掲げたる多くの詩歌は、概ね此時に成れるものにて、

その吟詠は人口に膾炙して、名聲都鄙に響きぬ。詩名一時に揚りて、得がたき天才の譽れかくれなければ、遂に皇室より恩給金を下付されたり。されど二人の兒女あるに加へて、兄弟さへ其家に身を寄せたりしかば、僅かなる恩給のみにては、一家の維持に困難するを免かれざりき。さればウイルヘルム皇帝は彼女の爲にとて、新に家をしつらへ賜ひしはアンナに取りて實に光榮の至りなりしが、アンナは一時も早く此家に住はんとて心頻りに急ぎしかば新に塗りし壁のまだ乾かぬに引遷りし爲め、端なく病に罹り、一千七百九十一年六十九歳を一期として、遂に黄泉の人となりぬ。その翌年に至り、其女記念錄を出版し、又詩集中の一篇をも發行したり。

わが國平安朝の文學が、女流の手によりて開拓され大成せられたるは寔に多とすべしといへども、是等の名媛才姫は、みな上流社會に出で、翠帳紅閨の裏に人となりて、花鳥風月の間に吟詠諷誦するを以て其の職業とせるものなり。見よ、かの清少納言の如き、紫式部の如き、伊勢大輔の如き、和泉式部の如き、赤染衛門の如き、いづれが然らざるものあるか。こゝを以て其作多くは浮虚に陷ゐり、淫靡に流れ、華麗なる文章、優雅なる歌句の外には、殆んど矜式するに足るものなく。之をアンナが日の生活に追はれて、齷齪として奔走に衣食するの間に、心を深遠なる思想界に遣りて、貧困と闘ひ、苦痛を忍びながら、遂に其の天才を大成し、眇たる一匹婦を以て一國帝王の歡待するところとなりしに比すれば其間豈に霄壤のみならむや。今の女學生達、徒らに學校生活を爲さゞれば、才名遂に成し難しとのみ思ふは非なり。志あるものは業成るとかや、勉めて倦まざれば、アンナたる決して難きにあらじ。

予は凡ての女生に向ひ、文學者たらんことを望むものに非ざれども、天才にあらざれば、殆んど大成しがたき文學すら、心がけ一つにては、縱ひ學校敎育は受けずとも、尙ほ應分の成効を見ると、アンナの如きもののあるを說くのみ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

講義

東關紀行講義（三）

文學士　境野天華

ほんの河原に打出でたれば、四方の海かすかにして、山なく、岡なし。秦田の一千餘里を見渡したらん心地して、草土ともに蒼茫たり。月の夜ののぞみいかならんとゆかしくおぼゆ。

ほんの河原、本野が原のこと、三河の國御油の驛より豊河に出づる通路。

秦田の一千餘里、唐の公乘億と云ふ人の十五夜の詩に「秦田一千餘里凛々氷鋪」と云ふ句がある、こゝでは、此の句を引いて書いたもので、今の峽西省地方は昔秦と云はれて居つた、即ち秦田とは峽西省一帶の廣々たる野原を云ふのであつて、それに月の光がさしてさながら氷を舖きつめたやうな玲瓏たる光景を詠じたもの、此の詩を引いて來たところから、本文の中にも「月の夜ののぞみいかならん」と書いたものである。

（通解）道はほんの河原にさしかゝりた、四邊は廣廣とした原であつて、遙かに海を廻らして居る外、見渡したところ、眼を遮ぎる山もなければ、岡も見つからぬ。其の廣々とした所を見れば彼の詩に詠ぜられて居る秦田の一千餘里の眺めはこうでもあらうかと思はれる、はてしなき廣野は草も土も一色に茫然と只どこまでもどこまでもと廣く見える。思ふに此の廣野の月の夜の眺めはどんなものであらう、どんなにか好いに違いない、月夜に此處を通らないのが殘念でならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しげれるさゝ原の中に、あまたふみわけたる道ありて、ゆく末も迷ひぬべきに、古武藏の前司、みちのたよりのともがらにおほせて、植ゑおかれける柳も、いまだ蔭とたのむまではなけれども、かつ〳〵先づみちのしるべとなるもあはれなり。

武藏の前司、北條泰時のこと、泰時は執權となる以前武藏の守となりてゐた。

(通衢)曠莫たる廣野には笹篠生ひ茂り、其の中を踏み分けて出來たる通路が幾筋もあうて、どうかするとどれが正しき街道やら分り兼ねる程であるが、幸に前代に武藏の國守をしてゐられた、彼の徳高き北條泰時公が、往來の人の便を考へて、此の街道附近の人民に命令を下し、街道に沿ふてずらりと柳を植ゑ込ませて置かれたのが、まだ左程年數も經たぬから立寄りて憩ふほど立派な木蔭は作りてゐないが、それでも尙どれも〳〵往來の目標となりて、自然人も道を踏み迷はぬ、誠にこれも昔の施政者の民に下した仁惠の餘德である。

もろこし、召公奭は周の武王の弟なり。成王の三公として燕といふ國をつかさどりき。陝の西の方を治めし時、一つの甘棠の下をしめて政を行ふとき、司人よりはじめてもろ〳〵の民にいたるまで、其のもとを失はず、あまねく又人の患をことわり、重き罪をもなだめけり。國民こぞりて其德政をしのぶゆゑに、召公去にし後までも、彼の木をうやまひて、あへてきらず、歌をなんつくりける。

召公奭、昔周の武王崩じ、其の子成王まだ年が幼かつたので、其の叔父にあたる周公と召公とは其

に三公の位にゐて、成王に代りて政を行ふた。後ち召公奭は燕の國に封せらるゝやうになりた。其の以前陝西に居て政を聽いた頃は何時も甘棠の木の下に於てするが習慣であつた。そして其政治の仕方が極て公平で、又人民の憂を除き普く仁惠を布いたので、人民は非常に召公の徳を慕つてゐた。後ち召公は周の都の方へ歸りて往かれたが、燕の人民は永く召公の徳を懷ふて、其の常に政を聞いて居られた處の甘棠の木をさながら召公のやうに考へて、何時までも枯らすまい、絶やすまいと思つて歌を作つた。其の歌(詩)は「蔽芾甘棠勿レ剪勿レ伐召伯所レ茇、蔽芾甘棠勿レ剪勿レ敗召伯所レ憩、蔽芾甘棠勿レ剪勿レ拜召伯所レ説」と云ふので即ち詩經に載つて居る甘棠(やまなし、やま林檎、梨の類)の詩である。此に此の詩を引いたのは北條泰時の徳を召公奭のそれに比せん爲めである。

(通解)昔支那に召公奭と云ふ人があつた。召公奭は周の武王の弟に當る人で、武王の子成王の世に三公の一人として燕の國を治めてゐた。其の以前陝西にゐて國を治めた時、何時も甘棠の木の下に座を占めて政を聽き、上は多くの官人から下は諸の人民に至るまで、誰彼の區別なく、普く、人の苦患憂愁を除き去り、重き罪を犯かした者も出來る丈輕るくゆるやかにしてやつたので、其の國の人々は召公の徳に服して召公を慕ひまつるあまりに、召公が其國を去られた後々までも其處の甘棠の木を懷かしく思ふて、其の木を召公のやうに尊敬し、何時までも、枯れしめまい、絶えしめまいと思ふ心から、甘棠の歌を作りた、其の木をかりそめにも剪りて削けるとはわるい、一寸でも毀ふやうなことがありてはいけないと云ふ意味の歌を作つた。實に君子の徳ほど有難いものはなくまた人に慕はるゝものは無い。

後三條天皇東宮にておはしけるに、學士實政、任國に赴く時、國の民假令甘棠の詠をなすとも忘るゝことなかれ多

くの年月の遊といふ御製をたまはせたりけるも此の心にやありけん、いみじくかたじけなし。

學士資政、この事は今鏡、古事談、古今著聞集等の書に出てゐる古事で、帝の御製は「州民縦發二甘棠詠一、莫レ忘多年風月遊」云々とある。

(通解)また後三條天皇がまだ皇太子で以て東宮に御在になりた時、學士の資政が今度甲斐の國守となり追々下向するに就いて、送別の詩をお作りになりた。其の詩の御心は、不斷から學問徳行がある、汝資政のことであるから、其の國守としての政治のやり方も定めし立派であらう、さすれば甲斐の國人どもが其の徳を慕ふて、昔周の召公に彼國の人民どもがなしたやうに甘棠の歌に類するものを作ることがあるだらう、然しいくら國人から慕はれても、此方でも汝の事は何時迄もかはらず思ふてゐるからして、汝と共に多年花につけ、月につけ、遊び暮らした事を思ひ出して、任滿ちたらば疾く都に還り來いと云ふ意味の御詩であるが、これも彼の召公奭の故事の心を含められたものらしい、實に恭ない有難い大御心である。

彼の前の司も、この召公のあとを追ひて、人をはぐゝみ、物をあはれむあまり、道のほとりのゆきゝのかげまでも思ひよりて植ゑおかれたる柳なれば、これを見んともがら、皆かの召公を忍びけん國民の如くをしみめで、行末の影とたのまんこと、其の本意はさだめてかはらじとこそおぼゆれ。

植ゑおきしぬしなき跡の柳原
なほ其の影を人やたのまん。

(通解)また彼の武藏の前司北條泰時に於いてもこの昔の召公の故事を追慕し、天下の人民を可愛がり、事物を憐れむ慈悲心がありあまりて、此の街

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

道を往來する人の憩ふべき木蔭ともなれよと永遠に民を思ふ心から路の邊りに柳を植ゑ列ねて置かれたのであるから、此の柳を見る人は誰も誰も、昔彼の召公の徳を懐ふて忘れなかつた周の人達の感心な心懸け同樣、此柳は泰時が植ゑられたのだと云ふ心で此の木を愛惜し、其處に立倚りては何時までも何時までも其徳を忘れない其の本心は、彼の周人が召公に對したのと異らないことであらう。

手植ゑの主は今は居られぬけれども、其の柳は今もこうして路傍に柳の原をなしてゐる、其の下を往來する人はそれを見るにつけても植ゑて置いた人の事を思ひ、其の影に立倚ることであらう。

豐河といふ宿の前を打すぐるに、あるものゝいふをきけば、この道は昔よりよくる方なかりし程に、近きころ俄にわたふづの今道とかいふに、旅人多くかゝるあひだ、今は其の宿は人の家居をさへ外にのみうつすなどぞいふなる。古きをすて新しきにうつるならひ、定まれることゝいひながら、いかなる故ならんとおぼつかなし。昔よりすみつきたる里人の今更居うかれんこそ、かの伏見の里ならねども、あれまくをしくおぼゆれ。

　おぼつかないざ豐河のかはる瀨を
　　いかなる人のわたりそめけん。

わたふづ　度津と書く、此の以後のものに志賀須賀の渡とあるのはこれであらう。
伏見の里ならねども、古今集雜部のよみ人しらずの歌に「いざこゝに我世はへなんすがはらや、ふし見の里のあれまくもをし」と云ふのがある、歌の意はいつ迄もいつ迄も自分は此の伏見の里に住

んでゐたい、我もともどもに立去りたらばどんなにか此の伏見の里は荒れ果つるであらう、それが忍びぬからと云ふのである。

(通解)豊河と云ふ宿の前を通るとき、側の人の云ふのを聞いてゐると、昔から此の豊河の宿はかならず東海道を下る人の通るべき道順になりてゐて外には道路もなかつたのであるが、此の頃になりて俄かに度津の方の新道(今道)とか云ふものが開らけた爲め、旅客は大抵其の方を過ることになりて、此の豊河の宿の方は通る人が稀れになりた、其の結果此處に住居をしてゐたもの迄も家を提げて他に引越すものが多いと、こうである。自分は其の話を聞いて居ながらつくづく感じた、それは古きものを棄て新しいものにつくと云ふのはどうも致方ない人情でもあらうけれど、何故またさうまでにうつり易い人の心であらう、其の心の底が腑に落ち兼ねる、昔から古く長く此の豊河の里に定住(すみつき)してゐる里人でありながら、今更此處を見棄てゝ他に引越し、どこともなくさまよひ出すのは(ゐうかれん)昔の歌にある伏見の里では無いが、實にどの位か此の豊河の里が荒れ果つることであらうと思はれて、殘念に堪へぬ。

此の豊河の瀬の幾瀬となく變りゆくやうに心變りをして今道の新道を渡り初めたは誰であらう、一向にわからぬが、何にしても頼みがたない人の心ではある。

三河遠江の堺に高師の山ときこゆるあり。山中にこえかゝるほどに谷川の流れ落ちて、岩瀬の浪ことく\しくきこゆ。境川とぞいふ。

岩つたひ駒うちわたす谷川の
おともたかしの濱に來にけり。

(通解)三河の國と遠江の國との境界になりた、其の國堺のあたりに高師の山と云ふ山がある、其の山中にかゝりて幾程もなく谷川の流れに出會つた

谷川の水は流れて落ちて岩に激して瀬をなし、其の浪の音が高く仰山にきこえて居る。川の名は境川と云ふことである。

岩崖の道をつたひつたふて、乗る駒をあゆませて(わたす)居ると、何時かしらず、水の音高き谷川に來た、其の名までもたかしの濱と付いて居る處に來た。

橋本といふ所につきぬれば、聞きわたりしかひありて、けしきいと心すごし。南には潮海あり、漁舟波にうかぶ。北には湖水あり、人家峰につらなれり。其間にすさき遠くさしいで、松きびしくおひつゞき、嵐しきりにむせぶ、松のひゞき浪の音いづれとも聞きわきがたし。行人心を傷ましめ、とまるたぐひ夢をさまさずといふことなし。

(通解)橋本と云ふ驛に着いたが、此の附近一帶の景色は兼て評判で、好い所とは聞いてゐたが、實際見たところ聞いたところと違ひなく、一帶の景色は心すごく覺ゆる程立派なものだ。まあ、あらまし、其の景色を云つて見やう、南の方は廣い廣い海洋で、其の波の上には漁船が泛々として浮いてゐる、北の方は蒼々たる湖水(濱名湖)、其の水を越して聳ゆる峯巒、其の麓まで人家がずらりと連なりてゐる。其の處に洲崎が遠く突出して、松が透間なく並み立ちてゐて其の梢を吹き通ふ嵐が颯々たる好音を奏してゐる。いづれが松の聲やら、波の音やら、一寸區別がし兼ねる。此の松の聲波の音は此處を過ぎ行く旅客の心にしみわたり、また此處に一夜の宿を借る人の夜半の夢を攪き亂すと云ふ、實に感慨深い名勝の地である。

湖に渡せる橋を濱名と名づく、古き名所なり。あさ立つ雲のなごり、いつくよりも心細し。

ゆきとまる旅寢はいつもかはらねど
わきて濱名の橋ぞすぎうき。

(通解)其の湖水に架けられたのが濱名の橋で、古く昔から世に持てはやされた名所である。一夜を此の湖水の滸に寢て、其のあけの朝、いよ／＼宿を出發しやうと云ふ間際、湖のあたりを眺めてゐると、朝の雲が水の面に立迷ふて、これが次第に何處へか跡方もなく消えて仕舞ふ。これまで道々の多くの宿を立出づるときも名殘はいつも惜しく心細い感じはしたが、今日はまた特別に名殘をしくまた心細く思はれた。旅寢の一夜の宿として足を駐めた所は、何處としていざ出發と云ふ際には名殘が惜しい事ではあるが、殊に此處の濱名の橋は通り過ぎ難く覺へる。

なごり多くおぼえながら、此の宿をも打ち出でゝ、ゆきすぐるほどに、舞坂の原といふ所に來にけり。北南は渺々とはるかにして、西は海の渚近し。錦花繡草のたぐひはいとも見えず白き眞砂のみありて、雪のつもれるに似たり。其間に松たえ／＼おひわたりて、鹽風梢におとつれ、またあやしき草の庵所々に見ゆる、漁人釣客などの住みかにやあるらん。

(通解)名殘は盡きず、立ち去りがたく覺えたが濱名の宿を後に見なして出懸けた。すると間もなく舞坂の原と云ふ所に來た。北と南とは海も遙に渺々として餘程遠くなりて居たが、西の方は海に面してゐて渚は直ぐ近くになつてゐる。北の邊一帶の地は美しい花(錦花)奇麗な草(繡草)は多く見當らぬが、眞砂が眞白で、丁度雪でも積んでゐるやうで、其間に翠の松が所々疎らに生へてゐる。海から潮風が其の梢を吹いて、其の松の間には所所草屋根の粗末な家が並んで居る、定めしそれは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此邊の漁師(漁人、釣客)の住家であらう。誠に書にも書き出せぬ程の好い景色。

末遠き野原なれば、つくゞくとながめ行く程に、打つれたる旅人のかたるを聞けば、いつの頃よりとは知らず、此原に木像の觀音おはします。

(通解)見渡したところ、廣い廣い野原で、それをつくゞくと眺めながら、歩を移した。道をたどりながら伴侶になりた旅人は自分に向つて、何時頃からと云ふことは分らぬけれど、此の舞坂の原の中に木像の觀音樣が一體お出になりましたと語り出した。

御堂など朽ちあれにけるにや、かりそめの草の庵の内に雨露もたまらず、年月を送るほどに、ひと丶せのぞむことありて、鎌倉へ下る筑紫人ありけり。此の觀音の御前にまゐりたりけるが若し此の本意をとげて、故郷へむかはゞ御堂をつくるべきよし心の中に申しおきたりけり。鎌倉にてのぞむことかなひけるによりて御堂を作りけるより人多く參るとぞいふなる。

(通解)其の觀音樣を收めてあつた御堂も朽ち毀ぼれてゐたのであらう、形ばかりの草葺き屋根の事で、雨も露も滿足には防ぐことが出來ぬ位の哀れな樣子で、此の觀音樣は隨分不見目な年月を送りて居られた。所が偶然にも或る年のこと、身にある所願の筋があつて遙々と西の筑紫から鎌倉指して下る所の一人の旅人があつた。其の人が丁度此の貧乏な觀音樣の御堂の前まで來て、つくゞくと哀れな御樣子を見て、若し幸に自分の所願が叶ふて故郷へかへるやうになりたら、歸路に此處を通るとき屹度立派な御堂を建立して差し上げる、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

どうか自分の願事が叶ひます樣にと心の中に祈願を込めて立ち去つた。すると御利生があつたものと見え、鎌倉では見事に其の願事が叶ふと云ふ幸福な事になりたので誓の通りに御堂を建て、草屋根の中から今度の御堂に遷し奉りた。此後と云ふものは段々此の觀音樣に參詣するものが多くなりて來て、今に至るまで御繁昌の事だと云ふ話を伴侶の人がして聞かせた。

聞きあへず御堂へ參りたれば不斷香の烟風にさそはれて打ちかをり、閼伽の花の露あざやかに見ゆ。願書とおぼしき物、斗帳の紐に結びつけたれば弘誓のふかきこと海の如しといへるもたのもしくて。

たのもしな入江に立つるみをつくし
深きしるしのありときくにも。

不斷香。佛の前に絶えさず燒きしめる香。

閼伽の花。佛前に捧ぐる花、閼伽は梵語、水を盛る器を云つたもの、又轉じて水の義に用ゐられる。

斗帳。佛前の龕の上に垂る、戸帳。

弘誓のふかきこと云々、法華經にも弘誓深如海、歷劫不思議と云ふ語がある。佛菩薩衆生濟度の廣大なる誓願を海の深さにたとへたもの。

みをつくし。澪標と書く、水中に船が通りゆくべき道すぢを指示した棒串のこと。たのもしなの歌の上句は只だ「深きしるし」と下の句を起こさん爲めに置かれたのである。

（通解）伴侶の人が話し了るか了らぬと云ふ時丁度自分どもは其の御堂の前に來た。で參詣して見ると、香の烟は絶え間なく、風に吹かれてたなびき四邊に薫り、御前に上げてある花立ての花は新しく取りかへられたものと見えて、露滴たらんばかりである。能く見ると御願の文句を書いたものらしいのが、戸帳の紐に結びつけられてある。それ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を見ても「一切衆生濟度の御心は譬へば海のやうな」と云はれた經文の中の言葉通り、此の觀世音大菩薩の御利益のほども察せられたので。さて〳〵賴もしい事、入江の水に立つてゐる澪標のしるしあるやうに、深き靈驗があるときくにつけても有難さがつく〴〵と思はれる。

天龍と名づけたるわたりあり、川深く流れはげしく見ゆ。秋の水みなぎり來て、船の去ることすみやかなれば往還の旅人たやすくむかひの岸につきかたし。

（通解）天龍と名の付いた渡場に來た。見れば川の水も深く、流れも激しい。秋の季節であるから、水勢も多く、溢れるほとで、船は矢のやうに下流へと下るので、上り下の旅人が此の岸から彼の岸へ、彼の岸から此の岸へと移るにも餘程の手間が取れて中々の事である。

此の川水まされる時、舟などもおのづからくつがへりて、底の水屑となるたぐひ多かりと聞くこそ、彼の巫峽の水の流れ、思ひよせられて、いとあやうき心地す。しかはあれども、人の心に比ぶれば、しつかなる流れぞかしと思ふにもたとふべきかたなきは世にふる道のけはしきならひなり。

　この川のはやき流れも世の中の
　　人の心のたぐひとは見ず。

（通解）巫峽の水、支那湖南省岳州府にある急流。白樂天の詩「大行路」の中に、「大行之路能摧車、若比人心是坦途。巫峽之水能覆舟、若比人心是安流。（中略）行路難、不在水、不在山、只在人情反覆間」とあるは即ち此に引用された句で、また吉田兼好が歌に、「世の中を渡り比べて今ぞしる、阿波

の鳴門に浪風もなし」とあるのも同じ人生の行路難を歌つたものである。

（通解）今一層水かさが増して來でもしやうものなら、此の川は實に危險な處で、舟もまかりまちがへば顚覆し、舟に乘りた人は哀れ水底の藻屑となると云ふ不幸な塲合が多いと人の話に聞くにつけても、彼の支那人の詩の中に能く歌はれて居る巫峽の水の流れも、こうであらうかと思ひ出されて險呑至極に思はれた、然し又考へて見れば白樂天も云つて居る通り、眞個の危險六かしさと云ふものは決して山や水ではなく人の心の上にあるので此の激しい流れも人情の險はしいのに比べて見れば、靜かなもの、平穩無事なものと云つてよいと思ふにつけても、かへすぐ〵六かしいのは世渡りの道、處世法であらうと思はれる。

此の天龍川の流れ、見れば成程疾い、しかしそれも世間の人情の測りがたい、險しいのに比べたなら、何でもないと云はねばならぬ。

漢文講義

阿井笛村

蝘蜓

賴襄

浪華有二夫婦與居者一。夫罹二惡疾一。而妻事レ之甚謹。夫勸二其適レ他。未レ肯也。一日觀二於屋後一。其壁腰蔽以二杉皮一。皮裏有二一蝘蜓一。貫二於釘一。猶蠢蠢然。怪レ之數驗視。其雌往來哺レ之。故久而不レ死也。妻爲悽然以告レ夫曰。蟲豸且護二其儷一。況人乎。良人未レ死。妾將何之。夫猶不二自安一。因計二速死一。聞三河豚殺レ人。買食之。吐二血數升一。其疾立癒。終身爲二夫妻一。

（讀方）浪華に夫婦與に居る者有り。夫惡疾に罹る。而して妻之に事ふること甚だ謹む。夫其れに他に適かんことを勸むれども。未だ肯せざるなり。一日屋後に觀るに。其壁腰。蔽ふに杉皮を以てし。皮

裡に一蝘蜓あり。釘に貫かれ。猶蠢々然たり。之を怪み數々驗視するに。其の雌往來して之に哺す。故に久しふして死せざりし也。妻爲に悽然として以て夫に告げて曰く。蟲豸だも且つ其の儷を護る。況や人を乎。良人未だ死せず。妾將た何くに之かんと。夫猶は自ら安んせず。因りて速に死せんことを計り。河豚の人を殺すを聞き、買ひて而して之を食ひしに。血を吐くこと數升にして。而して其疾立どころに癒ゆ。終身夫妻爲りき。

(譯解)浪華即ち大阪に夫妻暮しの者がありました夫罹二惡疾一而妻事レ之甚謹＝ところが。此の夫が惡疾(瘡毒若は癩病の類なり)を罹ひまして。厭ふべき容體となりましたが。其の妻は少しも之を厭ふ氣色もなく。之に事へて看護することが甚だ謹でありました。然るに夫は。妻に對して甚だ氣の毒なることと思ひます故。どうか他に適りしてくれと勸めますけれども。なか〳〵未だ肯き入れずに居ました。一日觀二於屋後一＝一日妻がふと其の屋の後にて。觀出したものがあります。其壁腰蔽以二杉皮一＝其の屋の後の壁の腰は。杉の皮を以て蔽ふてありました。皮裡有二一蝘蜓一貫二於釘一猶蠢蠢然＝其の杉皮と壁との裏に。一疋の蝘蜓が居まして。其の躰を釘に突き貫かれて居りながら。死にもせずに。蠢々動ひて居るのです。何れこれは幾年か以前に。大工が此の壁の腰を杉皮で張るときに。蝘蜓諸共釘附にしたのに相違なひ。夫にしてはどうして今日に至るまでも。生て居ることが出來たのか知らんと。怪レ之數驗視其雌往來哺レ之故久而不レ死也＝之を怪に思ひまして。數々往ては氣を附けて驗して視ますと。其の蝘蜓は雄なので。今一疋の壯健なる雌が居まして。其れが雄の側に往たり來たりして。餌を運んで哺くんで居るので。初めて命を續けて居る原因が解りました。妻爲悽然告レ夫曰＝妻は之が爲に悽然と身にこたへて感心をして。夫に告げて曰すには。蟲豸且護二其儷一況人乎＝蟲豸でさへも彼の通り。其の儷を護りを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して、幾年ともなく。不具の者を哺つて居るではありませぬか。况してや人でありますものを。良人が未だお死なりなされもせぬのに。假令何と仰せられうとも。妾將何之＝妾が良人を振り棄て何方に之かれましようやと。斯樣に申しましたけれども。夫は猶も自ら心に安んじられませぬ。因計二速死一聞二河豚殺レ人買食レ之吐レ血數升而其疾立癒終身爲二夫妻一＝因てどうとかして速く死ぬる方はなきかと。種々計へたる揚句。河豚と云ふ魚は人を殺す毒魚だとの事を聞きまして。此れを買ひ求めて食べました。すると血を吐く事が凡そ五六升斗りで。一時は大へん苦しみましたが。さしもの難病が拭ふが如く。立どころに癒て仕舞まして。其れより終身夫妻の契りを全くしました。支那にても此の末文に似たる話があります、晉の代に、盛彥字は翁子と云ふ孝子がありました、其の母不幸にも眼病を患ひ、終に失明となりました、盛彥は此の盲目の母に事へて孝道を盡す爲に、朝廷より辟召を蒙りても辭して應じませずに、其躬自ら母に侍養き、母に食を進むるときには、必ず己れ先づ自ら嘗めて毒のなきことを確かめ、然る後に之を母に供へる樣にして居ました、然るところ此の母は疾が久しくなるに附け、心が僻がみ、氣が短かくなりて、婢使に氣に入らぬことがあると、杖を以て撻ち撻くこと抔がありました、故に婢が忿て恨みまして、盛彥が何か用事あつて外へ出て行た後で、蠐螬を取て來て其れを炙として、之を老母に餉させました、母は何の氣も附かず其れを食べて旨ひ〳〵と言て居ましたが、どうやら異な味だと心附きましたに依て、密と藏して置て、盛彥が歸て來た時に、其れを出して示せました、盛彥は一目之を見ると驚くまい事か、斯樣なものを食しては、到底も老母の命は助からぬと思ひまして、母を抱ひて慟き哭しみ、終には氣絕をして、又漸く甦がへると云ふ程の騷ぎでありました、すると不思議なることには、母の兩眼が豁然

と開きましたので、盛彦は天に拜し地に拜して、天限りなく欣びました、此れ全く盛彦の孝心が、天に感應したのだと、人々が申し稱へたといふことであります。

義狗　依田學海

義狗養二於宮城縣柴田郡堤村牧川八十右衛門家一。敏而順。能曉二人言一。家人愛レ之。明治十六年。十二月。家人在レ田。主婦汲レ井澣濯。狗臥レ門。忽聞二兒叫一。狗躍入レ室。婦大驚走視レ之。則狗啣二兒帶一。從二爐中一出。衣皆火。撲二滅之一。兒乃無レ恙。

（讀方）義狗は宮城縣柴田郡堤村の牧川八十右の家に養はる。敏にして順なり。能く人言を曉る。家人之を愛す。明治十六年十二月家人田に在り。主婦井を汲みて澣濯す。狗門に臥す。忽ち兒の叫ぶを聞く。狗躍りて室に入る。婦大に驚き走りて之を視れば。則ち狗。兒の帶を啣み。爐中より出づ。衣皆火なり。之を撲滅す。兒乃ち恙なかりき。

（譯解）義狗＝とは恩義を知りたる狗と申すこと。此の義狗は宮城縣の柴田郡の堤村の農民牧川八十右衛門と云ふ人の家に養はれて居ましたので。敏而順能曉二人言一＝此の狗は其の性質が。敏どくして而かも柔順しくありました故に。家内の人が之を愛して居ました。明治十六年十二月のこと。或る日家内の人々はみな外に出て。在レ田＝田仕事をして居ました。主婦汲レ井澣濯＝内には主婦が留主をして。井戸の水を汲みて澣濯をして居ますと。狗は門のわきに臥して居ました。すると忽ち兒の泣叫ぶ聲が聞へました。狗躍入レ室＝狗は其の聲を聞くが否躍り起りて。一室の内に驅け込みました。主婦は何事ならんと大に驚きて。走りて往て視ますると。則狗啣二兒帶一從二爐中一出＝コハ如何に狗が兒の帶を啣へて、爐の中から出で來ました衣皆火撲二滅之一兒乃無レ恙＝其の衣は一面に火になりて居ます。すぐに其れを撲滅しましたから。兒は幸にして恙なく助かりました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英文雜録

THE SICK AND WOUNDED.

Marugame, Nov. 30.

A number of sick and wounded troops returned here from the front to-day.

病傷兵　　十一月三十日丸龜發

若干名の病傷兵本日戰地より當地に歸着せり。

MR. K. MISAKI.

Nagasaki, Nov. 30.

Mr. K. Misaki, Vice-President of the Specie Bank, touched here to-day on his way to Kobe from Shanghai.

三崎龜之助氏　　十一月三十日長崎發

日本正金銀行副頭取三崎龜之助氏は上海より神戸への歸途本日當地に立寄りたり。

H. I. H. PRINCE FUSHIMI, SR.

It is reported that H. I. H. Prince Fushimi, Sr., arrived at Philadelphia from St. Louis on the 28th ult., having visited the Niagara Falls on route.

伏見宮殿下

伏見宮殿下途中ナイヤガラ瀑布御一覽の上先月二十八日聖路易より費府に御到着遊ばされたる由

A STUPENDOUS CONTRACT FOR THE RUSSIAN NAVY.

London, Nov. 28.—It is stated that a certain American shipbuilder has been given a contract at Sebastopol for the construction of a hundred Russian warships.

露國海軍の驚くべき注文

十一月廿八日倫敦發或る米國の造船家は百隻の軍艦を製造すべき注文をセバストポールに於て露國より與へられたりと云ふ。

AN EXPLOSION OF GUNPOWDER.

On November 28 an explosion occured at the gunpowder magazine belonging to Mr. I. Ito in Oimachi near Nagoya, inflicting damage on some buildings in the neighbourhood of the magazine. An employe who unfortunately was on the spot at the time, was killed.

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

火藥の爆裂

十一月二十八日名古屋附近の大井町なる伊東氏の所有に係る火藥庫に於て火藥爆發し附近の數軒の建築物に損害を與へ且つ折柄其處に居合せし一名の雇人は不幸にも死せりと云ふ。

LIEUTENANT-GENERAL UYEDA.

Lieutenant-General Uyeda, who has been appointed the Commander of the Formosan garrison, departed for his new post on Tuesday, leaving Shimbashi at 6 P. M.

上田中將

臺灣守備隊の司令官に任せられたる上田中將は去火曜日午後六時新橋より任地に向け出發せり。

DR. K. FURUICHI.

Dr. K. Furuichi, President of the Söeul Fusan Railway Company, who had been on a tour of inspection in Korea, returned to Tokyo on Wednesday morning.

古市博士

京釜鐵道社長古市博士は朝鮮內地視察の爲め旅行中なりしが水曜日の朝歸京したり。

THE BALTIC FLEET.

A report received in certain trustworthy quarters here states that the portion of the Baltic Fleet which is taking the Cape of Good Hope route, is now engaged in coaling off Swakop, a German territority about 850 miles north of the Cape.

ボルチック艦隊

當地の或る信ずべき所に達したる報知によればボルチック艦隊中の喜望峰の道を通航せるものは喜望峰の北方八百五十哩なる獨領スワコップの沖合にて目下石炭積込中なりと云ふ。

MAJOR-GENERAL NAKAMURA WOUNDED.

It is reported that Major-General Nakamura was slightly wounded while charging a fort on the occasion of the recent general attack on Port Arthur.

中村少將負傷す

中村少將は旅順總攻擊の折砲臺進擊中微傷を負へりと云ふ。

PRESIDENT ROOSEVELT VISITS THE JAPANESE TEA-HOUSE AT ST LOUIS.

According to a telegram from St. Louis, received by the Central Chamber of Tea Guilds, President Roose-

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

velt visited the Japanese tea-house in the Exhibition ground and expressed his high approval of Japanese tea.

ルーズベルト大統領在聖路易の日本喫茶店を訪ふ

聖路易より中央茶業組合會に達せし電報に依ればルーズベルト大統領は博覽會内の日本喫茶店を訪ひ大に日本茶を賞賛したりと云ふ。

A GALE OFF MIYAKO HARBOUR.

A gale occurred off Miyako harbour, Rikuchu province, early on the morning of November 27. Several fishing boats were missing up to the 28th, and it is feared that some lives were lost during the storm.

宮古港沖の烈風

十一月廿七日早朝陸中國宮古港沖合に於て烈風起り廿八日に至るも數隻の漁船行衛不明なり數名の人は暴風中死去せしならんと憂へ居れり。

I. 前號和文英譯練習の譯文

1. That report is groundless but we once believed in it.
2. Do you know where the family of Admiral Togo live?
3. They live somewhere in Kojimachi Ku.
4. What does the air consist of?
5. It consists chiefly of oxygen aad nitrogen.
6. Is he is rich enough to go abroad to study?
7. Yes, he is as rich as Baron Iwasaki,
8. When will the plum-trees at Sugita blossom?
9. They have already begun to blossom.

Self-denial is the essence of heroism.—Emerson.

克己は勇氣の精髓なり

To give up interest for duty is the alphabet morals.—Hinton.

義務の爲めに私利を抛棄するは德行の初歩なり

Above all things reverence yourself.—Pythagoras.

何は措置き先づ自己を尊敬せよ

Sefl-distrust is the cause of most of our failures. Bovee.

己を信ぜざるは多くの失敗の本なり

The best hearts are always the bravest.—Steme.

最も善き心は常に最も勇敢なり

瓜生海軍中將夫人

一記者



日露開戰の劈頭第一、我が聯合艦隊第四戰隊司令官として、陸軍を擁護し、その上陸の大任を完うしたる上に、敵艦ワリーヤーグ、コレーツの二隻を仁川港外、而かも列國軍艦の眼前に於て、見事撃沈し、勇名一世を震はせし驍將はそも誰となすでございませうか。三尺の童子も其名を知る彼の海軍中將（その當時少將でした。）▲瓜生外吉氏其人でございます。又、彼の蔚山沖の海戰に於て、浦鹽艦隊のリユリックを撃ち沈められたのも、實に其人でございます。

留守邸は、府下北豊島郡日暮里にございますが、記者は過ぐる二月五日同邸を訪れました。

呉竹の根岸の里は笹の雪、それより北に向ひ、音無瀨川を遡のぼること數間、右手の小路を二十間も入りますると、突當に「瓜生」と記せる軒洋燈が、嚴めしき門に掲げられてあります。門を潜つて右手を見まするに、其處には扇骨木の小やかな生垣があつて、それを見越に彼處の空地には、器械體操の鐵管鞦韆、相撲の土俵場等が設備されてゐて、早や其家

庭に於て、如何に體育養成に重きを置かれてあるかが知れます。突當つて、左手の玄關に向へば、早や取次の書生が出て來て取り告がれるので、記者の名を申しますると、直に八疊の座敷に通されました。記者は夫人とは豫て存じて居りまするから、すぐと時候の御挨拶を述べましたのです。

▲座敷の模樣

東南が奇麗に乾拭してある鏡のやうな椽側で、障子に硝子が入つてゐて、風雅なるお庭の翠色が目に映ずるやうになつてゐます。床の所にはピヤノを一臺据ゑ付けてありまして、籐製の椅子が二三脚置いてありますのは、ピアノを奏する時用達つのでございませう。天井からは電氣燈がぶら下つてゐて、何となく中將夫人の西洋趣味が發揮されて居ます。又、床の左の方には、硝子の書棚があつて、これには、紅、青、紫、綠などの色した、金字入の洋書が一杯に詰めかけてございますが、これは又夫人の平生愛翫せらるゝのでございませう。

そして、夫人は一閑張の机に美しい更紗の蔽をかけたのを控へて、火鉢を二つも拵へてありましたから、記者は、『お客樣ですか』とお尋ねまをすと、『いいえ、火曜と金曜との午前は女の方が二三人御稽古に來られるのです。只今歸つたばかりな所です』と、云はれて、直に、記者に、其火鉢と座蒲團などを薦められました、そこへ又、召使が、お茶とお菓子とを……。

▲夫人手編の沓下

やがて、夫人は『もし、御免なさいまし』と云はれて、その横にあつた黑い毛糸の沓下を編み掛けられました。そこで、記者は、是は大方、恤兵部へでも獻納なさるものと推しまして、お尋ねしますると、夫人はにつこりとせられて『ハイ、さうです。これは恤兵部へ納めるのです。何うも戰地では普通の沓下は冷たくつて、ちつとも役に立たぬさうです、そして、矢張り此毛の方が一番宜しいさうです。……けれども、幾ら毛でも機械で織つたのと、手編のと

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は大變に違ふて、手編のは温かさの上から云つても、又保ちの上から云つてもずつと宜しいさうです。……ハイ、私ですか、春から大分編みました。お客樣があつても、お心易い方の前は、いつも是を持ち出して、編みながらお話をしてゐます。……」

それから、記者は夫人が昨年より、下谷區の

▲出征軍人の家族を慰問

されてゐることを、お聞き申しました所、夫人はちよつと編針の手を留めて、火鉢の上へ兩手を翳して『ハイ、昨年は隨分其方此方を回りました、……ハイ、私共二三人で回るのです。……ハイ、お金でも遣りますし、又ちよつとした反物や、古着、それからお菓子などをやることもございます。先づ、その家に相當したものを考へて遣るのですが、何うも仕樣がないものです。反物や着物を遣りましても直に質屋に持つて行きますから、まづ、お錢を與るのが一番よろしいです。……下谷の區內には例の萬年町がありますが、彼所等は、實にひどいとも何とも云へぬものです。東京の眞中に彼樣な穢い所があるかと、初めて參りました時には、今更のやうに驚きました。……實に可哀相な家族が隨分ありまして、思はず淚が出ますのが幾軒もございます。赤ン坊で、お母さんが病氣で、乳を呑ますことが出來ないで、飢ゑ死になりかゝつてるのもありますし、それから七八十の母親が一人で居るのもありますし、實に悲慘なのが澤山あります。そして、萬年町あたりでは大方其日暮の者が多いんですが、飯櫃一つ、お鍋一つが、大事の〳〵の財產で、何うかすると直ぐそれを質屋のやうな所へ持つて行つて三錢でも四錢でも借りて來て、燒芋でもかぢるといふ風です。そして少し工面の宜い時は其を受けて來て置くといふ風で實に何とも彼ともお話にならぬことをして、その日その日を生活して行つて居ります。で、此方は小供などが、隨分薄着してゐるのがあつて、寒さに向ふに手拭一枚でぐる〳〵卷き付けたやうなのがありますから、此方が注意して、其子供の着るやうな綿入の

古着などをやりましても、今度行きますると、決して着て居りませんが、これは必ず質へ持つて行つたのです。實に何うも仕様が無く、隨分恤り甲斐のないことがございます……」と。

さて、夫人は又彼の威仁親王殿下の總裁になつて居られまする帝國海事協會で、帝國義勇艦隊が建設されましたので、同會では新に昨年十二月、

▲婦人部の委員

が出來て、婦人の方でも製艦するといふことになりましたので、夫人には殊の外此美擧の爲め盡力されてゐるといふとを仄に耳に挾んでゐましたから、お聞き申して見ますると『はあ、彼の義勇艦隊の方ですか、是も大分結果が宜さそうでございます。三年の間に一圓五十錢出して貰へば宜いのです。一年に僅か五十錢の割です。一時に收めて貰へば尙ほ都合が宜うございます。一年に五十錢ですから、下女でも誰でも入り易うございます。私の所の娘供も下女も皆入つてゐます。そして、最初は先づ三年で二百萬圓位集めて其位な艦を作へる積です。何うか、あなた方も、一つ御吹聽なすつて、入會するやうに御盡力して下さいまし……ハイ、一圓五十錢とは限りませんとも、其以上は御召次第で……ハイ、これも、成る可く海軍の方の家族から取らぬやうにして、それ以外の重に何ですね、商人などの方から寄附して貰ひたいのです。……』と。

さて、次に、

▲中將の略歷

を伺ひまするに、君は加賀大聖寺の藩士で、當年五十四歲で、海軍兵學校の出身でございます。卒業後、海軍省から選拔せられて米國に航し、同國の兵學校に入つて、專ら機關砲術等を硏究し、數年にして歸朝されました。

日淸戰爭の時は、佛國の公使館付でありましたし又北淸事變の時は軍令部第一局長でありまして、未だ一度も實戰に臨まれなかつたので、轉た骨鳴り肉動くの嘆に堪えられなかつたのですが、嘗て或人に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

打ち對はれて、日本の敵は支那位でない、まだ〳〵大きいものがあるから、それをやつけるのを先づ樂にして置かう。』と云はれてゐたさうですが、今度といふ今度こそは、君が豫ての敵の、其所謂大なるものに向つて、思ふ存分に、仁川に蔚山に敵艦を打破されたのでございませう。實に將軍の胸中の如何に壯且快なるや、また思ふべきでございます。

▲畏き詔勅の摸寫

彼の仁川の海戰は、そも〳〵火蓋を切つた劈頭で、斯くも世界海戰史に特筆大書すべき著しき功勞を樹てられましたので、その當時、畏き邊より嘉賞の詔勅を賜はられました。その詔勅に宣はく、

聯合艦隊第四戰隊は陸軍を擁護し仁川上陸の任務を完うし加ふるに敵艦を港外に擊破し遂に之をして殲滅せしむるに至る
朕深く之を嘉尙す

と、海軍省では、右の詔勅を直に君の乘艦に傳達すると共に、其摸寫したのを日暮里の留守邸へ送つて來ましたので、夫人繁子を始め家族一同恭しくそれを三寶に載せて、床の間に飾り、前代未聞の優渥なる恩命に感泣したといふことでございます。

▲中將の平生

容貌風采は軍人としては、寧ろ優和といふ位で、實に温厚篤實なる君子でございます。けれども、資性が至つて豪放豁達で、常に勇武を好み、軍艦松島、嚴島、扶桑、八島等の艦長としては、平生は至つて温和な態度を取つて居られまするけれど、いざ演習とか、何とか、事のある時は、その部下を督勵することが、極めて嚴格で、殆んど全く別人のやうになられ、そして、平時と云へども、其部下をして、猶ほ戰時の心得をなさしめるといふことを專ら力めて居られるさうです。

酒は餘り飲まれず、在邸の折柄は令孃等にピヤノや琴を奏せしめて、此上ない樂みとして居られます。そして、運動がお好きですから、天氣が快くて閑暇さへあれば家族一同殘らず打ち連れて郊外散步に出

掛け、一家其樂を共にせらるるといふことです。

さて、又、中將が、昨年の春、乃ち開戰以前に、令息(剛君義雄君)令孃(忍子榮枝子)に送られた御手紙がありますから、それを掲げて置きませう。

今日は日本國危急存亡の秋に候間　弱輩に至る迄
御國の爲に盡す覺悟なかるべからず
決して自儘勝手なる事等を云ふ時にあらず其許等
は何ほ幼年の事故專心學問に從事せらるべく候先
は返事　旁　一寸申進　候以上

と、事短く書かれましたけれど、その深き意のある情の籠つた文言は、實に後世に滅すべからざる名教訓でございます。

▲夫人繁子

は、彼の有名な益田孝氏の令妹で、幼少の時、(明治四年、)岩倉大使の一行と共に、日本最初の女子留學生として、彼の大山大將夫人、津田梅子女史、外二人と共に米國に留學せられましたが、最初に、五人とも異つた家庭に預けられました。夫人は即ち二ユーヘヴン府の歷史家ジョンエス、シ、アポット氏の家庭に寄托せられ、中等普通學を修め、十一年バッサ女子大學校に轉じて、音樂科、文學科、近世國語科を研究し、十四年六月音樂專門科を卒業して初めて歸朝せられ、直に文部省音樂取調掛教授を托せられ、それから高等女學校の教諭や、音樂學校の教授となられ、三十二年の頃女子高等師範學校の教授となられ、久しく英語と音樂とを受持つて居られましたが、一昨年の春これを辭されて、今は專ら家庭に在つて、子女の薫陶に從事されてゐます。

▲その家族

は、長女は千代子(二三)と云ひ、これは既に神戸市なる山下芳太郎といへる人に嫁して居られます。長男武雄(二二)次男剛(二〇)次女忍子(一九)三男義雄(一五)三女榮枝(一三)四男勇(三つ)の都合七人でございます。そして、長男武雄君は現に江田島なる海軍兵學校の第三年生ですが、學術優等品行方正といふので、優等生の待遇を受けて居られるさうです。又次男剛君は

學習院の高等學校へ通つて居られ、次女忍子は女子高等師範學校の附屬高等女學校へ、三男義雄君は開成中學校へ、四女榮枝子は令姉忍子と同じく附屬小學の方へ通はれて居られ、雨の朝も風の朝も、相互に缺席なさるといふこともなく、競ふやうにして、撓まず倦まず勉强して居られます。

▲令孃達の善行

ほのかに聞きまするに、忍子と榮枝子の兩孃とも平生御自分のお小遣の中を少しにても郵便局に預けて居られまするが、或時、或人が、榮枝孃に打ち對ひまして、

『お孃さん、貴娘方は別にお金をお貯めなさらんでも、別に御不自由のあるお方ではありませんが、一體、何の爲めになさるんです？』

と、斯う聞かれましたので、榮枝孃は莞爾して、その愛らしい口元に微笑さへ見せながら、

『わ、われはね、姉樣も私もね、お金をどつさり貯めてね、慈善にするのよ。』

と、きつぱり答へられました。

實に幼少な方でありながら、何と感ずべきお心掛ではございませんか。實に世の少女達の模範ともなる方ですが、これも皆、夫人の家庭に於ける薫陶が宜しいからでございませう。

關野海軍中佐夫人

一記者

昨年の二月八日の開戰以來、數度の海戰に於いて奮鬪勇戰せられました戰鬪艦八島の副艦長海軍中佐

▲關野謙吉氏

の麻布東町なる留守宅を訪ねましたのは、過る二月三日でございました。

屋根無し門に「關野謙吉」としてある古びた表札を見て先づ門内へ入り、玄關の格子戸を押し明けると間もなく、取告に出て來られしは、年の頃は三十二三の、丸髷の目鼻立の氣高き婦人で、秩父らしい衣

物に飛白の羽織を召され、如何にも質素な打裝でございまするは、則ち

▲夫人貞子殿

で、記者は先づ慇懃に初對面の禮を述べ、且つ例の如く來意を申しまするど、夫人は甚く謙遜せられ『ナニ、お耻かしいことでございます、私なんかの家庭などに就きましては、他人樣のやうな立派なことがございませんで、赤面の至りでございます、……けれども、まア〳〵、此方へお上んなすつて。』とのことで、記者は、先づ導かれるまゝ、左手の方の奇麗に拭き清めてある椽側を直角に曲つて、外れの

▲六疊の座敷

に打ち通りました。但見れば、床の間には、御歴代の御眞影の幅が掛つて居つて、その前には白梅を飾りけなく活けてあります、また違棚の方には、立派な洋燈や、中佐の小照や、寫眞帖などを飾つてあります。また、四方の小壁には寫眞額や油畫額を掲げてございます。

召使が丁度不在と見えて、夫人自ら蒲團、火鉢、茶、菓子と順次に運ばれました。

さて、まづ、記者は、時候の挨拶を述べて、次に今年の正月に就いて話しはじめましたところ、夫人は言葉しづかに、『ハイ、今年のお正月は實にお目出たい、結構な、私なんか生れて初めての縁喜の宜いお正月でございました。去暮には東郷さんが御凱旋になりますし、元日には、旅順開城、それから皇孫がお生れになりますし、それに、すつとお天氣は宜うございましたし、實に何とも例へやうない結構なお正月でございました。これで又今年も幸先が宜うございますから、海軍も陸軍も調子善く行くでございませう、……が、何ですね、海陸軍人のお骨折がお大抵ではございませんね、どうか、一日でも早く平和となれば宜いと私なんかは思つて居ます。まア、一ト口に軍人は、戰爭する爲めに出來てゐて、命を捨てる者に定つてゐるとは申す者の……まア、宜い加減に治まれば宜いと思つてゐます。士官以上

の人でありますれば、家族だつて萬一の事があつても、後の整理も何うにか付ませうが、兵卒やなんかで、貧しい人の家庭などは實にお氣の毒なのがありまして、新聞などにも、軍人家族が路頭に迷ふとが種種出て居りますのを見ますると、本當にお氣の毒とも何とも云へませんで、私は實に殘酷なやうな氣がしてたまりませんです、どうか、早く平和といふとを待つて居るのです、……』など丶云はれました。

次に、記者は、まづ、

▲中佐の略歴

を承はりましたが、夫人はちよつと小頸を傾げられて『ハイ、良人の履歴ですか、何う順序を立て丶お話して宜いやら了りませんから、どうか貴公の方からお尋ねして下さいまし。』とのとでしたから、記者が順序を立て丶問ひ初めますると、夫人は『ハイ舊は參州板倉藩で、慶應元年生れです。……ハイ、學校ですか、初め芝の新錢座の攻玉社に入り、それから兵學校へ入つたのです。……ハイ、日清戰爭の時は丁度大尉で嚴島の分隊長でございました。ハイ、金鵄勳章も貰ひました。それから間もなく少佐に進み、三十二年に敷島の回航委員として英國の方へ參りました、そして、歸りましてから、直に中佐に任せられ、それから東伏見宮殿下の御附武官として扶桑艦に乘り組み、一昨年の四月になつて、現今の八島に乘つたのでございます。』と。

▲中佐の性行

中佐人となり、謹嚴卒直、毫も邪曲を許さぬといふ風で、沈勇寡言なことは其の眉宇の間に現ばれてゐるのでございます。頭腦の緻密で、又至つて明確なものでございます。在邸の折柄は令息など丶散步に出掛けたりするのを無上の娛樂としてゐらる丶さうです。また嗜好として花卉の培養に頗る熱心だと云ふことです。酒は軍人として珍しいほど少量で滿足せらる丶さうです。

▲今度の出征

中佐が八島に轉乘せられた以來、日露の交涉が切

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

迫しましたから、一度も歸宅さるゝ暇もなく、愈々出征することになりましたから、乃ち夫人貞子は二女靜子を伴うて佐世保に赴きて、別を告げましたが、素より金革を蓐とせる軍人の習ひとして格別に後事を托することもなく、只母上と兄上とに我が身の無事なることを傳へ吳れよと、言ひ殘されたのであつたさうです。その後、仁川や旅順口の勝利に就いて時々音信があつたさうですが、いつも我海軍大勝利愉快〳〵と言短く記し、家事などのことに就いては何事もいつて來ないさうでございます。かやうな有樣でありますから、夫人は良人の出征後、特に能く家政を處理し、また能く姑に仕へて孝養を怠らず、努めて居らるゝのでございます。

▲その家庭

中佐の令兄を修蔵と云ひ、現に內務省地質調查所の技師として勤務中であるさうです。母堂美和子は今年七十二歲の高齡を迎へられましたが、至つて健康で、早朝より孫兒の世話に餘念なく日を送つて居らるゝさうです。夫人貞子は三十六歲で、長男清君が八歲、長女萬喜子が十一歲、二女靜子が五歲で都合三人の兒女が居られます。そして、長女萬喜子は麻布飯倉小學校に通はれて居ります、いづれも、靜淑なる夫人の薰陶を受けて居られますから、禮儀能く行はれて居ります。記者が訪づれました時は、丁度萬喜子孃も令息清君も玄關に居られましたが、幼年にも似合ぬ位丁寧に挨拶せられましたので記者はこれ等の點を以て、能く其夫人の家庭における薰陶の一端をも窺ふことが出來ました。

さて、最後に

▲萬喜子孃の美談

として世の少女の鑑ともなる價値あるものがございますから、まづ、ざつと事の大略を述べて置きませう。

これは、一昨年の春のことであつたさうです。萬喜子孃の所に、まだ十二三歲の小さき小間使が居りましたが、萬喜子孃は其小間使と共に座敷の方で手

鞠を突いて節面白う遣つて居ましたが、何うした機會にか、小間使の突いて居た鞠が高く違棚の上へ飛んで上つて、其處にあつた美しい九谷の一輪活の花瓶を倒しましたが、運惡くも水が零れて口の所が缺けて了ひました。さア、大變、小間使は物も云はないで、唯眞赤な顔して、さも〳〵心配さうにして居ました。もし、奥樣に申し上げたならば、屹度大層なお目玉を頂戴するであらう、さて〳〵困つた、いつそ此儘で默つて家へ逃げて歸つて、後からお袋をお詫に寄越さうかしら、と千々に小さき胸を碎いて居りましたが、やがて其斷けた花瓶と其破片とを取り上げまして、その壞れ口を繼ぐやうにしましたけれど、一旦壞れたものゝ喰付いて元形にならう筈もございませんので、小間使の少女はほと〳〵當惑して、最早や眼に涙を一ぱいに浮べて居りました。そして、小さき憐な聲で、

『あら、どうしやうかしら。』

と、獨語のやうに囁きまするので、是を見て今まで默つて居た萬喜子孃は何か少し考へたやうで、

『お前、いゝよ、心配しないでも。』

と、如何にも落付き拂つて云ひまするど、彼方は亦

『だつて、お孃さま、どう致しましても、心配せずには居られません。』

『いゝよ、お前は默つて居れば。』

『どうして、お孃さま、そんなことが出來ませう。』

『そりや、いゝよ、私が斯樣やつて一緒にあそんで居たのだからね、私が壞したと、さう云つて、お母樣にお詫するから、お前は默つて居れば宜いよ』

『あら。まア、どうして、お孃さま、そんなことが………。』

と、小間使の少女は子供心にも流石に氣の毒の感に打たれたと見えて、今はわつと、聲さへ立てゝ泣きました。

『いゝよ、そんなに困らんでも、宜いよ、大丈夫、お母さまはお叱りなさらないわ。』

と、慰めまするど、

『だつて、お嬢さま、貴嬢がお壞しなすつたものでもないのに、……それを〳〵……それよりも私が奥様に申し上げて……お詫します……。』

と、聲音は痛く打震るへて居りました。で、怜悧なる萬喜子嬢はいゝわざと平氣を裝うて口元に微笑さへ見せながら、

『いゝと云つたら宜いよ、私、お母様に叱られたつて……お前默つて居りや、それで宜いわ。』

『だつて、そんなことが。』

と、云つて小間使は疊へ突伏しましたが、萬喜子嬢は、直ぐと其座を去つて奥の方へ駈けて行かれ、早速自分の過失として、これを夫人に訴へてお詫びされたと云ふことです。後では小間使の少女も自白してお詫びしたさうですが、夫人は只につこりと笑つて些とも叱責せられなかつたと云ふことです。人の困つてゐる所を哀れと思つて、自分が其罪を着ると云ふことは、實に立派な善行で、その光は一生の間消えませぬ。

（をはり）

束髪八の字形　（新流行）

今日の流行の束髪とし云へば例の花月卷とのみ思へる人の多きこそ可笑しけれ其れも左るとに頓着なき男子ならば是非もなけれど小説家の何の某とも云はるゝ人が中流以上の婦人の風俗を書くにも髪は花月卷とせるが最と多きぞ不注意極まる事よとは左る婦人の物語なりけり△如何にも其の言の如く昨今中流以上に行はるゝ束髪は花月卷の見るから下品なるものにはあらで八の字形と名けらるゝものなり其恰好を云はんに宛も8の字の上半部の輪の如き小さき輪をなしたり故に此名ありとぞ又エス形とも稱せらるゝはS字にも見ゆるを以てなり別に又糸卷形とも云へる由△八の字形の流行の初めは早や三年程以前にして其れまで中流以上の婦人には主に夜會結と名けられたるが行はれしかど頓て是が看護婦社會に大流行を極め爲めに看護婦頭と云ふ異名をさへ呼ぶに至りしより夜會結を排斥して前記の八の字形を好むの風を生じ之と同時に所謂下田式の前髪即ちフックリと前髪を取るとが流行となりぬ△然るに花月卷は妙に廣く婦人社會の好みに適して中流以上にも矢張一時は大分行はれたる様なれどお三どんにも裏店のお茶ッピイにも齊しく此結髪が大持となりたるより忽ち中流以上には花月卷が勢力を失ひ今や身分ある婦人にして花月卷を結ふ人は皆無となり女學生にも亦其れと同様八の字或は以前行はれし形の束髪行はれ又夜會結びも再び持囃されんとするの兆候も見ゆとぞ



夫の眼に映じたる

妻の仕事

岩田鳥山

▲はしがき

人は社交的の動物である。とは古くから唱へられて、而して言ひ陳した辭なのですが、此『社交』といふ二字には種々と深き意味が含れてゐますので、就中、何人の頭腦にも先づ聯想されますのは、『家庭』といふ文字でありませう。『社交』と『家庭』!。是れは切つても切れない深い關係を有つて居ますので、『社交』を離れて『家庭』なく、『家庭』を餘所にして完全に『社交』が成立つ道理はありませむ。

と申しますると、其樣ら友達同志の交際、是れは『社交』ではないのかといふ、反問をお起しになる方もありませうが、成程、是れも『社交』の一部分ではありませうけれど、『家庭』と『家庭』との『社交』でなければ決して完全な『社交』であるとは申されますまい。で、『社交』が『家庭』と『家庭』との交際でなければならぬ如く、『家庭』も亦唯一家を爲してゐるばかりでは、それが決して申分のない『家庭』とは申されませぬ。『家庭』には須く『家庭』を形成る要素がなければならないのです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『家庭』を形成る要素？謂ふ迄もなく『夫』と『妻』とです、換言すれば夫婦揃つて居らなくつては、是れを圓滿具備せる『家庭』といふことが出來ますまい。一家に『夫』と『妻』あつて始めて『家庭』が成立ち、其又『家庭』が至る所に在つて、茲に於てか『社交』といふ文字が起つて參ります。

では、其『社交』の花ともなり、飾ともなりますのは『夫』なる男子でありませうか、又『妻』なる女子でありませうか、無論！『妻』なる御婦人方であらねばなりませぬ。噫！『社交』の花！『社交』の飾！御婦人方の光榮と名譽と誇とは大したものではありませぬか。我等男性は此『社交』の花なる御婦人方——妻なる名の許に——あるが爲に活き、『社交』の飾なる御婦人方——妻なる名の下に——あるが爲に光明があるのです。我等は此御婦人方へ『社交』の女王といふ尊稱を捧げて、我等が生活に光明あり活氣あるべくあらしめた多大な功績を讃美するに恪かならぬのであります。

が、又退いて夫たる男子の立場から、妻たる女子が何事を爲しつゝあるかを觀察して、是れを發表しますのは強ち無益の業ではあるまいと思ひます。否啻に無益な業でないばかりか、最も趣味あることゝ想ひましたので、茲に『夫の眼に映じたる妻の仕事』といふ題目を掲げまして、公平な觀察を公けにすることゝいたしました。がお斷申して置きます。是れには些かの虚飾も亦聊かの虚僞も混つて居ませんので、觀たまゝ、感じたまゝを赤裸々に記しましたのですから、往々露骨に流れまする所もありませうが、其邊の所は宜しく御推讀を煩はさねばなりませぬ。是れは豫じめ願つて置きまする。

▲新婚當時

時の力は人をして様々に變化させますが、恐らく婦人程著しく變化が眼に立つものはありますまい、ツイ此程迄振分髪の、垂髪姿でゐたものが、何時の間にかお下をリボンで結ぶ様になり、桃割になり、唐人髷となり、島田髷となり、夜會卷となり、其邊

化の烈しいと云つたら三日見ぬ間の花所ではありませむが、其著しい上にも著しく、其烈しい上にも烈しい變化を見せますのは、島田髷を丸髷に結ひ變る時で御座いませう、處女時代を去つて一家の主婦となる時で御座いませう。昨迄は人形を抱いて頰擦をしたる、邪氣なく罪のないことを言つてゐたものが、一度式三獻の盃を手にいたしまするど、宛で生れ變つた樣に變つて了つて、言語づかい、身の舉動、凡べてが內端に、鷹揚に、約しやかに、處女時代の活々として邪氣なさは樂に仕度も見ることが出來なくなります。外部へ現はれた變化は此位ですが、表面から見えない精神の變化は一通や二通ではありませむ。自分の將來の運命は此時——式三獻の盃を手にした時に定められて了つて、善惡共に此運命のまにまに服從せねばならぬのですから、薄氷を踏むとでも申しませうか、深淵へ臨むとでも言ひませうか、其怖さ、其恐しさ、小い胸は始終波立つてばかり居るのでありませう。能く我等男子の方で「妻を娶るのは麻尼剌の富籤を引く樣なもので、巧く引き當てればい丶、若し左樣でない時には百年の不作だ」と申しまするが、是れは敢て男子の側ばかりではありますまい、此辭は移して以て御婦人方にも用ゐられるのです。否、百年の苦樂他人に據る、御婦人方に對しては、層一層切に此感がわらねばなりますね。

で、新しい妻、若き妻は何事も內端で、控へ目で、又約しやかでありまするし、夫たる男子の方でも新枕の美しい夢に醉つてゐる頃でありますから「妻の仕事」に就ても細かな觀察なぞは兎ても出來るものではありませむ。夫の眼に見え、耳に聞ゆる凡べてのものは美しく映り、樂しく響くばかりでして、一寸とした手料理の鹽加減の、縱し夫の口に適しませんでも、彼の優しい手を下したのかと思ふと甘く味はれ、顔へ勝の不器用な手附で酌をしてくれた酒も自分を慰め樣といふ眞心が籠つてゐるかと思ふと美味も飲れるといつた具合に、一言、一行、唯々善い方の側ばかり眼に附きまして、未來の樂しさばかり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

描かれて居まするから、例へ毫末の缺點がありませうとも、醉つてゐるもの丶眼に何うして夫れを認めるとか出來ませう。ですから某詩人が此新婚當時を「人間一生の春！」と言ひましたのは、有繋に味のある辭で、若し現世に樂園といふものがあるとしますれば、此時代を申すのであらうと思ひます。



雖然、人間一生の春は永久に續くものでありませうか、現世の樂園は何時までもあるものでせうか。縦へ夫婦の情交は日より月に、月より年に、漸次と睦じくなつて行きませうとも、其樂しい夢は永久に覺めずにゐられませうか、是等の疑問は忽ちにして解くことが出來ます。私は前に時の力は人を様々に變化させると申して置きました。然り、此恐るべき時の力は、花嫁を何時迄も花嫁として置きませむ。而して渠女の纖弱身體に大なる責任を脊負せます、夫れは主婦として一家の財政を經營すべき任に當らせることゝ、母として育兒の任を帶ばしむることです。

さア斯うなると際限なしに例の飯事を續けてゐる譯には參らなくなります。大ければ大きいだけに、小ければ又小いだけに、一家の切盛をしてゐなければなりませぬ。從つて臙脂とか白粉とかいふものには漸次遠ざかつて行く様になります、換言すれば世帶

の苦勞に憂身を窶す樣になつて行きまして、最初の內端であつたのや、控え目であつたのや、約しやかであつたのが次第に脫れて行つて、木地を其儘出す樣になりますから、『妻の仕事』を觀察仕樣といふ夫の爲には最も都合のいゝ時で、鐵札か、金札かは此時に定まるのであります。無論！夫たる人も旣に新婚といふ美しい夢から覺めてゐまするから、虛心に、公平に其仕事――妻の仕事――に就て判斷を下すことが出來ますので………。

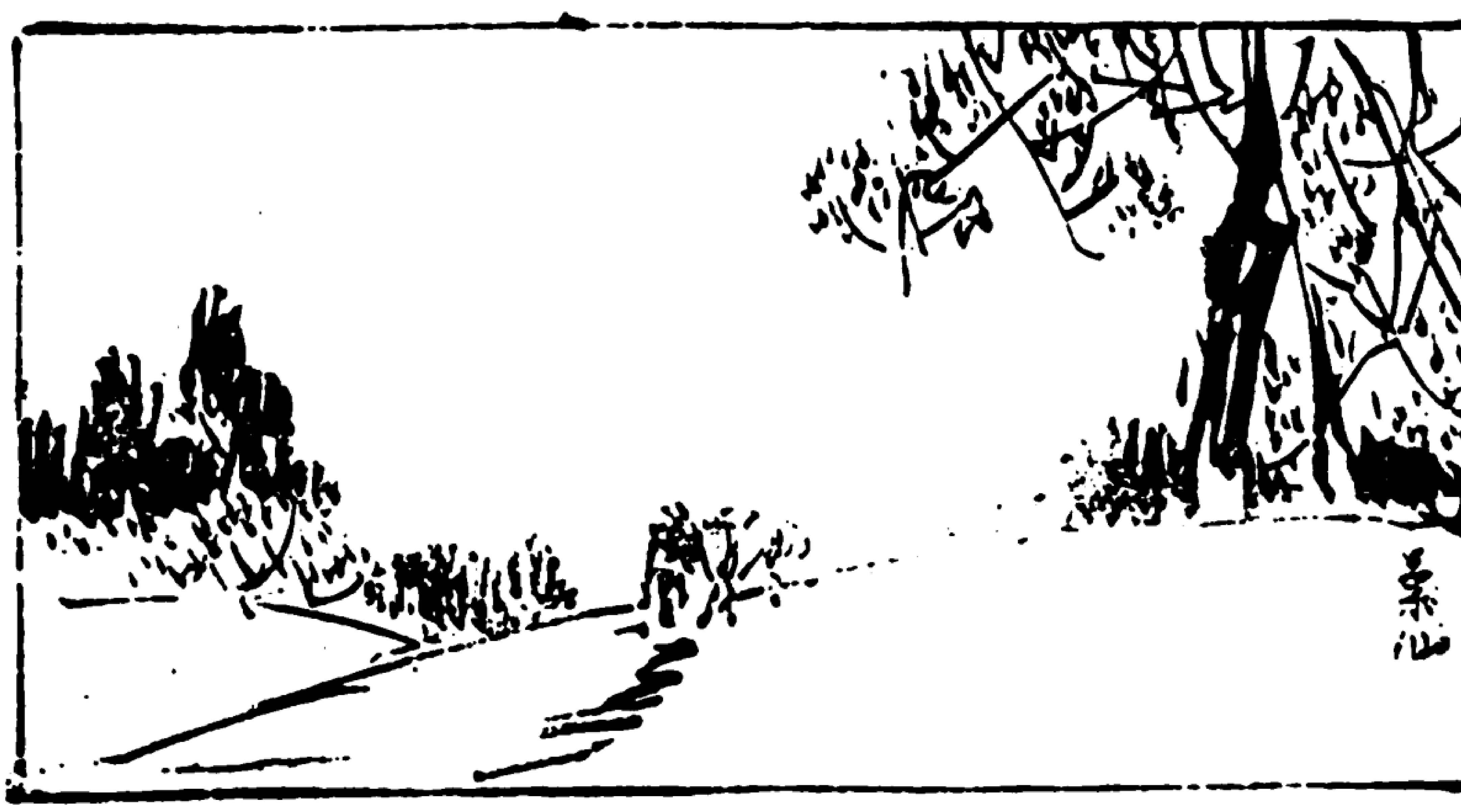
▲馴れたる妻

妻の仕事？夫から受取た金錢を不足のない樣に處分して行くばかり！夫をして內顧の憂ひなからしめて行くばかり！此樣ことが何で難しからう！男子が社會に立つて浮世の荒浪と戰鬪のに比べたら言ふに足らぬ、是れが何で仕事であらう？と輕々しく一笑に附して了ふ男子も多い樣ですが、互に執る道こそ違へ、其心配、其苦勞は活社會の戰鬪場裏に立つ人と些の増減はないのです『家庭』に於ける女王の制令其宜しきを得なかつたなら、一家は忽ち紊亂して、社會の戰士たるべき男子をして安んじて其戰鬪に從はしむることが出來ませうか。妻なる『家庭』の女王がありますから、男子たる夫は、些かも心を惹れずに其職務を執つて行かれるので、其仕事の難易は元より輕重するに足らぬのであります。さらば、夫は是れを如何に監視し、又如何に妻の仕事を觀てゐるでありませうか、是は恐らく妻たる人の聞かんことを希つて居る問題であらうと思ひます。が、凡べての妻君が願つてゐる如く、望んでゐる如く、多くの夫なる人は此問題に對して餘りに閑却してはゐますまいか、等閑にしてはゐますまいか。其處で私は是等の人に先んじて妻の仕事を觀樣としました、殊に多大な注意を拂つて觀樣としまして、先づ『新婚當時』を觀察しましたが、何うも充分といふ譯に行きませんでしたから、更に『馴れたる妻』の仕事を觀察することにしました。

馴れたる妻？何と變な名前ではありませむか。然

し、茲に『馴れたる妻』と言ひますのは結婚後一年間を經た程を言ひますので、畢竟主婦として馴れて來たといふ意なのです。

男の仕事の非常に複雜で變化の多いのに引換へ、女の仕事は單純で大した變化もありませむ。で、觀察と申した所で始終同一ことを觀てゐるのですけれど、それでも觀樣に依つては又面白いもので、細心は女の美點で、又長所ですから、男は兎ても思ひもつきません點に氣を配つて行くのを觀ますると能く彼樣點にと思ふことが度々です。先づ早いお話しが、一寸とした買物をするとしても、何處其處のは品は善いが不廉とか、又は彼處は廉いけれども品が惡いとか、と言つた樣なことはちやんと觀てありますし、其の他主人の嗜好物は言ふまでもありませむ。其友達の親しくするものは何時の間にか嗜好物を記憶しまして、其方が見えた時にはそれを出して接待の心を盡すなど、いふことは、女でなければ眞似のならぬことです。殊に、室内の整理ですな、男は兎角放縱のもので、出せば出したツ己で、跡始末といふのをしませんから、後に至つて其物が見えない時は大騷ぎをすることが度々ありますが、それを一々整理して何は何處へ、彼は彼處へと、順序正しく藏つてくれますので、チツトもまごつくことはありませむ。是等は『妻の仕事』としては極く些細なことで、事々しく茲に揭げる必要はありませんが、其力の多くを用ひますのは家計上のことで、私共では云ふに足らぬ些細の收入ですけれど、夫れでも何うにか彼うにか繰廻して、月々不足で困るといふことを聞いたことはありませむ。



有餘る生計向なら、其局に當るものも大きに樂でせうけれど、一杯〳〵の收入なのですから、嘸ぞ骨が折れるだらうと思つてゐますけれど、本人――家庭の大藏大臣――は別に新財源を發見仕樣とも思ひませんければ、此樣ことでは困ると愚痴らしいことを溢したこともありませむ。

それから一ケ月の收支決算（も餘り大層らしいけれど）ですね。完全な簿記法は心得ては居ませんけれど、自分一流の月計表ともいふべきものを作つて月毎に私へ報告をして居ます。其又表なるものが頗る奇妙でして、口座には至極不思議なのがあります、其一例を擧げますと、米代とか、副食物とか言つた樣な、凡べて賄費へ入るべきものが一ツ〳〵別座になつて居り、消耗費に記入すべきものが左樣でなかつたり、簿記法で言ふ貸借の意を誤つたり、隨分怪しげなバランスですけれど、それでも一ケ月の收支決算は一目瞭然になつて居ます。次に私が非常の便利を得ましたのは毎日怠らず記けてゐる日記なのでそれも文章なんかは如何はしいものですけれど、私のした事、妻のしたこと、其他一家の出來ごとは細かに記入してありますので、何時何日は何所へ行つたッ氣なと、一寸と忘れる樣なとがありましても、日記を見ますとそれが記いてゐるので、あゝ、彼處へ行つたのかと直ぐに分りますから、從つて失策をする樣なことが尠くなりました。が、又弱らされることもあるのです。例へば、何月何日、朝幾度起しても起きないので、出勤――私は某署の腰辨なのです――の時間を過したとか、又は何月何日の夜、酒を過して、啊羅聲を出して詩を吟じて、近所を騒がせたとか、麗々しく書いてあるので、思はず失笑しては恐縮することもありました。

然し是等は先づ良好方の側で、困ることには餘りに綺麗好の方なので、私が身體に暇のある時、書齋に籠居して調物をするとか、何か書きものでもしてゐて、少し頭腦が疲れて來ますと其處を其儘に散亂し放しにして、氣をぬきの散歩へ出掛ますとが度々

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ありますが、出る時に「此處へ手をつけてはいかんよ」と言つて行けば宜しいのですけれど、時とすると、それを忘れて何とも言はずに行くことがあります。二三十分して歸つて見ますると、四邊は何時の間にやらチャンと片附けてあつて、再び机へ對ふとの出來ぬ場合もありますので、是れには甚く閉口させられます。（未完）

我國の婚姻（一）

林恒山

我邦上古より婚姻の仕方は、漸次風俗の推移と共に變遷し來りて、大に其趣を異にするを免かれず、是れ何れの國にても亦然るを見るべし、唯々世教の關係によりて、古代に是とせられたるをも、後世にては非とすることとありて、我邦は古今の相違殊に甚しきを見ると雖も、猶古代の遺風の永く留存するもののあるは、古來の習慣の人情を支配する深きもののあるを知るに足るべきか。

先づ上古に於ける婚姻の仕方を云はんに、今日の如く女子を男子の家に迎ふるにあらずして、男子より女子の家に往きて婚禮を行ふを常とせり、是れ後世と大に異なるの一なり、又其婚姻後に於ても、多くは依然として女子を其親の家に置きて、男子より此に往きかよへるなり、是れ亦後世と大に異なれるの二なり、左れば如何にして最初婚姻の約束を取結ぶかといふに、我邦にては、上古より男女の差別は嚴重にして、殊に高位貴人に於ては、男女相接近するが如きは、絶えて之れ無かりしなり、故に只々人傳に或家の女子の美しきことを聞きて、婚姻を申し込み、親の許を得て後婚禮を行ひしなり、此外に歌垣と云へることあり、是れ上古時代に於ては、盛んに行はれたるものにして、春花秋月の好時節に於て、或る定まりたる日を期して、都にては市に、田舍にては或る野山に、暮方より若き男女の打集まりて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

互に歌を唱和し、舞ひ戯むるゝなり、之を歌垣とも又歌かゞひとも云へり、此時男子の方より此女はと思ふものあれば、呼びかけて名乗り合ひ、互に其心に適へば、此に婚姻の約束を結ぶなり、是れ上古に於ける一般の男女が相知るを得る唯一の方法にして、婚姻に於ける豫備の第一手段なりしなり、古言に婚姻の事をヨバヒといふも、此歌垣に男子より女子に呼びかけて約束するより出でしものなるべく、此の歌垣は後世に於ける盆踊の起原なるべしともいひ、又近代まで地方により或る神社の祭禮などに、若き男女の参詣して、打集りて歌舞するものありたるも、亦此歌垣の遺れるものならんとも云へり。

此くて男女相知り、互に其意に適ひたる後は、父母の許を得ざるべからず、父母にして之を許せば、此に珠髪(女の髪飾)などを女子に贈りて信契と爲すもあり、是れ後世の結納の起原ならんかと云へり。

前記の歌垣には、往々高位貴人も立交りたまひしものと見え、古事記清寧天皇記に平郡臣の祖、名は志毘臣、歌垣に立ちて、其袁祁命(顯宗天皇)の婚さんとする美人の手を取れり、其嬢子は菟田首等が女名は大魚と云へり、爾袁祁命も歌垣に立しき、云々、此時袁祁命の歌に、

潮瀬の　波折を見れば
遊び來る　鮪が　鰭手に
妻立てり見ゆ

と、此は潮瀬の流るゝ所に、波の高く立つを見れば鮪の鰭に添ひて、少女の立てるを見るとの意なり、志毘臣之に答へて、

大魚よし　鮪衝く海人よ
其　有れば　心裏戀しけむ
鮪衝く　鮪

と、此は大魚よしは鮪の枕詞にて、鮪衝くは鮪に附くの意にかけたるにて、海人は嬢子をいふ、此嬢子が鮪に附纏ひあれば、王子の心中如何にうらやましく、戀しからんとの意なり、鮪衝く鮪は第二句を打返へして謠へるにて、大に誇る所なり、志毘臣又

大宮の　彼鰭手で
隅傾ぶけり

と、此歌は袁祁王の御殿の端の隅が見苦しく傾きて居るといふ意にて、王の只々御一人のみ淋しげに立ち給へるを其住み給へる御殿の様の見苦しきに譬へて侮り奉りしなり、是に於て袁祁王又

大匠　拙劣こそ
隅傾ぶけり

と、大工が拙劣なる故に、隅が傾きしので、吾に於て何かわらんとの反駁の意なり、命又

大君の　心を寛み
臣の子の　八重の柴垣
入り立ずあり

と、大君のは袁祁王自身に詔ふにて、心寛かなるによりて、臣の子の志毘の八重の柴垣に踏み入らず、若し嬢子を得んと欲せば、汝が垣を堅めて防ぐとも打破り得べけれど、今は宥し置くとの意なり、志毘臣愈々怒りて、

大王の　王子の柴垣
八節結り　結り廻はし
截れむ柴垣　焼けむ柴垣

と、大王の王子の柴垣は、幾重にも垣を結び廻したるも、截らば必らず截て見ん、焼かば必らず焼きて見んと、王の縦令嬢子を得て守らるゝも、吾いかで宥しおかんや、厳重なる柴垣も踏破りて、取返すべしとの意なり、（右の歌は古事記は順序等の誤あり今書記によりて正せり、）又古事記に如此歌ひて、闘明して、各退けましぬ、明旦之時、意富祁命（仁賢天皇）、袁祁命二柱議云たまはゞ、凡て朝廷の人等は旦には朝廷に参赴り、晝は志毘が門に集ふ、亦今は志毘、亦寝たらむ、其門に人も無けむ、故今ならずは、謀難けむとはかりて、即ち軍を興して、志毘臣が家を圍みて、殺りたまひき、とあり、平群志毘臣は、武内宿禰の子孫にして、世々朝廷の大臣となり、其威勢朝廷を凌ぎたれば、其亡滅すべきは怪しむに足らざるが、歌垣に嬢子の爭より袁祁命に對し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ての無禮なる、言語同斷にして、爲めに亡滅の期を早めたるものなり、此く女子によりて、禍福の機を爲せることの多きは、女子も亦顧みざるべからず。
又珠髪を贈る事は、安康天皇記に、天皇伊呂弟大長谷王子の爲めに、坂本臣等が祖、根臣を大日下王(安康天皇の祖叔父)の許に遣して、詔らしめたまへらく、汝が命の妹、若日下王を大長谷王子に婚せむとす、故、貢るべしと、のらしめたまひき、爾に大日下王四たび拜みて白したまく、若し如此大命も有らむかと疑へる故に、外にも出さずて置きつ、是れ恐



し、大命の隨に奉進らむと白したまひき、然れども言以て白す事は、無禮と思ほして、即ち其妹の禮物として、押木之玉縵を持たしめて、貢獻りき、根臣即ち其禮物の玉縵を盜取りて、大日下王を讒しまつりけらく、大日下王は勅命を受けたまはらずして、己が妹や、等族之下席に爲らむといひて横刀の手上取りしばりて、怒りましつと白しき、故天皇太く怒りまして、大日下王を殺して、其王の嫡妻長田大郎女を取持來て、皇后と爲たまひき、とあり、此事後に知れて根臣は誅せられたり。
又上古より我國に於ては、男子は幾人の妻をも設くるを得たるなり、其妻は前に云へる如く、何れも各

各其親の家にありたるより、異母兄弟は殆んど他人の如く、父親より之を見れば、等しく皆己が子なるも、異母兄弟姉妹より之を見れば、相見知ることもなき、家を異にせる他人にして、後世の如き兄弟姉妹の關係もなく、感情もあらざりしなり、後世より之を見れば、不思議の樣なれども、當時の風俗習慣よりして、何人も恠しむものあらざりしなり、是れによりて、當時は異母兄弟姉妹の間にも婚姻の行はれたるものなり、云はゞ異母兄弟姉妹は兄弟姉妹にあらずして他人なりし、殊に皇后は必らず皇族よりせられたれば、上古時代の皇后には同母妹を以てせられたるもあり、彼同姓相娶らずなど云へるは支那の敎に過ぎずして、當時は固より我邦の風俗習慣には之れなきなり、且つ姉妹共に一男子に婚することもありて、後世にも先づ姉を娶り、其死後に至りて妹を娶ることは、往々見る所なるが、上古にては姉妹同時に一男子に從ふものあり、是れ支那文學の傳はりし後に於ても、尙ほ行はれたるものなり、是れ等は上古の史を讀むもの丶心得置くべき事なり。斯く一夫多妻の風習久しく行はれたるが、我國上古よりの美風といふべきは、女子なるものは必らず一夫に聽從するを以て之を婦德の第一と爲せること、當時に於ても亦後世に於ても最も大切なる一要素たりしことなり、是れ實に我邦神代よりの遺風にして古事記神代の卷に八千矛神（大國主神）の嫡后須勢理毘賣命が大御酒坏を取らして立依指擧げて歌ひたまはく、

八千矛の　神の　命や
吾が大國主こそは　男にいませば
打ち見る　島の岬々
搔き見る　磯の岬落ちず
若草の　妻持たせらめ
吾はもよ　女にしあれば
汝除きて　男は無し
汝除きて　妻は無し
綾垣の　ふはやが下に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

蟲衾　柔やが下に
栲衾　亮ぐが下に
沫雪の　軟搗る胸を
栲綱の　白き腕
素手抱き　手抱き拱がり
眞玉手　玉手差纏き
股長に　寢宿なせ
豐御酒　献まつらせ

とあり、此歌の大意は、八千矛神や吾大國主神こそは男にいませば、打ち見る島の岬々や、見渡す礒の岬殘らず、何れの處にても若き妻を持ち給はん、吾は女であれば、君を除きては男はなし、君を除きては妻はなし、綾の帳帷のふは〳〵したる下に、絹の衾の柔かなる下に、織物のさや〳〵と音する下に、沫雪の如き軟なる胸、綱の如き白き腕にて、素手にて抱き、玉手にて卷き、股を長くして、寢て宿りたまへ、美酒を召あがれとなり、此君は男子なれば多く妻を持ちたまふも、吾は女子の身なれば、君を除きては夫のあるべきにあらずといふ、此美風の傳はりて、多少の嫉妬は免かれざりしならんも、之によりて婦徳の圓滿に維持せられたるは明かなり、此語は恐らくは多妻主義の金壁なるべし。

尙ほ此に附記すべきは此妻の幾人もある中に早く妻とせしをコナミといひ、後なるをウハナリと云へり、妻とせし時の前後によりていふものなれども、後世の前妻後妻とは大に異れり、同時に妻たるもの丶中にていふなり、此コナミとウハナリとの間柄は、先づ姉妹の關係に似て、後世の夫人と側室との如き程の差別はあらざりしなり、故に時によりコナミの二人並びて何れも劣らぬ事もありし程なり。

此に遺憾なるは上古に於ける婚禮の儀式等の詳ならざるにありて、只々結婚の日には、女子の方にて机代之物を備へて禮物とするとあるが、机代之物とは膳部に据ふる酒饌の類をいふものにて、上古にては食物は机に据ふるを常とせしによれり、其男子來る時に先づ女子より杯を採りて男子に献むるとは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此女子の家に至るが故なりしならんが、今日も婚禮の時に、所謂三々九度の杯は、先づ女子の方より初むるは、上古よりの遺習なるべきか。（未完）

修容術（身のたしなみ）

すみよ

鏡に對ひて容態を整ふる乙女を見て、無下に益なき事をするものなりと譏るは、甚しき誤りでは御座いますまいか、昔から日本の習慣で、此修容と申すことは、大層八ケ間敷敎へられたもので、寢顔を夫に見するな、とまで誡められて居ります、それは何も歌妓などが粉飾を凝して、男子に顧みられんことを希ふとは、全く主旨を異にして、一種の身たしなみ……愼みと云ふに外ならぬもので、言葉を換へて云はゞ、禮の一つであると申しても可かろうと思はれます。

丁度貴人などの御前に出るには、男女に拘はらず、相當の禮容を整ふると同し事で、女子が夫に對し、又世間の人に對して、相當の裝ひと云ふ事を忘れてはなりませぬ、これは男でも女でも同じでありますが、取分け女に於ては、此心懸の必要を感じます。

元來動物の類を見ても、雄よりも雌の方が、遥に外貌の美と云ふ點に就ては劣つて居ますのは、彼の鷄や、孔雀や、その外の小鳥の類を見ても、能く判ります、人間も亦同樣で、女子は遺憾ながらその美則ち天稟の美と云ふ點に於ては生れたまゝを比較したならば到底も男子には及びませぬ、白粉や、臙脂や、美はしい衣服などで、飾り立てゝ居るから、女子が美麗しく見ゆるので、私共の故郷などでは、海人、海人と申しても、別の人間では無いのですが、漁夫の妻が、夫と共に海に出で、稼ぐのですが、ドーモ其顔も身體も眞黒で、茶褐色の頭髮をぐる〳〵卷にして、海邊に出て居る體裁を見ますと、人間とは見られぬ位ですが、同じ色が黒くても、男子の方が遥に立優つて立派に見へます、私は此海人を見て

小供心にも、常に女と云ふものは、力や智恵が男に較べて劣つて居るばかりでなく、美と云ふものまでも、男には及ばぬと、斯樣に思ふて居たのです、その感念は今日に至つても、少しも變りませぬ、それでこの修容と申すことは、彼の禮容の一つとして、せねばならぬと云ふとの外に、斯樣に劣つて居るのを補ふと云ふ必要の上から見ても、是非外貌を整ふると云ふことの必要を感ずるではありませんか。

それから今一つ修容が必要なと云ふのは、この外貌を整ふるが爲に、引て其心までも、自然に温雅に、優麗に、向上する利益のあるもので、西洋の諺にも身體の外貌に、意を留めざるものは、其身を撿束せず、世上一般の人斯の如くなる時は、終に野蠻の境界に陷るべしと云へるが如く、此修容は如何にもつまらぬ樣ではありますが、其關係は誠に廣く且つ大なりと云ふことを知らねばなりませぬ、斯樣に申せばとて、一概におしやれ、めかしをおすゝめ申す次第では御座いませぬが、彼の白粉禁止論の如き、殺風景な議論は、實に女子をして生ぶのまゝの姿有樣に戻ると云ふ、……餘り亂暴なる議論であらうと思ひます、修容と申しても、燕脂や白粉を以て、濃裝せよとの意では無いので、如上の粉飾的材料は借らぬとも、充分に此目的は達し得られます、要は身のたしなみと云ふ精神を以て、適當に、清潔に、身體容貌を整ふると云ふのが大切で、若し程能く身體の美を保ち整ふると云ふ事を爲し得たる場合には、詩人をして花や月にたとへて歌はすることさへ出來るでは御座いませぬか。そこで婦人か身體の各部に就て注意すべき、事柄を述べんに、先つ

▲毛髮の注意

から始めませう、女は髮、髮のめでたからむと……と昔の人も云ひし如く、其人に逢ふと、先つ一番に目の着くのは頭髮で、この髮のうるはしき程、其人の美を增さしむるものはありませぬ、或は之を雲にたとへ、柳のやさしきに擬する程で、雲鬢と云ふ言葉には、正しく顏貌の麗はしさをも偲ばしむるでは

ありませぬか、此毛髪に就ての注意は第一に其平素の手入で、其手入れは、時々之を洗滌するのが、尤も大切なる注意である様に思はれます、其方法は石鹼と水……石鹼を用ふるのは毛髪を枯燥さするなどゝ申して、嫌ふ人もあるやうですが、決してそうではありませぬ、殊に本邦婦人の如く、常に多く油を用ふるものは、殊に此必要を感じます、即ち石鹼と水で先つ充分に洗ひて、能く乾かしてから適度の硬さの髪刷毛て、髪と頭頂を摩擦し、そして橄欖油でも、猪脂でも、少し許塗抹して、清淨なる刷毛にて、屢々梳るのです、此法は大層毛髪を緻密にして、其上光澤を増すものです、頭髪の末梢は時々之を剪るのが宜しう御座います、これは毛髪を長くするため、又その巻縮れるのを防ぐにも大なる効力のあるものです、其の他グリスリンに香油を少許混じたる稀薄液にて、洗滌するのも、頭部の脂皮を去り、逆上を下ぐるの効があります。



夫から頭髪の結び方も、大層髪の美麗を保つと云ふ點に關係するもので、日本の昔の結び方殊に上方風と、普通に稱へまする西京婦人の様な結び方は、毛髪の爲に、非常によくないのです、少し許の油を用ふるのは毛髪を柔軟にして、枯燥を防ぐの利益がありますが、彼の西京風の様に、コテ〳〵塗付ますのは、恰も油で固める様なもので、毛

髮の手入と云ふ上からは勿論、第一衛生の上に非常に害が御座います、毛髮の爲に一番宜しいのは、無論束髮であります、束髮は全く油なしの結び方、俗に橫濱風と云ふハイカラ式と申す人もありますが、其結び方は餘り毛髮の爲によいとは申されませぬ、少許油をつけて結ぶ花月卷などは、毛髮の爲にも宜しい樣に思はれます、花月卷の事は、此頃二三の新聞に、彼の束髮は下田歌子女史か結び初めてから、非常に流行して昔風のかもじや迄が、恐慌を來したと云ふ樣な事が見えた樣ですが、實は彼の結び方の元祖に、下田さんでは無くて、新橋の料理店の女中が結び初で、一時下流社會に行はれたので、名さへ花月卷と云ふ位ですが、之は少し意氣な方で貴婦人方には、如何と思はれます、束髮の結び方にも種々あつて、之迄流行した內でも、英吉利卷或はS卷三つ組卷等種々ありますが、最新流行の結び方は佛蘭西卷……之は前髮をふつくり出して根を結び佛蘭西櫛とて、丁度花鋏の樣な工合に出來て居る櫛へ、卷付けて結ぶので、栗野公使夫人が彼地に流行する方をとつて結び初められたのですが、大層上品な結び形であります、然しながら結髮の仕方は、各々の似合ふ樣な結びのが宜ろしい樣に思はれます、縱へ流行すればとて、不似合なのにも關らず、流行を追ひますのは、實に見苦しき限りでは御座いますまひか。

▲皮膚を美麗に保つ事に就て

次には皮膚を美麗に保つ事、之は單に美と云ふ上計りでなく、第一衛生上の點に於ても此皮膚を清潔にすると申すことは、餘程必要があるので皮膚を不潔にして、脂肪或は外部の塵埃を附着せしめて置く時は、氣孔を閉塞して、其の調節を妨げます故に、種々なる疾病の原因となり、皮膚病をも發します、斯樣に衛生上に關係を有するものでありますから、皮膚の清潔と申す事は是非とも相當の注意を致さねばなりませぬ。夫は第一石鹼の洗滌法、石鹼を使用するに、其方法を得ませぬ時は、往々皮膚を黃染して、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

却つて色が黒く見ゆる事も御座いますが、之は石鹸を使用した跡の洗ひ方が悪るいので、夫が爲一種の化學的變化が起るのですから、石鹸を用ゐました後には、よく清洗するを要します、又皮膚を美麗に保ちまするは、牛乳の洗滌法で御座います、即ち微温中に一合ほどの牛乳を加へたる稀薄液で、顔面を洗ひたる後、微温の天水に、薔薇精の二三滴を加へて洗ひたる後、新鮮なる大氣の中で、運動致しまするのは尤もよい皮膚の美麗を保つ方法で御座います、歐洲の貴婦人社會には、此方法が行はれて居るそうです、此方法によれる美麗は白粉や、他の顔料で粉色したのと異つて、自然的の美で御座いますから、尤も麗しひ皮膚の血色を保つ事が出來ます。

凡そ皮膚を清潔にして、光澤を保ちますには、申すまでもなくお湯に入るとを怠つてはなりませぬ、近來は冷水浴又は冷水摩拭なども盛んになつて參りましたが、修容の上から申しますと、矢張りお湯の方が優れて宜しいのであります。

子守り歌

子守り歌は其種類も却々多いが、どうも今日の物としてはよく適らぬ様に思ふ、又近頃出來たものもあるが是も理屈に走つたものばかりで面白くない、茲にある人が其家庭の女の子のために作つたものがある、無邪氣の内にどこにか味がある様にも思はれる、斯云ふ方が反つて能いかも知れぬ。

寢ん、寢ん、寢ん、寢ん、寢ん〱よーつ。信ちやんは寢んねを能くします。然間はよーく遊びます。まんまをたんと喰べまする。乳もたんと吞みまする。小便も能ーく教へます。少しもお世話が焼けませぬ。夜になーれば能く寢ます。段々大きく成つたらばー。赤いリボンを下げまする。蝦茶の袴を穿きまする。毛糸の靴下穿きまする。可愛いー靴が穿きまする。學校へ能ーく行きまする。唱歌を能ーく歌ひます。裁縫も能ーく出來まする。使も能ーく致します。赤兒のお守も能くします。寢ん、寢ん、寢ん、寢ん〱

痩せる妙法

▲從來水を飲めば、身體を肥滿ならしむるとの説、或一部に行はれつゝあつたが、此頃佛國の學者アンリー、ド、パルヴ井ユと云へる人、ヂユルナル、デバ雜誌に公けにせる試驗に依れば、肥滿せる人にして、若し清水を飲用すれば、却つて痩るものなりと▲氏は其例として、數頭のギニア種豕に、午前六時午後六時の兩度、一回廿五グラム宛を注射し、且つ食物の水分をも分析査定し、合計一日一頭に付百八十グラムの水を取らしめた▲斯く水分を取らしめつゝある間に於て、豕は一日四グラムの重量を減じた、而して此の試驗は、三日繼續して之を廢し、夫より固形食物を與へ、其量却つて清水試驗を行ひつゝあつた時より少なかつたにも拘はらず、豕の重量は、毎日增加するやうになつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

化粧のいろ〳〵

▲洗粉と米糠

洗粉と米糠とは、どちらも皮膚の汚垢を去るに必要でありますが、同じ洗粉や米糠でも、品質の善いものを擇ばねばなりませぬ、さもないと忽ち肌理を粗くして、全く化粧の目的に反することになります、洗粉では、小豆粉に滑石、甘松、龍腦を配合したもの、又糠ならば、砂などの混物なき、新らしい正味の糠なれば、必らず効能がございます、入浴の節、糠に鷄卵の白身をまぜて、顔面や頸筋を洗ひますれば、一層効能が見へますが、それは隨分不經濟でありますから、前以て上等の日本紙に白身を塗りて乾かし、一寸四方位の太さに切つて、その二切れ三切れを、入浴の度毎に、糠と共に袋に入れて用うるが宜しうございます。

▲入浴と洗面

入浴は身體を淸潔にし、且つ皮膚を艶麗ならしむるものでありますから、化粧上にも、衞生上にも缺くべからざることは申すまでもございませぬが、塩湯や鑛泉を混じた藥湯は、皮膚を刺戟し、肉色の美を害するものでありますから、化粧上から申しますと避くる方が宜しうございます、又顔を洗ふには、常に微温湯を用ひ、前に陳べたる糠袋を其湯の中に投して、よく絞り、泔水湯にして用ひますれば、一層皮膚を美はしくいたします、又た同じく微温湯に硼砂を混し、或は氷砂糖を加へるもよろしいです、手拭は成るたけ柔かきものを選び、西洋手拭の如きは用ひてはなりませぬ、入浴又は洗面を終つたときには、乾きたる手拭もて、丁寧に濕氣を拭ひとりて、精良なる美貌劑を塗るのであります。身だしなみと申すことは、御婦人方には、大切なことで、決して忽かせにすべきではございません。

▲白粉、紅、香水其他の化粧法

について、次號からさま〴〵御傳授いたします。●

飲食物の話（續）

磯部 武者五郎

穀類

△米 米の成分は水分、澱粉、砂糖、糊精、肪脂及び灰分等なり。

種類 米の種類に五種あり、早稲、中稲、晩稲、陸稲、糯米是なり、早稲は四月中旬に稲を苗田に下し苗代を作り、五月下旬、之を本田に分ち植ゑ、九月下旬に刈り入るゝなり、中稲は五月上、中旬頃に種を下し、六月上旬頃苗を分ち十月中旬に刈り取る、晩稲は四月下旬後に種を蒔き十一月上旬に刈り取る、陸稲は五月中旬種を下し、十月頃刈り取るなり、陸稲は水田の稲に比すれば、味劣る、なれども収實多きを以て作るもの多し、飯米として用ふる外濁酒、麹、飴等を作るに用ふ、糯米は米の一種にして陸稲と稍同じきものなり、其の性質粘質力に富めるを以て多くは蒸して强飯、餅、とし又糒、寒晒粉、菓子、飴等を作るに用ふるなり。

産地 日本は米特に水田米の産地にして世界に著名なり、而して内國米にて著名なる産地は美濃、肥後伊勢、尾張、筑前、豊前、備前、伊豫、武藏、加賀安房、丹波、但馬諸國なり、外國米にて我邦に輸入するものは、西貢（佛領印度）米、ランクン（印度）米を多しとす。

米の由來 米は本邦上古の時代よりありたるとは、我國名を瑞穂國と稱するにて知るべし、尚其歴史に見えたるは、日本紀神代の卷に、天照大神以粟、稗、麥、豆爲陸田種子、以稲爲水田種子、田定天邑君、即以其稲種、始殖于天狹田、長田、其秋垂穎八握莫々然、とあるを見て其の栽培の既に神代の昔より始まりしを知るべし。

米の効能 米は澱粉を主成分とす、澱粉は身體に暖氣を生じ、併せて營養を主ずるものなり、本邦人は先祖以來米食するを以て、米なきときは生活するに頗る困難なり、故に米を主食とするなり、されども

過食するときは身體に其發熱せる成分剩殘し、身體腫れ、むくみ、遂に脚氣を起し、又は胃を擴張して痼疾の病を起すに至るべし。

△麥　麥の成分は水分、澱粉、蛋白、脂肪、灰分等なり、其の米と異なるは蛋白質を含むに在り。

麥の種類は大麥、小麥、裸麥、燕麥、等なり、大麥は我國にては米に次ぎたる主食品にして、麥飯として食用し、酒、酢、醬油の料に供し、又饂飩、麩、索麵麥酒、飴を作るに用ふ、小麥は我國にては、重に味噌、醬油を作る料に供し、又麵麭を作るに用ふ、小麥は歐洲に於ては、我國の米と同じく主要の食品たり、裸麥は大麥の一種にして稍黃色を帶ぶ、其食料としての用ひ方は大麥と同じ、麥粒の殼を脱し易き故に此の名あり、燕麥は重に歐洲に於て栽培するものなり、其の用ひ方亦大麥と稍同じ、麥の一種の鳩麥といふあり、重に支那に產するものにて意苡仁と稱す、澱粉、蛋白、脂肪に富むを以て多く藥品として使用せり、近來之を粉末にし煎餅、團子等を製す。

△粟　粟の成分は水分、蛋白、澱粉、灰分等なり。粟の種類には粟、大粟、黑粟、糯粟等あり、大粟は粱と稱し、通常の粟より大なり、共に食料とす、泡盛酒は粟を用ひて造るなり、糯粟は餅を造るに用ふ、粟は本邦神代より產出せしものにて阿波の國と稱するは此の粟の盛に產出せしを以てなり。

△黍　黍の成分は粟と大差なし、但蛋白、脂肪、灰分に富むを以て營養に効あり、本邦にては到る處農家にて栽培し、其の粒黃なる故黃實と稱せしより轉じて「キビ」といふに至りしなり。

黍の種類には糯黍、粳黍の二種あり、糯黍は餅、團子を製す、黍團子は古より人口に膾炙せるものにて日本一の黍團子なる童話は能く人の知る處なり、されば古より黍團子を愛味せしことを知るべし、粳黍は飯として用ふ。

△稗　稗の成分は粟、黍と大差なし、只蛋白、脂肪の少きと澱粉の多きとの差なり。此品は米麥少き僻地に於て食料に供すれども、頗る粗味なり、稗は我

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

邦上古より栽培したるものなり。

△玉蜀黍　玉蜀黍の成分は他の穀物と大差なし但、澱粉、蛋白に富むを以て食料として常に用ゆることを得るなり、此の品の原産地は南亞米利加なりといふ、通常五月上旬に種子を蒔き八月に至りて實る、其の實は焙りて食し、又は粉末にして飯とし、或は麵麭を製するに用ふ。

△蜀黍　の成分は他の穀物と大差なし只、蛋白、澱粉に富むを以て營養に適せる食品とす、此の品は世界各地に製出し米麥少き地に於ては常食料に充つ、蜀黍は往時支那より傳來せしを以て「モロコシ」の稱あり、玉蜀黍は天正年間に外國より傳來せしなり、當時外國を總稱して「唐」といひし故、更に唐の字を附けて「唐モロコシ」と稱せしなり、蜀黍は多く粉末にして寒晒にし團子其他菓子を造る料とす、又用ひて火酒釀造の料に供せり。

以上にて穀物類に關する概略は終りたり、只是に穀類の一種として見るべきものあり、即ち蕎麥なり、蕎麥の成分は穀物と大差なき故之を穀類とするも可なり、而して澱粉、蛋白に富み其の味の佳なるより、我邦にては之を種々の食品を製するに用ふ、蕎麥切、蕎麥搔は一般の常食する所、殊に蕎麥切は廣く用ひられて、飯の代用を爲すに至る、其の他種々の菓子を造る料に供す。

四季の臺所

中川雪枝

四月

▲飯

『さくら飯』　これは中くらゐの蛸をざつと煠で、足を一本づゝ切はなし、小口切に極うすく切り、飯は常の如く炊き、ふきあがる時蛸を入れ、飯をたき上げ、能くまぜ合して器に移し、味汁をつけ、加味を添えて出す。

『筍めし』　筍の根のところを切捨て、細きざみと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して茹で、うす醤油にて味をつけ、常の如く飯を炊きて器に移す時まぜ合す。

『蛤めし』 小蛤を湯煮して取出し、貝を去り、其湯がきたる汁に水をまして米を仕かけ、煮あがる時蛤を入れ、炊き上がりたる後に能くまぜ合すなり、山椒の粉、芽しそ、葱の刻み、たうがらし、など添ゆればよし。

▲汁

『大根』 いてふ大根にし、蕗の薹を細く刻みて。

『午蒡』 さゝがきにし、よめ菜をこま切にして。

『蕨』 灰を出し、一寸程に切り、百合根をへがして添ふ。

『根芋』 筒切にして、胡麻汁にす。

『鯛』 鯛をおろし、よき程に切り、身の方へ横縦に細く庖丁目を入れ、これに花菜を添ふ。

『鮟鱇』 皮を角切にして、蕗の長切をあしらふ。

『針魚』 片身おろしにし、若蕗の葉を細かく切りてあしらふ。

『伊勢鰕』 皮をむき、小口切にし、青海苔をあぶりたるを、もみて放す。

『鰕』 つみ入にし、つぶ椎茸に、つまみ菜を放す、つみ入の仕方は、鰕の皮を去り、身をよく摺り、目のあられ羅斗にてこし、玉子の白みと鹽少し入れ、組板にのべ、庖丁のさきにてすくい取り、鹽水に入れ、汁へ煮こむなり。

『赤貝』 へぎて、割根芋を加へて。

『蛤』 むき身に、よめ菜のこま切をはなす。

『鯉』 筒切にし、粉山椒をはなし、濃汁にす、これは鯉の鱗を引かずに筒切にし、白みそ、赤みそ、を等分にして、鰹味汁に仕立て、鯉を入れ、よく煮て粉山椒をふりかくるなり。

『小鮒』 焼きたるに、干山椒をはなす。

『鴨』 うすく作り、芹をそろへて切り。

『小鳥』 細にたゝき、獨活の繊切を加へ、柚子をへぎて匂ひに。

右のほか、松露と嫁菜、つみ入れ豆腐に新若芽、あ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

られ豆腐につく〴〵し、あられ豆腐に青菜、こま〴〵
焼豆腐にさゝかき午蒡。

▲吸物

すまし仕立のもの。
『蕨』灰を出し、穂ばかり切りて、焼海苔をかけ、蓋にすり生薑を置く。
『ほうれん草』茹でたるに、獨活を小口切にし。
『鱚』ざつとゆがき、蓴菜を生のまゝに入る、口は胡椒。
『わいなめ』切身を湯がき、三つ葉を揃へ切りて加へ、口に柚の花を。
『白魚』湯をとほし、小かめを細かく切りて。
『小鮎』あぶりたるに根芋をあしらふ。
『烏賊』よせ烏賊につふ椎茸を入れ、花柚を口にす、仕方は、烏賊を細かく切り、暫時鹽水に浸し、別に葛を少しときて、玉子の白味ばかりの中にまぜ、烏賊を水を切りて之に交ぜ、よきほどに取りて皿に並べ、甑に入れて蒸す。

『同』短冊に切り、ざつと湯がき、淺草海苔をあぶりもみ、口は柚を用ゆ。
しほ仕立のもの。
『小鰕』煠で、これに焼豆腐と、もみ海苔を、う
『鯛』薄切にしたる湯がき、筍の穂の茹でたるに木の芽を添ふ。
『鹽鱈』鹽出して、わり葱に焼豆腐の角切。

▲膾に刺身

『和布』これに獨活の短冊切り、湯がきたる蚵のむきみを加へ、からし酢味噌にす。
『鯉』うすくつくり、よめ菜をゆで、二杯酢に。
『鯔』平作りにし、三葉の湯をとほしたるをあしらひ、からし酢にす。
『針魚』細作りにし、獨活を纎切にしたるを、生薑酢にして。
『鮎』三枚におろし、細くつくりて、からし酢味噌にす。
『鹽鮭』うすくつくり、ざつとあぶり、橙酢にて。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『赤貝』へぎて湯をとほし、岩茸を細く切りて、敷味噌にす。
『貝の柱』淺草海苔をもみかけて、大根おろし酢にす。
『牡蠣』ざつと湯がき、もやし茗荷を繊切にし、これを三杯酢にす。

▲和　物

『松露』薄味つけて、木耳を細かく切り、胡椒味噌に仕立つ。
『筍』茹で丶亂切にし、木の芽味噌にす。
『白魚』湯がきて、からし和にす。
『車鰕』小口切にし、蕗の筒切、これを各茹で、黒胡麻味噌に和へる。
『烏賊』角に切り、木耳を繊切にして、之を唐がらし味噌和にす。
『烏賊の足』二本づ丶切はなし、ざつと醤油にて味をつけ、胡麻の油にて揚げたるを和へる、これをかいゝゝびたん和と云ふ。
『赤貝』百合の根を加へて、山椒味噌和にす。
『蛤』茹で丶、荒布の繊に切りたるとを、白胡麻味噌に和る。
『鳥貝』わけぎを加へて、から酢味噌和に。



▲煮　物

『蕨』燒豆腐と煮合せる。
『百合根』生のまゝ逆まに鍋に伏せ、食鹽と味醂にて煮る、時間は二十分位、この丸煮。
『小芋』薄味をつけ、湯煮したる獨活を丸切にし葛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をかけ、生姜をおろす。

『筍』　味をつけ、蓴菜の堅き所を挾み取り、よき程に切り、温湯につけ、筍を器に入れ、薄葛をかけ、山葵を蓋にのせて出す。

『糸蒟蒻と白が人參』　薄味をつけ、淺草海苔をもみかける。

『菅牛蒡に青海苔』　牛蒡を丸のまゝ二寸許に切り、ざつと湯煮して、身を箆にて繰り、其のまゝ味醂醤油にて煮、身を出し、青海苔を粉にして被せる。

『獨活』　一寸程に切り、旨煮にして胡椒をふりかく。

『慈姑の海苔卷』　生のまゝ皮をむき、山葵卸にておろし、よく摺り、温飩粉少し、醤油少し加へ、すり合せ、淺草海苔を二枚敷き、其上へ箆にて一分ほどの厚さにのべ、三葉のこま〳〵をハラリと撒き、小口よりくる〳〵と卷き、胡麻の油にて揚げ、小口切にして、とり合せ物につかふ。

『比目魚』　皮も身も首も、一つに切りて煮、もやし生姜を添ふ。

『鰈』　味醂醤油にて煮上げ、其汁にて葛をとき、煮て、上より青海苔をふりかける。

『蛤のしぐれ煮』　むき身に生姜を刻みませて、生醤油にて煮上ぐ。

『蛸のさくら煮』　足を生のまゝ薄小口にし、鹽を用ひずして水にてあらひ、味醂を入れ、煮上がりたる時に醤油をさす。

『鰕の具足煮』　伊勢鰕を皮のまゝ小口切にし、味醂醤油にていりつけ、わり山椒をかける。

『鯉の甘露煮』　丸のまゝ燒きて、文火にて湯煮をし、水飴を加へ、煮汁のつまる毎に水を注し、十時間程も經て、薄醤油を入れるなり。

『寄せ鳥』　何にても、小鳥の骨とともによくたゝき、味醂醤油入れて、煮固りたるをよき程にちぎり、鷄卵をときたる中へ入れ、鉢などに入れ、甑にて蒸すなり、何につかひてもよし。

▲あげもの

『精進もの』　四種ばかり左に。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

△三葉の亂切　△小慈姑の芽付　△蕨を茹で、穗を長く切りたる　△淺草海苔の角切に、片面衣をつけ。

『てんぷら』　これも四種ばかり。

△さよりを片身おろしにして骨を去りたるもの　△烏賊を白魚もどきに切り、五切ほどづゝよせて　△鯒を片身卸しにし、骨を鋤取りて　△鰹を筒切にし貝の柱と一つにして。

▲炙　物

『蓮根』　湯煮し、味醂醤油にてつけ燒にし、胡椒をふりかく。

『慈姑』　醤油に酒を加へて附燒。

『百合根』　胡椒醤油にて、へがしたるものを附燒。

『鯛』　白燒にて木の芽醤油をかける。

『針魚』　白燒にして、酢醤油をかける。

『鰆』　てり燒にし、鹽燒の蕗の臺をあしらふ。

『比目魚』　醤油に酒しほ加へて付燒にし、胡椒をふりかく、これが比目魚の色つけ燒なり。

『鯛の蠟やき』　切身に薄鹽をあて、串にさし、よく燒き、玉子の解きたる饂飩粉をまぜ、遠火にて四五遍付燒にし、串を拔きて出す。

『飯蛸』　木の芽醤油にて煮り付ける。

『鮎』　鹽燒にし、酢午蒡をあしらふ。

『蛤に酢獨活』　太き獨活を一寸程に切り、ざッと湯煮して、唐がらし酢にてつける。

▲田　樂

『蕗の臺』　串にさし、蕃味噌にて。

『ちやうろぎ』　串にさし、木の芽味噌にて。

『鱧』　骨切にし、山椒味噌にて。

『伊勢鰕』　ざッと湯がきて皮を去り、二つ割にして串にさし、よく燒きて胡麻の油を一ぺんぬり、又よく燒き、魚田に仕立つ。

『牡蠣』　煎りて水氣をとり、串にさして蕗味噌魚田にす。

『烏賊』　短冊に切り、串にさして醤油をつけ、又燒きたるものを木の芽魚田にす、

『蛸』　煠でたるを小角切にし、串にさして胡麻の油

をぬり、よく焼きて魚田に仕立つ。

『蛤』湯がきて串にさし、よく焼きて、山椒味噌魚田にす。

▲浸し物

『三葉にはり〳〵』—はり〳〵は、干大根を薄く小口切にし、酒に浸け置きて用う。

『田芹に獨活』獨活は纎にし、酢醤油を用う。

『たんぽゝ』よめ菜、土筆、とり交ぜ、生醤油にて。

『路の若葉』よく茹で、細かく切り、白胡麻酢醤油にて。

『蕨』穂ばかりの灰出したるをザッと茹で、松露の茹でたると合せて。

▲献立の一例

この期に於けるものを。

『本膳汁』雁、午蒡、獨活、青菜又は焼麩、蕨、午蒡、若芽。

『同 鱠』針魚の細づくり、糸瓜、むき胡桃の青酢（青酢はほうれんそうを茹で、水を能くしぼりて、摺鉢にて摺りながら酢をまぜてよくのべ、すいのうにて漉すべし）或は鮎に蓼、生姜。

『同 壺』干蛤、ごまめ或は葛だまりにて、くらげ、まうさう筍もよし。

『刺身』海鼠、だゝみ、つくし、山椒の芽、或は鯛にみるくひを蓼酢にて用ゆるもよし。

『焼物』大蒲鉾に車鰕。

『平』口しほの鯛、松葉昆布、椎茸の大なるもの。

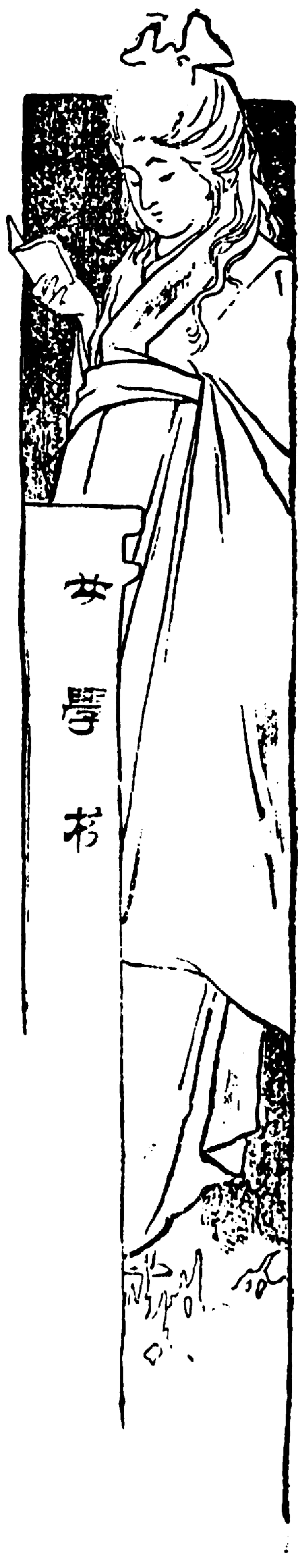
『茶碗盛』鮑の江島煮に山椒の芽。

『大猪口』このわたに獨活。

▲漬物

『櫻漬』さくらの半開の枝を切り、花ばかりつみて鹽一升に水一升の割合にせんじ、一夜さまして花とひたく〳〵に漬け、押をかけ置くなり。

『筍の鹽漬』皮をむきて澤庵大根の如く、一かはづつ並べて、中鹽にして輕き押石をかけて漬けるなり、番椒を少し入れ置くべし。



女子英學塾を訪ふ

一記者

皇城の西、半藏門の外、濠を隔てた英國公使館の裏手であるから、此のあたりはまだ〳〵塵寰に遠しなど、形容することは出來ぬのであるが、四時青々として色を變へざる公使館内の松は緑滴たらんばかりにして、吹く風の音も清々しく、人の往還も稀なるだけに、自から閑靜の趣を呈して居る、此處高燥なる一地區を劃して、質素なる建物が、四棟五棟、若木の間に立てられてある、之れが私立女子英學塾なので、日本女流中最も英文學に堪能なる津田梅子女史が後進の誘掖に勵精して居られる處である。記者は豫ての約束により過る月の第一火曜日の午後二時過に、此の塾を訪問した、公使館の煉化塀に沿ふて裏手に廻ると、飾り氣のない白木の門に女子英學塾と木標が掲げてある、其處を通つて玄關から刺を通ずると、此方へとて玄關傍の應接室に伴はれた、此室で少焉待つて居ると、やがて和服に袴を着けて綾羅紗の被布を重ねられた、年の頃四十前後と見へる品格のよい方が、閾を排して入つて來られた、之れが津田塾長なのである、記者は初對面の挨拶を終つて、さて來意を述べると、塾長は傍の違棚に置いてある同塾の規則一葉を執つて記者に示しながら、諄

諄として説明を與へられた。

△此の塾の創立

は明治三十四年の九月で、英語を主として女子に高等専門の學藝を授くる目的で、今では文部省認可の専門學校となつて居る、入學資格は高等女學校卒業の者及び之れと同等の學力ある者に限られて居る、津田塾長を始め櫻井彦一郎、高等師範の本田源次郎、學習院の熊本謙次郎の諸氏及びハーツホン、グリイン、ペリーなどの外人諸氏が専ら英語と英文學の敎授を擔任し、漢文、敎育、心理、國語、體操の各科とも夫れ〲適當の敎員を聘してあつて、大山侯爵夫人と新渡戸農學博士とが顧問になつて居られる、それで此の塾の卒業生は主に高等女學校の英語敎師となるので、現に是れまで二回の卒業生を出したが、其の内でお茶の水の女學校の敎員になつて居るのが一人、第一高等女學校の敎員になつて居るのが二人、第三高等女學校の敎員になつてるのが一人あつて、其の外に私立學校の敎員となつて居るのもあるそうである、目下の生徒数は本科と師範科を合せて百二十名で、敎員一人に生徒二十名を受持つといふ程度を以て敎授して居る。而して、

△津田塾長の敎育方針

とも見るべき意見は斯うである、『妾どもの塾では決して生徒の多いのを望みませぬ、生徒の多いのは眞に外観は立派である、一つの級に五六十名の生徒を收容して敎授して居られるのは、見た處は盛んなものであります、併し、一人の敎員で此の多數の生徒を敎授して、正確に其の効を見やうとするのは實際無理な話しなので、米國の學校などでは凡そ一人の敎員で十五人の生徒を受持つことになつて居ます、それは何故かといふに、正確に敎育の効果を收めやうとするには、生徒の個人々々について其の長所と短所とを見分けなければならぬから、多くの生徒を受持つては到底困難の話しなので、澤山の生徒に敎授する敎員は其の生徒の名前すら碌に記臆することが出來なくなります、此のやうなことでは、生徒の

特性を一々に見分けることなどは望み難い、譬へて申しますれば、醫者が病を療治するにも、一人一人について其の病の特徴を見分けて、之れに適應した藥餌を與へねばならぬのと同じく、生徒を敎へますにも矢張り、其の生徒一人一人について、其の特性を見分けて之れを適當に敎へ導くといふのが大切の事であります、それ故妾は在學生の多きを望みません、隨つて每期の卒業生も少ないのでありますが、成るべく完全な成果を見たい考へなので、嚴格に此の方針を執つて居る」といはれた。此の塾には本科、師範科の外に、

△豫備科と撰科

とが置いてあつて、豫備科は本科及師範科の入學資格中英語の學力の不十分なる者の爲めに設け、撰科は本科或は師範科の科目中一科若くは數科を修むる爲めに設けたのである。尤も其の豫備科に就ては、今後大いに入學者の便宜を謀ること丶し、高等小學卒業程度にて、英語を修めんとする者の入學を許すことにしたい考へであるとは、塾長の話された處である。で、此の塾には構內に、

△家庭的寄宿舍

の設けがあつて、頗ぶる良好の成績を擧げて居る、元來此の塾は校舍の棟續きに、津田塾長の家宅が建てられて、棟こそ違へ、殆んど續いて居る、而して其の隣地には敎員ハーツホン氏の住宅が建てられてあるから、寄宿舍生は取締たる首藤やえ子、並に先頃米國から歸朝して今は寄宿舍監督たる河合みち子の二女史によつて、嚴格に指導せらる丶上に、津田塾長とハーツホン氏によりて日夕凡ての監督をされて居るので、塾長の如きは朝餐と午餐とを日々其の生徒等と共にして居られるといふ事である、寄宿生は室內の洒掃を自らして居るが、又其の日々の食事に就ては生徒全體を幾組かに區別し、交代の上、前週に於て次週の献立を定め之を實行するので、土曜日には特に生徒の手になりし料理をものして、敎員などを饗應し、其夜は歌留多會又は談話會などを催

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

催ふして、教員も生徒も愉快に心措きなく遊ぶとになつて居る、即ち此の寄宿舍は充分監督を嚴重にして、怠りのないやうに學科の勉强を督勵すると同時に、一方には面白く愉快なる興味を與へることに勉めて居る、尤も寄宿の生徒數も多くはない、今ではたつた三十名を限られて居る、勿論それは悉く本科若くは師範科生であつて、豫備科生としては餘程の事情のあるものでなくては許されぬとになつて居る。以上、女子英學塾に就て其の大要を悉したと思ひますから、之れから、

△塾長　津田梅子女史

を紹介しませう、女史は我國農業界先覺者學農社長津田仙氏の二女で、慶應元年東京牛込區南町に生れたのであるが、教養宜しきを得た爲めに、幼時より體質、智力共に頗ぶる圓滿な發育を遂げて、女史が六歳の頃、母から百人一首を授けられたが、其の百人一首にある人物の繪の臺座が悉く異なつて居るので、其の人物の座して居る臺のみを見れば、直ぐに其の詠歌を暗誦したといふことである、女史は其後年僅かに六歳にして、今の大山侯爵夫人等と共に米國に留學することになつたのであるが、出發の數月前に、父君が女史に向つて、お前は米國に行けば牛ばかり食つて居ねばならぬが善いかと云はれたが怜悧なる女史は、それでは牛を食べませうと、それから日々牛肉のみを食したとの事であるが、又以て、女史が萬事に對する用意の如何を推測ることが出來ませう、其後女史は米國に留學すること十一年、十七歳の頃一旦歸朝して、三年の後再び渡米し、費府のグリンモール大學で生物學を、紐育のオセゴー大學で教育學を修め、歸朝の後、華族女學校の教授になつて居られたが、折柄米國に萬國婦人會が開かれたので、女史は政府からの依囑で此の會に臨み、席上演說をして歐米人の喝采を博し、之れが動機になつて英人の招待を受けて同國に赴き、備さに女子教育の有樣を觀察して歸朝し、華族女學校教授の外に女子高等師範學校の教授をも兼ねて居られたが、其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の後此の女子英學塾を開かれたので、此の塾は女史が是れまでの經驗によつて、其の理想的の教育を施すことを期して居られるのである、女史は尙ほ其の後繼者として、女流英文學者を得んが爲めに、有望なる女子を撰擇して米國に留學せしめられて居る相である、女史は性質頗ぶる謙遜な人であつて、世に知らるゝことを好まず、寫眞を乞ふものがあつても之れを許されないのみならず、卒業生の寫眞と申しても、謂はゞ未だ修業中のものでして、人に知られる程のものではありませぬ、何か世の爲め人の爲めに、一廉の仕事でも出來ました上ならば兎に角、今日ではお需に應ずるとは好みませぬ、とは常に人に語つて居られる處なのである、記者が訪問の際にも相變らず右の如く謙遜せられたので、強いて請ひ受けんも禮を失する次第なれば、同校舍の寫眞を請ふて之れを口繪に挿入することにしました、即ち口繪に在る同塾の寫眞は、玄關前を寫したもので、亭々たる若木のむら立てる間、修飾なき塾舍の見ゆる處など、一見何となくゆかしき感を惹き起すではありませんか、之れも塾長其人の氣品の如何を偲ぶに好適なる材料かと思はれるのであります。

フヒリプ孃の監督せる學生寄宿舍

一ノ瀨初子

近來女子教育が盛んになりましたにつれ、いろいろの女學校が設立され、またはる〴〵上京する女學生のために、いづれの學校でも大抵寄宿舍のないところはない樣でありますが、また近來では女子の寄宿舍生活は女子をして、

▲家庭的觀念

より遠ざからしむるものである、婦人將來のために思はしくないとか何とかいろ〳〵な非難の聲も起りました、また其結果としては、學校とはなれて、家庭的に遠來の婦女を寄宿せしめ、且つ之が監督に任

する、即ち

▲女學生監督寄宿舍

なるものが起らざるを得ないのです、……如何にも方々に起りましたところの何々女塾とか、何々寄宿舍とか、立派な名は澤山出來ましたが、これも一得一失は免れないものと見えまして、隨分非難を受く可き、さま〳〵なる事のないではありません、實際中には怪しいものもないとは限らないのであります、この二つの——學校寄宿舍及監督寄宿舍——の弊害より遠ざかり、純潔にして且つ趣味ある確實なる

▲模範的監督寄宿舍

は即ち日本女子大學校及び紅蘭女學校に教鞭をとられつゝある、ミス、フヒリップの主監にかゝるそれだろふと思ひます、だからして私は親しく先生より御話を承りました、素より皆樣に御紹介いたししたい目的でありますが、家庭を知るには、先づ主人公を見なければならない樣に、この寄宿舍を知るには先づ先生を知らねばなりません、先生は英國の御方で、快活な、深切な、熱心な、そしていやみのない、世に謂ふ

▲さつぱりした御質

で、生徒を遇する事姉妹の如く友の如く、これに對せらるゝ事、慈母の如く、其間に一點の隔てをおかぬ打とけた即ち家庭的寄宿舍をつくるには好個の御性質を、そなへられた方でありまして、また極めて質素で、且また日本語にも熟達せられ、なか〳〵御上手にすら〳〵御話をなさいます、さて先生の監督せられて居る寄宿舍は、雜司ケ谷町百八番地閑靜な自然と

▲新鮮な空氣

に富んだ、衛生にも勉强にも、極めて適當した處に、その位地をしめて居る、西洋造りの……されど室内は疊……新らしい建物でありまして、テニス、グラウンドもあり、井戸もあり、洗濯物も干すべく、花園もつくる可く、あたりに充分の空地を殘して、そして、周圍はすべて竹垣をめぐらしてあります、建

物は新らしいし、疊はきれいだし、其上掃除はゆきとゞいているので、眞に氣持がよく感ぜられます。が、たてられてから日もまだ淺い事ですから、今では生徒の數も十幾人と云ふのであります、然し二十餘人は收容すべき設備がついて居るさうです、それで、

▲先生の御目的

は何れにあるかと云ふに、それは素より家庭的に、家族的に……と云ふに外ならぬのでありまして、如何にして家庭を清く保つ可きか、如何にして家庭を和氣靄々たらしむ可きか、これ等の事を、學問の上ばかりでなく、經驗的に即ち實際に敎へよう

▲生きた學問

をさせよう、役に立つ婦人をつくろうと云ふ事は、先生の御考の大部分を占めてる樣でありまして、先生は斯る理想をもつて、日々夜々、御導きなさるのであります、だからして、それに關して必要と認めらるゝものは、すべて實習させられる樣になつて居ます、料理の如きも、西洋料理たると、日本料理たるとを問はず、折々實習があるので、殊に日本の料理、……と云つて殊更につくるのではありませんが、其日其日の夕食の準備だけ、即ち晩食の料理は生徒の方が二人づゝ當番になつてやる樣になつて居ます、料理の事が出ましたから、ついでに

▲食事食堂

について御話しいたしますれば、食堂は十四疊一間でありまして、テーブルや、腰掛がありますから、西洋流の樣に思はれますが、生徒の食事は矢張日本食であります、(一週一度は洋食ださうです)それならばなぜにテーブルや腰かけを用ゆるかといへば、どうも

▲疊の上に座して食事

をすると云ふ事は宜しくなかろうとの先生の御考より出でたのでありまして、無論先生も同じ食堂內でともに打解けて同しテーブルで召しあがるのださうです、——尤も先生の朝晝の二食は極めて質素な洋

食夕飯は日本食を召しあがるとのことでした、——へだてなき、たのしき一家族としての食堂の集ひは聞くさへ和氣洋々の思が胸にみなぎる樣感ぜられます、それから北食堂の次の間に襖を隔て十疊あまりの室がつゞいて二つありますが、これはすべての

▲集會

に用ひらるゝので、時としては、また有志の人——この寄宿舍のものばかりでなく——のためにバイブルの講義があるさうです。素より宗教は自由でありますが、先生の仰せらるゝに「こんな室の掃除も生徒が多くなつたら順番でする樣にしようと思ひますが、今の所では女中にさして居ます、なぜなれば只今、何分にも人が少いので、若しこゝ迄掃除をする樣になると……素より家を淨くする事は必要で、その習慣を養ふ事は、極いゝ事ですけれども、さうすると、

▲あまり、いそがしく

はなるまいかと思ひますので、……勉强も大切ですから、これがために勉强の妨害となる樣では折角の事が無になる樣な事ですから……實に注意のゆきとゞいた御考だと思ひます。それなら生徒は、掃除などはしないで、御姬樣のやうに、すまして居るかと云ふに、決して然ではないのであります、

▲自分の室

は素より廊下などは、皆、順番々々でやつてるのでありまして、これはまた適當な運動にもなりませう、運動といへば先生は非常に運動、即ち體育を重んぜらるゝ方であろうとは誰でも一度この寄宿舍を訪ふて御話を承れば直に推察する事が出來ます、たゞ推察さるゝばかりでなく、先生御自身も亦明に御話なさいました、テニス、グラウンドの設けもあり、また

▲戸外の運動

も奬勵して居らるゝのでありまして、毎日一度は午後五時前ならば、いつでも、ひまの時に二人づゝ一緒にゆく事としてゆるされてあります、この監督寄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

宿舍の制度、方針が、如何に實際に

▲體育に適し

衞生にかなつて居るかは、この寄宿舍に來た爲に、健康の度を增した人も現にあるといふ一事に照しても推察する事が出來るのでありまして、この一點だけを見ても、確かに他の模範となり、他にほこる事が出來るのである、元來

▲學校寄宿舍の欠點

の一つとして、識者の注意を引いてるのは、運動の不足であります。兎角學校の寄宿舍といふものは、あまりに、監獄的で、……またそれでなければ、取締上いろ／＼な不都合を來しまして事情やむとを得ざる事もありますが、そんな事は別として、兎に角運動の不足と云ふ事は先づ一般に――普通の寄宿舍で――認められるのであります、これがために

▲身體が衰弱し

いろ／＼な病氣となり、また病人と名のつくものにならずとも、この候補者位にはなつたり、或は何となく心地が勝れなかつたりして、わざ／＼寄宿舍を出て他より通學すると云ふ樣な人も少くないのであります。然るに先生の監督寄宿舍は全くこの弊を脫して、否な脫するのみか、却つて

▲反對の好結果

を表はしつゝあると云ふのは、まことに鑑みる可き事であります。其他、散步以外の外出は、今は午後五時、夏ならば五時半が門限でありまして、日曜以外の日といへども、いつでも暇にまかして出る事が出來ます、(但し保證人或は親類の保證は必要であります、これは最初一度でよろしいさうです)朝は、

▲五時半の起床

で、夜は六時十分より八時半までが自習時間でありますが、それがすむと一同は先生の御室に集つて九時まで、一緒に、いろ／＼なゲームをしてたのしむのでありまして、まことに他に類少き愉快なホームであります、私は敢てホームと云ひます、且またゲ

ームの時も

▲成る可く英語を用ひる様にしてありますから、たのしき間にも知らず〳〵語學の練習が出來るので、これは教場で、四角ばつて會話の稽古をするよりも面白くて、はるかに効があるだろふと思ひます。語學の練習はこの時にとゞまらず、三度の食事、食事の間に於ても同じ事でありまして、また時を定めて不審を御だづね致す事も出來る様な御話で、例へば、何時より何時までが、不審をたづねる時間と定めてありまして、其時間内に、生徒の方では幾人づゝか先生の御室に伺つて、不審を解いていたゞく事が出來るので、時には會話も教へて下さるし、まことに結構な事だと思ひます、外國の風俗や語學の力を養はんとするもノ、ためには亦この上もないことです、否、そんなノばかりでなくあらゆる女學生のためには、最も確かな好個の監督寄宿舎であります、それから

▲入浴は一週三度と定めてありまして、すべての費用は一ケ月七圓、但し當分寒い間は、炭などの費を合せて、七圓五十錢ださうです、室は、六疊と八疊とありまして六疊には二人、八疊には三人、それより以上は同室におかない御方針で、一室にあまり多人數居る事はよくあるまいと思ふからとの御話でした。先生は外國の御方でありながら、日本の女子の爲めに斯くも周到なる注意を以て、かゝる立派な模範的監督寄宿舎の主監の任に當つて居られるのは、殊に感謝す可き事だろうと思ひます。

○　○　○　○　○　○　○　○

今日は『茶』に來いと、私共通學生は、昨日先生の御案内を受けて居ますので、三時の鐘が勇ましく………いつもよりも、よく勇ましく聞へた、先生の西洋史講義がすむ、禮がすむ、つゝみをとる、肩掛をとる、教室を出る、例の所に待合はせる、行く人が多いだろうと思つて居たのに、

▲只三人

岩堂夫人と西郷夫人と私とでありました、他にはこの模範的寄宿舍に寄宿して居らつしやる小野さん一人が道づれ、都合四人が一緒に行かうとして居る時小野さんが消え殘つてる雪の上で靴を拭く爲か、足をうしろにはね上るので、私が犬の樣だわねえと云つたら、隨分口が惡いと云はれ、ハイと大人しくなつて居ますと、門を出る時「一さあいゝ、

▲惡口の君

から先へ」と西郷夫人から、立派な、御名前を頂戴いたしました、先づ有がたく承つて豐明寮の裏にあたる雪どけの道を通り拔け、雜司ケ谷——先生の寄宿舍は實に近いのです——そして角を一つまがつて、ひろい〳〵いゝ、

▲梅林を右

に見つゝ、新らしい門につきました、戸をあける、玄關にゆく、案外！見覺えある靴がぬいである、さては肩掛、書物のつゝみ、……こりや千田さん方ぢや、あ、お先にいらしてるわと噂しながら長い細い廊下をぬけて、導かるゝ十疊の一間、先生は御自身御立出で御迎へ下さつてそして席が定まる、オ、果して三四人の御先きがけがありまして、話は進み笑聲あふれて、さも〳〵樂しさうでした、且また先生の御友達が居らしてたので、一層にぎはしかつたのです、さて其室は、ガラス戸を隔てゝテニスグラウンドも、そして向の畑も、彼方の林も思ふまゝ見る事が出來るので、自ら氣も春めく樣に思はれました、家の建て方間取り方などは、皆如何にも空氣の流通がよく、光線の具合がよくて所謂文明的に出來て居ますので、こんな所に住んで居たならば、病氣をしようとしても出來まいと思ふ位でした、御茶をいたゞき、御菓子をいたゞいて、いろ〳〵の話も面白く、殊に先生のお友達は、御自分田舍に居らした時でゝもありませう、その土地の人が西洋人は「如何して生きてるだろう」と云つたなど、ほんとにお腹のよれる程御笑はせなさつたのです、さて私どもは、happy home のゲーム に夢中になつて居ます

と、廊下の方に足音がして、「先生只今歸りました」と靜かなる聲、内より「御歸りなさい」と仰せらるる先生の御聲、其の聲と聲とが、またなく親しさを表はし、溫情を含んで

▲うるはしい家族

のさまを想像させました。丁度 happy home が Shelling game に遷りました時でした、先刻今日は料理の當番だからと立つて行つた友の一人は手を拭きつゝ歸つて來まして、またも一人加はる、おもしろい、おもしろいけれども時がゆるさぬので、厚き待遇の御禮を述べつゝ、先生其他の友に送られて玄關に出ました、門を出でゝ左に行くものは只一人、皆右の方向なので、

▲さようなら、、、、、

と一聲の挨拶、私は何だか考へ〳〵て、つひ護國寺の前まで來ましたが、振り返れば雜司ケ谷の彼方、高き空にたのし氣の雲が一つ、その寄宿舍に惠の露を持ち來すかの樣に見えました。

（をはり）

寄贈人名

河原操子女史贈品　金參圓　宮城內　吳服掛有志婦人

金卄錢　下野國今市町　井上倘子

金卅錢　秋田縣仙北郡後福岡村　伊藏ふさ子

金卅錢　小石川區久堅町六十九番地　中島さく子

金拾錢　三河國碧海郡鷲塚村　榊原てる子◎同奈良縣山邊郡二階堂村　水川富榮子◎同麹町區三丁目十番地　佐伯すゑ子

小計　金四圓拾錢也

一金五圓貳拾五錢　前々號登載分

一金拾五圓七拾錢　前號　同上

合計　金貳拾五圓五錢也

右之通に付藥箱購入の上直に送達の手續を了すべく候尚ほ詳細なる決算は次號紙上に於て報道仕るべく候也

明治三十八年三月十六日

女鑑編輯局

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

油畫。水彩畫。木炭畫。圖案。研究時間各自隨意

所費每月壹圓五拾錢。束脩貳圓

同舟舍繪畫研究所

斯道の眞摯なる研究者の爲に。

美術學校入學志望者の爲に。

業務の餘暇を畫に遊ぶ者の爲に。

赤坂區新坂町

六十五番地（幽靈坂下）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

輕便─瓦斯の煮燒─德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

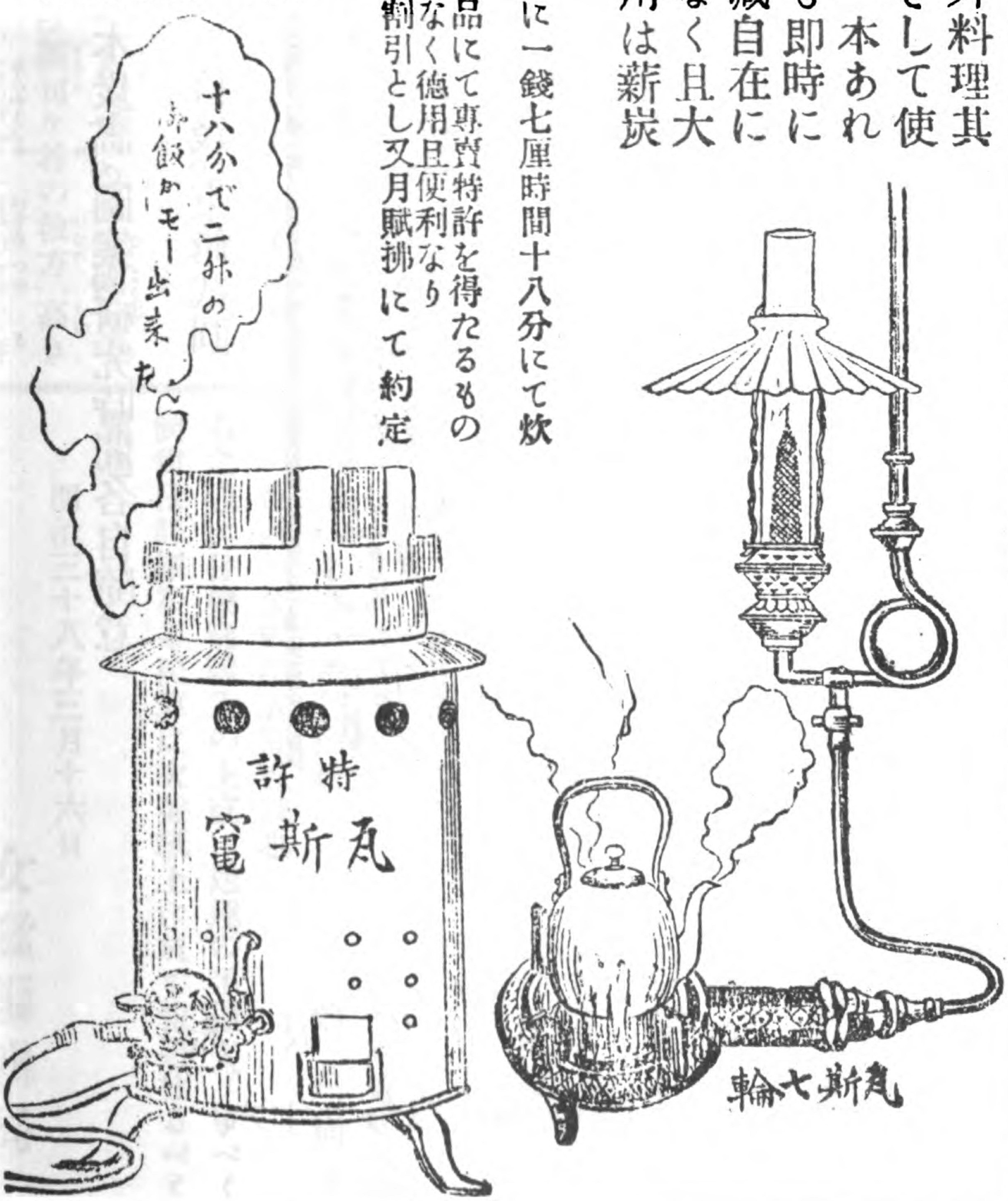
○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尙各種瓦斯器具は當社構內陳列所又は銀座所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候

神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

電話本局一三番、五四八番、二三〇三番



新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の淸酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり、(附錄)腐敗酒直し法、醬油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内：：

無代進呈

す酒造家右今回披露の爲拾萬部限り及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あるとを確證す(注意)本館の隆盛を羡み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して爲傳者に欺かるゝと勿れ：：(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變**化し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレ！に流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立廢ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯る深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんとを乞ふ

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も



わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずるも憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻逘藥す郵券代用必ず二増割の事(電話下谷五四六番)

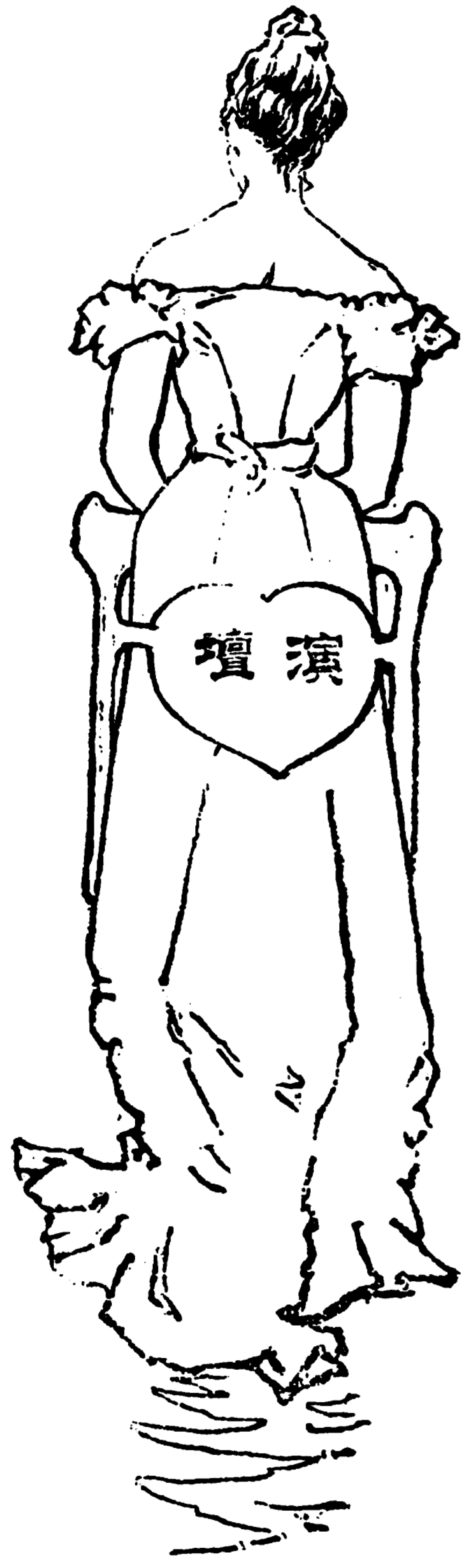
以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



御諸學校御用
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
SA
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、三三〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 一、〇三〇
二號同 一、二三〇
三號同 一、三五〇
四號同 一、五一〇
御用 體操器械
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
484
テニス用ラケット一組
改良櫻一重枠ラケット一組
安藤商店
東京神田裏神保町五
電話本局四百八十四

女子と善美教育



博士リギヨル演説
前田越嶺筆記

外人で而も天保時代の古物と云はるゝやうな老人の私は、今女子の言語、擧動、禮儀、作法等に就ては私の方が、東洋禮讓國の皆樣より敎へて頂かなければなりません、私の今日申上げたいと思ふ所は、發して外に顯はれるときには、矢張り禮讓として見はれますけれども、實は其の禮讓の內容、若くは根源とも云ふ可きものであります、私は原語から無理な熟字を案出しまして、假りに善美敎育と云ふ文字を用ゐるのであります。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今日まで、日本の敎育は美術敎育と言つて然るべきかと思ひます、女子の家庭に於ける生活を見ましても、宛然として美術の展覽に接するが如き感が起ります、勿論風俗などは、時勢と共に推移るものではありますが、然し假令古風古俗でも、善美なる點は飽迄も保存して往きたいものであります、老人と云ふものは、常に保存主義の者で、動もすると古代の感嘆者となつて、新世紀の事はなんでも卑下する癖がありますけれども、私は外人でもありまするし、又それほど頑固でもない積であります、私は眞理以外には、決して頑固を通しません、眞理は千秋萬古依然同一、西洋の眞理、日本の眞理なきことは、宛も西洋の太陽、日本の太陽と區別のなきが如く、昔の眞理、今の眞理なきことも、亦宛も昔の太陽、今の太陽と區別されぬが如くでありますから、眞理に對しては、頑固の譏を受けるのを甘んずる代り、一身に取りましては、頑固なことは決していはぬ積りであります。

只今眞理に就てお話申上げましたが、眞、善、美と云ふ三字は離されぬ文字で、善美も亦眞理と同じやうに考へなければなりません、單だ解り易いやうに、故意と眞理を引いて申上げたのであります、乃で

私の今申上げるのは善美敎育でありまするが、其の善美敎育の一部分は、皆樣のお母さんが之を家庭に敎へ、皆樣の敎師が之を學校に敎へて居りまして、私よりも綿密に考が屆いて居りますから、此點に就きては私が申上げる必要は御座りません、就中皆樣のお母さん又は敎師方は日夕皆樣と共に住んで居つて、起居眠食を同うしておいでなさることでありますから、綿密な事柄までに眼がとゞいて居ります、却つて私のやうな、武骨な者は、御婦人方の社會に顏を出すのは、年に一度か二度位、ホンの指を屈して數ふるにも足りません程でありますから、迚も此點に就てお話をする資格はないのであります。

乍併善美敎育と云ふのは、單に外部に發して顯はれるものに止まるものではありません。恐らくば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

皆様のお母さん又は教師方の餘り眼を着けない所に、寧ろ重要な部分があるかも知れません、乃で私は此の部分をお話いたしたいと思ふのであります。

偖乃で凡て人間には、精神と形體と云ふ二方面があります、而して形體を動かすもの、形體を活かすものは、言ふ迄もなく精神であります、禮儀作法に於きましても同じ事で、言語、擧動の形體と云ふものと、言語擧動の精神と云ふ二方面があります、前者は國により、時によりて違ひますけれども、後者は何れの國、何れの時代にも通じて同一であります。

例へば人に對して尊敬親切の顯はし方は種々樣々ありますが、併し尊敬親切と云ふものは其の內容、其の根本に於て何れの國に於ても變りはありません、私のやうな外人で、日本語の極めて拙な者でも、內に親切が溢れて居りますれば、皆様が矢張り之を看拔て聽て下さるやうな譯であります。

私は皆様が、家庭で學び、學校で學びました事を、決して放棄せよとは申しません、寧ろ一生之を保存して往かれんことを希望いたしますが、然し人間と云ふものは、子供の外は器械的に行ふと云ふのは、自然の事ではありません、人間は器械ではありません、人間の行ふ事柄ならば、何事にも精神と云ふものを入れなければなりません、精神は畢竟思想であります、精神の働きと云ふのは思想であります、其の思想の高尙なるものが、即ち理想であります、人は凡て皆思想で動き、思想で活きて居ります、下等の人間は卑しい思想で活き、上流の人間就中優美な人間は、高尙な思想、所謂理想で活きて居るのであります。

それで高尙優美なる皆様のやうな方々は、如何なる理想を以て活きて往かなければなりませんかと云ふに、二の語で能く之を言盡して居ります、善と美の理想即ち是であります、善美教育の必要は乃ち是より起るのであります、善と美と云ふとは、東洋禮讓國の日本ほど立派に發揮せられて居る國はありません、

就中先刻も申上げる通り、日本の女子教育に於て、最も著しく顯はれて居ります、日本の婦人に對する教育は、家庭に於ても、學校に於ても、如何なる處に於きましても、眞個に美術的事業と云つても、強ち過褒溢美の言ではありますまい、試に旅舍の下女を見ましても、其の起居動作が實に美であります。

美と善とは須臾も離されません、禮儀と云ふのは凡ての德の外形であります、女禮式と云ふのも、女德の發して外に顯はれたるものと見做されなければ、ホンの虛禮になつて了ひます、魂がなければ何事も死んで了ひます。德と禮の兩々相並立して行くことも宛も精神と形體と相合して行くが如くしなければなりません、禮の形ばかりでも不可なければ、德ばかりでも亦不可ません、禮の形ばかりだと、虛禮のみに止まらず、一種の僞善になつて了ひます、さうかと云ふて德ばかりならば、餘り嚴格で、趣味に乏しく、光彩が缺けて居るやうな觀があります、加之、德ばかりだと餘り人に知れません、それは人は外貌外容をのみ見て判斷するものであるからであります。

乃で此の兩方面を、立派に發達並行せしむるには、如何したならば宜しう御座りませうかと云ふに、先づ第一眼前に標本を立てなければなりません、就中精神に一の理想を描いて始終之を鏡の如くに眺めて居らなければなりません、尚一層適切に申上げると、後日自分の志す所の境遇、身分、職掌に於て、完全なる婦人の理想を描き、之を明鏡の如くに、朝な夕な眺めて居らなければならぬのであります、何ぜなれば理想なく、現實なく、志なく、事業なしで、見込みと云ふものがなければ、教育もないのであります、甚だ失禮な言葉でありますが、今日世間の教育の如く、單だ學びさへすれば可いと云ふやうな主義で、何んでも漢でも腦裡に押込まれるだけ押込み、知識で學ばれるだけ學ばせると云ふやうなことでは、後日に至り當の實行に資にならぬのみならず、寧ろ害になります、毒の吐きどころがなくなつて了ふのでありま

す、故に教育には確立一定の理想を立てると云ふ事は、空理でもなく、實行に取つて極めて必要な事であります。

言動の上にも、精神の部分と、形體の部分が必要であります、精神の部分は理想であります、即ち善と美の觀念、善美の思想と云つても同じことで、畢竟此の二者を合せて、之を言動の上に顯はすやうにしなければなりません、勿論此の場合に於て、單だ理想ばかりを高くして、實行が迚も之に隨伴して行くことが出來なければ、高尚な理想は却て人を不幸に導くやうなこともありますから、餘程注意しなければなりませんが、兎に角後日實際の言動に顯はされるやうな程度に於て、理想を描くのは、洵に結構な事であります、『私は私の言動の上に私の理想して居る斯々の婦人を寫し出しませう』と云ふ位の考がなければ、決して立派な婦人になる氣遣はありません、而して其の日々學ぶ所の事柄を皆此の目的に歸向せしめなければ、學ぶ所は大抵皆無用に歸つて了ひます。

善美教育に就き、原理をのみ掲げて學理的に之を論じますれば、一種の倫理學になつて了ひます、私は今は實行的方面より、成る可く教訓になるやうに申上げたいと思ふのであります、善と美は、見るに奇麗ですが、行ふには中々六箇敷う御座ります、丁度琴を彈じ初めるやうな鹽梅で、調子が皆んなくるつて居りますから、之を彈ずる者は、能く琴に馴れて居らなければなりません、樂器の調子の合はぬものほど、聽きにくいものはありません、人の言行も同じ理屈であります、人は樂器であります、之に善美の言動を發せしめんが爲には、能く其の記憶、感情、理性等の調子を合はせなければなりません。

記憶の裡には種々樣々の紀念が這入て居ります、感情の中には、喜怒、哀樂の情があります、理性のみ良心により、義務の法則を掲げて出るのでありますが、偖此等の調子を合せると云ふのが甚だ困難であり

ます、彈琴に熟達して居る人は、其の調子を容易く合せて、洵に耳に嬉しき合調和聲を發せしむることが出來ますが、琴の心得なき者は、何れの調子から合せ初めてよいか分りません、それと同じく善美敎育を受けて吾が心中の制御法を心得て居る人は、感情を抑へ、理性を揚げ、情慾を制し、義務を重んじ、記憶の裡の種々樣々なる紀念をも整理して、秩序井然、一糸紊れずと云ふやうに、洵に立派な言動の音樂を聽かしむることが出來ますけれども、初めより此種の敎育を受けず、家庭にも不規律に育ち、學校にも不規則に敎へられ、今迄我儘勝手に生活して來た人は、此の場合に於て、迚も心中能力の調子を合せると云ふことは出來ません、此の如き者は、其の心中紊れ、其の素行修らず、感情にのみ從つて或は喜び、或は怒り、今日悲むかと思へば、明日は笑ひ、變幻定まりなき浮萍的人間になつて了ひます、左なきだに、女子は多感の動物と稱せられて、感情に流れ易き者でありまするのに、此の彈琴よりも必要なる己が心中の合調を敎ゆる善美敎育を受けませんならば、尙更感情のみに支配さるるやうになり、人之を奈何ともする能はざるのみならず、己れ自らも如何して可いか分らなくなつて了ひます、此の如き女子は、亂調子の女子で、全然善美の點に缺けて居るものであります。

是に於て乎、善美敎育の必要が愈々益々明かになつて參ります、音樂に於ても、德行に於ても、大切なものは、音律と和調と云ふものであります、樂人が音律を心得て居ればこそ、美音を發せしむることが出來るなれ、何にも心得のなき者は、如何に精巧なる樂器に接しても、之を奈何ともすることが出來ません、人間それ自身も同じ譯であります、修身と云ひ、倫理と云ひ、畢竟私の謂ふ善美敎育を幼少より受け來つて、己の素行を修むる法則を心得て居る者のみ、美行善德を顯はすこと出來るものであります。

由是觀之、善美敎育と云ふのは、琴のお稽古や、其他の音樂の稽古よりも大切かと思ひます、己の心

調子を合せることが出來ずしては、琴の調子を妙にしらべることが出來ても、餘り善美なる女子とは申されません、琴は上手だが、素行が修まつて居らぬと云ふやうでは、女子に取りて餘り名譽なことではありますまい。

然らば善美教育は畢竟如何なるものであるかと云ふのが、自然念頭に浮び出る問題でありますが、今日は時間がありませんから、次の水曜日には、前に申した通り、琴を以て善美教育を解釋し、琴に十三絃あるが如く、人の感情にも十三絃の代に十一絃あれば、之が合調法を一々お話いたし、皆樣の言行の上に美なる音樂を發せしめたいと云ふ精神でありますから、次會には、其御積で御聽き下さるやうに願ふて置きます。

音樂と家庭

歡喜湧くが如き好良の家庭には必ず人心を融和すべき音樂の必要を認む故に歐米人の中流以上の家庭には樂器を備へざる者殆ど尠し然れども日本人の生活程度は音樂の必要を認めつゝも樂器の高價なるがため之を購ふ事能はざる者甚だ多し、されば其必要に應じて適當の方法を設けんは一は各家長の貯蓄に依て購求費を生み出すと一は樂器商が工夫して低廉なる樂器を造營するとにありとす今其の家庭的樂器なあぐれば、三絃琴等の日本音樂器と共にハンドオルガン、フリユート、ハーモニカ等なり此等は一圓以上五圓以下にて相當の物を買入るゝ事を得べきなり又進んでバイオリンを求めんとするも其價六圓にして兎に角一挺を購ひ得可くオルガンを求めんとするも十七八圓にして小學唱歌集を彈奏すべき鍵盤を有するものを得可し又柔和純良なる樂器の一つとして琴の必要は決して西洋音樂に後るゝものならず今其價を聞くに中間物（長五尺以內）六圓より八圓位迄中間物（長さ五尺より六尺迄）八圓より十圓迄本間物（長さ六尺に限る）十圓より十二圓以上限りなし但し又角ものとならば二十圓以上繻角物金口前操上物等にならば五十圓以上たるは勿論の事なりといふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



女性と發明

麹堂生

女德の表現、貞烈の發揮については、古來、之を否定するものなきのみならず、人として仰いで賞賛の辭をなさゞるものなかりしも、單り、學術の事としいへば、將た技藝の事としいへば、寧ろ女性をして強いて自から晦まして、他人の前には爲すなきを裝はしめんとせし風ありしは、畢竟、女性は一家内に蟄して外事を見ず、裁縫、炊爨、洒掃などの事にのみ、其の心身を專らにすれば、それにて事の足るものゝやうに、人も思ひ、自らも信じたるによるならんか、去はいへ、貞烈の發揮については、纖弱の手に白刄を揮ひ六尺の髯男をして血潮を流さしめし例しもあり、又た、女德表現の例としては、外邦に使する新郎を悲みて『君がゆく海邊のやどり霧立たばあがたちなげく息と知りませ』と歌へる熱烈もありき、其の外『別れなばうら悲しけれあが衣したにをきませたゞに逢ふまでに』と歌へる大膽も見られたりき、古へ、女性能く爲すなしとのみ、卑められし時に在りてすら、よく機會に逢着すれば、其の勇氣を發揮すること彼の如く、其の熱烈な表彰すること彼の如く、其の大膽に云爲すること彼の如し、故に女性能く爲すなしとせしは、社會の風潮と男子の威壓とが相俟ちて、彼をして彼の如くあらしめたるに外ならず、去れば、社會の事情にして彼等に要求する所だにあらば、彼等が其の心身の全力を注ぎて貢獻せんと試みんは難きにあらず、そが證憑として、文學界に、科學界に、社會的事業に、天晴れ名譽あ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る功績を致せし例し最と多し、近く東西の歴史を繙くも、其數枚擧に遑あらざるは、今更に事新らしく言ふ迄もなし。

殊に女性の特質として、總ての物事に細心緻密なるは極て妙なり、去れば、多くの方面に其の成功者を出せしは、謂れなきことにはあらず、唯だそれ、彼等に其の心身の能力を發揮し得べき境遇と自由とを與ふることの、機會其のものに欠くるあるを悲しむのみ。

明治も既に多くの星霜を經て、今日の日本は復た昔日の日本にあらず、女性の境遇に變化を來し、女性の自由は擴大せられつゝあり、故に維新以來の三十年間に於て女性の傑物を出せしこと少なからず、明治十四年の交にありては、男子に伍して盛んに政論をなしたる岸田某女あり、廿七八年以來の國難に際しては、身を以て國に致し、傷病將士をして大なる慰安を得せしめ、日本の赤十字旗に光榮を添へたる高山某女あり、畫工としての靑湖、詩人としての絳雲、教育家としての花溪、小說家としての一葉、共に一方の勇鎭なり、其の外一々に枚擧し來らんには、十指も屈するに遑あらざるべく、近く將來に名をなし業を殘すべき才媛の、亦極めて少なからざるを信ず、此の際、女性の發明に關する記述の如き、また趣味の存するものあらんか。

抑も發明といへる言葉は廣き意味を有するものなれども、要するに、人々が自己の心の働きより、未だ世の中にあらざるものを考へ出したる知覺にして、之を事物に應用し、之を實用に供せしむべく作爲したるものなるが、我國に於ては此の發明に對する保護として專賣特許の制あり、此の專賣特許を受けんには、其の道々に精通して、知見學術共に世に秀でたる十六人の學者、專門家によりて審查せられざるべからず、其の審查は發明に加ふる試驗にして、此の試驗に合格したるものは、眞個の發明として專賣特許を與へらるゝなり。

元來人の力には限りあり、自然を左右せんことは得

て望むべからず、然れども、自然を利用して彼此の力量を比較增減せしめて、之を或る特種の事業に向つて應用せしむることは難きにあらず、即ち、此の應用が學理に適し實地に利益し、其の仕方新奇ならんには、其の成蹟は發明となりて世に顯はるゝなり、尤も、たとひ其の仕方は新奇なりとも、其の方法若くは器物は世の實益を助くるとも、其の技術に關する人々又は其の技術に熟練したる職工、若くば其の製品の販賣に從事するものゝ、智識の範圍内に於て容易に明瞭なるものならんには、敢て珍とするに足らざれ



ば、之を發明とは稱すべからず、之に反して、發明の爲めに要したる心の働きが、普通尋常の智識に超えて、職工始め當業者すら、尙ほ容易に考案し得ざるものこそ、誠に價値あるものにして、これぞ眞個の發明なれ、近年種々なる發明をなして專賣特許を受けたる女性往々あり、而も此の發明界の事たる、寧ろ其の趣味の點に於て他に讓るものあればにや、世の耳目を惹くこと比較的少なし。

特許局の最近印行に係る特許發明分類表によるに、明治三十四年の一月以降、昨年六月に至るまでの特許總數は三千

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

九十七件なるが、此内女性の發明は僅々十三件を過ぎず、數字の上より見る時は眞に九牛の一毛なり、而も女性が其の特長を發揮して、それ〴〵の發明を成功し得たるに至りては、特に喜ぶべきにあらずや、今其の十三件を各年別に分つ時は、三十四年には二件、三十五年には四件、三十六年にも四件、三十七年の上六ヶ月間には三件にして、數の比例は年を追ふて增加しつゝあるなり、去れば、此の少數なる今日の現象は、女性發明の曙光とも見るべきものにして、其の將來に向つて望を屬すべきものなくんばあらず、茲にそが發明者氏名と品類とを列擧せんに。

三十四年には香川縣人淸水シゲなるもの燐寸軸早列機械を改良し、廣島縣人桑門サツなるもの垢摺袋を發明したり。

三十五年には、東京の人佐藤ムツなるもの田中喜十郎と協同して緣金用の金具を發明し、北海道の人谷カンなるもの東京の人小原吉五郎と協同して厨爐を發明し、大阪の人奥谷イトなるもの岡山縣人白神仁平と協同して羽織の紐を改良し、東京の人片澤ミユキなるもの卷煙草製造機械を發明したり。

三十六年には、東京の人岩崎トメなるもの印字機を、愛媛縣人村上ヨネなるもの金米糖製造器を、東京の人山本ヌイなるもの示名盤を發明し、同じく北村ヤヱなるもの松本直道と協同して蒲團を改良したり。

三十七年には、島根縣人赤沼モヱなるもの杼を、大阪の人藤崎トラなるものランプ釣手を、東京の人伊澤キヨなるもの改良鼻緖を發明したり。

右の如く、近年に於ける我國女性の發明品には、器械類として燐寸軸早列機械、卷煙草製造機械、金米糖製造器、印字器、示名盤の五種あり、日用雜具としては、厨爐あり、蒲團あり、緣金用の金具あり、ランプ釣手あり、其の他、杼、羽織の紐、鼻緖の如き女性には極めて相應しき器具もあるなり、燐寸軸早列機械は燐寸の軸列に經驗ある女性の發明か、卷

煙草製造機械は其の道に經驗ある女性によりて發明されしものらしく、之と同じく、印字器、金米糖製造器、及び示名盤とも、亦悉く其の道々の經驗より得來りたるものなるべく、厨爐の如きは、女性が日常使用して其便否を直接に感得するものなれば、之が改良發明は寧ろ當然の事にして、蒲團の如き、杼の如き、亦然るべきの道理あり、其の金具、ランプ釣手、羽織の紐、鼻緒などに至りては、自然に女性的發明に屬するものならずや、只尤も注意すべきは、是等改良發明の多くが、學理上の考究によりて得られたるにあらずして、其の人々の經驗によりて得られたるに在り、實に此等女性發明家の腦裡には普通の科學的知識さへ充分なるにはあらざるなり而も其の經驗によりて鍛錬せられたる緻密なる考慮は、斯くも事物の上に表顯されつゝあり、今や、女子教育は日を追ふて盛大に赴き、學理に明かなる女性科學家も漸く其數を加へ來らんとす、女性が發明界に如何なる働きを試みるかを視んことは、今日以後こそ其時なれ。

要するに、膨大にして大仕掛なる器械及び裝置の發明は、固より社會を利すること大に、從つて人世に有効なるは多言を俟たず、而も微細なる日常用具の改良發明が、個人を利し、家族を利し、施いて其の國家を利することの大なるは、亦想像の外に在るなり、去れば、日常世人の多く用ふる物品として、衣針、食器、箒、掃子、鉀、窓掛等の如き些細なるものにても、巧みに之を改良し、新奇なる發明をなし得たらんには、其の功決して尠少ならず、而して此等の改良發明は、眞に女性的發明に屬す、他日、我日本の女性が其の細心緻密なる理想を利用して、發明界に其の手腕を揮ひ、先づ此の手近なる改良發明を遂げ、進んで熱烈なる性情を以て大膽に大改良大發明を企畫するの時あるを期待せんは、強ち架空の希望にもあらざるべし。

終りに臨み、特許局印行の公報により、昨年の上半に於ける女性發明の概要を摘記すべし。

杼

島根縣　赤沼モヱ

此の杼は、管の拔挿を簡單になし、亦安全に其位置を保たしむべく、杼孔の一端に固植したる螺旋彈線の他の端を延長して直線となし、管挿棒となすに在り、而して其の目的とする所は、管の取換を簡易ならしめ、煩勞と時間を省き、且つ管を安全ならしむるものなるが、其の使用法は、杼孔の一方、内側に固植したる凸形の螺旋彈線の一端を延長して、直線となしたる管挿棒に管を通し、輕く螺旋の方へ押し、管挿棒と共に杼孔に納めつゝ、杼孔の彈線を固植せざる一方、内側の中心に穿ちたる細き穴に向け指頭を放つ時は、螺旋は彈きて再び凸形に復し、管挿棒は其穴に嵌り管を支へて安全ならしむるなり。

ランプ釣手

大阪府　藤崎トラ

此の發明は、下方に向ひたる受座に、左右に彈片を附着したる鉤片を自由に取外づし得べく挿入し鉤片には鎚鈎を垂下して、其の下端に鉤環を具へて成るランプ釣手にて、受止を安全にし、取外づしを簡易にし、隨意に他に移して用ひ得べくし、且つ體裁を完美ならしむるに在り、從來世に行はるゝランプ釣は、釘痕を天井の棧に殘し、若くば取外づし不便にして、而も鉤支堅牢ならざるの失あり、然るに、此の發明は全く此等の失を除き、實用上頗る便益なり。

鼻緒

東京市　伊澤キヨ

此の發明は、在來の鼻緒の如く下駄に裝着すること困難ならず、横緒の兩端及び前壺の端より突出せる環を取付板の上に屈曲し、適宜の位置の小孔に釘を打込むのみなれば、甚だ容易に裝着し得られ、而も金屬などの强硬なる資料より成る取付板を用ふるが故、釘を屢々打換ふる爲めに釘着の効果を損ずる憂なく、極めて堅固に裝着し得らるゝと共に、緒の弛みたる場合にも、迅速に締着け得らるゝ特効あり。

女子と發明これ蓋し一考すべき問題ならむ。

當世俤草紙

新山春子

これは、學校と云はず、家庭といはず、すべて此社會といふ廣い〱舞臺に於て、私が見たこと、聞いたこと、感じたこと、想ふたこと、或は又私を中心として實際にあつた事柄を埒もなく書きつけたものです。

（一）ハイカラ巻

皆さんは、若しも他人から斯様なこと云はれた時に、何うかは知りませんけれど私は彼の時、全く腹が立つて、腹が立つて、仕様がなく、顔がポッポと宛で火のやうにほてつて來ましたの。斯う申しますると、私の胸の中が狭いとか、まだ世馴れてゐないからだとか、何とか彼とか云ふお方もございませうけれど、左に右く私は全く怒りました。まあ、お聞きなすつて下さいまし、斯うなんですよ。

今年の春——と云つて、さうです。丁度七草の日の午後でした。私の極々親しいお友達の柳田龍子さんが、歌留多會をお催しになると云ふので、私は星村花子さんと御一緒に龍子さんのお家へまゐりましたの。

私と星村さんの外に、女のお客様が三人も被居いました。

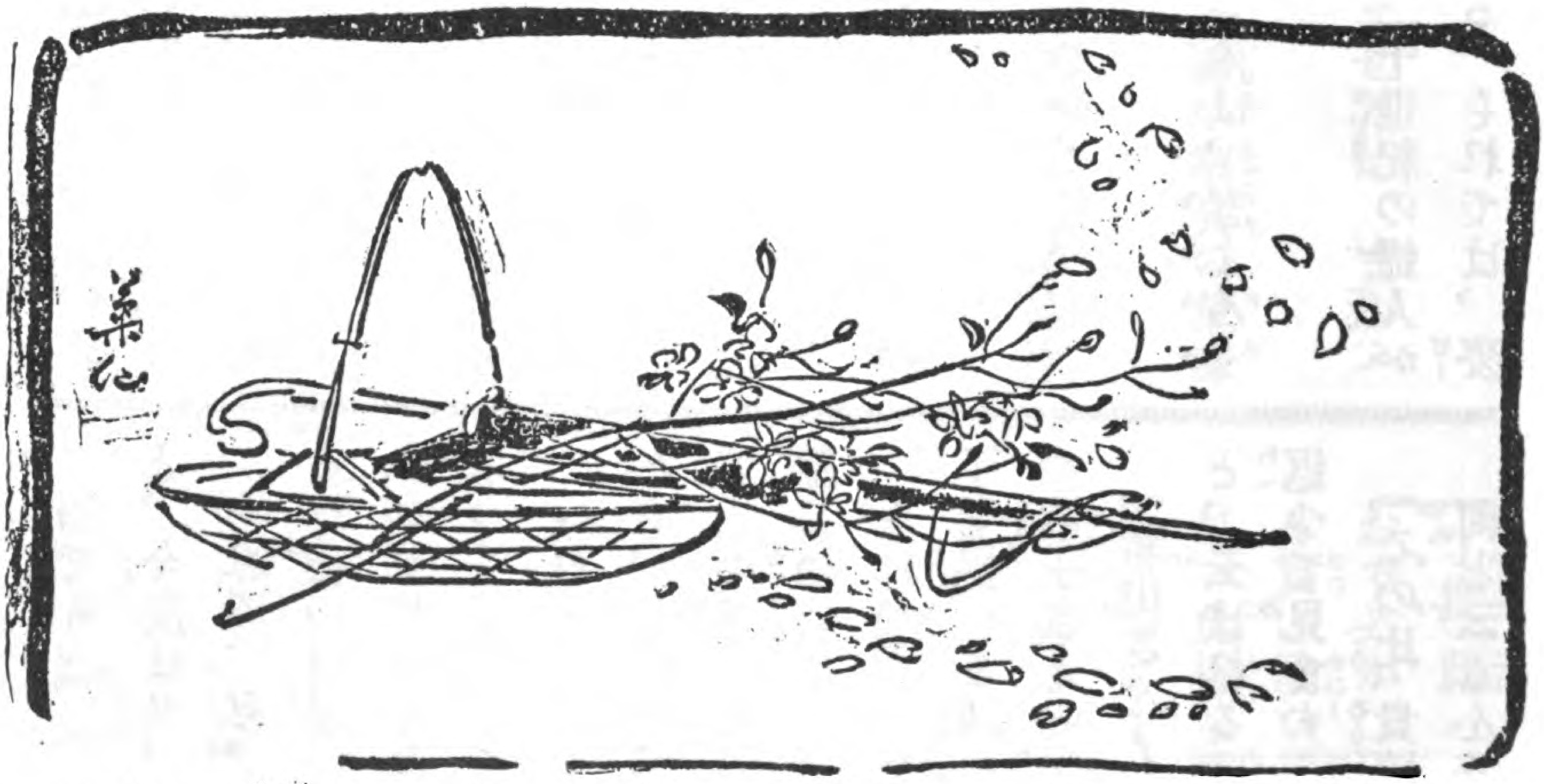
男の方のお客様は、龍子さんのお兄様のお友達で帝大の方が二人に、高等學校の方が二人で、主客都合十一人でした。

最初に男の方と女の方とが戰つて見ましたが、何分にも男の方は荒ッぽくて、太い十本の腕が蠻勇を振ふんですもの、私なんかの細い手は、險呑で〱ちつとも出せやしませんの、私は帝大の松崎といふ方に、甚く右の手を突かれて、血が滲み出ましたの、まあ、その亂暴たないんですもの、私、あんまり口惜しうございますから、『こんなに、血を出されちや

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

叶ひませんから、これから手袋かミットでも箝めて下さい』と、云つてやりましたの、すると、彼方の云ひ草が又酷いぢやありませんか、『貴娘のやうな手から血が出るものとは思はなかつた、私も大きに驚きました、失敬〳〵』と、人を馬鹿にした憎らしいことを云ふんですもの、私、其時から腹が立つて、腹が立つて、もう、歌留多なんか止して了つて歸らうかとも思ひましたの、ですけれど、まあ、我慢して二三度も戰ひました。

本當に、可厭な松崎さん、私、あんまり癪に觸りましたから、松崎さんの前のをドシ〳〵取つてやりましたの、それで松崎さんも、少し焦れ氣味になりましたので、



私やう〳〵胸が晴れましたの。

それから今度は男と女と入り混せになつて、双方に別れて遣りましたが、松崎さんと私とは、何時も敵で、いつも喧嘩腰で、根性わるく對抗してゐましたの、すると、又も私の指が折れたと思ふほど強く打ちまして、本當に、私、痛くつて痛くつて堪りませんでした。

私は思ひました。何故に松崎さんとまだ一度も味方同士にならないでいつも戰つてゐるのだと思つて、少し頭を冷にして笑ひながら『松崎さん、貴君と私は何時も敵同士ですね』と、云ひまするど、松崎さんも呵々と打ち笑つて『さうですな、これも前世の何とやらで大方犬と猿との仲だらう。』と云はれました。

それから、いろ〳〵と御馳走か出まして、男のお客などはお酒などお飲みになりました。

男は男の方で、お互に杯を交し、お酌をするやら、されるやら、いろ〳〵と愉快さうにお話が初まりました。

すると、松崎さん――私の嫌ひな松崎さんが、もう、滿面を眞赤になさいまして、私に對はれて、

『新山さん、一つ差し上げませう、……我は我が敵を愛するです…貴孃は私の最も好き敵です…。』

と、云つて京燒の杯を私の鼻の先へ出されるの。

私は、元よりお酒なんかは頂きませんから、有の儘、

『ハイ、有難う、頂いたも同然でございます。私、些とも飲けませんから。』

と、手も出さなかつたつで、松崎さんは、ぎよろりと私の顔を見て、

『まあ、いゝぢやありませんか、二十世紀の婦人がそれでは餘り意久地が無さ過ぎる、それでは、麥酒でも。』

と、今度は又、コップを差し出されるの。

それで、私、こんども受けないで置かうものなら、それ彼の口惡の松崎さんですもの、どんなことを云ふか知れやしないと思ひまして、到頭コップを受け取つてお酌して貰ひましたの。

けれども、どうして〳〵半口も飲めませんのですから、それを疊へ其儘おきましたの、すると、松崎さんが又、何とか彼とか云つて責めるの、本當に可厭な松崎さん。

それから、まあ、男は男、女は女と、お互に話相手を捉へて話してゐますると、松崎さんが、又も私や龍子さんの居る所へ來て、思ひ出したやうに、

『新山さん〳〵。』

と、云はれるの、私は『何ですか。』と、云つて顧り返つて見ますると、松崎さんは、私の頭髮を見て、

『この比、貴孃方の結つて居られる頭髮は、一體、何と云ふんですか。』と、問ひましたから、私は透

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

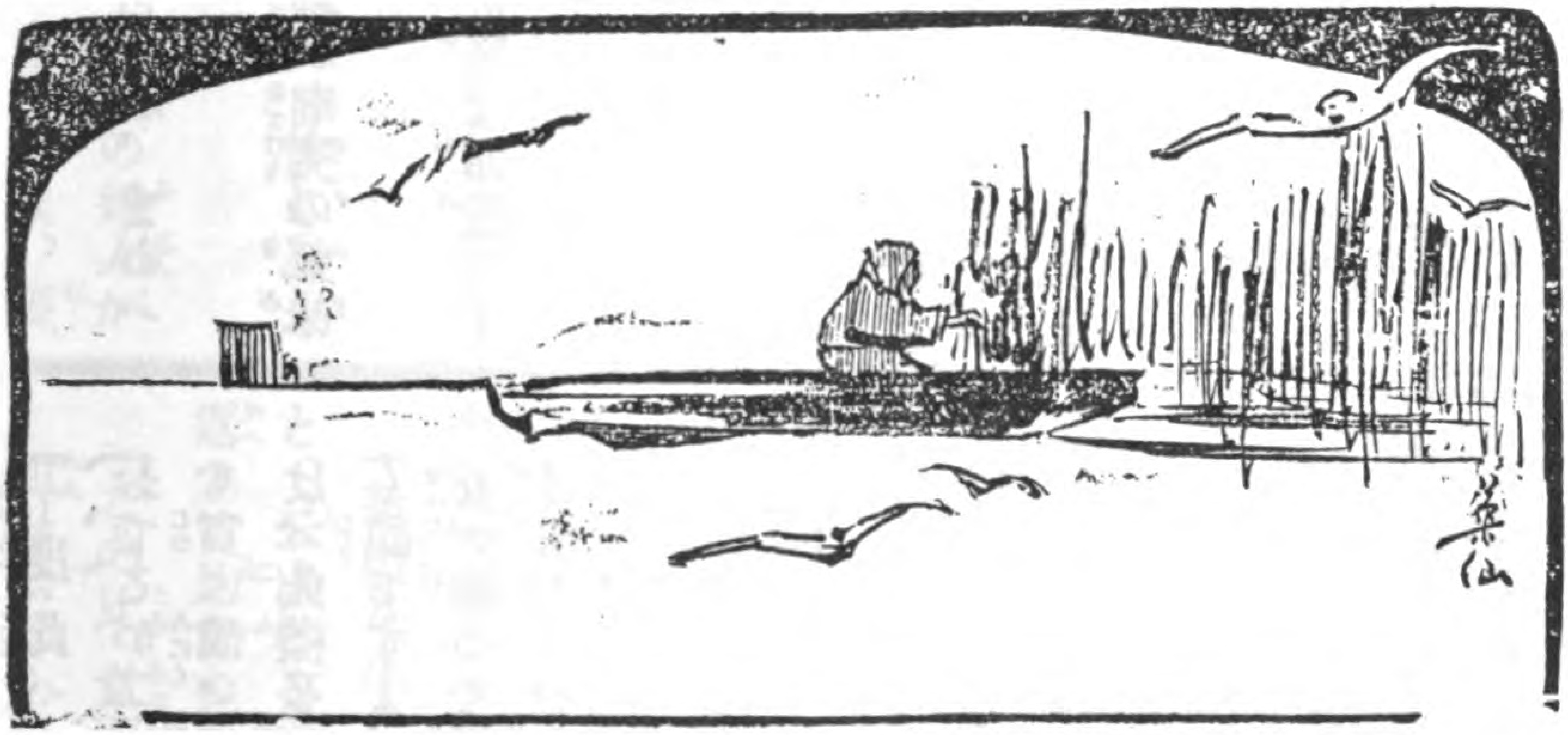
さず。
『左樣です、名と云うて別にありませんが、まあハイカラ卷なのです。』
と、云ふと、松崎さんは「フヽン」と聊か嘲笑の氣味合で、
『ハイカラ卷か何だか知れんけど、可厭な頭髮ですな、僕は此頭髮を見ると癪に觸つて仕樣がない、實に折角の容色も何も此頭髮の爲めに臺なしにするんだから……。』
と、甚く私どものを攻擊し始めるの。
本當につまらぬことを云ふ方です。私共の頭髮を見て、癪に觸らうが、何に觸らうが、松崎さんの知つたことではない、餘計なおせつかいだ、と斯う私は思ひまして、まあ、此人は大學にも居りながら、何と云ふ下らぬ方だらう、馬鹿な人もあればあつたもの、……と、思つて相手にもならず、知らぬ顏して濟して居ると、私の顏の橫の方から一寸と透すやうにして見て、

『丁度、此ハイカラ髮は橫から見ると廂のやうだ。いゝ、おでこが二段になつて見える、アハヽヽ。どうも實に醜い髮だ、御注意します。みなさん、以後は、此樣な醜い廂のやうなのはお止しなさい、至く醜ですよ、美でありません、つまり、此髮は醜女が結つて居れば相當な代物に見える胡魔化髮で貴孃方のやうな美しい、十人並以上のお方が結ふと、折角の御容色を五六段も下げる髮です。ですから、この髮に結つてると、華族樣の令孃も山出の下女も、まるで同じやうな顏立に見えます。實際、餘り下さる頭髮ではありませぬから、以後は可成お止しなさい、貴孃方のやうな別嬪が敢て天下の醜女の爲めに同情を表して、御自分の御容色を下げるには當らぬではありませんか。どうです、みなさん、さう思ひませんか。』
と、喋々と述べ立てゝ、そして、又、私をじろりと見られて、
『殊に、新山さんなんかは酷いですよ、丸で、鐵瓶

の蓋を載つけてるやうで　四十五度の傾斜をなしてゐる。』

と、甚しい惡口を吐いて、今度は龍子さんに打ち對はれ、

『貴孃も新山さんに負けず劣らずですが、貴孃のは水道の、共用栓の頭のやうです。アハヽヽ、そして、何ですね、皆さんの髪の前の方がぐらりと落こちさうになつてるのも、又、すつと前髪が眞直に突立てるのも、御自分の髪の毛だけでは迚も〳〵足りないから、それを助けてる義勇兵の……何とか云ひましたつけ、さう〳〵、……前髪入れとかゝわるんです、さうですね、……新山さんの方は髪の毛の義勇兵が頑張つてゐるんですかそれとも金のですか……何うして



も日本の女はね、其樣なハイカラ髪よりも、矢張り桃割や島田なんかゞ遙に〳〵美いですよ、とても較べ物にはならないですよ、……國粹保存……イヤ、そんな難かしいとを云ふのではありませんが、如何です、貴孃方は以後ちと桃割や島田に結つて、天下の婦女の髪を風靡させては……私は大に希望します……。』

と、何處を如何う押したら、那樣な惡口が滾々と水の湧くやうに出て來るだらうと私は思ひましたの、まあ隨分憎らしい言草ですわ、……けれども、私は、ナニ、松崎さんが云ふんでなくつて、お酒が云ふのかとも思ひましたけれど、何んだか可厭な可厭な感が胸に起つて來て、折角の

歌留多會も想つてゐたほど面白うなかつたのです。

いくら、松崎さんには、御氣に召さないか知れんけど、私を捉へて無暗に斯樣な惡口を吐くんですもの、私、何だか、初めつから好かぬ方だと思つてゐたものですから、何だか甚く癪に觸つて仕樣がないの、怒らずには居られないの、それで思はず顏がほてつて來て、歌留多で負けた時よりも熱くなつたの、皆さんは如何です、斯樣なことを云はれても、お腹が立ちませんか。オホヽヽ、私ばかりでせうね、斯樣なことに兎や角いふのは。

(二) 噂の噂

三月の中旬のことです。餘り好い、温いお天氣でしたから、私は久し振りで團子坂の高のお友達を訪ね、それから小石川の親類へ參らうと思ひまして、いろ〳〵と巾狹き小路を曲り屈りして、圖らずも○女學校とか△△女學校とかの前へ出ました。すると、丁度私の前方を行く二人の書生體の男があります。

一人は紋付、一人は絣の羽織。

私は、何といふこともなく、二人の後方へ隨いて行きまするど、紋付は學校の方を指しながら、

『まるで、君、女郎屋のやうな、赤い蒲團なんか干して。』

と、云つたので、私は太く胸を打たれまして、驚いて其方を見まするど、なるほど、玄關の上の二階の窓の日當り宜い所へ、赤い裏の蒲團を廣げてありました。

すると、絣も、

『全くだ。』

と、輕く首肯いて莞爾と笑つて居りました。

私は、その時、女郎屋が何うだとか、斯うだとかは一向に知りませんけど、何となく可厭な〳〵感が胸一杯になつて來ました。

左樣でせう、神聖なる婦徳を涵養する學校を捉へて見て——縱へ何を干しておらうとも——妓樓なんかと同一視するのは實に以ての外と思ひまして、聊

か腹が立ちますやら、口惜いやらで、面と對つて、その書生に何か云はうと思つた位でした。

この書生などは、大方墮落した連中で、何でも斯樣に卑しく物を視るのには相違ありません。けれども、私は兎に角、往來から目立つ所の學校の窓などへは少し遠慮しては何うかと思ひました。夜具や蒲團などを日光に曝すのは、これ家事衛生を其儘早速應用なさつたので、實に宜しい御心掛ですが、以後は成る可く人目の付かぬ、地濕を受けない限りは、成る可く低い所に干して貰ひたいものだ、と思ひました。

これは實に下らぬ書生の一口評で、敢て齒牙にかけるだけの價値はありませんけれど、斯樣な下らぬ書生に、斯樣に下らぬ評をされるのは、餘り感ずべきことでもございませんから、私は何れの學校に於きましても、此邊にも注意を拂つてお貰ひ申したいと存します。

花見

▲▲子

久しく玄冬の奇寒に閉ぢ籠められ、さて句芒の漸く陽光を送りて、窓より來る風も、何となく心地よき程になりたれば、いで看梅にと出るは遊癖の人ならでは、歸路の夕暮に、痛く冷ゆるのを恐じて、つい後れ勝なり、陰曆なれば、四月と聞けば、早更衣の好期、いまだ其には至らざるも、快晴の日には、羽織の一枚も脫てたくなり、遊心の自づと湧出に、園を見れば、草木まで萌出で、、觀遊を催促すやに見え、花も點々と朱脣を開きて呼び初めたりなどいふ人の聲も、道路に聞え、新聞にても、爰四五日が中に、或は兩三日も經ばなどと、急き立つるを見ては、最早遊嫌の人も家居得で閑を偸みて日を卜め貴嬢も阿姆もと、誘引合ひ、連袖ては、何地よりともなく、東西南北より會集まるもの、花瓣の數にも比

ぶべく、芳魂も塵氣に蒸るゝを呟つならんと思はる
る許りなるは、年々我東都に於ける春の花見の奇觀
なり。

さもあるべし、櫻は我邦に於ける名花の一として數へらるゝのみならで、總ての花の冠首とまで稱賛られ、支那にては、春の花といへば、先づ桃李をあげ牡丹を花王といひ、海棠を花仙などいひて、櫻はさのみ賞翫せられず、

沈休文の詩に、山櫻發欲レ然とあり、其註に、果木の名、朱色火の然るが如しと見え、王荊公の詩に、山櫻抱レ石映二松枝一とあり、司馬溫公の詩にも、紅櫻零落杏花開と見えたるも、此櫻といへるは我邦の櫻とは別種にして、我邦のサクラは此櫻の字を假り用ゐたるまでなり、

歐米にても、同樣人の口吻にも上らず、是れは斯くあるべき事にて、支那にも歐米にも我邦の如き美觀なる櫻のなきにより、此世界に比類なき我邦の櫻は獨我邦にてのみ觀ることを得、我邦人の天幸として外國人の欽羨も理りにて、我邦人の誇るべきものの一ともいふべきものなればなり。

多くの花ある中に、單に花といへば、櫻の事なり、是れ花の中にて、最美最艷ものなるより、花の名を專にせるなるべく、されば單花見といへば、この花を見る事にて、他の花は看梅觀菊などいふこととなり、又斯花といふも他の花ならで、櫻の事なるはいと古きよりなり、神代に斯花咲耶媛といへる神ありて、（富士及び櫻神社の神靈）櫻の咲きたる妖艷に比べて稱へたる御名なりといひ、彼百濟の王仁が大鷦鷯尊（仁德天皇）に御位を嗣がせられんことを勸め奉りしものなりといふ歌にも、

浪速津にさくやこの花冬ごもり
今を春べと咲くやこのはな

といへり、此歌のこの花といへるは、梅にはあらで櫻の事をいへるなり。

萬葉集にはサクラの花見とあり、是れ櫻見を單に花見とせざる證とするものあるも、サクラの花見

といひたりとて花見といひて櫻見にあらずといふ
證にはならず、詳細は長ければ略す、
又藤原良房が染殿后（良房の女明子にて、文德天皇の后なり）の殿中にて咏まれたりといふ

年ふればよはひは老いぬしかはあれど
花をし見ればものおもひもなし

といへる、此單花といへるも、櫻を見て之を染殿后にたとへ、自分は年老いたるも、后の花の如く榮華らるるを見れば、ものおもひもなしとの意なり、是等は皆櫻の故事として後世に稱せらるゝものなり、
又在原業平が咏める

世の中にたえて櫻のなかりせば
春のこゝろはのどけからまし



紀貫之が咏める

櫻よりまさる花なき花なれば
あたし草木はものならなくに

といへるは、如何に櫻を賞讃たるやを見るべく、清少納言は枕草紙に繪にかきておとるものといひ、宋景濂ハ恐是趙昌所レ難レ畫と讃め、畫家の巨匠も寫し得ぬ程のものとして、見ぬものには見せ樣のなき奇觀をいふなり。
此の外櫻につきては歌集に數多載せられたるが、

其中名歌として世に傳唱らるゝものは素性法師が山櫻を見てよめる、

見てのみや人にかたらん櫻花
　手ごとにをりていへづとにせん

又うりん院(羽林院)の御子のもとに花見に北山のほとりにまかれりける時によめる

いざ今日は春の山邊にまじりなん
　くれなばなげの花のかげかは

紀友則の寛平御時(宇多院)きさいの宮の歌合に

みよしのゝ山邊にさける櫻花
　雪かとのみぞあやまたれける

紀貫之が歌奉れと仰られし時によみて奉れる

櫻花さきにけらしも足引の
　山のかひよりみゆる白くも

又山の櫻を見てよめる

春かすみなにかくすらん櫻花
　ちるまをたにも見るべきものを

藤原行成が櫻狩りに雨降りたれば

櫻がり雨は降りけり同しくは
　ぬるとも花のかけにかくれん

伊勢大輔が初めて宮中に召されて父大中臣能宣が歌人なるより、櫻を題として詠めとの仰に

古の奈良のみやこの八重さくら
　けふ九重ににほひぬるかな

是等は後世の人の原歌ともなり、模範ともなり、又故事ともなれるものにて、歌詠者の記臆をくべきものなり。

又八幡太郎義家が奥州攻め時勿來關にてよめる

吹く風はなこその關と思へども
　路もせにちる山ざくらかな

薩摩守忠度が近江長柄山にてよめる

さゞなみや志賀の都はあれにしを
　昔ながらの山櫻かな

是等は武人にてありながら、斯る名歌を詠出せりといひ、今も人口に膾炙さるゝに至れるにて幕府時代の儒者は此勿來關の故事を詩にも作りて、其技倆を

見せんと試みたる人多かりしが、富士山の詩と勿來關の詩とは作らぬ詩人少なけれど、能く作り得たるもの少なしといへり、畢竟問題の好きに劣るなるべし。

此外櫻に就きての故事といふべきは、兒島備後三郎高德が後醍醐天皇の行在所に忍入りて櫻樹に天莫レ空二勾踐一時非レ無二范蠡一と支那にて昔范蠡が越王勾踐を佐けて終に吳王に敗れたるの耻を雪ぎて一時諸侯の覇となりし故事を以て天皇に勤王の武士あることを知らせ奉りたるは何人も知れる所なるべく、又此櫻は幕府時代に武士が人に欽羨れたる地位をもたとへて「花は櫻に、人は武士」といへる諺もあり彼大和魂といふ古より我邦の武士道の精神ともいふべきものをも譬喩て、和學即國學者の泰斗と呼ばれたる本居宣長の歌に

敷島のやまとごゝろを人とはゞ
　あさひににほふ山ざくらばな

といひ、此大和魂といふを儒者は文天祥の正氣歌より採りて正氣の二字を用ゐ、一時勤王家の巨臂と目れたる水戶の藤田東湖は、正氣歌といふを作りて、

秀爲二不二嶽一　發爲二萬朶櫻一

といへり。

詩にも面白きもの頗る多し、今其中尤とも優れたるを擧ぐれば石川丈山が詩に

此花若在二唐園裡一　何使三楊妃比二海棠一

草塲佩川が楊貴妃櫻の詩に

怜他天寶皇家使　萬里唯攜二鈿合一回

奥野小山が畫櫻に

欲レ言西土無二春色一　四百餘州缺二此花一

賴山陽が律詩の前聯に

蹈樹心甘來作レ婢　洛花顏厚郤稱レ王

藤森弘庵が

萬古依然天上種　我櫻眞個是花王

又櫻の文章としては、佐藤一齋が小金井觀遊記ありて、愛日樓文集に載せたり、近世に著名は佐久間象山が櫻賦にて、飛鳥山に其碑あり、櫻の事を詠み又

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は書かんと思ふものは、讀むべきものなるべし、

蛇と生存競爭

梅の舍主人

本年の干支は巳即ち蛇でありましたが、新年の文壇には之に緣めるお話が甚だ淋しかつた、啻に文壇に於てのみならず、美術家にも工藝家にも、御贔氣を受けなかつたのは、能く〳〵果報の無いものと思はれます、勿論アノ姿では毛頭好いたらしい點は認められないが、動物界に於ける生存競爭の有樣を面白く說明せんとするには好箇の材料として、確かに値を持つて居るのであります、で、是れより

△蛇の動物界に於ける活動

の有樣から、兼て動物相互の優勝劣敗の活劇を演ずる壯觀を研究して、人生行路の進程にも亦此の大法則が行はれて居ることを證據立てゝ、生活上の參考に供したい積りであります、所が只今は丁度彼等が生存競爭の休戰時期で、深く土中に潛み居れば、其活動は愚か、姿さへ見ることが出來ませんから、先づ第一に彼等が

△冬時經營

の狀態を見んに、一粒の食一滴の水だに口にするを欲せず、クルリとタグルをかいたまゝムンヅリともせず、眠るが如く幽かに一筋の命を維ぎ居るに過ぎません、學者はかやうな狀態を名附けて、虫類の冬眠と申します、此冬眠の間は、彼れ此れ半年の永きに亘れど、彼等は飮まず食はずで、命に障りが無いのでせうか、ソレトモ彼等は不死の仙藥でも用意して居るのでは有りますまいか、否、彼等の胃の腑は此永き間、其體內の脂肪を受けて之を消化し、循環して不動不食の境遇に應ずる活力の補給を營んで居ります、ソレニ土中は地上に比べると、餘程温いので幸ひ體が凍つて、胃の腑の運轉が利かぬやうなことも無いから、兎に角そのまゝ一陽來復の春を待つて居るのであります、玆にいとおかしき蛇と蛙との

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

關係があります、夏の頃には蛇が蛙を見るや否や忽ち一と呑みにして仕舞ふのみならず、常に草を分けても之を追ひ廻すので、蛙はスルッと云ふ音を聞いても、ザンブリ水中に飛込んでヤット其毒牙を免るるので、其仲の惡いことゝ申したら、諺にいふ犬と猿と位ではありません、然に此寒さの間は同じ穴に棲みながら、蛇は蛙を好まぬのではなけれど、進んで之を餌にしやうとする勇氣もなく、蛙は蛇を恐れるに相違なけれど、逃げ出して命を永らへやうとする勇氣もありません、サナガラ兄弟同樣の親みに見えますが、之ぞ彼等が本能として半歳は生存競爭の必要から、然に暴力を振ふにも係はらず、冬の半歳は冬眠の影響より、遂に幽境に縮こまつて斯るへマな狀態に甘じて居らねばならぬのであります、是の一事によつても、彼等が冬籠の狀態は明かでありませう、序にモー一つ

△蛇と蛞蝓

との關係を申し述べますが、勿論之は冬眠中の事柄ではありません、元來蛞蝓が敵を防ぐ手段を見るにズット體を縮める拍子に、一種の液を分泌して自分は其液の中に引籠て了います、此ヌラ〳〵とした液には、流石の敵も小氣味が惡いと見え、何の手出しもせず、コソ〳〵と逃げ去るが、特に蛇はソレが嫌ひなのか、蛞蝓の姿を視まするど、けたゝましい勢ひで、三十六計の奥の手を極め込むのです、彼方では蛙が蛇に追はれるかと思へば、此方では蛇が蛞蝓に追捲くられる、と云ふやうに、何れも思ひのまゝに振舞ふわけに參りませんのみならず、互に相牽制して生物が共存の釣合を工合好く保つて居るのは、誠に面白い現象ではありませんか、彼の小供が歡迎する「三スクミ」と云ふ玩具を御覽でせうが、小箱の中に此蛇と蛞蝓と蛙とを並べたもので、若し蛇が蛙に近寄らふとしても、蛞蝓が其間に居りますから、其欲望を遂げることが出來ず、蛙が蛞蝓に迫らふとしても、蛇に睥まれて居るので、矢張其目的を達するわけに參りません、斯樣に敵の敵の敵と云ふ組合

Digitized by Google

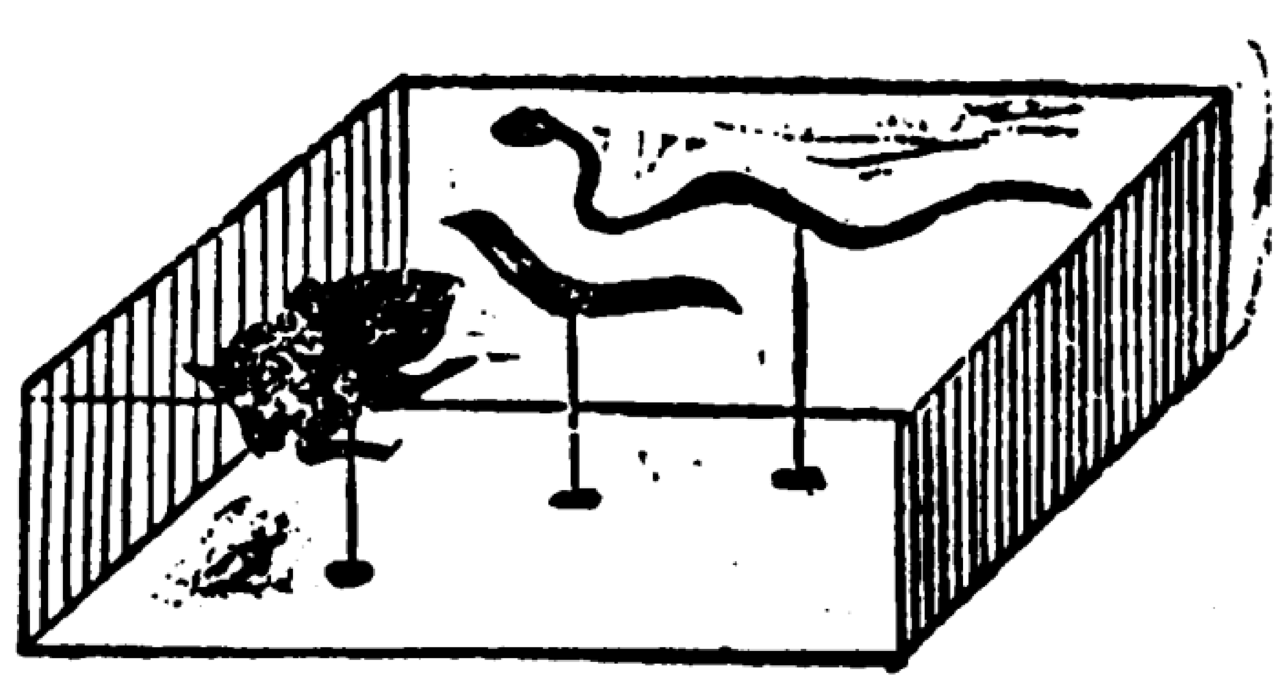
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せゆゑ手ん手にスッカリ縮み込んで了ふので、ッイ三スクミと云ふ名前が附けられたのであります、彼の天地の間に生存する大小幾多の動物が、生存競爭優勝劣敗の裏に於て、ソレ〳〵其子孫を繼續し、共存の調和を存ずる所以のものは、皆此三スクミの如き關係に依るものでありませう、

世の子女の姉となり母となる方は、斯る敎育的の玩具を利用して、面白おかしく其好奇心をあやつらば、子女は知らず〳〵の間に、動物共食の有樣や共存調和の事柄を覺ることが容易でありませう。

沖縄にハブと云へる一種の大蛇あり、其頭の形が飯匙即ち飯杓子に似たるより、斯くは名附けしものとかや、體の長さ三間ばかり、實に蛇の中の大王で、一ト度怒れば忽ち人畜を害するといふ恐ろしいものであります、所が玆にまた野猪と云ふ猛獸が居て、其の暴力に對抗するのみならず、勁敵として痛く之を壓迫するので、流石のハブも、野猪の姿を見るや否や、雲を霞に消え失せて、滅多に雌雄を決する如き輕擧を致しません、曾て一匹の野猪が今しも澤邊に水飮める大ハブを見付け、不意に其胴腹を目がけて突進した、ハブはケタタマシク棒立して、慘しく其の大きな口を開き、鋭い牙を剝き出して、敵の頸筋に飛びついた、野猪も透かさず敵の首を牙にすくッた、力に任せて投げ上げた、咽元狙つて突つかけた、ハブはバッタリ覆る、起きさまに敵の後足にからみつく、キリ〳〵と捲き立てる遮二無二嚙りつく、アハヤ野猪の形勢は危急に迫る時にハブの氣息また奄々として餘勢がシドロとなつた、野猪もコヽを先途と蹴る、跳る、衝き立てる、當るを幸ひ薙ぎ仆すといふ勢であるから、さすがのハブも次第に疲れてベタリと大地に長まつた、續いて野猪も岩の如く踞つて

第二圖



三スクミ

コロリと草間に横はつた、而して野猪はやがて、ムツクリ起き上つて山奥に其姿を潜めたが、ハブは終に起つことが出來なかつた、これは土人の物語りでありますが、全體彼等は何の怨があつて戰つたのか彼等とて痛さを知らぬこともあるまいし、又命のいらぬことも無いでせう、が、是れぞ彼等が生存の必要上食を求むるより起る競爭、即ち飽くまでも他を仆して己れの命を完うすることを謀るところの所謂生存競爭を云ふもので、これがチャールス、ダーヰンと始めて唱へ出した「ストラッグル、フォル、エキジステンス」Struggle for existence といふ言葉を譯したものであります、凡そ此世に於て生きとし生けるものは、何れも命がけの奪ひ合ひをして己れの位置を安らかに致さうと心がけぬものは無いのですが、強いものに出遇うと弱いものは負けて了ひ、優つた者には劣つたものが勝つとが出來ないので、其結果所謂優勝劣敗と云ふ現象が表はれる、蛇は蛙に取つての強者、猪はハブに對する優者で、是等の場合には、蛙やハブは劣者として、弱者として、其生存を完うすることの出來ぬことは、重ねて申すまでも無いでせう、シテ、此生存競爭の法則は、常に吾々の間にも盛んに行はれて居つて、學生は學問の成績の爲めに爭ひ、商人は損得の爲めに爭ひ、政事家は權力や、名譽の爲めに爭うて、他を排し己れの志を貫かんと非常な勢ひを以て活劇を試みて居るのであります、で、ウッカリお心よしで居た日には忽ち劣敗の域にハチ飛ばされて、無慘な一生を送らなくてはなりません、ソコデ、此競爭の優勝を占めやうとするには、ソレ相應の利器といふものが極めて必要でありますが、是れ亦彼の猛獸毒蛇などの爭鬪に見て、如何なる利器を如何に活動せしむるかを究める時は、有益な參考を得ることが出來やうと思はれます。

△蛇の利器

凡そ蛇のやうな醜いものは恐らく外に類ゐが有りますまい、スルッと云ふ音を聞いてさへゾッと身の毛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

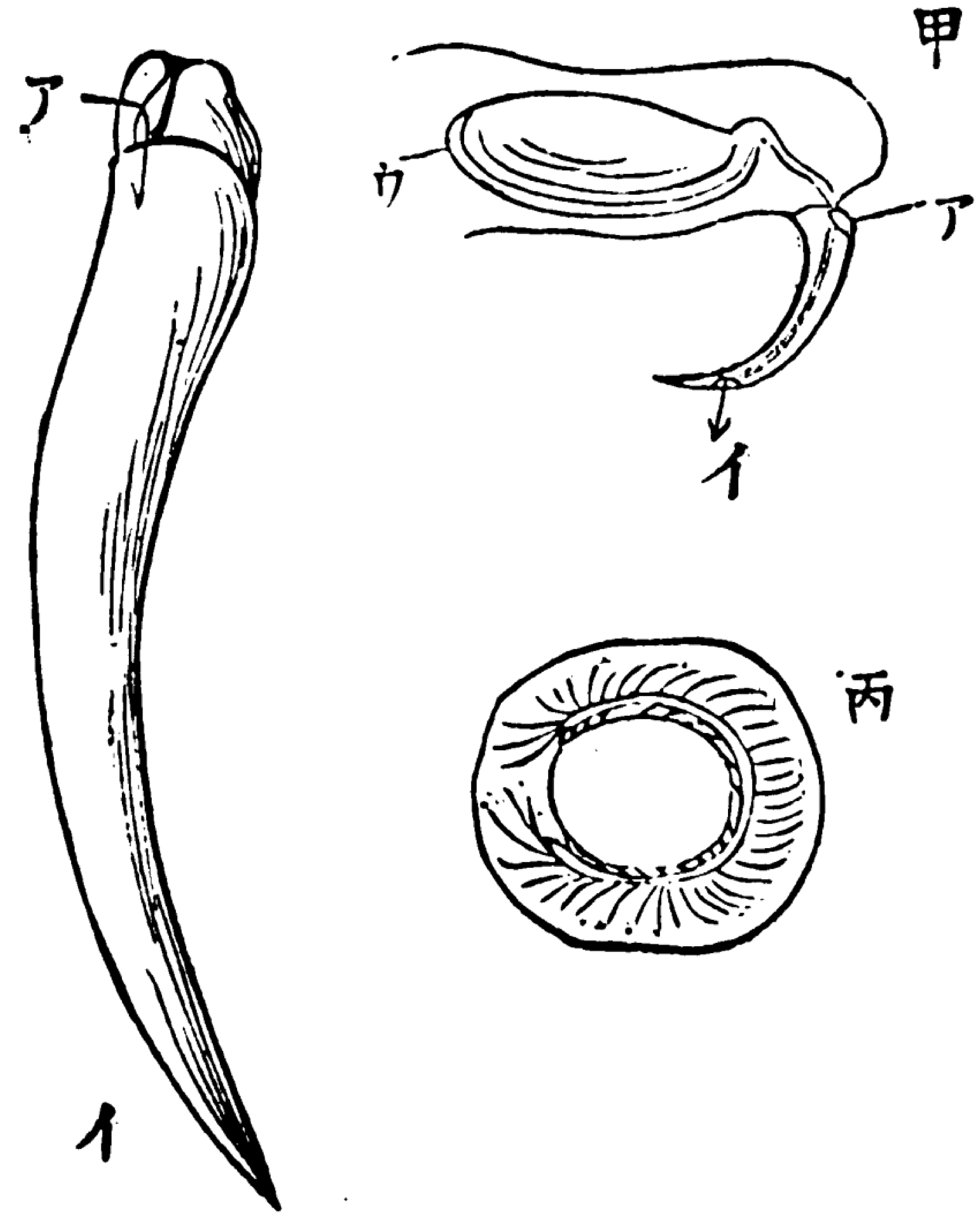
が慄立つ。諺に蛇に見込まれたら災難などと申して居るシブトイ根性らしいが、イカサマ其敵に對する態度を見るも、イヤに隱忍に搆へて、蛙でも鼠でも睨んだら最期、中々取り逃がしません、忽ちガラに無い大きな口を開けて一ト呑みにしますが、今其口の搆造を檢するに、上下の顎に細い齒が並んで、腔内が甚だ廣い上に、下顎骨のチヤウツガヒはユッタリと頭骨に連繫して居るので、大きな口を開くのに適當して居ますので、口を開くれば腹腸まで暴らしたり、卵や鼠などを丸呑にしても平氣なのであります、分けて此口中からヒラ〳〵と舌尖を現はす樣は、餘り心持の善いもので有りませんが、此ヒラ〳〵こそ蛇に取つては大事の〳〵道さき案内で、丁度バッタや嚙み切り虫などの觸角と同じ働きをするのであります、ハブやマムシには此外にまだ上顎の前部に二本の毒牙があつて、平時は之を其内側に伏せて置きますが、一朝危險に臨む時は、口を廣開すると共に其牙を起して敵者に飛び付き、毒囊を絞つて毒液を注入すること、恰も醫者が注射を行ふと異りません、此毒牙を檢べて見ると、第二圖甲に於て點線で示してあるやうに、牙の眞中に一筋の細い孔が通つて、一端は牙のトッサキのイに於て開口し、他端はアの口から頭部の毒囊ウに連續して居ります、個樣に牙の中に管のやうな孔があるので之を管牙と申します、圖中の乙は更に見易い爲めに擴大したもの、丙は橫に切つた所を示したものであります、要するにウより、滲出する毒液が、アの入口から管の中を通つて、イの出口に押し出すやうな工合になつて居ります。

以上のお話に依て見ると、蛇には毒牙のあるのと無いものとの二つの種類があること、敵に對しては何れも口を以て、利器として居ることも明らかでありませう、從つて無毒の蛇は有毒の蛇より戰鬪の利器が缺乏して居ることもお分りになりませうが、茲に一つ面白いのは無毒の蛇でありながら、其背鱗の色合とか 班紋の樣子とか云ふ見掛の大體を宛然有

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

毒の蛇に似せて、己れの戰鬪利器の薄弱なのをゴマカシて、敵害を防ぐものがあります、丁度彼のトヲムシが蜂の色彩を眞似て、他の動物を警戒して近づいては危いぞと言はぬばかりの虚勢を示すのと同じことで、コンナ横着ものは動物界に數多くあるのでムいます、動物學者は之を名附けて、動物の擬態と申します、處が此擬態の無いものはドウして利器の薄弱なのを補ふのか、何か甘い工夫でも備つて居るのか、ソレトモ敵に出逢ふたら、何等の抵抗をもせず、尋常に命を取られて泣き寢入りに終るまでのことであるか、ヨシ、それまでは無くともスラ〳〵逃げ出して、手出しも何にも致さないのか、勿論かなはぬと見たら逃げるが專一でありませうが、生憎蛇の體には足も無ければ、翼も無く、タヾ僅に肋骨を操つて爬行するに過ぎませんから、其逃走力と申して、大したものではありません。が、以上の他の蛇にも、亦それぞれ面白い自衛器を供へて居ります、今カラス蛇の背鱗の色合を見るに、一寸見たばかりでは、土砂の色と間違ふばかり、隔つて見れば、ソレと心付かぬほどでありますから、自然敵の眼を眩まして、其身を完うすることが出來るのであります、是れも矢張冬の兎が眞白になつて、雪中を駆け行きながら、雪か兎か見分の附かぬのと同じと、即ち例の保護色と申すので、多くは戰鬪利器の薄弱な動物に特有する一種の防禦法と云ふべきものでありま

第二圖



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せう、で、蛇に有毒無毒の二種あるものと共に其躰色も亦二タ色あつて、前者即ちハブ、マムシ、ヤマカヾシの如きは派手な躰色であるが、後者即ちアヲダイシヤウ、カラスヘビの如きは地味な色合で、一見其毒の有無を識別することが出來ますから、山野を運動する時など注意さへして居れば、蛇に嚙まれるやうな失策が厶いません。次に彼等の

△第二の利器

はドンナものが有るのか、但しは此外に利器と數へるものが無いのでせうか、一寸考へたきりでは之と云ふべきものが見當りませんが、彼等の繩のやうな體こそ、ソレ全體が、一大戰鬪利器なので、口で働らく猶豫の無い危急な時には、全身を振り廻して敵の急處にからみつき、キリ〳〵と卷き立てながら、ギユウ〳〵しめ上げ締め付けて、敵の息の根を止めるとか、左なくば此利器を搦め捕つて仕舞ふのであります、しかも彼等の脊骨は四十六個と云ふ夥しい片骨が、鎖のやうに連接して居るから、其屈伸曲繞とも思ひのまゝなるのみならず、甚だ多力のものゆゑに、一度搦みついた上は、容易に振り解くことが出來ませぬ、コンナ防禦の方法は、他の動物に類ゐのないことで、奇妙不思議一種専賣特許の戰鬪利器と申して宜いでありませう、モシ彼等にして此上勇健なる飛び足があつたならば、ソレコソ鬼に金棒と申すべきで、マサカの塲合には、更に一段の活動が出來るかと思はれますが、是丈は彼等に取つて惜むべきことであります、學者の研究に據れば、彼等が進化の或時代には足を持つて居つたもので、其痕跡が腹鱗に認め得らるれど、餘り細長い體ゆゑ如何樣の四肢にては、此體を擔ひ兼ねて、反て不便でありますから、進化の法則に漏れず、遂に之を消失して仕舞つたさうであります、成程彼等に龜の足のやうなものが有つたとて、アノ體を載せたでは、胴中がタルンデ、盤龍魚の歩くより、遙かにブキなものと想像されませう、彼の龍のやうな勇健なる足でなくばイツソ無い方が體の取りまはしに都合が宜しいに違

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひわりますまい、此進化論に依て考へると、彼等が未だ四肢を所持して居た頃は、其體の長も今よりは餘程短かつたに相違ない、ナゼかと申すに動物學の分類上から彼等は龜や、蟠龍魚や、蜥蜴や、鰐などと同類として、均しく爬虫類に一括せられるのみで無く、モシ其體をズット縮めて龜の甲を被らせたら、頭と云ひ、尾と云ひ、ソックリ龜に似て居るでは有りませんか、爬虫類で足の無いは、蛇のみで、龜などと同類と見るのは、無理らしくありますが、サテ一歩を進めて研究して見れば、至極尤な分類と考へることが出來ます、彼等は其境遇の必要から足の發達を萎縮して遂に之を消失して、次第に其體を延長したものとすれば、今後彼等が生存競爭の上に、激變を生ずるやうな場合には、更に今日より一層長い體に變るかも知れません。

◎八日の旅

紙面の都合により休載

◎節季菓子の製法

萩の餅は道明寺を水洗して能く浸し蒸器の底に濕布巾を敷きて之へ入れ、約廿分間許り蒸すべし、若し蒸器なき時は、味噌漉に布巾を敷きて蒸すも可なり、さて蒸上りし後は適宜に丸めて餡を塗るなり、又胡麻をまぶされんとするには、黑胡麻を煎りて能く摺り胡麻一合ならば砂糖十五匁の割合にて能く混ずべし、黍粉は砂糖と同割にて食鹽を少し加へれば宜し。

櫻餅は米利堅粉一升に付き、砂糖三十匁の割合なり、粉末を水にてドロ〳〵に解し、之に砂糖を加へて能く攪交せ、杓子にて掬へる位の加減に調へ玉子燒鍋に胡麻の油を敷き、杓子にて掬ひ入れて小判形に薄く燒き剝器にて剝きて皮を造るなり、餡は皮の冷ぬ内に卷込み、其上を鹽漬の櫻の葉にて包むなり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

美人は薄命か幸福か

赤門隱士

▲婦人といふものは、全體どういふ性格のものであるか、それからして、われ等には、解決が付かぬのである。

▲姿が花のやうに美しくて、心が澄み渡つた月のやうに奇麗で、柔和で、親切で、謙遜であるのが、婦人の本質なのか。

▲又た縱ひ姿形は、愛らしくても優しくても、心は蛇の如く、夜叉の如く、惡鬼の如く、羅刹の如く、人を迷はしもする、欺きもする、怒らせもすれば、笑はせもして、種々さま〲の惡事をして樂しむのが、その天性であるか。

▲凡そ世中に奇麗な女ほど愛すべきものはない、彼は則ち天女の化身であるといふて、隨喜渇仰の涙を流した詩人がある、此の方面から觀ると、美人は確かに、頌徳表を受くべき資格を有て居る。

▲しかるに又たそれとは正反對なことをいつて居る學者もある、それは、婦人は自然の誘惑物、一家の危險物、生命を奪ふ魔物、紅粉を施したる邪惡物、であるといふのである、此點から言ふと、美人は尤も怖ろしい罪の深いものといはねばならぬ。

▲罪の深いものとすれば、美人薄命は當然罪禍の報ひである。

▲頌徳表でも上るべき程のものであつて見ると、姓氏なくして玉輿に乘るのは、寔に其當を得たもので、何も不思議はない。

▲三千の寵愛を一身に集めて、朝歌夜弦の歡樂を縱まゝした前の楊貴妃は、最上等の美人の受くべき正當の報償を受けたものであるか。

▲馬嵬の塵と消え亡せて、哀れや花魂空しく泥土に塗れたる後の楊貴妃は、最上等の美人として、その

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

犯したる罪惡の爲に、その身を亡ぼしたものと見るべきであるか。

▲烈婦節婦といはるゝものには、先づ美人は鮮ない、毒婦、惡婦には決して醜婦はない。

▲人を殺す程の女には美人が多い、人に殺さるゝ女も必ず美人である、此間鶴見の停車場の前で、啞者の爲に慘殺された女も、美人であつた、箱屋殺しの花井お梅も美人である。

▲さらば醜婦は不幸にして、美人は幸福であるか、但しは醜婦は幸福であつて、美人は不幸であるか、此の問題よ、なか〳〵解釋に苦しまざるを得ない。

▲幸、不幸といふことからして、ツマリ明瞭な解釋は出來ないではあるまいか。

▲泣いて玉輿に乘るものもあれば、笑つて手鍋をさぐるものもある、玉輿ばかりが幸福でなくて、手鍋もまた全く不幸とはいへない。

▲しかし、いや〳〵ながら玉輿に乘つた人でも、活計歡樂思ひのまゝの身となつてから、いつまでも泣いて許り居るであらうか、好いて手鍋をさげる人でも、長い歲月の間には、隨分嫌氣のさすことのないでもあるまい。

▲斯ういつて見ると、他人の眼には、羨しい程幸福と見ゆることも、必ず幸福でない、可愛さうとも、不憫とも思はるゝ程の不幸も、また必ず不幸とは限られない。

▲始めは不幸と思はるゝとも、幸となつたり、樂みと見えたことが却つて苦しみとなるともあるから、何が何だか凡眼には一向に判斷がつかぬ。

▲小說家などに言はせると、愛は女子の生命で、愛を失つたときには、その女子は既に心理的に死んだものであるといふが、實際愛と女子との關係は、そんなに密着した重大なものであらうか、少々疑はしく思はれる。

▲これは恰ど人の性は善である、故に惡事をするものは、人ではないといふと同しとではあるまいか、說敎者が勸善懲惡の敎の立場からいふと、是非さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ういはねばならぬ、小說家の先生達も、愛といふものを、大切なものと立てゝ置かねば、小說は決して出來なからう。

▲勿論失戀といふことはある、而して此の失戀の爲に、いはゆる心理的に死んだ者と思はるゝことのないでもないが、此の死んだ人間が、幽靈でなくて、眞實甦へることがある。

▲それは境遇の上から、心ならずも甦へることもあらうが、歳月の經る中には、生々した立派な人間となつて、何處から見ても、一たび死んだことのある人とは思はれないのが多い。

▲容姿がよくつて若寡婦と來ては、前途は知るべしだ。



▲其人の心からいふと、死んだまゝで、一生を送りたいのかも知れぬが、境遇が許さない、世間が許さない(或場合では、本人自から許さないこともあらう)許さないから、甦へる、甦へると、結句其方が樂しくなる、胡せ一度は死んだのかと、自から我身を笑ふやうなこともある。

▲小說家のいふ愛と死との關係は、元より當てにはならないが、強て解釋を下したなら、甲に對する愛を失ふて、更に乙に對する愛の生ずるまで、則ち一幕了んで、次の幕の開く間は死んだやうなものになるかも知れぬ、まア此位のも

のとして置いたなら、格別の間違も起るまい。

▲少々苛酷にも聞えるが、蟲類には冬眠といふことがあつて、蛇のやうな敏い奴でも、蛙のやうなハチ廻る奴でも、冬期になると地中に深くもぐり込んで飲まず、喰はずに暮して居るが、これは決して死んだのではない、春になつて少しく温かくなると、ゾロ〳〵と歩み始むる、小說家の目には、少々不思議と見へはすまひか。

▲罪のない十三四の娘が、潔い姿をして居るのを見ると、如何にも可憐である。

▲十七八の式部連二三人以上に、電車の中に乘り込まれては、田舍の老爺はウッ魂切る『私しこれだから、エレク、カアは嫌よ、こんなに度々スタンドするのだもの』

▲二十二三の卒業式部曰く『私しハスバンドなんど要らないことよ、一生ミスで立通すのよ』

▲ア丶美人果して薄命なるか、將た幸福なるか、これからが、本論に入るのである。

米國だより

在桑港　うまのかみ

一、日章旗至る所に翻へる

◎桑港では日本人在留者が、各所に散在して居るものですから、一月一日以來、數日間日章旗が市內各所に翻へつて居ました。勿論米國の星章旗と交叉してゞあります。

◎天長節のをりには、日本人の軒頭に立て並べた日章旗を見て、白人等は日軍大勝利があつたのかと、日本人に向つて問ひました。

◎此度は陷落の電報が、すべての新聞の第一頁に特別製造の大字を以て、載せられてありましたから、特に日本人を引きとゞめて問ふものもなく、たゞ途中に出合すると、わざ〳〵近よつて來て、萬歲を云つたり、握手をしたりするやうな有樣であります。

二、萬歲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◎萬歳と云ふ語の意味は、英語では Long live! 又は Happy and good luck! でありまして、佛語には vive! であります。

◎然るに今や白人は、日本人を見ると、ロング、リヴなどは申しませんで、怪げな發音で、バンザイ々々々々と申しますのが、面白うございます。

三、ハロー、ミスター

◎是迄途中で白人が日本人を見るや、其呼びかけることばはジャプ！、またはジャプ○○○（卑猥の日本語）と云ひました。これより少しよくて、ハロー、チャーレー等でありまする。此の一日このかたは時々ハロー、ミスター（いや、貴君）と云ふ敬語を以て呼ばれるのであります。

◎白人の店に入つて、何々を持つて居るかと問ひますと、イエス、サー、又はノー、サー（然り貴君よ、否貴君よなどの意）と答へますのを時々きゝました、

四、柔術の稽古

◎おかしい事には、白人等は、日本兵は戰場に於て小さな體で、大のロスキーを仆すに、毎に柔術でやつて居るのだと、考へて居るものが多くありますのです。

◎それで、日本人とさへ見れば、誰でも柔術を心得て居るものと思つて居ます。

◎つい三四日前に、私のとまつて居る所へ、わざわざ出かけて來た、二人の壯者がありました、何の用かと聞きましたら、柔術の稽古を願ひたいと云ふのです。うまのかみとは申しながら、武術などは一向存じません、たゞ筆舌で、半世を過して來ました私でございます。で、「柔術は、私の得意とする所ではない、私は著作者だ。日本語を稽古したいなら敎へてやる」とことば柔かに答へて追ひかへしました。是がうまのかみの柔術であります。

五、貴女の柔術

◎一新聞に見えました。桑港の一令孃が、紐育にまゐりました。夜中に街上でいたづら男におひました。令孃即ち容赦なくランドリと云ふ柔術の手で

其男を道の向ふがは迄とばせまして、シタヽカに鼻血を出させました。令嬢揚言して曰く「わらはは、桑港で日本人に就て柔道を學んだものです。」

◎大統領の令嬢エリス、ルーズベルト嬢が父君と共に柔術の稽古に熱心でありますことは、有名な話であります。

◎これは新しい話でありませぬが、ともかくついでに申しておきます次第です。

六、桑港の諸新聞の意見

◎桑港のクロニクルを始めとして、コールも、エキザミナーも、ブルデンも、エブニングポーストも、皆露將ステッセルの勇敢なことを述べまして、

◎そして日本軍に就いては何と申しましたかと申しますと、「ステッセル將軍の勇壯義烈は申すまでもない、乃木、東郷兩大將の勳功につゞいて之を歴史に傳ふべきものである」と云ふ風に申しました。

◎これ乃木、東郷兩大將の勳功につゞいてステッセル將軍の武勇を譽めましたのですから、日本軍のえらい事はたしかに、認めて居ますのです。

◎勿論、日本軍の無類なる武勇は、彼等にも認めらるべき筈であるとして、私はステッセル將軍について、彼等白人記者の意見に、全然同意する事が出來ませぬ。

七、白人の現金主義

◎今更ならぬ事ながら、こゝに二件を附記いたします。

◎第一、桑港小學校の日本學生排斥問題。これは昨年一旦おさまつて、更に年末に至つて、再燃しましたのが、旅順陷落の電報至るや、いつとなく其問題がたち消えとなつた。

◎第二、サクラメント地方で日本人勞働者を雇はないと、或る部落で決議しましたのが、やはり昨年の暮でした。之も日本バンザイの聲におされて、消えてしまひさうです。

◎同じ白人の中でも、アメリカ人は、格段な現金主義者なのです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人記者倶樂部の集會

△婦人記者倶樂部の集會は、去る十二日の日曜日に淀橋浄水工場の參觀と、角筈の梅園銀世界の見物とを兼ねて、熊野權現十二社の境内に開かれた。

△平素欠席勝の予等も、春心地に浮かされたといふではないが、氣候もよし、天氣もよし、場所もいゝので、申合せの時刻に、新宿停車場の邊に行た。

△こゝには早や數十人の婦人雜誌記者や、新聞社の連中が待受けて居られた、それに紫縮緬被布打扮の今井歌子さんも居られたので一行の氣が引立た。

△浄水場の側の某女學校の前に行くと、又々一隊のクラブ員が居た、婦人連も四五人見た、少々古いが萬緑叢中紅數點となつて、愈々人氣が立つた。

△器械學の素養のない吾々には、事務員の説明が、一々分る筈はないが、何しろ大都會何百萬の生命を繫いで居る浄水の源を見て、大に満足した。

△梅園の銀世界は、今が盛りで、可なりに人出もあつた、場所も廣く、樹の數も多いから、清香鼻を襲ふ心地がして、一句出さうであつたが、出無つた。

△十二社の入口に行くと、キャッ々々、ハッハッといふ聲が聞へた、不思議に思ふていつて見ると、洋服の髯男が、丸髷の妻君を脊負て、立て居た。

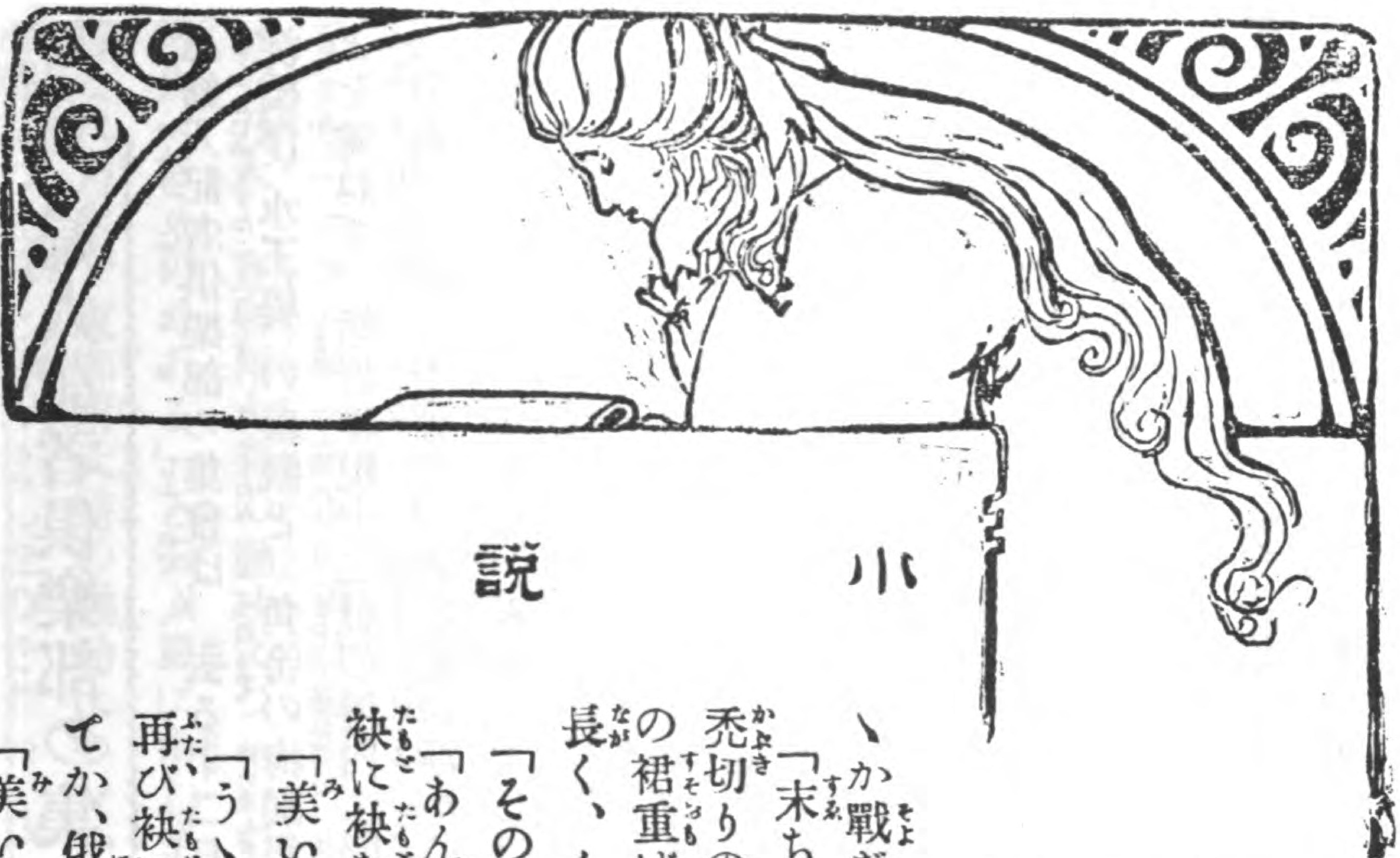
△それを又一人の髯男が、おッ落ちぬ樣に後からチヤンと摑へて居る所は中々頼母しかつた、廿世紀となると世中が變つて來る、是からが眞に女の世界だ。

△十二社の茶小屋の二階で圍碁、擲戯と思ひ〱に遊んで居ると、やがて親子ドンブリが出る、鹽煎餅がでる、女學會の山澤氏の寄附された蜜柑も出た。

△食事が了んでから、女子教育に關する談話も出た、これと取立てゝ云ふ程のことはなかつたが、中川愛氷氏と廿世紀婦人の舌戰は、一興であつた。

△八時頃退散して茶屋を出ると四面蕭寂、霄月が朧ろに池の面を照らして、身も心も寔にすが〱するのを禁じ得なかつた。

△景山秀子といふ豪傑も出て居られたのである。



若紫

佐藤露英女史

上

日向りよき椽に、丸々と眠れる小猫の緋鹿の子の首輪美しう、袖垣に山茶花はら〳〵と散りかゝりて、近く紅葉の朽葉にいさゝか戰ぎあり。

「末ちやん、お庭へ行つて花々取つて來ませう」

禿切りの、眞白き頰愛らしう、友禪の兩の袂に人形抱へて、重ねたる紅の裙重げに立てば、二つばかり妹らしう、此子はお河童にして、やつこ長く、くるりとしたる眼付の惡戯らしきが「いや」と首振りて、

「そのお人形ちやん、私のよ」「あら」、身を横にその手を振り放して、

「あんな事を云つて！、美いちやんのよ」、

袂に袂を重ねて、しつかと抱へ直しつゝ、人形の頭に頰摺りして、

「美いちやんのだね」、

「うゝん、末ちやんの」

再び袂に縋れば、取られまじとてばた〳〵と逃げゆくを、誰に告ぐるとてか、俄に、

「美いちやんが」

と叫んで、兩足據に投げ出しながら、咽喉も破れよとわつと泣き立つるに、聞きつけて走り來し女の、簡口の襦袢の袖、太き手頸に窮屈らしう、周章しく抱き上げて、

「お、、お、、可愛想に、誰が此樣に苛責ましたの」、

皺みし双子の前垂に頰を拭ひやりて、凉しき眼をば見張りて、呆れ顔に佇む方を見返り、

「美いちやんですか？」

點頭きしが、唇戰かして悲しげに、

「いぢめて！」と又泣き出す。

「まあ惡いのねへ、お母ちやんに云ひ告けて、叱らせて上げますから最う泣かないの」

袖無しの被布の亂れし房を直して、

「お孃ちやまは何故然うでせうね、小さい物を苛めて、ほんとに惡いお子だ」

炭團に眼鼻の、さらでも黑き面に底光りする眼を剝きて、後ざまに睨めば、はやおろ〳〵と淚聲になりて、

「だつてこのお人形を末ちやんが取るんだもの、私のものを」

「取つたつて好いぢやありませんか、欲しがつたら貸してお上げ成さいな、意地の惡い」

片手に肩を捉へて、

「姉さんの癖に、吝嗇坊だよ」

と一と小突き、小突く、何故か此方は泣きも立てず、ぢつと押默りて温順しう、

「あい」と抱かるゝ子に人形を差出すを、小さき身に手を振り上げて、口付憎らしう、

「吝嗇坊」

「ほんとですね、其樣吝嗇坊さんのお人形なんか要りませんよッて、お母ちやんに云つて叉叱らしてやりませうよ」

我れ面白氣に云ひ捨てゝ去らうとすれば、

「りんや」

と思はず走り寄つて、見上げたる眼の涙に輝きつゝ、

「勘忍して、ね、末ちやん御免なさい、最う意地惡るしないから」

袂に縋りし風情の可憐らしきを、見返りもせず、

「おほゝゝ、今になつて詫罪つたつて知りませんよ、お母ちやんに叱られるのが恐いもんだから」

立ち塞がりし身を、手酷う押退けて、摺り拔ける時、後の障子を開きて、

「騷々しいねへ、何だいおりんどん」

と、色蒼う、頰骨立ちし險しい眼付の、赤き髮を丸髷に結ひたるが、聲低う云ひて敷居の上にすつと立つ、

「あゝ、乳母さん、又お孃ちやまが苛めたんですよ、だから御新造樣に然う云はうと思つたら、自分が惡い事をして泣きながら可けないつて止めるのさ」

追從らしう差し寄れば、

「ばあや」と小さき手を出すに抱き取りて、

「此後お泣かせ申ちや顏にひいが切れて可けないよ」

「私が泣かせたんぢやありませんよ、お孃ちやまでさ」

身には庇ひくるゝ人もなく、答あればとて下婢共に苛酷まるゝが悲しくて、兩の袖に面を掩ひたるまゝ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しく／＼と泣くを、屹と横目に見やりて、
「ほんとにこの頃は惡くおなりだ、癖になるから言告てお上げ」
云はるゝ儘に、つと袖を取りて、
「さあお母ちやんの處へいらつしやい、來るんですよ」と勢猛く引く。
引き立てられながら、片々の袖に涙を拭きつゝ、乳母の方を向きて、
「御免して頂戴よ、もう仕ないから」
面を背向けて、
「乳母やは存じませんよ」、と素氣なし。
「さあ」と再び手荒う引かれながら、繼母の小言の怖しく、抓め／＼されたり、打たれたり、其の上闇きお土藏の中に入れられねばならず、と身も震はれて、直と椽に座りて了ふに、
「打捨てお置きよ、傍に置かないだつて言告られらあね、さあ／＼、お母ちやんの處へ行きませう、ねえお末ちやま」
丈高き身を反らせて、木綿裙をやゝ長う、落着き顏にそと椽を傳へば、
「この通り云ふ事つたら聞きやしない、よ御座んすとも、其の代りお負けをつけてどん／＼叱らしてやるから」
端無く走りて乳母の跡を追ひ行く。
今日は父樣はお不在、文三の意地惡きには引き代へて、斯う云ふ時何時も詑びてくる、新吉も、父の病氣とて宿へ下りし儘まだ歸らず、何れに潜みても免るゝに由なき苛責の手の、迫り來ては今更に悲しく、思

はずしやくり上げて、

「新や」と呼びつゝ立上れば、目覺めたる小猫、鈴の音可愛らしう走り來て、戯ふれ顔に幼き主人の裾に纏繞るを、

「いや〳〵」

と首振りて、身を退けざま袂のうちに嗚咽の聲小さう、俯向きたる細き首筋に、ちゞい毛寒氣なり。

中

風稍々强う、手向けの花の新らしきも散りて、仆れたる卒塔婆に今降り出でし雨の痕の情なさ、落葉燒きし煙りの黄昏るゝ儘に絶えゆきて、投げ置かれたる竹箒の許に、猶名殘りの一と筋、色淡うそれかとばかり僅に靡く寂しき墓所の夕ぐれを、破れ傘傾げて、奥深き本堂に供養の鐘の音、折からに哀れなるを耳にしつゝ、右に左に石塔の間を縫ひ〳〵て、裏方の垣の破れ、繕はぬ儘に何時か自然と甚れになりし拔け道を、辿り行く十五ばかりの子の、眉濃く、切れ長き眼の清しう、愛嬌深き白き頰のふつくりと、肩に腕に繼ぎ目は荒けれど破れも見えぬ丹精の筒袖、小倉の帶に縞の前垂堅く締めて、左手に藥瓶を抱へしが、垣を潜りて表通りへと右手に折れし時、最前より此處に待ち受けてやありし、眼付面ざし能く似通ひたれど、色はさまで白からず、汚れに縞目も分かぬ肩入れの着物きて、赤き唐縮緬の帶小さく結び、前髪も後髪も無理に上げて引詰めたる銀杏返し、輪に少し足らぬ毛の前の邊りに刎ねたる頭を聊か傾げて、

「兄ちゃん、遲かつたねへ」

と、つと走り寄る。足を止めて、

「さわかい、阿父さんは？」

嬉し氣に兄の腕に捉りて、片足立ちに跳ねながら、
「阿父ちやん、寢て居るよ、遲かつたぢやないか兄ちやん」
又繰り返して、
「待遠しかつたよ」
「然うかい、お醫者樣が手間がとれたんだ」
歩み出して、思ひ有り氣に傾向けば、
「兄ちやん、私お藥持つて行かう」
其れには答へず、妹を見返りて、
「お前、傘なしだね、濡れると毒なんだよ」
「あゝ、私には傘が取れないんだもの」
傘を仰ぎ見て、破れたるを我が方に廻しつゝ、小さき身體に低う翳しやれば、莞爾と甘え顏に寄り添ふて
「今ね、お隣家のおばさんにお芋を貰つたの」
それも聞き流して、すた〳〵と急ぎ足に、
「さあ、早急と歩行んだよ、阿父さんが待ち遠しいや」
「あゝ」
黒ずみて鼻緒の色もなき、草履のやうなる大人物の駒下駄を引き摺りつゝ小走りに走り出して、
「阿父ちやんがね兄ちやん、兄やは何處か惡いのぢやないかつて心配して居たよ」
「え？」と訝し氣に妹を眺めて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「阿父さんがかい」

「あゝ、だつて兄ちやん、時々默つちやつた切りで居るもの、だからなんだよ」

熟と見上ぐれば、何か云ひ度氣に見えしが、軒毎に燈火輝きて、雨に暮れゆく大路の淋しさを眺め廻はして、

「まあ可いや、早く行かうよ」

「鹽梅が惡いんぢやないかね、兄ちやん」

「然うぢやないとも、然うぢやないけれどね主家のお孃ちやまが可哀想なんで時々考へるんだよ」

寒氣に片々の手を腰揚げの下に差し入れて、首を窄めつゝ、

「お孃ちやま？」

「あゝ」と言葉を途切らして、

「可哀想なんだよ、繼子だから衆人に苛められてね、女中なんか、自分等が摘み食ひをして置いて、お孃ちやまの行爲にばかりしちまふんだ」

一向に其れをのみ思ひ渡るか、又默して俯向くを、幼くとも貧の辛さに馴れて、七度八度迎へたる歳月の間、冬枯れの景色ばかりを味ひし胸には、悲しき浮世の相の移り易う、心より、

「繼子なの、可哀想だね」

大人めかしう眉を顰めしが、何とや思ひし、ふと立止りて、

「平常に好い着物を着て居る、あのお孃ちやまかい？」

歩調を緩めて、

「うむ、お嬢ちやま知つてるの？」
「何時か、ほら、私が行つた時、兄ちやんに背負さつて居たぢやないか、彼の奇麗な被布を着て居たんだよ、兄ちやんに聞いたら、始中彼様服装をして居るんだつて！」
「然うだつたかしら、忘れちやつた」
「好いな、私なんか余所行にもあんな着物はありやしない」
打萎れて、
「継子でも好いや、私もあんなに成り度い」
昨夜、凍る月影の許、量り炭片手に下げて、唇紫に染めつゝ、人の軒に暫し泣きたりし。
「苛められた方が好いんだね」
「あゝ」
「馬鹿云つてらあ」
されど、抓りたる痕の脊には痣、咎なくて小さき指先には灸の痕の絶えしことなき哀れさを物語らんともせず。破れたる屏風の内に、四邊は闇となりて、病み臥す父の、又咳き入りてや一人苦しむ。と心急きて傘を妹に渡しつゝ、
「轉ばないやうに來るんだよ」
と雨の中をツッと走りて、路次の門に「按摩揉みりやうぢ」と看板新らしき横を折れゆく、今宵も病み臥す父をば後方にして、妹と唯二人、油煙閉ざす手洋燈の許に、隙漏る障子の木枯を塞みつゝ、内職の手をば夜更くるまでも休めぬなるべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

下

浮世の波は裏町に荒くして、年の瀬の越えも兼ねつゝ、悶掻き疲労れて、母と子は泣寝入りの、経るともなく何時しか一夜は明けたる春の空、父は火もなき角火鉢の許に去年の姿を腕組みの儘、ましてや、門松の緑は軒つゞきの邊りに見えず、屠蘇の香の薫りもあらねど、初日影の平和なる姿は破れ障子にも映りて、初鳥の聲の嫌ひなく此處をも訪へば、淋しき思ひながら氣ばかりは浮き立ちて、昨日の辛さも何を苦しみしかと今はおかしく、いざや此れより寝正月の、我れも春樂しき味は知りつるとて。

内職を休みし三が日の間の嬉しさ、髪は隣家の女房が心遣ひに美しうなりて、さすがは襟に垢も見えず、色は褪せたれど、紫縞の双子の綿入れ、折目正しきを端然と着て、路次の外面に一日懐手の、他人が上ぐる空の紙鳶もおもしろく、姿に似合はぬ大きなる羽子板持ちて、追羽子拾ふに袂の先きを厭ふ、小ましやくれの遊び戯ふるゝ樣をも、嬉し氣に眺めくらせしおさわは、相人にはせられねど我れも共に樂しう遊び過ごしたる心りの可憐らしく、晩は双六と、夕暮れを散りぐ〳〵に別れゆく子の後、我れは今日一日のさまを、兄と共々語り合はんとて、いそ〳〵と路次の内へと曲る時、寳舟の羽子板を袖に抱へし子の、衛衛地色に寒牡丹の大模樣鮮かなる友禪縮緬の被布着て、いさゝか見ゆる藤色紕の二枚、板締め縮緬の紅燃ゆる襦袢の袖をはら〳〵と風に飜へさせつゝ、木履の足許危ふく後方をば走り過ぎしが、やがて再び此方に立戻り、禿切りの頭を右に左にと返して、迂路々々と何をか尋ね迷ふ風情の、はや涙溢るゝまで泣き度氣の顔となりし哀れさを、服装の美しさに眼を奪はれて、氣疎き顔に眺めつめしおさわは、ふと向き返りし其の面を見るより、急ぎ馳けよりて、にこ〳〵と、

「お孃ちやま、お孃ちやま」

と、呼ぶ、見覺えなきか、我れを呼ばれて振り上げたる面に怖れの色動きて、二足三足退きながら、
「だあれ?」
と不安氣に見守るを、夕べの支度に忙しう、色褪せたる繼ぎ〳〵の盲縞の筒袖着て、手桶片手に、溝板踏みつゝ表に立ち出でし新吉の、妹に伴はるゝ、思ひよらぬ小さき人のその姿におどろかされて、手桶持つ手も打忘るゝばかり、我れ知らず走りよれば、目敏く、
「新や」
と叫びざま縋りつきて、面を彼方の身に埋めしまゝ、慕ひに慕ひし日頃の思ひ、責め苛まるゝ日毎の悲しさの、一時に湧き出でゝか、わつと聲を上げて泣き出しつ、心地も惑ひて、物云ふ由さへあらず、狼狽しく抱き上げし途端に、かたりと音して下に落ちたる羽子板、おさわは拾ひ上げて砂に埋れし押繪を、驚き顏に頰膨まして、ふう〳〵と打ち拂ふ、
「何うして來たんです?、よく新やの家が見付りましたね」
漸うと尋ねかけて、己が掌に涙の頰を拭ふてやれば、啜り上げながら、
「りんやがね、りんやと二の宮さんへ來た時にね、旗やの處で、此處から向ふの方へ行くと新やとこだつて」
唯點頭きて、
「きつとお孃ちやまを探して居ますよ、お母ちやんは?」
「居ないの、みんながね、美いちやんをお土藏へばかり入れるの」
袖を手弄びて、泣顏の哀れに、

「新や、歸つて來ないんだもの」
年端はゆかねど、幼き主人が我れを慕ふ可愛しさの身に泌みて、庇護ふものなきこの頃の、嘸や身謐めの思ひに暮すなるべし。と今更に忍ばれて、
「阿父さんの病氣が直りさへすりや、新やは歸ります」
と見上ぐる面に、袖をはらりと落して、
「今日歸つておいで！」
と鼻聲に身を搖動る。
「もう少し經つて……………」
と云ひさせば、遮りて、
「新やが居なけりや、美いちやんもお家へ歸らないの」
「そんな事しちや、猶お母ちやんが叱りますよ」
久し振に抱きて我れも嬉しく、離し度くはなけれど主人の手前、さすがに家内の者の案じ尋ねてやおらんと、
「新やも一所に行きますよ、然うしたら歸るでせう」
「新や來るの？、お家へ行くのかい」
俄に笑顔になれば、妹は聞き咎めて、
「兄ちやん行つちやつちや嫌だよ」
と兄の肱を押へて差し窺く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「新やも行きますよ」と優しう答へて、身をば返しながら、
「行きやしないよ、大丈夫だよ、だけれどお孃ちやまを置いて來なくつちや成らないから、大急ぎで行つて來る間だけ、不在番をして居ておくれ、ね、好いだらう」
そと抱き下して、機嫌取り顔に妹の肩に手を置くを、はや涙浮めて、
「厭だわ、私も一緒に行くんだよ、晩になるもの兄ちやん」
「分らない事を云ふもんぢやないよ、晩にならない間歸つて來るからね、阿父さんの傍にちやんと座つて待つて居るんだよ」
「え」、と頰に口の觸るゝばかり差し寄つて搔い抱けば、
「新や、歸らうよ、お家へ行つたら双六をしやうね」
辨へもなう、腕に縋りて、
「新や歸らうよ」と繰す返す。
點頭き見せて、
「馳け出して行つて來るんだから直ぐだよ、二人ながら行つちまふと、阿父さんが一人法師で可哀想だもの、だからお前丈家に待つて居るんだよ、分つたらう」
龍泉寺町より廣小路まで然まで遙にはあらねど、昨日より容體惡しう、片寢に橫はりしまゝ粥湯も却けて唯現なく眠れる父の氣遣しく、胸も安からねど、
「確守とお不在居して、おくれ、直ぐ〳〵歸るから」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

涙の中に合點して、

「阿父ちやんの傍に待つてるから、早く歸つてお出でよ」

「あゝ直ぐだとも」

幼心の解らぬ儘を語り聞かさば、無益に父の案じや過さんと、

「阿父さんが聞いたらば、出來上つた袋をお店へ持つて行つたと云つてお置き、お孃ちやまが來たなんて云ふと餘計な心配をするから、好いかい、忘れちや可けないよ」

くる〳〵と我が帶を引き解きて、孃樣を脊負ひ上ぐれば、抱へたる袂にはた〳〵と其の肩を打ちて、

「お家へ行くのよ新やと、一緒に來ないの？」

と首曲げて、別るゝ際のさすが懷しうおさわを見下すを、淋し氣に、携へし羽子板を渡して、無言に振り仰ぎしばかり。

「有難う」と打笑みて、

「羽根をつかうね新や、明日もよ」

答へぬ面に無限の愁は含まれつ、しかと帶を前に結んで、一と足二た足足早に歩み出しが、手桶の傍に佇みて悄然と見送る妹を振り返り、

「早くお歸り！、阿父さんが心配するから」

凝視られて、詫びしき思ひの振りに出でつゝ、手桶に手を掛けて涙含む眼を伏せながら、

「あい」

「直つき歸るよ」

云ひ捨てざまに走り出づるを、

「直ぐだよ、兄ちゃん」

と思はず叫びて跡を追ふ時、

「さよなら」

と暮れ殘る巷に晴々しき聲。腰上げ深う短き裙に、露はなる細き足寒う立ち盡せば、兄の脊に友禪の袂色麗しう舞ひて、風消えて星輝き初めし大空に奴凧高々と唯一とつ、手繰りも兼ねて佇める主は何れにや。今宵又立別れて、小さき臥床に、おのがじゝ汚れなき夢の何をや結ぶ、寶舟は括り枕の下に、昨夜敷きたるまゝにして。

（終り）



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文林

江柳

春雨のふる江の柳もえしより
　つりふねならぬ船も浮へり　高崎正風

入江川ゆきかふ船にさはるまて
　岸の柳はのひまさりけり　鍋島直大

春くれは氷もとけてなかれ江の
　岸の青柳もえそめにけり　北小路随光

青柳のつゆおちそひて流江の
　玉もゝ春のいろふかむらむ　本居豊穎

うちなひく春のいり江の柳原
　朝緑にもなりにける哉　黒川真頼

のとかにも霞のおくになひく哉
　ほのみしま江の青柳のいと　津軽承昭

しもかれにさひし入江も青柳の
　糸のみとりに春めきにけり　小畑美稲

春雨のふるえの岸の青柳の
　糸の緑のふかくもある哉　町尻量衡

船はつる入江の岸のいとやなき
　とまの上まてうちなひきつゝ　梅溪通治

すみのえは松のみおふときゝしかと
　春はやなきの糸もかゝれり　竹屋光昭

いとたるゝ柳にはかり風みえて
　前田利鬯

入江のとかにかすむけさ哉　日野西光善

つのくにのなにはほり江の春の色の
ふかくもみゆる青柳のいと　水野　忠敬

なには江の岸の柳のわさみとり
糸のより／＼もえそめにけり　常磐井堯熙

なにはつの梅かゝさそふ春風に
堀江の柳うちなひくみゆ　澁谷宗隆教

のとかなる入江のきしのたま柳
あやをる波に影うつりけり　千種　任子

よと川のいりえにたてるいとやなき
のとけき陰に魚やよるらむ　小倉　文子

水ぬるむ堀江の岸の柳原
いつとはなしに春めきに鳧　町尻　量弘

鷺のとふゆくへをみれは春雨の
古江の柳もえいてに鳧

家もなきいりえの岸のをちこちに
けふるとみしは柳なりけり　園　祥子

なにはかたあしまの氷とけしより
入江のやなきもえそめに鳧　姉小路良子

伏見山梅かゝおろす夕風に
やなきそなひく巨椋の入江　坂　正臣

春の色を松にもみせてすみの江の
岸の柳はもえそめにけり　近藤　久敬

花見船つなくところとなりぬへし
したり柳の靡く入江は　小池　道子

うら／＼と入江のかすみたちこめて
汀の柳わさみとりせり　鼓　兼子

船とめし入江のきしの柳かけ
袖さむからぬ春風そふく　北島　糸子

春霞日にたちそひて三島江の
入江のやなぎわか緑せり
津守 好子

なにはかた入江のなみもうち霞み
のどかになびく青柳の糸
平田 三枝

ふねよする入江の柳もえいでゝ
水さむからぬ春風ぞふく
吉田 愛

歸りきて海人はをふねや繋ぐらむ
湊細江の青柳のいと
狄原 嚴雄

橋わりてゆく水すめる流江や
こゝろもなびく岸のあをやぎ
小杉 榲邨

春風に氷もとけて流江の
柳なびけりあなたこなたに
植松 有經

白魚とるをふねもみえて川ぐちの
いりえの柳はる風ぞふく
小出 粲

あた浪はあとなくなぎし湊江に
なびくけぶりは柳也けり
中邨 秋香

舟つきの火かげかすめりくれ渡る
いりえの岸の柳がくれに
鎌田 正夫

船の帆もうごかぬ春の夕かぜに
入江のやなぎうちなびくみゆ
大口 鯛二

かげうつす柳のいとにつながれて
入江はなれぬ船もありけり
猪熊 夏樹

鷺のとふ入江はくれて柳はら
釣する人のかへりゆくみゆ
滋野井 實麗

湊江のつゝみの柳あをみけり
つなげる船に錨はあげども
遠山 英一

うつほ木となれる江口のいとやなぎ
いくよの春かくりかへすらむ
加藤 義清

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

官幣大社賀茂別雷神社に在りける程出征軍人の武運長久を祈るとて里人の詣で來るを見て詠める長歌並に短歌

下田　春興

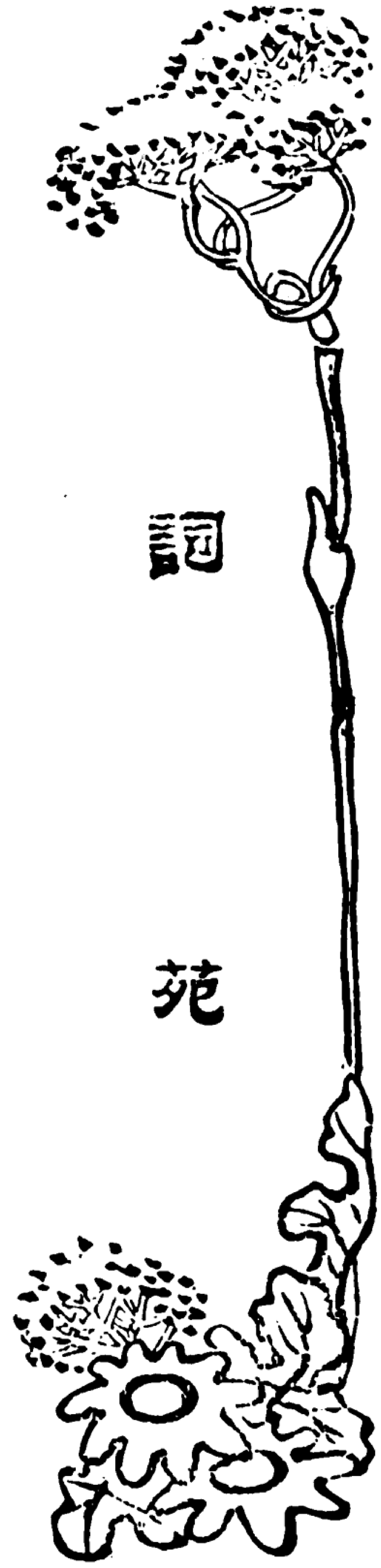
かぜまじり　あめのふる夜も
あめまじり　かぜのふく日も
ひと日だに　おつることなく
ひと夜だに　かくることなく
代々の親の　いつくやしろと
さとびとや　ねぎごとすらし
みづとりの　賀茂のやしろの
みやびとの　とのひどころに
たゞひとり　わがもりをれば
けふもまた　きのふのごとく
みたらしの　ながれにさえて
かしはでの　おときこゆなり
八ひら手の　おとひびくなり
みいくさの　めしのまにまに
あだうたむ　みさきとなりて
さとことの　わかきかぎりは
こと〴〵に　いでたちぬれど
矢だまの　わざはひもなく
ほこ太刀の　きずもおらせず
つゝがなく　もなくことなく
おほことを　はたさむまでは
あまかけり　そらかけりつゝ
見そなはし　まもりたまへと
しがちゝの　いのるなるらし
しがつまの　いのるなるらし
かぜまじり　あめのふる夜も
あめまじり　かぜのふく日も
おこたらず　ひとひもおちず
おほかみに　あふきこひのむ
あはれ里人

反歌

うつせみの　ひとはちからに
かぎりあれ　かみをたのむの
ほかやなからむ、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

詞苑



從二位男爵黑田清綱先生撰（代撰菊池武則先生）

菫

天

靜岡縣濱名郡和田村六一番地　竹内みつ子

むかし誰かゆかりなれはや花菫
　色なつかしく咲き匂ふらむ

地

三重縣津市西新丁　神田みよし子

つみあまる少女か袖にうれしさも
　こほれてみゆる花すみれかな

人

麻布區東町四十七番地　林環子

やすらひていさや摘てむすみれ草
　ゆくての野邊に花のさけれは

甲

むらさきのいろのゆかりの菫草つみてかへらむつゆにぬるゝも　尾道　片山松子

春の野のけしきもいよゝ添へにけりこゝな菫のはなのさかりに　旭川　後藤きみ子

この朝け妹かゝきれにむらさきのいろなつかしきすみれ花さく　長野　小泉鐵女子

乙

かすが野の霞むひまより小女子かゆかり色こきすみれつむみゆ　愛媛　せき子

ゆふ月の影にすみれのはなさきてゆかりの色ににほふ野へかな　奈良　天野照子

むらさきのすみれ匂ひて花むしろ敷はへたりと見ゆる野邊かな　本郷　山口寧子

春の野におもふ友とち打むれてつめともあかぬはすみれかな　相模　鈴木こう子

めてゝ摘むをとめか袖にまかふらん若むらさきにすみれ花さく　瀧野川　松本まつ子

神奈川　鈴木勉子

ふまれても色なつかしく咲きにけりつみてもゆかむ野邊の菫を　上總　高石とよ子

むらさきの色なつかしく咲きいてゝ野もせに匂ふ花すみれかな

（以下到着順）

愛媛　高橋茂子

思ふとちはる野にいてゝなつかしき菫つむ子やたのしかるらむ　備後　高坂たゞ子

かすみたつのへの芝生のつほすみれ花にやとりて蝶のねむれる　熊本　田代喜和子

きのふまてつほみなりしかすみれ草けさは芝生に花さきにけり　埼玉　横田秋子

望月のおほろかなかのつほすみれ人にしられてはなさきにけり　牛込　後藤喜與子

をしけれとつみてや母のつとにせんあかぬゆかりのいろの菫を　大阪　船越小仙子

かすか野のわか紫のつほすみれゆかりのいろのなつかしきかな　三河　榊原きく子

菫[illegible]けにゆかりの色のうすくこくすみれ匂へるのへのゆかしさ　松山　上原のふ子

はなさきし野へのすみれを少女子は袖ゆたかにと摘やつむらん　松山　山崎匡子

花すみれにほへる庭にふる雨もむらさきそゝくこゝ地こそすれ　松山　京子

すかのれのなかき日れもす野へにいてゝつめともあかぬ花菫哉　松山　梯たけ子

わか庭のまかきのうちの花すみれ日毎に見れとあかぬいろかな　京橋　高橋翠子

紫のいろもゆかしきはなすみれかめにやさゝむかさしにやせむ　秋田　古瀬惟子

春駒にふみのこされて牧のゝにひとりすみれのはなそにほへる　壬生　まさえ子

うちかすむ芝生の野邊に色深きすみれ摘みつゝくらしけるかな　赤坂　松本くすゞ子

ふるさとは淺茅となれとなつかしき春はすみれのはな咲にけり　麻布　林艶子

きゝすなきてふもたはれて菫さく春の野邊こそ過きうかりけれ　豊多摩　駒澤さだ子

なつかしきゆかりのいろにあくかれて今日も摘しつ菫咲く野に　赤坂　岩谷滋子

むさし野ののへはさなからむらさきのくもともみえてさく菫哉　京橋　渡邊名加子

まなひやはやすみなるらん春の野に菫つむこのけふはむれつゝ　金澤　北隆子

菫草いろもゆかしく咲きつゝくのへにはひとのたえせさりけり　富山　大木磁子

庭もせにさくすみれの花さかり色むらさきにおけるしらつゆ　福井　杉本濱子

草かりのわらへいこゝろみちの邊の芝生に交るしろすみれかな　金澤　土井壽子

むらさきの根はふ横野に咲き出てゝ訪ふ人多きつほすみれかな　高田　吉田花子

賤の男にすきかへされしすみれ花にほひもうせす蝶のねむれる　福井　今村田鶴子

夕雲[illegible]落つるかたより暮れ初めてむらさきにほふすみれ野の空　芝　松永德子

つみとりてをとめか髮にかさしたるゆかりの色の花すみれかな　伊豫　山本千鶴子

花やさしいろなつかしきつほすみれふる春雨にさかりなりけり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

赤坂 岩谷梓子

故さとの春やむかしのやととへはこゝにすみれの花そにほへろ
前橋 林腐子

春の野につとふ少女を見送りついへぢのつとにすみれつみなん
京橋 渡邊初子

きゝすなくこ松かはらに咲いてゝつみてもにほふ花すみれかな
前橋 竹のふし

かの廣きひはりなくのにてを取てすみれをつみしともはいつくに
本郷 甲藤わか子

けふも又すみれ咲のに日は暮ぬあかぬゆかりにかへさわすれて
埼玉 戸田折香

大和なる奈良の都のはなすみれたかなつかしきいろにそめけん
加賀 古邊とみ子

はろくれは一本すみれ萌えいてゝこけむすまゝの戀つかにさく
岩代 和美

何けなくふしてうたひろあしさきに踐れて匂ふしろすみれかな
攝津 きみ子

かき送る文にこめてもはなすみれゆめに咲くらん人に見せはや
神奈川 菊子

しけりおふ草葉の蔭にやさしくもめたちて見ゆるすみれ一本
伊勢 海野すみ子

春の野にあそふ一日は大かたのひとのこゝろもすみれなるらん
東京 太田はつ子

菫つみし去年の一日をおもひ出てゝ鄙なかしきこゝちこそすれ
下野 細野きみ子

けふもまたすみれつみつゝ城山のふもとの野へに遊ふたのしさ
下谷 五十嵐せい子

花むしろ敷はへたりと見ゆるまでのへを匂はすつほすみれかな
本所 辰巳季子

あれはてしかきねに匂ふつほすみれ春のかたみと花たはにせん
上野 飯田かつの子

里遠きのすへまてきておもふとちすみれつみても遊ひつるかな
日向 岸上はろ子

すみれ花かさして笑めるおと女子のふり袖ちかふ三つの蝶舞ふ
下野 木村節子

あれ庭にゆかりの色のそてたれてひとりすみれのなに思ふらん
河内 田中しずの子

おもふとち菫さく野にうかれいてゝけふ嬉しくもつみてける哉
常陸 栗原もと子

見るからに優しくもまた美しゝすみれは女子のこゝろなりけり
常陸 市村久子

心あるしつか男の子のなさけにてかられし後に咲くすみれかな
本郷 大枝つね子

けさも又出て摘えしつほすみれかほりみちたりふつくゑの上に
越後 山田なみ子

すかのれの長き春日を樂しくもゝとりともとすみれつみけり
大和 栗山倹子

小原女のみちゆくふりにかたりけり野邊は菫のさかりなりしと
秋田 細谷はろ子

みいくさの歸りまたろゝうなひこをなくさめて摘ひすみれかな
三河 榊原てる子

あひらしきうなひ小女か袖よりもこほれて匂ふすれみひともと
愛媛 さゆり子

をさな遊ひ語りかわしてゆくのみち色なつかしきすみれ花さく
愛媛 薫子

めせと呼ふ小女か籠にはなすみれ物おもはしくいろうすれゆく
愛媛 美佐子

あはれむかし偲へとともかたまつさに匂ひこほるゝはな菫かな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つほすみれさき匂ふ野の春の風たもとゆかしくかをりぬるかな　肥後　佐々小學子

春日和さけにうかるゝ花かけにこゝろつくしのすみれ咲くかな　能登　秋の花子

野にやまにつみゝ菫のいろ〳〵を雨のこよひはしなさためせむ　京橋　高橋珍子

つみためし若菜のうちにましりけりこきむらさきのすみれ一と花　下谷　岡田春子

來て見れは思ふとちさへ居合はせてかた野の菫つむそうれしき　陸前　吉澤いと子

つむもをしつまねはかさす花もなし今さかりなる庭のすみれは　熊本　田代綾子

乙女子かつめるたもとに色みちてむらさき匂ふつほすみれかな　大坂　中江なほ子

にはとりのもてこしたれか庭のおものまつの木陰に菫はなさく　河内　田中たつの子

ききす鳴くかたののみ野のさくらかけにほひゆかしく菫花さく　肥後　佐々有鄰子

亡友のう戀たまひにしつほすみれ匂ひそめけり去年にまさりて　札幌　笠原まき子

ゆく春のかたみにさくかすみれ花ま袖につまんかへさわすれて　米澤　木村旬子

あれはてし軒にたれかすみれ花ゆかりもとめてひとり匂へり　但馬　田尻保代子

すみれ草つみてうれつるわが袖にゆるくもかよふ春のはつかせ　下谷　岡田柳子

はなすみれうたいつつみし紫野いろにしのふろゆかしともかな　大阪　山本いせ子

小石川　新井ちよ子

里川のつゝみのみちをつみとりしすみれこほれつ誰れかゆきけむ　大和　栗山高子

やれ垣にむかしなからに咲いてしすみれの花をつむはたか子そ　埼玉　横田有磨子

菫つむ少女に問へはゆひさしてをしゆるかたやうふすなのもり　肥後　德永萬壽子

春の野にかへさわすれて處女子か赤もすそひきすみれつむなり　神戸　今岡みさを子

朝また我が庭の面に咲充てるすみれのはなをこころともかな　岐阜　中島もと子

あめふりて野川のきしの菫すみれひとよに色のふかみけるかな　肥後　德永而有子

春の野に心うかれてをと女子かつはなましりのすみれつむなり　埼玉　横田やな子

雲雀鳴野へのおちこちふみならしけふもひれもすすみれつむなり　信州　吉田落葉子

山里のうはかかきれもなつかしくむかしすみれの花さきにけり　肥後　德永成子

きてみれはこき紫に春の野はすみれのはなそさかりなりける　伊賀　佐々木まさ子

少女子の机にかさるひともとのかをりゆかしきはなすみれかな　兵庫　海乃潤子

すみれふや一と二たひらと庭の面すかたやさしきむらさきの花　三河　永井さい子

春雨のふる野の小野にそてぬれてすみれの花をつむはたか子そ　神田　山田ふみ子

すみれさく野をなつかしみ一夜ねし名殘はそてにのこゝむ朝つゆ　和歌山　高内さくら子

摘むも惜しつまぬもおしくおもふかなしはふのなかゝ菫一もと

備後 高坂ちえ子

我かいなの庭の園生のすみれくさみつよつふたつ花そさきけり
本郷 西岡古代子

ふるさとの淺茅か原のつほすみれ色のみむかしかたみなりけり
山口 村上操子

むらさきに花こそ匂へつほすみれおなしみとりの色にもえても
松山 田村多豆子

たかつまに摘はやされてすみれ草はるはゆかりの色にさくらむ
松山 よし子

摘むもなしつまぬもうしと暫くはすみれさく野にたち迷ふかな
津 茨木みす子

さほひめの春のころものいろににてむらさき匂ふ花すみれかな
名古屋 不破きみ子

春雨のふる野のおしたきてみれはこゝろすみれの花さかりなり
常陸 初澤篠子

雨ほそきうつらの床のくさむらにすみれのはなの白くもおる哉
本所 三坂鋭子

ゆるく吹く風に匂ひなわかちつゝいろもゆかしく咲すみれかな
本所 三坂きやう子

少女子かかたみにあまる草のなかの一本すみれ香やなつかしき
埼玉 澤田仲子

はひこりし野邊のしこ草しぬらけて色香ゆかしきすみれ咲なり
埼玉 澤田房子

すみれはなへ、そ蝶はとひゆきてひとり春野に匂ひぬるかな
埼玉 澤田榮子

琉わしのつゝきはそれぬつはものも心うこきぬ野邊のすみれに
兵庫 山内乃 初峰子

鳥のねにうかされまよふ廣きのにかほり床しいすみれさきゐつ
秋田 古瀬とよ子

つはくろにやとをまかせてけふも又すみれの床に日を暮しけり
秋田 古瀬りく子

この頃はいくさにこゝろひかれつゝすみれ花つむ人そすくなき
日本橋 小林芳子

ゆふひはり月もすみれの床の上にほのみゆるまてつみ暮しけり
香川 鎌田光惠子

むらさきに匂ふはる野のはな菫つむへきころとなれるたのしさ
小石川 青木たま子

けふも又はるの野守となりにけりゆかしく匂ふすみれつみつゝ
肥前 藤松りか子

春くれとつむ人もなきふるさとにひとりすみれの花のあはれさ
埼玉 日向おさ子

君來ませ色なつかしきはなすみれ君の爲めとて匂ほひぬるかな
名古屋 端佐子

菫草摘むもつまぬも惜しきとてみつゝたるさまのいちらしきかな
羽後 鈴木しゆた子

われとても菫花にてあるならは君くるにはにさかましものを
東京 浦田闌子

うつくしきゆかりの色の花すみれ妹かかたみにかさしてしかな
仙臺 村田さく子

犬ころかかすみの奥に浮れゆく道はんとはせて兒らすみれ摘む
福井 牧かね子

すみれ草むらさき深くさきいてゝあさる少女のそてかほるなり
富山 大木滋子

庭もせにさくやすみれの花さかり色むらさきのつゆのおくまて
壬生 春野化子

うなゐ子にともなはれ來てけふもまた菫摘みつゝ暮しけるかな
陸前 前田河千年子

菫つむ少女こゝろのやさしくもそてふりはへて野へにたはるゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

少女子がまゝことにとてつみためしすみれの花に蝶そたはるゝ　岡山　小山松枝子
紫ににほへる野邊のつほすみれいさ摘みためてしはな束にせん　壬生　花野つゆ子
遠山にゆきはのこれとのとかにもすみれは庭にさきそめにけり　陸前　前田河みさを子
さと川のかなたや杼の野邊ならむすみれかさせる少女子の見ゆ　札幌　小山かく子
はるなかうとふ人もなき草庵はひとりすみれのはなそ友なる　滋賀　保榮子
いくそ度春はふれどもむらさきのすみれさく野は床しかりけり　薩摩　松原みれ子
日はしろうかすみにやまはたちきえてふもとの野原菫さくなり　播磨　横田春枝子
雲雀鳴く芝生の野邊に色はえてつはなまちりに咲くすみれかな　壬生　松野みどり子
ゆく春のかたみとみえてすみれくさ花もゆかりの色にさきけり　春野　田島みよ子
雨晴れてかすむ山田のほそみちにすみれ一もと咲きにほふかな　壬生　下町榮子
賤の女が畑打ちやめて道の邊のすみれなかむるさまそのとけき　壬生　松山しげる子
行く先きを忘れはてゝそ眛しける咲のさかりのみちのすみれに　壬生　花野咲子

電車

天

いなつまの車ひく世と成しより馬のちからもたのまさり鬼　麻布流東町四十七番地　林艶子

地

稲妻の影のことくにはしりゆく車や御代のひかりなるらん　埼玉縣川越町　横田すま子

人

いなつまの車にのりてさく花の雲の上のにわそふみよかな　秋田縣由利郡本莊町裏尾崎町十三番地　古瀬惟子

甲

稲つまのひかりのほとに足とくも市のちまたをゆくくるまかな　瀧野川　松本まつ子
いなつまの光にはしる小車はひらけ行くよのすかたなりけり　北多摩　駒澤さだ子
いなつまとはしる車は大御代のすゝむにつるゝすかたなりけり　赤坂　松本くす子
いなつまの糸をたよりの車こそひらけゆく世のしるしなりけり　京橋　高橋翠子

乙

久留米　田中まき子
絶間なくめくるくるまもいなつまの糸の力によりゝなりけり
本郷　甲藤わか子
稲つまのひかりのほとにみやこちをたゝつかのまに行くるま哉
(以下到着順)
京都　森本秀子
老人の孫の手ひきて小くるまにのれるもたのし御代のたまもの
福井　今村春子
月に日にひらけ車のためしにはいなつまさへも引かれぬるかな
越後　吉田花子
みやこなる友のたよりぞ樂やましこゝにか、ここに電車かよふと
伊勢　湯野すみ子
都路をあまねくはせてひとみなの利益をはかるくるまなるかな
神奈川　鈴木勉子
ひらけゆく御代の光りはいなつまに車とらせてはしるけふかな
下谷　五十嵐せい子
稲妻のひかりのほとにいち早くみやこちまたをゆくくるまかな
静岡　竹内みつ子
いな妻のひかりのほとに行くくるま老も若きもやすきみよかな
本郷　山口琴子
まかね路かにしろくるまに打のりて市中やすくゆきかよひけり
羽後　鈴木しゆん子
ひく人はなくともやらむはりかねをたよる車のおろよなるもの
日本橋　鹽田關子
開けゆく御代の恵みにくるまさへいなつまよせてはしらする哉
本郷　小坂みさを子
いなゝまの車ゆきかふおほみよになびく御旗はかちときのこゑ
福井　牧かれ子
ひらけ行く御代のめくみはなにものゝ引くともみえてはしる小車

富山　大木滋子
足つかれいまぞ電車にぬるなんとおもへばはやもつきにける哉
名古屋　滿佐子
馬もなくけむりもたさてはしるとてゐなかの祖母はゝと不審顔
仙臺　村田さく子
過けしもなく回る電車を見るにても世ははりかねのいとろ一すち
奈良　天野てる子
開けゆくみやこにしげるまかねちをかよふ電車のにぎはしき哉
神奈川　永島波子
はりかねのいと便よき御代なれや千里のみちもつかのまにして
大阪　山本いせ子
いなつまのちからを人のたくみにて千里ゆきかふみよ仰ゝかも
小石川　新井ちよ子
いさゝかの力こもると見えなくにうこくは神のちからなるらむ
但馬　田尻保代子
おほみよにうまれあひてぞ電のちからにはしるくるまをもみる
日本橋　小林芳子
かしましくやみゝをやふるいかつちのくるま過ゆく跡の淋しさ
香川　鎌田光ゑ子
稲妻のひらめくまにもたちまちに進みてはやしこれのくるまは
小石川　青木たま子
馬もなし烟もたてすまかねちをすゝみゆく世のくるまはやしも
肥前　藤松りか子
いなつまにひかれてかよふ小車は土のうへゆくこゝちなもせす
伊賀　佐々木きさ子
世のなかの進むためしやいなつまのひかりにたくむこれの車は
河内　田中たつの子
はりかねの只ひとすちを命にてえれきくるまのかけはしるらん
熊本　田代綾子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

電の名にもそむかていちはやくすゝむくるまそくすしかりける
熊本　田代きわ子

いなつまか車の中にとちこめてちまたやちまたゆくそくすしき
大坂　中江なほ子

かな道のとゝろくみれはいなつまのひかりよりとくはしる小車
陸前　吉澤いと子

山賤もうはさしてけりはしりゆくみやこ大路のこれの小くるま
旭川　笹乃雪子

學術のいさをはいかにたかからん手ひきのくるま電車とそなる
京橋　高橋珍子

あつさ弓矢よりもはやきくるまかな都おほちもつかの間にして
三河　榊原てる子

進む世のわさはくすしくはりかれの糸ひとすしにゆくくるま哉
肥後　佐々小琴子

天つちのなしのまにまにいなつまのかけよりはやりはしる小車
秋田　古瀬とよ子

いなつまのくるまよにこそ引れけれ雲ゐにのみと思ひしものを
私田　古瀬りく子

いなつまのくるまにのりて久かたの雲ゐに通ふひともありけり
大和　栗山俊子

電のかけよりはやくすきにけりとゝろくおとをあとにのこして
長野　小泉德女子

たれをかも行も返るもいなつまにひかるゝくるまいと早くして
上總　高石とよ子

いなつまの光をかりてひとすちの糸をたよりにはしる小くるま
京橋　渡邊初子

やちまたにひきまはしたる針金をつたふ電車のかすそひゆく
京橋　渡邊名加子

なるかみとともにひらめく稲妻もくるまひくよとなりにける哉

めつらしと思ひし汽車はむかしにて今は電車のはしる御代かな
前橋　林　浤子

いかつちにひかれてめくる小車のとくも進める御代そうれしき
赤坂　岩谷滝子

いなつまのひけるくるまは絶まなくみやこ大路を行かよひつゝ
芝　松永德子

學校のかよひち獨りけふもまた電車のまとよりさくらなかむる
播磨　横田春枝子

なるかみと人もおそれしいかつちに車ひかするよとはなりける
長野　田島みよ子

さきいそく花のくるまをいなつまのはしらする社嬉しかりけれ
秋田　細谷はる子

はりかれにちからをこめてすゝみゆく大路ゆかしき御代の小車
岡山　小山松枝子

ひらけゆく御世には空の稲妻もあかきはやめてくるまひくなり
麻布　林　環子

月に日にすゝむ御代こそうれしけれ火みつのちからからぬ小車
陸前　前田川千年

ひらけゆく御代のたくみのたくまれしまかれの上をとふ電車哉
陸前　前田河みさを子

さりてより三とせにたらぬ都路のいなつまくるま音にのみきく
薩摩　松原みれ子

ゆかさりし遠きたひ路をたやすくもかよふもうれし黒かれの道
埼玉　澤田房子

電のまたたくひまに千里はしるくるまはみよのたまものにして
肥後　佐々有郷子

稲妻のちからによりて小くるまのやすくも走しる君か御代かな
本所　三坂きやう子
三河　榊原きく子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

進みゆくみよそ嬉しきくろまさへ馬もいなかてはしろなりけり　神田　山田婦美子

乙女子かおそれおのゝくいなつまも車ひきゆく世とはなりにき　牛込　後藤きよ子

妙のまにともにあひ見むうれしさもかゝろ車のあれはなりけり　伊勢　京子

みやこ路はくすしき車ゆきかひて開けゆく世のさまそ見せける　松山　上原のふ子

大空のものとのみ見しいな妻にくろま引かする世となりにけり　三重　神田みよし子

まかねちもひらけ〳〵ていなつまの引くのまに〳〵はしろ在車　三重　茨木みす子

まかねちはいとゝひらけて一すしのけふりもたてす行く車かな　松山　田村多豆子

ゆけは歸りかへれは往てひくいとのいとなくめくる車なりけり　名古屋　不破きみ子

朝またき都のちまたおとろ〳〵ひゝくはかよふくろまなりけり　山口　村上揮子

稲つまにめくる車のちからにははかなきかけはそはらさりけり　愛媛　さゆり子

いなからに千里の道も小くろまの進みゆく世のたのもしきかな　長野　吉田落葉

いなつまの名にはたかはす西ひかしみやこおほ路をめくる在車　岐阜　中島もと子

すゝみゆく棄さま〳〵にいなつまのくろま現世に逢にけるかな　神戸　今西みさを子

雷車てふ物をはかりて行くひとの君のめくみをいまそ知らなん　兵庫　海乃潮子

坂神を涮道なせしでんしやをはすきくわかたにいなか人の見る　肥後　德永萬壽子

すゝむ世そおとろかれぬるいなつまの車をたくむことも有ける　埼玉　横川秋子

稲つまの光をり〳〵あらはしてちまたやちまたゆくくろまかな　肥後　德永庭子

御代なれやすすむかまゝに電のちからにはしろくろまにそのる　埼玉　横田やな子

賑はしきみやこ大路をゆきかへりはしろくろまやいなつまの影　肥後　德永雨有子

御代なれや千里のみちもつかのまにはしろ車はいなつまのわさ　大和　栗山高子

はりかね雨いと氣りよき世なるかなみろまにすきゐでんき小車　三河　永井さい子

一筋にひくはりかれのちからにてはしろくろまの早くもある哉　本郷　河岡古代子

あを柳の都おほ路はあめにくれてひかりよそへる電車すきゆく

●女鑑兼題

	文	歌
五月	庭砧蛙	落花を惜む
六月	百合 松下禪尼	樹陰に蚋を舞きて

▲隨意投稿　短文、短歌、今様、新体詩

▲注意　投稿規則を熟覧せらるべし規則に違ひたるものは採らず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

華族女學校教授 井上賴圀先生撰

戰死せる軍人の未亡人に贈る

天

山城八幡町 鈴木菊子

慫打つ霰の音にも吹きしく風の寒さにも遠征の君たち偲ばれ候折柄けたゝましき號外ハ鈴の音して投げ込まれし一葉取る手もどかしく讀みもてゆけばこはいかに戰死將校中に御良人様の御名を拜せんとはあまりの事にうつゝごとゝもおぼえ侍らず唯涙のみ止めがたく候。まいてや君の御心の程如何におはし給ふらむ生還期すべからざるは軍人のならひ今日あるべしとはかねての御覺悟に候はんも幼き御子の無心にまち給ふを御覽遊ばされては日頃雄々しき君にもげに斷腸の思ひせさせ給ふらむと一入推しまゐらせ候。さはれ千歳一遇の此のみいくさに臨ませ給ひ而かも旭に匂ふ山櫻の散るを惜しまぬ日本男子が眞の鑑を示させ給ひしせの君の御いさほしはた御ほまれ何にか例へ候べきげにもめざましき御事と存上げ候。さし過したることながら唯この後は二葉芳ぐはしき撫し子を培ひそだて給ふこそ亡き君への又なき御回向と存ぜられ候。此の花は御生前殊にめで給ひしとの心ありてにや優しうもにほひ出で候まゝ一枝まゐらせ候御手向下され候はゞ私のみか花もさこそ本意に候はん。あなかしこ。

地

和歌山市屋形町三丁目八番地 高内さくら子

拙き文して一筆申上まゐらせ候扨も御良人様には昨年より征露のため御出陣遊ばされ數回の戰闘にいつも抜群の功を立てさせられ候御勇名は其の都度新聞紙上にて拜見仕り家内一同限りなく御喜び申上ぐると共にひ

たすら御武運の長久を祈り居申候さるを此度某所の戰に彈丸雨飛の間を事ともせず御奮鬪　折柄計らず敵の砲彈命中し天晴壯烈なる御戰死遊ばされ候趣承知仕り大に驚き入まゐらせ候御良人樣などは未だ少壯の士官に居らせられ前途多望なる御身を以て一朝戰場の露と消えさせられ候御事國家の爲實に惜しみても尙餘りある事に御座候御家内樣の御愁傷嘸かしと深く御推察申上候併しながら是れまで度々の御勳功と申し又此度は殊に難所ときこへし某所を御先登遊ばされ候程の御手柄を遊ばしての上の事にて候へば少しも御殘念の御事は之れなきのみならず報國の赤忠はかくれなく其の御芳名は我國光と共に洽く世界になりひゞき申べく武臣としての御名譽はこれに過ぎたるものはおはし申さず候されば御悲しみの中にも御心を慰さめられ御形見の坊樣の御養育に御心を用ひさせ給はん事を偏に念じ上まゐらせ候なほ申上度事は濱の眞砂の數つきせず候へども取りあえず御悔みのみ申上まゐらせ候何れ其の中御神前へも參拜いたし申べく候かしく

人

北海道札幌郡篠路村六四　笠原まき子

北山おろしの例ならずさえにし夜半ばかりや降り出けん冬ごもり淋しき木立も賤が伏家も一夜のうちに銀のよそひいみじう、見渡すかぎりたゞ綿の樣のながめなれどかゝる深雪にふりはへて訪ひ來る人もあらねばいと心寂しき折柄み心こめ給ひし御消息うれしと打ち開き候へばいつにかはらぬ御水莖の跡御美しう拜しまゐらせ候ところ思ひきや背の君樣には御戰死遊ばされ候とか。あなた樣は申も更なり御一統樣の御心の内如何と御痛ましさの極みにこそ。御出陣　御勇かりしは昨日とのみ覺え候に今此の悲しき御知らせに接しまゐらせんとは只だ〳〵夢の心地こそ致し侍る。背の君樣は世に武士と生れさせ給へる御甲斐の候よ。よしや御身は野邊の露とし消え給ふとも香しき御名は歷史あらんかぎり千萬歲の後までも傳へらるゝ御事と存じ上候。さはいへ、心弱きは女の常に候へば朝な夕なの事に付けても御口惜しうおぼへ給ふらんと御

推察いたし申候。され共御心づかひのあまり御いたづきなど起させ給ひては却て御不孝かと存じ候。唯何事も御國のみためと思召給ひいよ〻御兩親樣に御孝養あそばされ御忘れがたみの武夫樣を敎へ導き給ひなば御良人樣にも安らかに天つみ國に眠らせ給ふらんとぞ存じ上候。申上度き事も數々御座候へ共女心の千々に打ち亂れ筆のはこびもあやしく相成候まゝ萬つ御目もじの折にとて取敢ずかくなん。

下谷　岡田柳子

宣戰の詔拜しまつりてより早一年餘りになり侍りぬ其長き月日我み軍は一として勝たざるはなく一として敗らざるはなく日の本のみ光はいよ〻高く輝き渡り西比利亞の野に靡かぬ草木もなきに至りしは偏へに我大君の大御稜威と幾多の將卒の君が忠勇とによる事と吾等ひとしく畏み奉るになん。あ〻此光榮あるみ戰に天晴大和男子の技倆を示しみうせまし〻み軍人よあ〻此譽ある君に列なり給へる介閨の君よ哀れ朝に夕に恙なかれと祈り給ひしならむ勝関あげて歸りまさむ日を待ち給ひしならむさるを此訃に接し給ひし其み心やいかに其御驚きや如何に思へばそゞろに袖ぬれていひ出でん言葉もわかずなん。さりながら高き御譽れは外國迄も響き渡りを〻しきみ名は幾世の後迄文もて記され語りもて傳へられ長しへに朽ざらむ亡き君にも日々に聞ゆる勝関の聲をだに地下にしろしめさむにはさこそ甲斐ありとや思されむ。君よ夫人よこを御心の御なぐさみにみ國の幸を祈らせ給へや。まいて御かたみの男の子君さへましませば御父君が御志をうけつぎまして天晴御家名あげ給ふらん只管にとく生ひたちまさむ事をのみ待ち参らするになん。

大阪　船越小仙子

此間おたのみの御產衣針の運びも覺束なく候へども今朝やう〳〵縫上げ候。もはや臨月の御事ゆゑ唯今も持たせ上げんと心構への折から號外の鈴の音けた〻ましく何事の吉報かと投込みし一葉手にとり候へば撫順方面の大捷と初號活字の目に入るも嬉しくまして當方面の大捷は偏に御良人塚崎大

尉様の御働きとあるにいよゝ嬉しく讀下し候に最後の一節……あはれその最後の一節を繰返して胸とゞろき夢か現か言葉も涙も出でず母もろとも顔見合せて今更の溜息のみに御座候。この千載一遇の時機に我も男児と生れし嬉しさいでや腰の貞宗眞向にかざして思ふがまゝに遣付けんと勇ましく雀躍して首途したまひし其時の御姿今も目にちらつき候ものを、さてもいた〱しやまだ二十路に足らぬ御齡若木の花をむざと散らしゝ殘り惜しさと母は悲の涙にたゞ〱打しめり居候。去年の初春相生の松かはらぬ契りをこめられし夫君の出征をその八月若葉の陰に遙々みおくりたまひし以來雨にも風にもの御心づくし嘸や彼方の空の方様の胸にもヒシと通ひし事に候はむ思へば夢のやうなる斯世にも候ものかな。おくれたまひし御嘆さしみ〱推測りまゐらせ候へど大事の〱御忘形見はそなた様の御胎内におはせば唯今持たせ參らす御產衣を力草に今日にも御初產の紐やす〱と父様似の利子様うませたまはむことそなた様一代の御手柄とこそそれのみ祈りまゐらせ候。かしこ。

熊本　日高かず子

去年の今日此頃を思ひ出てはといひおこせ給へるげに如何ばかり偲びおはしますらん。心ありげに散る山櫻を征衣かろげにうけ給ひ數多の兵ゐていさましう征路の途に出立せ給へる御面影今も猶目のあたり見まゐらする樣なるを其花の匂ひ與れをのみ殘して沙河の流の歸らずなりたまひし御事今更夢とのみあはれ夢なれかしとこそ思ひ候へ。爲つゝましうおはす上に御覺悟いみしく取亂し給はぬ御有様に御後の事もるゝ方なくすまさせられて其御故鄕に歸らせ給ひしよりは姑君におはします世の如く御仕へ遊ばされ末賴しき猛様御相手に我軍の勝報の號外をかつ〱手向となして御吊ひの由御魂もさこそは嬉しと聞取らん承るだに袖ぬらし候今より二十年の辛抱とは更に〱强き御覺悟に候よさる賢き御心になとさからふ世の波風の候へき父君の御志つかせ給はん猛様の二十年後の御面影早う見奉らまほしう御成長を陰ながら祈居候。婦人會も御在會の折のやう豫備病院勤務怠りなく君まさばとは取り〱の絶えぬ噂の聲に候。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御慰問使御來院の折の寫眞一葉御目にかけ候朝鮮飴は猛樣に珍らしからねど清正公の昔も忍ばれて御名の猛々しき武夫となり給へとの心に候阿蘇の煙のたえまなく君戀る友ありと御物思ひの折ふしに御心遣り給へかし願ひ候よ。

あなかしこ。

岡山　小山松枝子

人々のさわげる號外拜見いたし候ところ某方面の激戦中御良人樣にはめざましき御働にて其塲の露と消えさせ給ひし由誠に驚ろき申候。かねて御覺悟の上とは申ながら相生の松片枝枯れにし御悲嘆のほどさこそと推しまゐらせ候まして忘れかたみなる撫子の生ひたち美しく頑是なき御振舞など見そなはしては御心のうちいかがあらん座ろに涙の催され候。されど皇國の連戦連捷はひとへに戦ひ給ふ君たちの男しき御動作によることゝて身を軍籍におかせられ千載一遇とも申すべき晴れの職に御討死遊ばされしは國民の忠勇を外にしめし御一門の名譽を長へに傳へられて大和武夫のかゞみと世にも人にも唱はれ給ふらん。思へばなか〳〵に御羨しうさへ存じ候今更ふつゝかなる身の申すまでも候はねど只管御歎きに沈ませ給ふは誠に心細く存せられ候さればこの名譽ある軍人の妻としてなき君への御回向は御遺子の御養育に御心を注がせられ父君のほまれを一しほ高め給はむやう勤めらるゝことと存じまゐらせ候。いつれ參上よろづ聞え上ぐべく候へどもとりあへず御悔まで。かしこ。

小石川　新井ちよ子

こその春御別れをつけしより明暮心のみはたとらるゝものゝやがて一度の御めもじもなく又の春をも迎へしをかな扨て申すも涙の種ながら去るゝの號外の何とはなしに氣づかはしく購ひ見れば夫の君の御討死とか今更何と申上げん言葉もなく呆然たるほとに御嘆きの御文さへ玉はりては胸も塞がる心地してそこはかとなき鳳出のみせらるゝに、ことに去年の四月夫の君を見送りまゐらせ都の空に御分れをつげられし折り涼しき眼に涙も見せず心殘りなう出られてよ武雄は天晴この手に育てあげむとの御言葉に夫の君樣の面さし輝き渡りしを思ひ見ればさこそ快く戦死を遂げられつらんとこそかれても大君のへにこそ死なめと夫の君の常々口誦まれしが別れし里にさく花のやがて手向けとならんとは誰しも思ひまうけぬものを、さはいへ御身のなげかれなば御兩親にまでも涙をうつすことゝなりかしづく道にもたがはなむ恐にも深き悲しみを包み給へよ妾も近き内には都の春をつとにして妹と共に訪れてこそ御慰めも申さばやと心懸け居るなれさぞ武雄樣も大人しくなられしならむみよ子樣はものいふほどになられしや其の二人の面かけこそなき夫の君の形見なればゆめおろそかになし給ひそ。

あなかしこ。

播磨　横田春枝子

さても驚かれぬる御知らせを承るものかな、沙河激戦の文字は度度新聞にて讀み候へどもよもや其折かゝる悲みのあらんとは思ひまうくる由もなく今迄も神佛に御武運長久を祈り參らせしこそなか〳〵に恨めしうてあまりの事に涙も頓にはいで申さず候まして二世をも契り給へる御前樣の御嘆きの程こそ如何ならん父上は金鵄勳章佩びて歸り來ますなりと威張り給ひし和子樣の今はいじらしの御目に涙たゝへて父君の御上問ひ給ふとか兼て御覺悟の上とは申ながら其折の御心中推し參らせては胸もあやしう亂れて秋の闌けさのみいやまさり御氣の毒さに申上る言葉も御座なく候、さりながら思ひ返し候得ば君の御爲國の爲五千萬同胞にかはりて命を九鼎の重きに置き身を鴻毛の輕きに比して高き〳〵名譽の光の中に花々しく果て給ひしなれば御家門の譽は此上もなき事と思召し無理にも樂しう御あきらめ遊ばされ御かたみの和子樣御大切に天晴亡き君の御嫡子として恥しからぬよう御育て遊ばさるべく候

うとき私共の中上る迄も御座なく候得共御前様の御務は已れよりいよ〳〵重くなり候得ばゆめ〳〵御歎きのあまり御身をそこね給はぬやうくれぐれも念じ上候勇しき御戰死を承るにつけても過る月御出征の折丈高き御身に軍服着け給ひて今ならで我等の眞伎倆を發揮する機會の又あらんやと勇み給ひし雄々しき御姿の今猶床しく仰がれ候最後の御功こそさぞかしと推し參らせ候よろづは御目もじの上に申上べく先は取あへず斯くなむかしこ。

肥後　徳永廣子

月日に關守なく暮いとふかき今日このごろ御一統様いかにすぐさせ給ふらん。御良人様の御心の中しのび奉るも涙に侍べれど國のため天皇の御ためほの月日戰かひ給ひつひに沙河の激戰に名譽ある神の身とならせ給ひしもいといさましきわざには侍れど實に世界未曾有の此度の戰爭に仇の膽をも潰さんばかり大日本生れのますらをの本分をつくし給ひし勳功とこしなへに史上にいちじるく殘したまひしこそ國のほまれ御家のほまれ菊池の里の名までも世に知れ候畏けれども菊池の社の大神もいかに嬉しく御家を守護させ給ふらん、しかるに御もと様にも天晴なる御氣性かくましましてこそ御留守居も美事につくし給ふかずかず深く感ぜられ侍るされば此後とても御心をはげまし給ひいと猛くうるはしく育だて給ふらん御子息方を御樂しみに御教養あそばし御成長の曉には亡父君の御あとをつがせ給ひ、あはれ勇士とならせ給ひて亡き御靈をなぐさめ給ひなばいかばかり嬉しくおぼしめすならん、今日しも文案の中よりとりいだしつる御良人様の御消息に雄々しき御筆跡をくりかへし侍りて後の御紀念とは思はざりし其まゝ御寫眞の前に香花と共に手向奉りの短册には

しき島の大和の花とちりはてて
　君が勳功は累代にかくはし

御内きみの御心を察し奉りて

かくはしき君がいさをは花と散りて

のこる木蔭のいかにさびしき

愛媛　高橋茂子

昨日今日そぼ降る雨の淋しさに今宵は如何におはすらん元より御覺悟も聢かなる君の返らぬ御くり言はよもおはすまじとこそ御察し申侍れどさもなき者さへ軒の玉だれしめやかに何となう哀れ身にしむなる況して悲しき御便り得てしより御袖ひるよしなき君にしあればさぞやそれよりそれにと思ひ出多く如何ばかりみ心細くおはすらん。素より御良人様には御力の限り御身の限り國家のみ爲に盡され候て御芳名つきる時なくいとも御名譽の御戰死なれば御本懐におはすらんも中ながら殘る御家族わけても御許様の御身の上今更ならねど深く〳〵をしはかり參らせてはかげながら同じ思ひの涙にかき暮申候、されど何事も國民の義務御國への御奉公にしあれば務めて私情をなげうち給ひ疾く御心をそゝがれ必ず御歎きのあまり御體をなそこない給ひそ今よりは亡き君に御かはり遊ばし内外に御用もしげからむ御身の一しほ御心強からではと存申候、世には悲しみにもなか〳〵に極りなく上にも上のあるものにて候よ、たゞ御年こそめされつれ未だ親御もおはし且また男の子の君さへおはし候なれば今日の御歎もいつしか少と過去りて遠からず樂しき昔に返り給はむにくれ〳〵も夢なしとのみ嘆ち玉はで今よりはひたすらに御子様御成人に御心を注がれ給ひ亡き君の御靈を安じ參らせられん事專一に候先は思ひ出のまゝ亂筆を顧みん遑もあらでかきつけ參らせ候努々おしなにとり給ひそかしこ。

但馬　田尻保代子

背の君には去る頃某所に於て御奮戰の際天晴なる戰死をとげさせ給ひしとか、戰場の常とは申せ今更なる驚きに頓には御悔の言の葉もいで不申げに人知れぬ御袖の露けさこそ如何に雄々敷み心にも任かせ給はぬ御事といとゞ數思ひやられ候へ御出征以來酷寒嚴寒の御障りは元より各所に轉戰被遊しも微傷も負ひ給はで度々勇

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しき武者振の御噂さ承るにつけ尙益々武運長へにましませと只管祈り奉りしものを、殊には未だ春秋に富ませ給ひ行末有望の青年士官と望みを一身に集められ給ひしなるに、今將た拔群の御偉烈と勇健の御英姿を追懷し奉りては一日〳〵新なる哀悼の情添ひまさる心地のせられ申し候。そも戰場に花と散り雪と消ゆるは武夫の本分と常々のたまひし御當人に於てはさぞかし御本懷におはすらんも未だ一人の忘形見だにおはさず淺からぬ比翼の御契も半ならずして後れ給ひし御悲みは左こそと推し測り參らせ候へども嗚呼萬世不滅の勳功と感歎おき玉はざりし軍司令官閣下を始め奉り國の内外有らゆる人の賞讃を博し畏きあたりよりも異例の御沙汰をさへ受け給ひし高き譽は長へに皇國の史上に輝き渡り幾多後進の爲め朽せぬ好鑑とならせ給ひし御光榮をしもせめては御心やりに思し明らめ給ひて、亡き御靈の御祭ねもごろにいとなませらる樣ねぎ奉り候。あなかしこ。

前橋　竹のふし子

くもり勝なる此頃とて何となく晴やらぬ心地せらるゝ折柄鈴の音けたゝましう投げ入れし號外手に取るより早く目に映りしは二號活字にものされし御主人樣の御名なれば胸躍らして讀續けゆけば思ひまうけぬ名譽の御戰死遊ばされ候趣日頃の御覺悟の程はよくよく存じ居候へ共今かく其の報に接しては誰か嘆かぬ人の候べき況て御父君の御顏だに知り給はぬ御幼兒無心に笑み給ふを見らるる御許樣の御胸中偏に推しはかり參らせ候去ながら一死報國は武將の常とて常々御口に遊はし候御主人樣の御心には嘸かし御滿足の御事かとも信じ參らせ候去にても斯る大功を立て笑つて永き眠に就き給ひしは御許樣日頃の御内助行屆き後顧の憂のおはさればこそいと床しく存候此の後とても御子樣御養育の大任を負ひ給ふ御身なれば御養生專一に御追福の程祈上候申上度事は數盡せず候へ共胸迫り筆も調はねば餘は他日を期することとして只々日頃の御覺悟まげ給はぬ樣念じ上候遠隔るの身に任せず心許無くば候ものから身の及ぶ限りは厭ひまじく候儘妹とも思召し何くれとなく御心明し給はりたく亡き君の好み給ひし當函館林產の麥落雁壹折小包として差出し候儘いさゝかながら御靈前へ御供へ被下度候先は取急ぎ御弔詞のみ申上候　かしこ。

伊豫　山本田鶴子

もとの露末の雫定めなき世とは申しながら御良人樣御出征後日もまだ淺きに國のため君のため天晴れ名譽の戰死遊ばし候よし其報に接し給ひし御胸中そもやいかに遠察しまつるだに御同情の淚止めあへずなんさるにても心のみ戰場を走せめぐりて病めるものゝもだえ苦しみ果敢なく露ときえにし人々の悲しみに思ひくらぶれば譽れ高き御良人樣などは武士の本懷を遂げられしなれば羨み思ふものもありなんせめては御忘れ片身の勝男樣人並勝れて御さかしきを力草にとて、御身御大切に遊ばさるべく候實は早速參上御慰めも致すべきをこゝにも主人遠征中ゆゑ不本意ながら文して御悔み申上げ候返す〳〵も御身御大切に御心を用ゐられたく祈り居候　かしこ。

薩摩　松原峰子

昨日の新紙にて拜見いたし候へ共僞かなられば心さわがせつゝ公報を相待ち居り候らひしに殘念にも御良人樣には過る激戰に御勇ましく御戰死遊ばし候由、兼ねて御覺悟の上と申しながら日々にもの心づかせ給ふ和子樣のつみなく御したい遊ばす御あり樣など御覽ぜられてはいかに御胸つぶるゝ思ひにおはすらむと推し參らするだに淚とゞめあへず候さは申しながら私共の如くはらからにも男子なく古へより曾ても聞かぬ此度の大み軍に一人の從ふ者とて候はぬは實に殘念とも口惜し共申樣なくつれより御許樣の御上をのみうらやみ申居りしものを御良人樣には萬代にくちせぬ御武勳を殘させられてみ國の爲めの御戰死なれば御一家の御名譽實に此上もなき御事に存じ上候申上るまでもおはし候はれ共みどりの松の木間より散り行く花紅葉は殊に床しうながめられ候へばと

きはかきはに色かわらせられで若木の櫻おほしたてられむ事をのみ祈り參らせ候まづはとりあへずかくなん　かしこ。

常陸　勧澤簾子

雨降れば雨や染まなん風吹けば風や燃えんの紅梅の園に淋しくも朝な夕な雅筆執りてやるせなくもこの世をおくり給ふ御許樣の此の頃は如何に候よ。その昔共に短かき髮をおさげに結び海老茶袴に紫の小風呂敷を胸にかゝえて手をとりつ學びの庭にいそしみし時私には兄さまの候て未來は軍人よと語られしがその兄樣が御許樣の未來の夫の君よと幼心にもなんとなう羨しく思ひ候ひしよ。初めてお兄樣にお會ひ申せしは忘れもせじ士官學校を卒業の御祝ながらにと御歸省あらせられし時に候よ。黑き御眼しまりたる御口秀でゝ高き御鼻何となう雄々しく候て快活らしき御顔を拜せしよりは御許樣の益々羨しく候て月朧ろに櫻散りしく夕など端なく思の種となせしも幾度なりしか。歡樂の裡に三十七年の春を迎へ候て東も西も只遣り羽子の音と空に舞ふ紙鳶のひゞきのみ高き夕御許樣には目出度も式典を上げさせられ四隣皆平和の聲の滿ち渡りしよりいくばくもなく遠き〳〵滿洲の野に勇々しく夫の君の赴かれてはや一年餘りいづくの御戰にも恙なしとの御事誠に武運强き御方に候よと蔭ながら喜び居り候ひしがさんぬる黑溝臺の戰の際果敢なくも敵彈に貫かれて名譽の御戰死なされ候と聞きし時如何ばかり驚き候ひしか如何ばかり悲しく候ひしかましてまして〳〵御許樣の御身の上を考へ候ては只涙に咽びて泣き伏し候。其後御許樣にはこの世をあじきなく思しなされ青柳に似たる御髮を切り捨てて紅梅の閣に朝な夕な風月を友として御暮しなされ候由いつかは御伺申さんと存じながら先は御弔辭まであら〳〵かしこ

備後　片山松子

今日の戰報にて背の君樣名譽ある戰死をなん遂げさせ給ひ殊には數多き人々の中より撰ばれ給ひいとも重き任務を千辛萬苦して遂げ盡し給ひしとの事げに讀み終りし時は恰も夢路に入りし心地して暫しは呆然と致し候かれて御覺悟の事とはなし候へどもさすがに御心の内おしはかり參らせてもたゞ〳〵熱き涙に袖ぬらし候。さもあれど此度の戰ひこそ長へに平和を保つ爲めの義戰なれば凡そみくにゝ生れしますらをのかゝるみいくさに從ひ得るもこよなきほまれなるをましてや背の君樣にも御出征以來處々にて御勇戰遊ばし武功かくれなかりしに遂に此度拔群のいさほしを立て潔く散り給ひしこそかへすがへすも哀悼の至に存じ候されど君よ好しや屍を異國の土と化するとも芳名は千歲の末まで傳はり候はんにいたづらになげき給ひそ　かしこ。

名古屋　小倉繁子

其後は如何にわびしく御くらし給ふやらん御察し參らするも胸せまり申候。あわれ三月五日と云ふこその今日こそ背の君の勇みに勇みて廣土なるあだし野に出で立たせ給ひし日になむ其凛々しき御姿の程實に古の名高き武士ものかはとひたすらに目出度いさほしあげて歸りまさむ事をのみ祈り參らせしを。儚か物の一年たゝぬ間に戰場の花と散り給はんとは實に思ひもかけざりきさはれ御譽ある御勳功御名と共に幾千年の後までも輝やき申すべしさるに就けても御許樣が兼ての御覺悟承り實にかゝる君ありてこそ背の君も思ふまゝ國家の爲につくす事を得しならむと只々感じ入申候。そも是れより後の御責任いと重く御家の柱となり給ひ一つは老ひ給ふ親君をいたわられ一つは忘れがたみの御子達をはぐくまれん事こそ亡き御靈に對する御勤と存候。末筆ながら一しほ御身御いたわらせ給ひてよ。

神戸　今西みさを子

野も山も花に匂ひていと長閑に覺ゆなる今日此頃御許樣には如何過し給ふらむ思へば去年の皐月遠く萬里の征途に就き給ひし背の君には御出陣以來各地に御轉戰御武運强く微傷だに負せ給はで常に御勇壯なる御活動あらせられ御功も尠らざりしに同じ長月遼陽の大戰闘に參加せられ某司令官指揮の下に目覺しく御奮戰遊ばし

抜群の御功名揚げさせ給ひ潔く御戦死の由諸新聞紙の競つて御悼惜申上るを見るに付ても躰ての御性質に渡らせられ候へば御當人の御本望は申に及ばず御老人様の御満足左こそと御察申上候左れど御許様の御心地如何ならむと斜なき事さへ思ひまつりて座ろ悲しく存じ参らせ候併し今度は日清戦役にも彌増して仁義の皇軍向ふ所敵なく開戦以来連戦連勝國民の歡喜喩ふる物になし是偏に陛下の御稜威に依ると雖亦直接戦闘に参加し給へる御良人様初め多くの人々が義を泰山の重きに比し命を毛鴻の輕きに致し一意任務に服せられし御功とこそ存じられ候左れば畏くも陛下にはそが勳功を嘉せられ名譽此上なき金勳鵄章に有難き御沙汰さへ下し給はりし由御一家の御光榮此上や候べき申上る迄も無之候へ共御良人様の御名譽の御戦死をして永久に輝し給ふ様御許様の御奮勵こそ亡き方の御爲又なき御吊慰ならめと存上候先は右迄　かしこ。

近江　采澤芳惠子

人は喜び狂ふ花鳥の春を秋の最中とも御怨み遊ばすらん御心の程御察し申すも涙の種に候、思ひ返せば去年の此頃なりき明日は御出征と云ふ前夜漉絹をのべし様なる霞める月の影をたのみ心ばかりの別宴を開きましたる折柄軒端にかほる紅梅を見そなはし嗟何日見ても氣高い花よ我も汝の如く床しき香をかほらせて滿洲の花と散らんづと微笑ながら仰せられつる勇ましき御姿の今も目に見るやうにて其紅梅は今年も今を盛りなるに花の散るをは待ち玉はで御言葉の如く唐土の雪に床しき香を散らして軍陣にての名譽の御戦死御自分にはさぞや御本懐の御事と存しまゐらせ候處諸新聞とも筆を揃へて花々敷御最後を賞賛致し居り候そを御心やりのはしともなし玉はらすてやは、折柄その紅梅も一枝折りまならせ候まゝ露散らぬ間に御靈前へ御供へ下されたく花もさぞかし嬉しふ思ふらんとも存候。此の後は只々忘形見の御子様御養育遊ばしまた來ん樂しき日を御待ち遊すこそ亡き御靈に對しても何よりの御供養と存しまゐらせ候兎角御歎きは御身體に障り候まゝ御用心然るやう願入候

札幌　小山かく子

赤倉大尉殿には沙河附近の會戦に日本武士獨特の強襲隊を引卒し激戦五時間の目醒しき武者振りを此世の名殘りとし遂に御陣沒遊ばされ候趣只今號外にて拜見あまりの御痛はしさに御許様の御胸のうちや如何ならむと御悔みの言葉さへ俄に出申さず候。『名譽の戦死なり満足し玉へ』『生者必滅會者定離とあきらめ給へ』『御無念の程御察し申すになむ』など世の常の御挨拶申上げむも好ましからず。聖書の御教に死者の復活あり古來幾千年間幾億萬の教徒ら之を信じて慰めを得たり智者學者勇者賢者富者亦等しく之を信じて來世の生命を望みつゝ百難に耐へ萬難に勝てり死は萬事の終極にあらず死は永遠の別れにあらず此御教はわれも亦信じて疑はずそこに慰めあり希望あり聖者の德とも申すべきか。別封聖書一巻竹越氏の基督傳一册御目にかけ候御熱覧の上は書中より天來の慰め來るべしと相信じ御一家のため上天の祝福を祈り居り候何れ夕刻まかりいで緩々御物語り致すべく候。かしこ。

本郷　西岡古代子

小さき胸にも滿洲の空の氣遣はしく今朝も逸早く新聞くりひろげ候處こは如何御良人様には御戦死遊ばし候よし案より御首途の節にもその昔唐土にありとし聞きける麒麟閣はいざ知らず我魂は九段の坂上に凱旋せんと雄々しくも言ひ殘されしに貴女様にも御覺悟の事ならんとは存じ參らせ候ものから今も倚片しく袖に殘れるありし昔の夢を辿りて御心中さぞなと御察し申上候さはいへ只跡なき雲に憧がれて涙の谷にさまよひ給はんより御子息勇様の母たる勇氣もて御心を取り直し御教養專一に心懸け給はんことこそ彿に事ふる道ならんかと存候餘はお目もじの上にて　かしこ。

名古屋　不破きみ子

噫今更に捧げ參らする言の葉の露と消えにし御良人様には過つる沙河の會戰にいとも名譽の軍陣に雲がくれし給ひしは躰ての御覺

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

悟の上に候ひつれど如何にたけき武夫の妻とは申せ女性の御身には又萬斛の思ひあまりて在りし昔の偲ばせられ御歎きの種にもとつい不覺の涙の繰言くりかへし女々敷こゝろの出で待りし回顧すれば去年の秋御出征の前の日御壯容に接し候ひし時語らせ給ひし御言の葉は今ぞ紀念と成りて御懐かしさも一入になんしかはあれど生者必滅は人生の常なるに況して古今に例なきこたびの大國難にあたり大君の御楯と成り給ひ屍は滿洲の土と化し給ふも御績は千年の後も尚朽ちず日本男兒の御本分をつくさせ給ひしはいよいよ武士の御面目なれば仍後世の御譽を御諦め章の種と成し給ひ御許様の御身御大切に遊ばし給はん事専一に存じ上候

兵庫　山内　方初峰

戦死せる軍人の未亡人に送る回顧すれば去年二月の初め世にも聞えし隣の國の不仁不道を懲さんため仁義の軍を發せしよりは申も畏き事ながら我　大君には日夜御心を煩し給ひ諸將校を始め多くの士卒は家を思はず身を忘れ一意君の御爲め國の爲めと千辛萬苦の厭ひなく盡くす誠の神に通ひ何處如何なる苦戦にも人の驚く勝を得て進み進みし勇ましさ我日の本の同胞は申までもなく外つ國人も座ろ感じ居るとかや御良人様にも御召に應じ御出征以來度々の御手柄天晴れ我日の本の武勇の程を御示し遊ばし給ひしを最も嬉しく存じ一日も早く目出度凱旋の程を祈り居り參らせ候處計らずも〇〇の戦に名譽の戦死と承りし時は夢かとばかり打驚き參らせ候御身の御心中嘸かしと推し參らせ候へ共君の御爲め國の爲めにはと兼ての御言葉を察し參らせ候へば御本人には定めし御本望と存候さりながら日頃御父君の目出度御凱旋をのみ待ち居給ふ坊様の明日よりは如何におはさんかと御痛ましさに座ろ涙にくれ參らせ候例へ身は仇し野の花と散り果て給ふとも香ばしき御功名は輝く朝日と諸共に千代萬代までも海の内外に輝き申すべしとこそ申上候までもなき事ながら只御後は靈祭怠りなく坊様の御教育にいそしみ給ひ一意に御身を厭ひ給へかしあなかしこ。

羽前　木村旬子

承り候へば御表様には此度の戦に花々敷御討死遊ばされ候由兼て御覺悟の上とは申ながら御許様の御痛くのみ覺え候。ましてや御年よられし母君の杖柱とも頼み給ひし唯御一子のかくと聞き給ひなばいか許りに在しまし候はん。常々の御氣質に入らせ給へば何程か敵の奴原をさんざんに打敗りて勇ま敷御戦ひに遊ばし候らん是ぞげに武夫の鑑とや申べき。さ候へば大君の御爲大御國の爲に忠義をたてられ候御事御家門の御名譽此上もなき事に候へば必ずくゝ御力落しなく御身御大切に御忘れ形見の撫子に父君の御心を繼かせ給ふこそ憚りながら唯一の御追善かと存上候。些少ながら御香料のしるしにとて一封差上候まゝ御靈の御前に御供へ被下度いづれ後刻参上の心組には候へ共取り敢へず右まで　かしこ。

福井　杉本濱子

其後は一ひらの文も參らず打過ぎ候ところ兼て御遠征中の御良人様には旅順包圍總攻撃の折柄敵彈のため斃れたまひし由誠に驚入り候元より御覺悟の上とは存候へ共敷ならぬ私すら止めがたなみ袂の涙なれば況して御身の御なげきはさぞかしと推し上候。されどたとひ御身は砲の煙と消えさせ給ふとも朽ちせぬ御いは御垣の内にさへとどめられ雄々しき績の程は幾千代までも史の上に輝き給ふ御事なれば此をせめての御あきらめ草とも思しめし給ひて御心惱ませ給はぬ方却りて亡き方様の御魂もあまがけられて冥土の道とやらんにていかによろこび給はんと存ぜられ候何卒御身一入御大切に遊ばされ度先づは右取あへず御悔み申上候　かしこ。

福井　岩橋はな子

承り候へば御良人様には過日旅順の戦ひにいと勇ましく御戦死遊ばされ候由誠に驚ろき申候常にかたき御覺悟は御はし候へども定めしくゝ御許様にも御驚ろき遊ばし候はんと深く御推し申上候御戦死の有様はいとも細かに新聞紙上にて拜見致し候誠にくゝ潔ぎよき御最後にて實に軍人たる者の鑑にて御身は花と散り給ひ候へ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

共芳魂長へに香ばしく永久の誹り草にて候今や旅順の我手に歸し日章旗高く風になびくも皆これ御良人樣はじめ幾百の諸將士潔よく忠義にもゆる御身を犧牲となし給ひし結果にて高き〳〵御勳は如何ばかりかくほまれある軍人妻と〳〵呼ばれ給ふ御うらやましさよ申上る迄もなく候へ共御遺子なる勇樣百合子樣の御教育御大切に御良人樣の御名をいよ〳〵輝しなさるべく陰ながら祈り居候くれ〴〵も御身御大切に御注意遊ばされ度候早速に御目もじ致候て御悔み申上べきところ海山のへだて遠くいかにともせんなく何卒御ゆるし下され度候御いとまも御在し給へば御子達連れ遊ばしかすみたなびく田舍の春を見物遊ばされ度姉も是非にと申居候まづは右まであら〳〵かしこ

短文

廢園の月

土浦 大久保たか子

今し人なき内庭に彳みて、こし方行く末を忍ぶ妾は、去ぬる年、滿州の野にありて、草葉にそゝぐ戰場の露と消え去りにし兄上を思うて、人の身のはかなきに袖しぼるなり。

おゝ月下雪をあざむく白梅の花、汝は嘗て妾の幼かりし折兄上の手づから植ゑられしもの、あゝ花は咲けども主はゐまさず、汝は今誰の爲にか笑みを洩らしつる。

さはれ汝は實に兄上の心つくしの紀念なり、兄上の名は汝の如くにかゞはしく、兄上の勳は汝とその色を競ひつるよ、あゝ、汝は今ぞ花なれや、しかも萬古消えざる名譽の光ある無形の花のそれといかに。

顧れば月は西に落ちなんとして廢園ものすごく、冷かに握れる一枝の花、心ありや風なきに散る一片また二片。

結婚式

石狩 小山春枝子

一曲の讚美歌につれて新郞新婦は式場の正面に導かれた、極めて嚴格なる八字髯の牧師は祈禱、聖書朗讀、勸告と順序正しくやつてその式が濟むと會衆一同は直に別室へ退いた、そこには茶菓の設けがあり、くさ〴〵の餘興が仕組まれてある、お行儀よきお雛樣然たる二人の主人公を取りまいて、室はさ乍ら春の海の如くし。隅の方に居た一人の青年が、『なぜお雛樣達は笑はぬのだらう…』と云へば……『おかしくないからサ……』とお隣りの人が口を出すると『さうよ、あのお人方は可笑くなくツて嬉しいサ……』とまぜツ返したので、鹿爪らしいお主人が吹き出すと、夫を合圖に一坐は又どツと鬨の聲を揚げたのである、扨も目出度き集ひ……。

鶯の初音をきく

播磨 横田春枝子

きさらぎも目前ながら、吹風もはだ寒く、折々は白きものさえ散りて、山邊に立つ霞もまだ深からねど、花鳥の春とし云へば、何となう心も嬉しく、空のけしきものびらかにて、いつしかと待れし、庭の梅が枝も、五ツ六ツ匂ひそめたるに、鶯の初音きかねのみ、心た

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らぬよう思ひつゝ、一日二日と過しつるけふ、み佛の花あさるべくあちこちと見めぐれば、雨上りの空しめやかに、木々の梢そこはかとなく、霞み渡れるけはいの美しく、紫だちたる雲のたなびけるなど、云ひしらず長閑なるに、しばしたゝづみ眺る折から、かなたのなよ竹の小枝ゆら〳〵とうごきて、二聲三聲おぼつかなげに、鳴出でたる、其音の優しくわか〳〵しくて、ろうたげなる小女の、唄ふ唱歌を聞くがごと、いと〳〵嬉しうてなん。

出征の兄に送る文

田端　鈴木しげ子

涙の露を形見に止めて、瀛笛一聲、新橋に惜しき袂を分ち、參らせしは、昨日の如く、覺ゆれど、はや一年餘りの長き夢とは、相成申候此程は、寒さ激しくて、屋の内にて、火に寄り候ても、朝夕は、肌をさくばかり、嚴しく候へば、御地は寒氣の強き所の由、且つ陣中の事とて、食事衣服の手當も充分ならず、夜の具なども足らはぬ勝の由に承はり候へば定めし兄上には御難儀の事ならんと、日々御案じ申居り候、ざるにても御變りもなく、御勇戰の由、御兩親樣を始め皆々安心致し候、扨て、今春は元旦に當り、旅順陷落の、快報に接し、開闢以來今古未曾有の、新年にて、市民の元氣一時に激發し、旗行列提灯行列等男女老若打つどゐ、毎夜日比谷公園にて盛大なる、祝捷會のみ打續き、宅にては旅順陷落の唱歌を高々と歌ひ、父上の先頭にて陸海軍萬歲を三唱し併せて兄上の御武運長久を神に祈り候、又々猛は朝より、日露戰爭すご六に勝負を爭ひ、兄上と一緒に旅順陷落したりと喜び居り候、御兩親樣を始め親戚一同無事、御安心被下度候今更申迄もこれなく候へ共、通學の傍ら兄上に代りて、猛の教育は私身の及ぶ丈は盡し、第二國民を養成致さんと務め居り候へば決して御掛念なく、例へ屍は唐の原の露と消ゆとも其名は千代に殘るらん御働らき願はしく候、絵に書ける馬は、如何に猛く共進むを得ず、大丈夫も時に逢すば、己が武勇を現はすべき時は之れなく候、何卒御國の爲め、君の爲めに御盡しなされ、如何なる、變事出づるとも、武士の習なれば未練の振舞等は遊ばされず凱旋の曉には、金鵄勳章を胸にかゝやかし花々しく御歸京あらん事を切に祈上候先右御返し迄

親友

愛媛　高橋茂子

喜びばかり分ける爲めの友ならすと互にちかひし事を忘れしとにはあらねどもつげずばなかなかに風の便りもいと離き遠くへだてゝは神ならぬ身の知るよしも無きをなか〳〵に恥ぞかしと幾度も思ひかへしつれど君の悲しみは我またこゝに必す泣かんとのやさしきみ言葉に對して我こそ未だ友情のうすきにやと思ひ出でゝはそゝろ我身の恥しう思へばいとゝ君そしたはしし、さてはまのあたり情にとめるみ親に接する心地の忍ばれては限りなくいつ迄か思ひにまとはんされば善惡をとはす互に分ち分たれつ喜憂を共にし及ぶ限りはたすけ合ひ今はかく八重の潮路をへだつとも心ばかりは如何でへだてんあゝ人の身のまぬかれがたき年と共にかさなる憂きをしのぐにつけてもげに大切なるは友にこそ心弱き女子の身のなか〳〵にたへがたき事も長き年月にはそも幾度のかずな知らず少き胸のつまされては思ひ出の友なつかしく思へば世に親しき友にまさるもの何か有らんあゝ友ぞうれしき

春風

岡山　小山松枝子

そよ〳〵とふく風はえならぬ匂ひをおくりて、とぢこめがちなる身をもさそひ出し、谷の戸まで春を告げて、鶯も日こと〳〵庭の梅にうたふたのしさ。世はのどかにかすみ渡りて、春草もゆるみどりの野澤もさほひめのにきほふ花野となり、小女らは心地よき風に袖ふかせつゝ花を手にし、蝴蝶もとびきてなびつなはれつゝ、さまよへるはげに天使のごとし、なつかしき風は何やらんさゝやくごとすぎて汀の柳の糸をくりかへし〳〵もてあそぶもをかしきや。あゝ春の風のおかしさや。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

紫式部

備後　片山松子

ゆかりの色のあせやらで千年をふる今日までも香り床しき紫式部は藤原爲時の女なりけり幼けなきより天才人に秀でければ父も常々其をのこならさるを歎ちけり長じて藤原宣孝に嫁がれしが不幸にして早く夫を失ひしより後は堅く節操をまもり當時の弊風にも染らでひたぶるに文の林に分け入りしぞ床しけれ斯くて遂に古も今も絶えてなきかの源氏物語をなむ物せられける式部は又上東門院に史記を教へ參らせしかど斯る事をも深くしのびてますへつつしまれしぞ床しき神の如きさえを有ち婦德容姿に至るまで兼れ備へつる婦人は式部をおきては他にあらじあな羨はしの極みかな

亡き姉君

石川薫子

十一月十八日午前十時二十分姉上危篤の電報來る間もなく十一時半死去の悲報來る、嗟吹此瞬間一家の悲嘆驚駭は如何斗り氣も顚動して人心なかりき……アヽ忘れもせぬ去年文月二十日あまり我姉君を訪ひし時絶て久敷七年振りの對面とてこよなく喜び玉ひつ我いたく肉落ちぬと深く心痛められ歸京せばとく良醫に診察なし貰へよなど何くれ懇に宣ひしにアヽ夢の世よ、我はかくすこやかにて反て姉君逝き玉ひぬ、此月此日は如何なる惡日か聞く西班牙女皇またお難産のため御薨去遊ばされしと、我姉君はいと安く出產なし玉ひしに腦貧血のため遂に逝き給ひぬ、三人の幼子を後に、噫、彌生の花は風必ず誘ひ十五夜の月雲かゝらぬなしげにはかなく恨めしきは人の世よ、

梅

前橋　竹のふし子

風雪を冒し寒苦を凌ぎ睦月始めに勇ましく咲き出るは梅なり、昔より花の魁と稱へらるゝも宜なりかし、幹逞ましく姿凜々しくしかも花の潔よき星をもあざむく眞白の五瓣いと優しく如何にみやびなる、あゝかゝる優しく勇ましき此花を何にか例へん、之ぞ文武の兩道を兼れ備ふる大和の武士の俤とこそ、斯て淸き香をば放ちやり仇なす風にはた雪に露逆はず爭はず知らずへの其中に淸き香に感化さす大度の程こそ實に軍人の鑑とも見め、天晴譽をあげて犧牲獻身せし軍人は散りて後こそ潔よき、功を立てゝ後までいや榮ゆ花も實もある梅の花こそ幾年の後にひめ隱し其實に花の盛をば忍ばしむなれ、あゝかぐはしきかな梅の花、あゝかぐはしきかな梅の花、あゝ勇ましきかな日本軍人。

所感

下谷　岡田ちか子

時は丁度寒の眞最中、二三日前降りつもつた雪の、まだ、チラホラ殘つてゐる寒空に、綴れの衣まとひ、見るさへあはれな幼兒を相手に、針とる妻、「母樣、父樣はまだ歸らないの、ロシアの首澤山とつてかへつてくるのでせう、エヽいつよ」としきりにせまる、あゝ、この瞬間、母の胸中にはいかなる情の泉がき出されたのであらう。夫は。旅順に於て名譽の戰死を遂げ、今は、愛らしき童のいたはしさに勵む裁縫の業、折しも大路にきこゆるラッパのひゞき何も得しらで、いでゆくをの子を見送りつゝ、しのびねになく母のすがた。あゝいかに見るらむ地下の良人。

一夜の夢

群馬　林廣子

廣子さん暫くと、何だか、耳におぼえのあるお聲と、ふり返りみれば、なつかしいへ……六年前にお別れした貞子さんなのだもの。餘りの不思議に妾れ、「豐橋からお一人で」思はず聲もはづんだのであつた。と云へば落付いたよーすで此度こつちの女子師範へ務める事になつて、とそれなら、新聞にでも出る筈、さなくとも一寸御報知をと云へば餘り急の事とて、とわびらるゝ。何とはなく只、嬉しくいよくまーと、云ふたぎり常々お話をしよーと、積りつもつて居つた事も何處へやら、皆こー云ふものであろーか。姉チヤンと呼ばれてめを明けば今のは悉く夢であつた、あゝをしかつた、あ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はれ誠なれかし……と云ひても夢は夢、さぞかしおき〻なすつたら笑はる〻ことであろーと、獨り言して。

墓参　淡路　春海玉枝子

或日七人の友と共に同窓の一人であつた伊藤かち子の君の墓参りをした門を出ると涙雨は降り出した、道は十町程もあつたろー。墓へついて見れば地は高う富士形に……燈籠の火はかすかに……ゾッとする折柄雨はしと〳〵降りしきりて亡き君が影のしのばれつ忍はず袂をしぼつた。香花など手向けた後かへる道で君が家に立ちよつた。亡き君は幼にして母に別れ第二の母は去り第三の母は君がゆく一月前に長逝せられたのである。あ〻!!!父上のなげきやいかに!!!あ〻!!!御心の中やいかに!!!

山家の冬　越後　山田なみ子

淋にも山家は淋しけれど、分きて冬とし云へば、もの〻あはれは一入なり、終日諧らはん友なし、春は花、夏は青葉と過ぎ行きて、紅葉の錦と、いつしか、木枯に吹き散され、人目も草も枯れ果てぬれば、散り敷く木の葉を踏み分けて訪ふものは絶てなく、たま〳〵、人のけはいするに、立出で見れば、人の影なく、只々、峰の嵐に松の上風のみ、わきて、木枯吹すさむ夜などは、すき間もる風にゆめ破られ、物凄き音に眠るを得ざれば、心は千々にみだれて、果敢なき人の身の上など想出て、夜更す事も一度ならず、あ〻、あはれにも〻もの淋しきは、片山里の冬にこそ

宮崎紀行　肥後　北里繁子

今日は二月十八日土曜舊暦正月十五日戊子なり從五位の君の宮崎縣日向國宮崎裁判所判事に任ぜられたまひぬれば住なれし熊本市の白川堤の六橋園を舅姑の君をはじめ小學高等學校生徒の遠道を伴ひて朝はやく出發す六橋園は妾が實弟なる第五高等學校教員な永年の留守居に置きぬれば心おきなくたのみあり九州鐵道熊本停車場までは親族の送別あまたあり滊車にのりて三角停車場につきぬ三角港より葦北郡水俣ゆきの滊船にのり移りて午前八時牛港口を出船夕刻水俣港につきて旅館にやどる八十歳になりたまへる舅姑の御身なれば數里の海上いかがおはしまさんかと心もとなく侍りしか若年のものよりもいとすこやかにましますもうれしや遠道は子供心によろこびて祖父君萬歳萬々歳とぞとなへける一杯の酒をくみかはしてふしどに入ぬ

二月十九日午前水俣旅館出發午後九時牛吉松といふ所に着てやどる今日よりはかよひなれぬ道なれば名所舊跡をも聞ぬれど夢のごとくみなわすれたり

二月二十日午前八時吉松發午後五時小林といふ所に着てやとる

二月二十一日午前八時小林發午後五時宮崎の官舍に着きぬ當地の人々あまた訪來ていとにぎはし夜に入りても人の往來は絶ざりき

道中餡鞋もて記せしを其儘に故郷の父母の君の御ひざのもとにまゐらす

鞋とれば鞋とるたびに故郷を
　しのぶ草のみ生しげりけり

六橋園に留守せし弟のもとに消息すとて

白川の水のますますなつかしき
　音のみ耳を洗ふなりけり

白川にふかきちなみのある園を
　君がまもればいよよ榮えん

郵便　薩摩　松原みれ子

電話は未だ設けなき地多く電信は急を報するにはこよなく便りよけれどわたつみの海の内外あまさかるひな都のへだてなくゆきかよひぬる郵便こそいと床しけれまづあらたまの年の始めのほぎ言いひ交はす繪葉書はいづれ目出たからぬもなくたらちねの父母のみ消息伺ひ参らせての返り言はいつも〳〵慈愛あふる〻許りにてありがたき涙にむせぶ事さへ珍しからず西に東に分れたるはらからより互に知らぬ國ぶり共こま〴〵しるして送り送らる〻は樂し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とも樂しなつかしき友垣より愛子のうつし繪に添られたるうろはしき水莖のあとはあい見て語らふにも劣らず ぞ覺ゆる又爲替だに送れず日毎の新聞にはみ軍さの便りを始めさま〳〵知り得べく月に一度を待ちわぶる女鑑は郵便の聲さへ高く聞えてげに其名にそむかぬ女の心を磨くにはこよなき良き文なれ 昔しはふみを笠の緒によりて夫の許へ送りし人もありしとか今は海をへだてし彼の國へも文のゆきゝの道安きありがたきみ代なれば陣中よりの玉章はいかに家人の心をやすむらむ又た母君内君などより心こめられたる小包を仇し野に開かるゝ人のよろこびやいかならむ 猶書きもて行けばゆかしきふしおかしきふしもさわなれど まわらぬ筆には得も盡されず是にて郵便に託しはべる〳〵 女鑑に送りまいらすになん

涙の雨　　長野　田島みよ子

花の綻ぶにつけ鳥の囀るにつけ 過ぎにし去年の春野邊の畑に立ち上り給ひし亡き父君の事いみじう想ひ出されて 悲しおはれ今頃は何處の空にやさまよひ給ふらん 吹き來る花の香になりと果敢なき夢の間になりとも 知らせ給はれと返らぬ繰言ども打ち返しつゝ涙の雨にしほたるゝ 今日此頃母君には晝のほど寺詣に出で行き給ひていまさず我れのみ獨り心細く深け行く夜半を喞ちつゝ心ならずもまどろむに夢うつゝとも別かぬ程に父君のありしながらの御面影さやかに見え給ひて 聞え知らせ給ふに嬉しく懷しく走り寄り御袖に縋らんとするにありし 姿は煙と消えて見上ぐる方に月のみきらきらとして哀れむかごと又た悲むがごと

笛の音　　札幌　小山かく子

風流か無風流か高柵に伺らした庭園に綻びかけた一本の櫻V字形の枝に腰を据ゑ幹を脊頸にたまゝ憎らしい程巧に面白く明笛を吹くものがあるはて 何物であらうとぬき足で垣根近くすり寄り淡き弦月の光りにすかし見れば丈なす 黒髪はら〳〵と背後に垂れし十六七の少女、おやつと我知らず二三步——さがる 途端にぐしやアり何物をか踏みつけたので 思はずあつと再び聲を立てた笛の音はぴたり止んだ……寂寞はともに皈つた……あゝ醜念今一回とはがゆく感じた、然し駄目、星の眼のみいよ〳〵冴えて！

花は櫻木人は武士　　群馬　林　爾子

軒端に近き一本の古木今を盛に四邊恰も薄絹にて包みたらん如し姿は獨り端居して 此の花を眺むるあゝ誰かたゞに美しと見やるかはた潔しとみんかさはれ 爛熳として梢に咲きほこりたる時は美はし一度荒みたる夜風にあはゞあたら一つも止めて 散り果つるこれはた何にたとへん古より花は櫻木人は 武士となん云ひて共に其の名高しあゝ滿洲の野にあり 戰つゝある幾萬の兵士向ふ所速戰連捷これ何故ぞ一つは皇威のあまねきによるは 言ふをまたざれども二には人心の一致丈夫の忠君愛國の念これぞ〳〵 我が國の美なる故ぞかしあはれ此花の如く美しく 潔ぎよき心もて率に務るところなからずてや

意外　　伊豫　山本田鶴子

萬籟聲なき夜半寒風肌をさす 日頃堪へず忍びし佐世保病院なる兄君輕からぬ病のよふやく癒てふたゝび遠征の途に上られしあゝ知らざりきこれが長き別れにならむとは 名殘おしさいまだきえぬ間に悲しき戰死の報あり……

筆のすさび　　靜岡　岩田かめ代子

我は昨年の春より 身にいさゝかの障りを生じて、こたび醫師の勸めに由り鎌倉材の木坐てふ處に養生する身となりぬ 我の宿りしは由井ヶ濱のほとり光明寺の横手なる二階家なり 後なる光明寺山に響く鐘の音に目覺まし急ぎ散步に行かばやと含嗽もそこ〳〵に濟せて濱邊へとさまよいぬ霧を欺むく眞砂の濱に 女波男波のひた〳〵と寄せ來る樣右手には恰も 白扇を倒しまに立てたらんが如き富士のいと淸らかに現れそが下には 稻村ヶ崎に半ば被はれて僅かに半島を現はせる江の島、島を圍める碧々たる海原は波いと靜かに其間を行き通ふ小舟の眞帆片帆のみ見えて 海鷗の二つ三つ泳ぐ樣眞白なる富士には早や朝日のほの赤く匂ひていと麗しく 宛然一幅の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

油繪の如く其の風景の絶佳なる事 迚も拙き筆には現し難し嗚呼壯快なる今朝の海よ願はくば永久に此の地を離るゝ事なく 短かき一生を楽しく送りたきものにこそ

あゝ此野菊　かつ子

さる夜散歩に出かけた折 とある書肆の店先に數々の書籍が並べてあつた其の中に我日頃求めまほしう思つて居た詩集が目についた 誰が賣つたのであらうか 少し古びて居たけれども早速買つて歸つたのである、思ひきや 此詩集表紙のうらには我なつかしの友の君の姓名の記してあらうとは あゝ日頃友を慕ふ心のとゞいたのであらうか 君が傍に侍りしもの 我手に渡りしはと嬉しかりしも只しばし繙けば膝の上に落つる野菊の一輪あゝ 此花——我國の片隅に匂ひ出でしをこよなう愛でたまひて優にやさしき姿よげに御身のやうに思ふのであるなどゝのたまひて 君自ら摘み給ひしそれとつゆ違はぬのであつた、いとしの花よ、汝も心あらば嘸かし君をうらむであらう此詩集にも、あゝ此野菊にも倦み給ひし 君今いかに

うらめしな君が心の秋風に
ふきはらはれし野菊一輪

短歌

出征の人に　熊本　日高かず子

ますら夫のあつき心にとけぬへし
わたしへりあの野邊の白雪

慰問袋に

數ならぬこのふくろをも國のため
つくすまことのちりとうけてよ

高山盃子刀自の生涯をよみて　神奈川　森田はな子

朝な夕な君かあとをはかゝみとし
みがきおさめなんおのか心を

水仙花　肥後　鶴田春香子

玉はゝきとる手もさむき朝庭に
一もとさけり水仙の花

鶯　和泉　福原董子

長閑けさに手なれの小琴かなつれは
しらへあはせて鶯のなく

落葉　和歌山　高内直枝子

夕からすれくらもとむる羽風にもほろ／＼ちるかのきの紅葉は

雪の日出征軍人を送りて　山口　枯松葉

ふりつもる雪の中にも大丈夫かゆく一すぢの道はありけり

梅薫袖　和歌山　谷井清子

いつこをかすぎて來つらん里の子の色なきそてに梅か香そする

艦上新年　東京　ゆり子

はつ日かけかゝやきわたる波の上に軍のふれも松かさりして

旅順開城をきゝて　東京　ゆり子

まちわびしうれしき便きくにつけなほおもひやる武士のうへ

惜梅花　肥後　千々波楯子

こゝろなく人な手をりそうくひすの羽風もいとふ梅かはつはな

水邊鶯　さつき

谷川のなかれのみつのそこまてもすみわたるらむ鶯のこゑ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

兩殿下の御高德

小田原御用邸に御避寒中の常宮周宮兩殿下には熱海湯原等の轉地療養地に向ひて小田原町を通過する傷病の將校並に兵士に對し畏くも人車鐵道停車塲前に於て一々御慰問あらせられ殊に將校よりは名刺を召させられたる上創傷の如何を御下問あらせられ又御運動の折など途中にて小學生徒等の敬禮を表するものある時は一々御會釋あらせられ剩さへ勉强せよなどとの有り難き御言葉をさへ賜はること度々あり其他警衞の爲め御用邸に詰め居る警官の交代するに當りては一々御延見の上永々御苦勞なりしと御慰問遊ばさるゝにぞ何れも感泣して御高德のほどを仰ぎ奉り居るとぞ



兩宮の御近況

目下鎌倉御用邸に御避寒中なる、富美宮、泰宮兩内親王殿下には、此寒氣にも少しの御障りもあらせられず最と御健勝に渡らせられ初秋以來未だ一回も御風邪にすら冒され給はず、大寒中と雖も絕えず御勉學あらせられ、日曜を除くの外日々午前八時半より十一時半迄は普通學を修させられ、（一學課を三十分と定め、一課終る毎に廿分の御休憩あらせらるゝよし）富美宮殿下は普通學の外に午後には音樂、佛語

等を學ばせ給ふよし、御學問御教授掛りとしては、普通學は、富美宮殿下は、村田梅が枝、泰宮殿下は倉田やす子の兩人御附添ひにて御教授申上げ、他の專門の學課に就きては御習字は華族女學校教授坂正臣氏、佛語は學習院教授赤松範祥氏、ピアノは音樂學校教授杉浦千歌子等一週一回宛參殿して御教授申上げゝ、ありき、兩殿下共御成績御美事に在し御進歩の著しき事御用掛の人々も常に感嘆し參らする所なりと、又兩殿下共御仁心に富ませ給ひ、御用邸附近の農民の中に出征、入營等ある毎に、深く之れを犒らはせ給ひ、又御用邸は停車場の程近き場所なるを以て村民の旗押立てつゝ出征入營の兵士等を送る毎に御殿内より之を見そなはして御涙を浮かべ給ひて物蔭より之を見送らせ給ふ御樣他より見上げ奉るも勿體無き計りにて斯くも有難き御心の程を彼等に知らしめなば、如何計りか其が心を强うするに足らんなど近侍の人々も常に語り合ひつゝありとか、賤に洩れ承るだにありがたき御事共と云ふべきにこそ。

愛らしき姫宮

賀陽宮由紀子殿下の御淑德の趣は屢次耳にする所なるが今また同殿下の通學したまふ京都夷川間の町竹間尋常高等小學校に就て御近狀を伺ひ得たるぞうれしき、殿下は今年十一歲にて尋常第三學年の課程を修めたまふ、日々通學を此上なき御樂みにおそばし朝早く起き出でゝ御附の婦女どもを促しつゝ徒歩にて御登校せられ晴天には一日も車を召し給はず又雨中にても御徒歩に難儀ならぬ限りは車を召されずと云ふ、教員等は之を見奉りて感せぬはなし、また殿下は生徒等に對して御言葉遣ひもいと優しく相手の貧富を擇びたまはず且愛憐の念在さず至極平等に親しく樂しく交はり遊びたまふゆゑ皆々殿下を慕ひ遊戯時間の如きは殿下の御手を引きまゐらせて遊ぶ程なり、されど少しも敬意を缺かずと云ふ、かくて一日も御缺席なく學科の御成績もいと優れたるぞ尊き、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

左に記せるは殿下近頃の御作文なり又以て御秀才のほどを知るべし

山田從卒の話

山田と云ふ人は八幡の百姓家で生れた人でありました、幼い時から勉強が好きで何時も先生から御褒美をもらつたり譽めてもらつたりして居ました、昨年大阪の騎兵隊へ入營しましたが品行が宜いから直に中村と云ふ中尉殿の從卒になりました、山田從卒は賢くてよく間に合ひますから中尉殿から可愛がられて居ました所今度日露開戰になりましたので中尉殿も戰場へ行かれる事になりました、中尉殿は山田從卒をつれて遼陽の方へ參られましたが或時俄に敵が來たから戰の用意をして出よと命令が下りましたので、中尉殿は從卒に早く來いといつて一足先に出られました從卒は大急ぎに用意を調へて中尉殿を追うて行きますと最早戰は始まつてゐました、そこで中尉殿と一處に戰つてゐますと何處から來たのか小銃の彈丸が從卒の右の足に當りました、ですがこれ位の事で中尉殿に心配をさせてはならぬと自分で繃帶をして知らぬ顔して又戰つて居りますと今度は中尉殿の左の足に彈丸が當りましたので、中尉殿は山田やられたと言ひながら馬から下りて繃帶をしやうとしてゐられました、從卒は驚いて中尉殿のわきまで行かうと馬から下りてびつこを引きながら走つて行きますと、其途中で又左の足に彈丸が當りましたので思はず中尉殿やられましたと云つて其處にたふれました、そこで中尉殿は山田どうしたやられたか此繃帶をやらうとなげてやられました、從卒はもう夢中でもがいてゐますから中尉殿は自分の足を繃帶もせずに從卒のわきへ行かれて水を與へたり繃帶をしてやつたり、十分かいはうしてやられてそれから自分の足を繃帶して又戰はれました、中尉殿は目下の者を憐まれました私共も目下の者は憐まねばなりませぬ

それから從卒は衛生隊に助けられて病院へつれて行かれましたが幸に早くなほりましたからあの中尉殿とも一度戰に行きたいと思ひまして其由を願ひまして中尉殿の居られる處へ行きますと、中尉殿は今五人の兵士を伴れて斥候に行かうとして居られましたから、直に頼みまして、一處につれていつてもらふ事になりました、そこで七人があつちの木の影や、こつちの溝の中へかくれて或村の近く迄來ますと向ふの方に一人の敵が立つて居るのが見えましたから、もうとても皆がかたまつて行く事ができません　そこで中尉殿は如何しやうと考へてゐられますと從卒は私が一人でいつて參りますと云つて小溝をはいつて行きました、所が幸に見付かりませんでしたから敵の樣子を委しく見て參りまして小山の小蔭で中尉殿に其有樣を話てゐますと、何處からきたかどや／＼と大勢の敵が參りまして中尉殿を目がけて斬てかゝらうとしますから從卒は此時こそ恩返しをする時だと思ひまして一生懸命に戰ひながら、中尉殿に早く歸つて大將に言つて下さい早く早くと言ひますが、中尉殿も山田を殘して歸るのは可愛さうだと思はれて中々に歸られません、そこで從卒は致方がありませんから中尉殿の馬のしりをぴしやりとたゝきますと馬は驚いて元來た道へ走つて行きました、中尉殿はも一度山田を助けに行かうと思はれましたが皆が死んでは折角斥候に來た甲斐がないと思はれて山田を見捨てて歸られました、後の五人も中尉について歸りましたが山田は自分一人で中尉殿の姿が見えぬ樣になる迄戰ひましたが、とても及びませぬのでとう／＼殺されてしまひました、死を以て中尉殿に恩を返したのであります、人は恩を受けたならば必ず忘れずに報いねばなりません

美しき母の會

大阪婦人矯風會の有志者が組織されて居る母の會の

定期大會は、去月十二日午後二時より土佐堀青年會館に於て開かれました、當日は午前より小雨しとしとと降りましたが、母なる人、妻なる君、女學生、令嬢たち二百四十餘名參集されました、此會では特に住友家の專任家庭教師リチャードソン孃の家庭教育に關する趣味ある講話がありまして子供に對する躾け方、懲罰の方法などを說かれました、其中に「小兒が泣いて仕樣の無い時には打捨つて置くのが宜しう御座います、そして泣いて居る時には泣き帳とか淚の記とか云ふ樣なものを作つて置きまして、何ういふ原因で泣いたか、何の爲の淚か、それ等の事を明細に記して置きまして、他日その帳面を子供に見せて嘲笑するので御座います、嘲笑は子供の爲に叱られるよりも憂い事ですから……」といふ話もありまして大に注意を惹いたやうであります、次に孃は智育に就て學校と家庭の關係を附け、學校へ通ふのを愉快に感じさせるやう、學問をするのを趣味あるものと感じさせるのが肝要と說かれ、最後に體育に就ては衣服、住居、食物、運動等の事を細かに說かれました、孃が實驗に由る家庭教育のお話ですから、來衆には大分感動を與へたやうに見受けました、孃の講話が濟みますと、會長の林歌子女史は博愛社の孤兒救濟に關する用向で、馬關釜山等に旅行された見聞を面白く述べられ、四時半頃散會しました

河原女史の消息

曩に蒙古の女教師として聘せられたる河原女史は目下天津にあるよしにて最初同女史が蒙古に到るや同地方には男子の學堂尠く況て女子學堂など從來皆無なりしかば何方の女子も危み懼れて新築學堂に入學する者なかりしを蒙古王自ら大なる杖を携へ府內を巡回し戶毎に督促して入學を命ぜしかば何方の子女も續々入學し目下の生徒總數六十人に上れり而して何れも一年の後には蒙古語を以て字を書し文を作りまた日英兩國の文をも讀得るに到れりとぞ同女史は最初一年の契約にて已に滿期となりしも更に一年

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を繼續するの約整ひ其間二ヶ月の休暇を乞ひて北京天津等を漫遊の途中なりといふ

日本の美術品印度に現はる

舊臘我國に漫遊し數日前歸國されたる印度の大僧正サミ、ブフマンダー氏は歸國の途中本郷弓町なる女子美術學校に書を寄せ同國カルカッタ市の帝國博物館に陳列すべければとて女生徒の手に成れる造花、編物、刺繡、繪畫其他の寄贈を請ひ來れるにぞ同校は之に應ずべく來學期より夫々準備するならんと聞けるが大僧正は在京の當時親しく校内を參觀されたる由

實踐女學校と支那女生

府下澁谷村常盤松なる實踐女學校にては兩三年以來清國の女學生を入學せしめ我國の學風を敎授しつゝあり現に昨年度の如き錢豐、陳の二女を卒業せしめ前者は尙ほ進んで西ヶ原農事試驗場に入學せんとし後者は甞て我帝國大學を卒業し現に北京大學の敎授たる彥安に嫁ぎ居る由なるが今回南潯なる某道臺より多數の女生徒を留學せしめたき旨更に依囑し來りたるを以て同校にては或る條件の下に一組丈け引受くることゝなり隨つて職員中淸國の風俗並に言語に精通する者を要することとなりたるを以て敎務係木村芳子を女史二ヶ年間の豫定にて彼地へ特派留學せしむるよし尙ほ此先き必要によりては松本春子、坂寄光子、田副登志子の三女史をも渡航留學せしむるに至らんとの事なり

東郷大將の晝餐

▲世界の流行兒となつた東郷大將は、今はあらゆる物に其名を分け取りにされ東郷花、東郷カラー、東郷チクタイ、東郷巾着と、中々に忙しく見えるが、更に新たに東郷料理といふ物が出來ようとのことである

▲其は大將が今度重ねて任地へ赴かれる途中、去月

七日の午前九時二十分神戸驛へ着され、此處で晝餐をされることになつた、家は常磐花壇、花壇の女將前田イソ(六十)が恭しく大將に辭儀をし「お久し振りでございます、御機嫌宜しうお目出たう存じます」といふと、大將は「皆變りはないか」と尋ねられたので、女將は面目身に餘て涙を零した

△女將が斯く涙を零したのは今昔の感に堪へぬからで、大將と女將とは十年以前からの相識、十年前には大將は某艦で艦長でまだ大佐、折々この花壇に來られたことがあり、女將も親しく言葉も交してゐた、其が今は帝國海軍を一身に擔はれる樣になつたのであるが、昔に變らぬ優しい言葉を懸られたので

△女將は何か心限りの珍味をと思つたが、大將は鼈が好物であることを思ひ出し、其を吸物として侑めた、大將は大に滿足されて菊正宗の一合瓶をも傾けられた

△室は清潔な處をといふので、隱居の室と呼ぶ十疊敷き、給仕には神戸での老妓千駒、政吉の二人に襷を上げさせ素人風として出した

△所が流石の老妓も、東郷大將との名に聞き怖ぢし何の樣な怖い方かと思つて座に出ると、思つたにも似ぬ方、軍服姿窮屈らしげに、鰕茶緞子の座布團の上に座られ、花壇から侑めたエヂプチャンといふ一本五錢の卷煙草をタッタ一本喫はれたばかり、其の物靜かに質素にされてゐる所、何うしても何十隻の軍艦を掌の上にのせ、露西亞の海軍を慘々にされた方とは思はれぬとの噂

△東郷大將が鼈が好物だと聞いた料理屋者など、旨いことを聞いた、東郷料理と名を命けて、鼈を賣出さうと云ふ者があると、己は大將にあやかる爲に先づ鼈を食て見よう等と噪でゐるとのこと

故田中宮相夫人

宮内大臣子爵田中光顯氏の夫人伊與子の方は豫て心臟並に腎臟の病に罹りて近來は兎角病床に在るの日多かりしが明治三十八年三月三日午後七時五十分を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

以て終に不歸の客となられたり。夫人は夙に世上に知られたる賢婦人として交際家として諸人の尊重を受けし人なりければ、今其平素の性行の一班を左に記して、之を世に紹介すべし

▲夫人の世系　高知市を距る西七里、山水明媚の處に人口凡五千餘の一市街あり是を佐川町と云ふ、史を按ずるに慶長五年山内一豐公關ヶ原の戰功を以て土佐國に封せらるゝや、其老臣和泉重良を擧て以て佐川の邑主となし諸老臣の上班に列せしむ、重良は則ち深尾氏の祖にして、爾來十一代二百六十年間累世土佐藩の巨室たりしが廢藩の後に至り明治二年を以て佐川を去て高知市に移住せり、蓋し重良の祖先は人皇第五十九代宇多天皇の後裔眞野太郎定義に出で近江國の閥族なり夫人は實に斯る舊家名門の家系を繼承せる土佐の國老深尾康臣の第一の息女にして嘉永四年十月十九日を以て佐川に生れ、明治九年一月六日を以て今の宮相子爵に嫁せられたるものなり而して子爵は侍從片岡利和、井原昂、古澤滋の諸氏と同じく其頃は深尾氏の家臣にてありければ舊時の地位よりして言へば子爵と夫人とは即ち主從の間柄なりし

▲夫人の平生　夫人は土佐の國老の息女に生て名門に成長し田中子爵に嫁したる婦人なれば門閥的にてあるべき筈なるに天性頗る平民的にして其言行と云ひ嗜好と云ひ淡泊質素を旨とし曾て尋常貴婦人の如く奢侈華美を喜び修飾體裁を專らとするの風なく子爵が今日の榮職に登られし後とても依然自ら守りて心を動かさず絶て避寒避暑に托して行樂の興を爲したる事もなく唯土曜日毎に子爵と共に官邸より目白の本邸に赴き一日の淸閑を得るを以て無上の樂事とせられたるのみ巨室の息女としても權貴の夫人としても實に其比を見ざるの賢婦人なりき、されば常に子爵の門を出入する紳士學生等は云ふも更なり諸商人職工輩に至るまでゝ平等に之を遇して懇篤親切を極めしかば左しも口善惡なき京童も田中夫人の事とし云へば曾て之を批難する者なし。夫人は又深く佛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

教を尊信し目白の雲照律師に就きて其道を聽き稍々造詣する處ありしと云へり

▲夫人と公共事業　夫人は淑徳を以て常に女性の第一義とせられしかば何事にまれ勉めて諸人の聽視に觸るゝを避け表面に立ちて活動する事を好まれざりしが、時に臨みては自から進みて公共の爲に盡すを辭せられざりき、日清戰役の際には赤十字社篤志看護婦として我軍の傷病者は勿論、清國の捕虜患者に至るまで平等に親しく手を掛けられ、忌はしきものまでも自ら處分せられたるには人々も深く感じ合へりけり、かの小笠原伯爵夫人、新山春太郎氏夫人の如きは田中夫人と共に最も大に盡力せられたるものなりき、日露戰爭の始まるや、繃帶其他の軍用品を製せられ、昨年十二月の三日、病に罹られ一時危篤に瀕し、中頃少しく快方に向はれし際も、決して此等の業を休まれざりしなり

▲交際家としての夫人　夫人が交際場裡に於て華實倶に備へて光彩を聚められたるは世上の能く知る所なるが、西園寺侯が外相たりし時の如き夫人は其請に應じて天長節の夜會には常に主人側の女性を代表し、今の小村外相も亦屢々夫人を煩して其便を交際場裏に得られたる事あり、是また夫人が内外の貴紳士貴夫人より總ての尊敬を受け徳望自ら其重きをなせしが故なる事云ふまでもなし、斯の如く外にしては超絶の交際徳星たりしに拘はらず内にしては能く良人を助て内顧の憂ひなからしめ、子爵をして今の貴顯に多く見るが如き素行不修の風聞をも曾て世評に蒙ること無く常に其品位と尊嚴とを保有せしめたるは實に夫人内助の功なりと謂はざるべからず

▲病中の夫人　夫人が病に臥せるや橋本、ベルツ、岡諸氏の國手の診察を受け醫療至らざる所なかりしも不幸天壽を假さず、終に前記の如く本月三日逝去せられたるが、夫人の病劇しと聞ゆるや内外貴婦人及び貴紳士は皆我先にと爭ひて訪問し殊に一二の御息所には親しく病床に就いて御慰問ありしとぞ、此事以て夫人の徳望いかに上流社會に重かりしを窺ひ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

知るに足るべきなり。出でゝは交際場裏の德星と仰がれ入ては淑德内助の賢婦人たる夫人は嗚呼悲しい哉終に逝かれたり、此悲みは即ち一般が惋惜して措かざるの悲みなり豈獨り良人たる田中子爵一人の悲みならんや

▲夫人の詠歌　夫人は和歌に巧みなり、左に近詠三四を示す、

秋旅

たひ衣袖ふきはらふ夕風に
　露もやとりをさためかぬらん

川そひの宿にこよひはかりまくら
　雁かねさむし水音もして

畑

栗のほのうらおもけにもみゆるかな
　雀むらかるわきのやま畑

紀念の訓戒

適れの兵士よ幾多出征者の龜鑑として耻かしからぬ軍人よ茲に其功績を録するに方り姓名は暫く措きて先づ渠が戰地より妻女に寄せたる一篇の訓戒を掲げん義あり情あり人をして感涙に咽ばしむるものは是れ渠が赤心の溢るればなりけり

訓

一、留守中は他人より物品金圓の惠與を受くるな
そは夫の恥を世に公にし又妻たる道を缺くなり

二、戰地より送りたる書面は大切に保護せよ又他人に餘り見せるべからず

三、新橋の別れは最早再び逢はざる永き此世の別れと覺悟せよ
お前は夫を新橋と云ふ寺に送りたるものなり吾は今十萬億土の戰地を歩いて居る戰死は無事彼岸に達したるものと思ふべし

四、夫は歸り來るものと思ふな必ず名譽の戰死を爲すと覺悟せよ
そは男子として又國民として軍人として充分其任務を盡したるものなり

五、戰死の報に接すとも必ず悲泣なすを禁ず
喜んで萬歳を呼べ吾の男子として其本分を盡したるものと安心すべし

六、吾死後は恩賜金を以て家政を殘りなく治むべし又吾に代りて兩親の御靈を祭るべし
七、自分は軍人の妻たることを忘るゝな
八、親類及び知合其他近所に戰死者の家のありたる時は必ず見舞ふべし
九、親及び長老を敬ふは勿論目下の者を愛し必ず自暴自棄を愼むべし
十、夫が血を以て得たる名譽は幾年の後と雖も地に落すな
　右堅く遵守すべし
是れ單に渠が妻女のみならで普く出征者の妻女が心得べき訓言にわらずや抑も此兵士を誰とかする上等兵山崎卯之助氏にして氏は昨年韓國上陸以來道路修繕に從事しつゝ義州に入り九連城、岫巖、橋家堡子死房店等の戰鬪に加はり分水嶺の攻擊には小隊長の傳令使となり銃砲彈の雨下する間を縫ふて前後左右に奔走し時に田中一等卒の負傷に際しては隊長の命を受けて綳帶を施さんとしたるに敵に狙擊せられて二丸を受けしも少しも騷がず其綳帶を終りしが幸にして二丸とも裝具に命中せしのみなりしかば之を紀念として取收め置けり其後七月は樣子嶺、八月は又東新堡、達連河口、外濠附近の戰鬪に於て我隊三面合擊を蒙り非常に苦辛を嘗めしに氏は大隊長の傳令として其任務を盡し越えて孟家房に遼陽に勇敢なる動作を示して一隊の敬愛を受けぬ然るに十月歪頭山に向て前進せしが是ぞ氏が最後の決戰塲にして此時中隊は山の東方高地に至り右側を掩護して苦戰時を移し更に進みて左上の敵に對したるに敵は我軍を包圍せんと試みて其右側を中隊の前に現はしたれば得たり賢しと猛射を加へて敵の計畫を破りたり斯くして力戰數次全く敵を擊退して數里の外に追擊を行ひ馬耳山を占領するに至りしが氏は此際頭部に銃創を受けて綳帶所に送られたる儘遂に護國の鬼とはなりにけり氏は芝源助町在籍にして製文堂鉛版部に勤め多年忠實に立働き居たれば秀英舍庭契會よりも弔慰料として金五圓を軍人救護會よりは廿五圓を遺族す

み女に贈りたり

女學生の言語

數年前までは女學生間に一種高尚の言語行はれたるも近來は彼等の多くが兎角に自墮落に流るゝと同時に其言語も漸次に野卑亂雜に傾き動もすれば「アラ可くッてよ。アラ忌だわ」など所謂浮氣稼業の女共の口吻を學ぶもあれば或は「君、僕、失敬、來給へ見給へ」など男生其まゝの言語を弄するもあり又彼等の多くは小說を愛讀するの結果自然其小說中の言語を學びて身柄も辨まへずに卑しき詞又は媚かしき詞を吐きて得々たる者あるは慨くべき限なり就ては我が習慣の上より野卑に聞ゆべき詞又は省略に過ぎて意義を誤解し易き詞等は此際改良の必要ありとて第二高等女學校の如きは目下それ〲調査中なりと云へば他の女學校にても漸次に其弊を匡すの策を取るべき歟而して直接間接に彼等を誤るは近時流行する卑猥小說にあり女學生が小說を讀むは必ずしも惡からざるも其間に取捨なくんばあらず此等も各校監督者に於て注意ありたきものなり

流行の花見小袖（白木屋吳服店）

東京の巴里とも見る可き新橋の花柳界より總ての流行が起ると傳へし夫れは早や昔となりて今は女學生のスタイルが滿都の婦人界に持て囃さるゝといふ可祝な傾向とはなりぬ、近く萬朶の花にデコレートさるゝ東京の空を控へたる我が婦人界まづ海老茶の袴を拔きにした學校通ひの令孃姿の十五六よりして傳へんか▲上衣には寶珠御召河骨に觀世崩しの水を御召納戶地へ織出したる▲下衣は紋御召の葡萄地組子絣裾廻しは紅掛鼠縮緬▲帶は厚板の薄柿色地に有職もやう▲襦袢は紅地絞りの綸子羽縫なり髮は花月卷に例のリボン▲扨又其の束髮を避けて品よき島田髷の二十四五の御婦人には▲上衣は利休鼠の無地御召に江戶裾模樣刺繡の松に蔦▲下衣も同じ二枚重ねに裾廻しは御召鼠の織色▲長襦袢は紋羽二重の地文に光

琳の水が織出しあり其處へ寫生の蝶を友禪に飛ばせたり▲帶は綾織の厚板錆茶地共色の牡丹唐草を織出した上へ古代更紗を色糸で粒縫ひに縫ひ取つたり▲また前髪の絶頂に幅廣のリボンを膝結びにそよ吹かせたる例の不如歸の芝翫式なき子形に氣取つた十一二の少女には▲上衣は薄葡萄地の友禪縮緬霞暈に四季の草花を色よく配りたり▲下衣は同じく鼠色地に丸紋散しの光琳草花裾廻しは櫻鼠▲帶は無々子錦の薄牡丹地扇散らしのいろ〳〵親骨の煮染めの赤と松葉色の配合よく山水花鳥に美術の粋を蒐めたるもの等まづ以つて流行の理想柄なり

昨今の人の頭髪

昨今は相變らず束髪の大流行にて殊に著しく前髪を出し晴天の時は日除となり少しの雨では顔も濡れまじき程の異樣の風も流行となれば可笑しきものにて下女子守迄此風に眞似る傾向となりたるが畢竟之は巾一寸五分乃至二寸長さ五六寸の櫛一枚とリボンに束ね 簪位にてお茶を濁し得る經濟主義が根元となりたるものらしく從つて丸髷島田の如きも此頃は前髪、鬢、髱抔の周圍を出來得る丈フワリと出したる所謂上方風のもの流行し居る模樣なるが之も自毛にて賑かしをつけ多く裝飾品を用ゐざらんとする文口主義ならんと或人は語りぬ

精華女學校設立

國史國文を主科とし其の他女子に必要なる普通學科を兼修せしめ大に國家主義の女子を養成する目的を以て今回表題の學校を設立することゝ成り來る四月廿日より京都市一條通烏丸西入所へ建設中の京都皇典講究分所の一部に於きて授業を開始する筈なり校長には大森知事夫人學監には田中視學官夫人既に就職せられたる由なるが國史國文は主として稻荷神社宮司大貫眞浦氏京都大學講師池邊義象氏其の他專門の學士十數名之を擔任し普通學科は專任教師の外京都各女學校の女教師に囑托する由設立事務所は

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

京都市綾小路通烏丸西入所の京都皇典講究分所内なるが淑女諸子の入學申込續々ありとなり

女子中等教員講習科

神田橋外なる東京府教育會内東京女學講習會は從來女子師範學校高等女學校へ入學を志望するものゝ爲めに特に受驗に要する學科目を教授し來りしが今回女子師範學校高等女學校の家事科裁縫科の教員たらんとするものゝ爲めに文部省の檢定試驗に要する適切なる學科目を撰び講習を開始し本年七月を以て結了の豫定にて講師は塚本はま子(家事科)須磨さだ子(裁縫實習)瀬下てつ子(裁縫教授法)新坂富藏(家事應用實踐化學)東基吉(教育)佐藤球(國語)岡田起作(習字)の諸氏なりと云ふ

女子英學塾の入學試驗

麹町區五番町なる津田梅子女史の女子英學塾にては來る八日本科、豫科とも入學試驗を行ふ由但し人員は三十名位なりと

東洋女藝學校展覽會

神田區仲猿樂町の東洋女藝學校にては去月十九日より同二十三日迄三日間校内に於て日本畫、西洋畫、刺繍、摘造花、裁縫等の展覽會を催し公衆の觀覽に供せしが頗る盛況なりき

國語傳習所の新學期

文部省檢定試驗が師範學校高等女學校卒業者の外は各科共必ず國語學科を課することゝなれるより神田三崎町の同所にては今四月の新學期より右受驗希望者の爲特に時間を增加し設備をも完成して普通高等の兩科に男女の入學を許す由

女子高等師範學校豫備科

神田區三崎町一丁目大成學館内なる同科は本年より其の筋の認可を得て學校組織と爲し今四月より開始し高等女學校及同程度以上の學校を卒業せる者は無試驗其他は總て試驗の上入學を許すことゝなりたり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寄贈書目

日本婦人　第六十五號　東京府豊多摩郡澁谷村帝國婦人協會
女子之友　第百六十五號　東京市牛込區市ヶ谷文友社
女學世界　第五卷第三號　同日本橋區本町博文館
六合雜誌　第二百九十一號　芝區三田四國町ゆにてりあん
日本の家庭　第一卷第一號　神田區表神保町同文館
をんな　第五卷第三號　麹町區下二番町大日本女學會
中央公論　第十九年三號　本鄕區西片町反省社
廿世紀婦人　第二卷第三號　麹町區飯田町北海道婦人同志會
家庭週報　每號　小石川目白臺町櫻楓會
東京感化院月報　第四十一號　豊多摩郡澁谷村感化院
國學院雜誌　第十一卷第三號　麹町區飯田町國學院
時好　巳之第三號　日本橋駿河町三越吳服店
大八洲雜誌　卷之二百廿四號　神田區三崎町大八洲館
工談雜誌　第百七十七號　京橋區新榮町工談會
國詩　第一號　豊多摩郡澁谷村國詩會
婦女新聞　每號　牛込區東五軒町同社
中學科講義錄　每號　神田區北神保町大日本國民中學會
體育　第百卅五號　東京府荏原郡大井村大日本體育會
家庭文學　第二年第二號　大阪市南區大寶寺町家庭文學社
大日本婦人敎育會雜誌　第百七十二號　麹町區永田町同會
婦人と子供　第五卷第三號　本鄕湯島フレーベル會
音樂之友　第七卷第二號　巣鴨東福寺樂友社
成功　第六卷第六號　本鄕區弓町成功雜誌社
敎育　第六十號　本鄕區元町茗溪會
東京經濟雜誌　每號　京橋彌左衛門町同社
商家之友　第三十六號　京橋區南鍋町時事新報社
慶應義塾學報　第八十八號　芝區三田四國町同塾
上野敎育雜誌　第二百九號　前橋市曲輪町同會
紀伊敎育　第百三十四號　和歌山市同會

定價

一冊	前金 金貳拾錢
三冊三ヶ月分	前金 金五拾七錢
六冊半年分	前金 金壹圓拾錢
拾貳冊一年分	前金 金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六拾四行	金拾六圓
表紙一頁	金拾貳圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十八年三月卅一日印刷
明治三十八年四月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊豪一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

新刊

小畠幾次郎先生著

體力增進論

重要目次

第一編 體力增進論

第一章 體力增進とは何ぞや　第二章 體力增進の目的

第二編 體力增進本論

第三章 體力の本源　第四章 鍛練と體力增進

劍道と體力增進●柔術と體力增進●格法より得たる體力增進新法●柔道と體力增進●弓術と體力增進●乘馬と體力增進●相撲と體力增進●日本體育會の事業●鍛練的體力增進の總括

第五章 精神修養と體力增進　第六章 攝生と體力增進

第七章 無病長生法の直價を論ず

菊判洋裝
定價金四拾錢
郵稅金八錢
郵券代用壹割增

第三版
高評嘖々

小畠幾次郎先生著

腦力增進論

重要目次

緒言

總論

第一章 大勇猛心と腦力增進
第二章 神經衰弱とは何ぞや
第三章 大氣力家と神經衰弱
第四章 腦力の障害に對する醫術大家の意見
第五章 自發心の靈力
第六章 苦樂の觀
第七章 腦力增進と王陽明
第八章 自發的增進と注入的增進

菊判洋裝
定價金三十五錢
郵稅六錢
郵券代用一割增

發兌元　東京市築地　國光社

文學士登張竹風著

三

刊

讀書と修養

如何なる書籍を讀みて修養を資くべき乎。

四六判洋裝　定價三十錢　郵稅四錢

如何なる書籍を讀むべき乎。如何なる書籍を讀みて修養を資くべき乎。是れ恐らく讀書家の胸間に蟠れる先決の問題なるべし。著者竹風氏奇警の見識と卓拔の議論とを以て此間の疑問を解決するや、恰も庖丁の牛を解くが如く、向ふ處整然として解けざるはなき也。此書一たび出でゝ、讀書社會未決の大問題は釋然として氷解し、机に對して亡羊の嘆を發するものなきに至らん、復何ぞ其の讀書に益し修養に資くのる多大なるを疑はんや。希はくは江湖の讀書家一本を購ふて、座右の參考とし、以て讀書の興味と利益とを併有せられんことを。

東京築地　株式會社　國光社

再刊

阿多廣介先生
園田竹熊先生 編纂◎明治卅八年二月文部省檢定濟

女子補習讀本

菊判大和綴美本
定價 上卷金貳拾五錢
　　 下卷金參拾錢
郵稅 壹冊金四錢
郵券代用壹割增

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子、及び修業年限二個年の高等女學校技藝專修科生の使用に供せんが爲め編纂せるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其の材料は家事家政女工等を始め實業に關する事項。國家公衆に對する必要なる心得及び美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを選擇したれば實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

重要目次

卷之五 ◉わが國◉養蠶◉京染◉色◉衣服の取扱◉衣服着用の注意◉思ひやり◉秋山直女◉心のまゝになるならば◉親ごゝろ◉佐藤つる◉娘に送りし手紙◉日本の米作◉畜産果樹の栽培◉苦樂◉勤儉貯蓄◉甘蔗◉砂糖◉食鹽◉衛生に關する心得◉運動を勉むべき事◉飲食を節すべき事◉清潔を保つべき事◉西洋洗濯法◉空氣◉住居の撰擇◉ナイチンゲール◉赤十字◉慈善を行ふべき事

卷の貳 ◉國土と生業◉商業の發達◉主人の眼識◉古今交通の變遷◉電氣世界◉四季折々◉加賀千代女◉都と田舍◉森林國の女子の務◉女子の長所短所◉髪の飾身の飾◉風俗變遷◉維新後織物の進歩◉陶器磁器◉工女のかゞみ◉英國人の勤務◉田舍の夕ぞら◉看病◉母のつとめ◉樂しき家庭◉國家に對する心得◉出征軍人の妻に送る手紙◉右返事◉歐米人の公共心（以上）

發兌元 東京築地二丁目 國光社

▲▲女生及家庭の讀物▼▼

（國光社發行）

- 島田佳矣、野口駿尾共著 女子技藝 編物模様圖案 全五冊 定價 松ノ巻四十錢 櫻ノ巻五十錢 藤ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢 郵稅各二錢
- 棚橋絢子刀自著 女道叢話 全壹册 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 三輪田眞佐子刀自著 女子之本分 全壹册 定價金二十五錢 郵稅金四錢
- 三輪田眞佐子刀自著 女子處世論 全壹册 定價金二十錢 郵稅金四錢
- 磯部武者五郎先生著 家計簿記法 全壹册 定價金十五錢 郵稅金二錢
- 藤野天城先生著 女子小觀 全壹册 定價金二十錢 郵稅金四錢
- 堀内新泉先生著 女樂師 全壹册 定價金卅五錢 郵稅金六錢
- 松川霓州先生著 結婚と家庭 全壹册 定價金十五錢 郵稅金四錢
- 堀内新泉先生著 家庭の鑑 全壹册 定價金十八錢 郵稅金四錢
- 女鑑編輯局編 新編ひめかゞみ 全壹册 定價金二十五錢 郵稅金四錢
- 清藤正輔謹著 皇后陛下御略記 坤德 全壹册 上製卅五錢 並製廿五錢 郵稅四錢

- 梅澤和軒先生著 清少納言と紫式部 全壹册 定價金卅五錢 郵稅金六錢
- 澁谷愛先生著 萬國女子風俗 全壹册 定價金二十五錢 郵稅金四錢
- 堀内新泉先生著 少女讀本 雪の巻 月の巻 花の巻 全三册 定價各金十八錢 郵稅各金四錢
- 大町桂月先生著 常盤御前 全壹册 定價金二十三錢 郵稅金二錢
- 小林雨塔先生著 勾當の内侍 全壹册 定價金二十三錢 郵稅金二錢
- 濱田廉先生著 袈裟御前 全壹册 定價金二十三錢 郵稅金二錢
- 國府犀東先生著 靜御前 全壹册 定價金二十三錢 郵稅金二錢
- 長田偶得先生著 顔世御前 全壹册 定價金二十三錢 郵稅金二錢
- 杉谷正隆先生著 家庭訓歌 修身百首 全壹册 定價金二十錢 郵稅金四錢
- 高瀬眞卿先生著 學校家庭 修身一夕話 全壹册 定價 特六十錢 並三十八錢 郵稅八錢 六錢
- 指原乙子女史著 女子文章軌範 全壹册 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 華族女學校御編纂 國語假名かつひ一覧 折本 定價金拾貳錢 郵稅金貳錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第五回內國勸業博覽會

賞牌幷に褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴアイオレツト煉製
錫栓附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい





壽美禮おしろい

ねり製（定價）大壜二十錢 小壜十二錢

水製（定價）大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

ヴワイオレツト水
スミレ水白粉

すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭示素の新成蹟糅等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せず御肌へを滑々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を排へ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

錫栓附乳白硝子壜入

皮膚艶白劑 壽美禮あらい粉

綠、藍、紅彩蝶畫ひボックス入三錢

罐詰 六錢五厘 袋入 壹錢

(甲)弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞美する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くしして艶を出しきめをこまやかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

(乙)常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔ろ病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のればりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

(丙)使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE.
WASHILNG IOWDER.

壽美禮あらい粉



製造本舖 東京東兩國元町（兩國橋際）

伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

女鑑

明治三十八年四月一日發行

毎月一回一日發行　第拾五年第四號

明治廿五年三月十二日　第三種郵便物認可

山葉製風琴ハ第五回内國博覽會ニ於テ**第壹等賞牌**ヲ受領セリ

山葉製風琴（保險附）

- 壹號形　金拾六圓五拾錢
- 貳號形　金廿六圓五拾錢
- 參號形　金參拾七圓
- 四號形　金四拾參圓
- 五號形　金四拾八圓
- 六號形　金五拾五圓
- 七號形　金六拾五圓
- 八號形　金七拾五圓
- 九號形　金百圓
- 十號形　金百貳拾圓
- メーソンモデル
- 第壹號　金百參拾圓
- 仝貳號　金百五拾圓
- 仝參號　金貳百圓
- 新形壹號　金八百拾圓
- 仝貳號　金四拾五圓
- 足折形一號　金廿五圓
- 仝貳號　金參拾五圓

○山葉製洋琴　金參百圓以上各種

●舶來洋琴　三百圓以上三千圓迄各種

●舶來風琴　百圓以上千五百圓迄各種

○鈴木製ヴァイオリン　金五圓以上五十圓迄各種其他弓箱附屬品等各種









●舶來ヴァイオリン及弓箱等各種

●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種

●戰捷紀念國旗印銀笛數種

●八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓

右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジヨーレット各樂器附屬品、和洋音樂書各種郵劵貳錢御送附あらば美麗なる目錄進呈す

諸大家作歌作曲

討露軍歌 かちどき　第參

定價金五錢郵税三冊迄金貳錢

目次（充員召集 遠征軍人の妻 戰死者を吊ふ歌）

第壹卷目次（出陣、陸戰、海戰、神風、凱歌（文部省檢定濟））

第貳卷目次（陸軍、七十七勇士、日本男兒、起てや同胞）

以下續刊

東京市京橋區竹川町十三番地

共益商社樂器店

電話新橋五二九　電信略號キヨ

東京築地株式會社國光社印刷

Digitized by Google